

本多謙三論文集7

海外哲学思潮

附・洋雜誌目次

凡例

漢字はすべて新漢字に改め、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。いくつかの送り仮名の統一をした。参照文献でローマ数字で示されている数字はアルファベット「A」で代用している。参考文献中青字斜体字で示したものはネット上に公開されていることを示す。

カタカナの表記は現在の慣用に従って換えることを本多謙三論文集の方針としているが、本論文集では、修正を加えていない。巻末後記に人名のカタカナ旧表記一覧を添えて、現代的表記との対応を示す。

【】、「#」及びページ毎の青線で区切った脚注はすべて作成者の追加したもので非専門家を念頭にしたものである。
※【】また※「#」は、判読し難い文字の推測を記す。

本論文集7は、岩波書店雑誌『思想』に載せられた「海外哲学思潮」1932.4～1936.9です。本多の執筆は当初のいくつかのみと思われますが、無署名記事であるので、1936.9まで収載した。ただし署名されている1936.12から以降は、取り上げられた論文名のみを記録した。連載初期に取り上げられたいくつかの洋雑誌の内から六種の雑誌目次を載録した。

目次

海外哲学思潮

- 119号：1932.4 ヘーゲル記念の余韻
120号：1932.5 人間学を中心として
121号：1932.6
122号：1932.7
123号：1932.8
124号：1932.9 ……本多謙三&清水幾多郎
126号：1932.11
127号：1932.12
128号：1933.1
129号：1933.2
130号：1933.3
131号：1933.4
132号：1933.5 フィリップ・フランク「因果律とその限界」。マキシモフ「レーニンと自然科学」。政治学と精神分析学。社会学の一方。マルセル・ブルーストの美学。最近のホップス研究文献。「政治的性格学原理」ブーグレの「フランス社会主義」。
133号：1933.6 ベルクソン「道德と宗教との二つの泉源」。ソレル文献二つ。ハルトマン「精神的存在の問題」。ガイゼル「因果律」。

社会学文献二つ。ハーバート「生活と芸術における無意識」。

134号:1933.7 リッケルト、カッシレル、ホエフディング近況。「因果の問題」。職業社会学。ロシヤの法律哲学。フォン・シュタインの歴史哲学。

135号:1933.8 フォントネル文献、『コント書翰』、ポーランドとチエコスロヴキヤとに於ける実証主義、『ロゴス』の「リッケルト記念号」、グイスバッハ『一七世紀フランス絵画史』

136号:1933.9 マルセル・ブルーストの心理学、ポール・ロワイヤールの外国人と滞在者、宗教及び道德に二つの源泉ありや（ベルクソン批判）、啓蒙の哲学

137号:1933.10 ベルクソン主義の近況（ル・ロワ、シュブリエ）。言語の問題（シュミット・ロール、フィーゼル）。初期のフッセルに於て（イレマン）

138号:1933.11 文化哲学、スローガンとしての「暗き中世」、フリーエ

139号:1933.12 ウーティツ『人間と文化』。ハスハーゲン『宗教改革以前の国家と教会』。ギッチ『文学に於ける婦人被雇傭者』。バヴロフ『ヒステリーの生理学的解釈』。スピール『批判哲学』

140号:1934.1 マックス・シェラーの遺稿第一輯、特に「模範者と指導者」及び「愛の秩序」について、非常時国家論、メルソン文献

142号:1934.3 ライゼガング「レッシングの世界観」。ガイスマール「キエルケゴール」。カッシレル「ケンブリヂのプラトン派」

143号:1934.4 プロシエ『英雄神話と原始人心理』。クレッソン『道德問題と哲学者』。グイエ『コント伝』

145号:1934.6 ライヒ『ファシズムの大衆心理学』、リチャード・フッカー文献、バタフィールド『ホイグ党の歴史解釈』、ベルンハルト『歴史の意味』

146号：1934.7 ギルヘルム・フォン・フンボルト、シスモンディ、ルナン

148号：1934.9 クスビニアン書翰。エラスムス著作選集。エラスムス全集補遺。ロレーヌの僧正とトリエント会議

152号：1935.1 誤謬の問題、シルレル文献二種、ホップス文献

153号：1935.2 デュルケイム『社会分業論』の英訳

154号：1935.3 『社会的判断論』。ベルジャーイエフの「ドストイェーフスキー」。アランの「神々」

156号：1935.5 バルザック書翰、一生物学者の哲学、演劇論、キリスト教神学

157号：1935.6 書翰集二つ（メルセンヌ、ボーズンキット）、社会学文献二種（ロベルティ、スペンサー）

158号：1935.7 グルトブルク『フランス語の発達と構造』。エディントン『新科学論』。チャンドラー『美と人間性』

159号：1935.8 ベルグソン。ブロンデル。ブランシュゼク

160号：1935.9 『フランスに於ける文明観念の歴史』。『文学論』

161号：1935.10 ナチスと科学

163号：1935.12 フンボルトの百年忌…… (服部英四郎)

165号：1936.2 現代独逸の精神的祖父 ブラッドリの「試論集」…… (服部英次郎)

167号：1936.4 最近の西洋古代・中世哲学文献…… (服部英次郎)

168号：1936.5 アメリカの学問——フランス革命とイデオロジー…… (清水幾多郎)

170号：1936.7 文献学者の書簡集：ウオルフ・ウイラモウィッツ…… (服部英次郎)

171号：1936.8 『権威と家族』…… (清水幾多郎)

172号：1936.9 ゾンバルト『社会学』『哲学と歴史』——カッシーラー記念論文集…… (清水幾多郎&服部英次郎)

洋雑誌目次

LOGOS

1931.1~3 1932.1~3 1933.1

Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie

1935.1

ZUR EINFÜHRUNG

Kant-Studien

36(1931), 37(1932)

Archiv für Geschichte der Philosophie

40(1931), 41(1932)

Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte

10(1932), 11(1933), 12(1934)

Unter dem Banner des Marxismus

1930~33

後記

.....382

海外哲学思潮 1932.4

ヘーゲル記念の余韻

一

気のせいかな日本に於いては、もうはやヘーゲルに対する熱が降りつつある。それに一体回顧的記事というのは雑誌には相応しくないかも知れないが、かの地におけるヘーゲル記念の模様がやっと印刷になって伝わってくる状態なのであるから、この際しめ括りの意味で向うで発表された記念論文のようなものの二、三を紹介しておくことにする。

ドイツに於いては雑誌「カント研究」、「ロゴス」ⁱ、ともに全紙面をあげてヘーゲル記念に資しているが、相変らずグロツクナー、クロナーなどの新ヘーゲル学徒、ビンダー、ブッセ、ローレンツなどの法律哲学者、その他ラツスマン【「ラッソン」Lassonの誤記であろう】などのヘーゲル文献学者の活躍が目立つだけであらなく氣勢が揚つていない感じである。

まずヘーゲル研究への何らかの貢献といえ、ヘーゲル自身の手になった未発表の文章が二つ公にされたことであろう。「ロゴス」には Johannes Hoffmeister [Johannes Hoffmeister, 1907-55] という人の説明つきでヘーゲルがベルリンに於いて一七九六年にものしたという草稿が "Hegels erster Entwurf einer Philosophie des

i 「ロゴス」「カント研究」とともに、1931, 1932 両年の目次を巻末に記載した。

subjektiven Geistes"と題して載せられ、Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. XL Ht. 3 【40卷3号】はグロツクナーの序文を附して一八一〇年ヘーゲルからNie Chhammer 宛の書翰を公表している。

次に夫々の論者がヘーゲルが現代に対してどんな意義をもつと考えているかを摘記してみよう。

「カント研究」では Georg Lasson 【1862-1932】が「ヘーゲルと現代」と題して書いている。彼はこの問題を第一、ヘーゲル哲学が現代の生活および思索に対してもつ意義、第二ヘーゲルの体系思想、第三その方法の問題、第四その原理というように四項目に分けて論じている。ラッスソンは大戦とヘーゲル復興とを結びつけてこの傾向が顕著になったのは戦後一九二〇年以後のことだとみている。戦前は主観の自己満足の時代だった。その掲げたところの範疇——妥当、価値、文化、生、どれも意識の領域を出でなかった。然るに意識は精神の示現する一つの様態に過ぎない。その結果は必然に意識と対象との二元論に導いた。ところが大战によって現実のあらゆるものが覆されそこに初めて必然と運命とが自覚され個主観は絶対精神の中へ没入するに到った。時代はまさに全一態をもとめている。だから絶対の哲学に憧れる。ヘーゲルが絶対精神として措いたものはカントの理性とは違つて、西欧文化の永い間の世界観に於いて宗教的基礎概念だったものを科学的に表現し、純粹思维の体系に編み込んだものだ。第二に彼はヘーゲルの体系を三つの様式に分けて考える。一はエンティクロペディにおけるもので、これは「論理的過程の見地」からした体系である。二はフェノメノロギーにおけるもので、これは「精神そのものの立場」からした体系である。三は書物の形にはなっていないが、種々な哲学科目の講義のうちに窺われ、エンティクロペディの結論の部分に稍々明確になつて

いるもので、そこに初めて「哲学の理念」が姿をみせている。ここでは、理念の主観的活動の過程たる精神とそれ自らに存在する客観的な理念の過程たる自然とが共に絶対精神の顕現として示され、それは「永久に働き、産みそして享受する。」かくしてヘーゲルの方法は、カント的認識論の多元的帰結に対して「自同と自同ならぬ事との自同としての絶対者」を押したてる理性のモニズムとなる。ディアレクティクの方法的意義はそれである。然るに、絶対精神とディアレクティクはいずれも原理の問題である。故にもともとこの原理に逆う領域に対してこれを適用することは無意味である。その例は唯物史観だ（！）というのは、これは抑々精神の表現と自覚であるディアレクティクを死せるものの、精神なきものに適用することだから。これとは違って、絶対精神はキリスト教の人格神なのだ。（ヘーゲルは初期の作品の中でこう言っている「現代の瞬間に於いて哲学の第一に関心たることは、神を全てのものの唯一の根基として、存在と認識の唯一の原理として哲学の絶頂に置くことだ。」

Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie Bd. XXV Ht. 1. にもラッスソンのと同じ表題「ヘーゲルと現代」の下に Wilhelm Sauer 【1879-1962】なる人が書いている。この人はコエーニヒスベルク【Königsberg】大学の教授と肩書きされているが、別派の新ヘーゲル学派の人らしい。冒頭この学派がいわゆるヘーゲルの左右両翼を綜合するものと讃美している。彼は世間のヘーゲル・ルネサンスの声には異議を唱えてヘーゲルはあらゆる時代にとって modern であり得るのだと号ぶ。ではヘーゲルの現代性はどこにあるか。彼は（一）歴史哲學的問題提出、（二）ディアレクティク、（三）進化思想を算える。しかしこの論者は無条件にヘーゲル復興を謳歌していない。その危険性をも考慮している。その一はヘーゲルにおける偏論理主義であり、これは寧ろフ

ランス哲学の影響の下にカントが手をつけた形式的「批判の仕事の完結とみるべきであり、思惟と実在との混同はどこまでも戒められるべきである。その二は全体から始め全体に停滯することであり、例えば社会的領域に於いて客観的精神を余りに前面に押し出し過ぎることがそれである。

二

「ロクス」に出づる H. Glockner 【Hermann -, 1896-1979】の "Hegel renaissance und Neuhegelianismus" もこの部類に入れてよいであろう。彼は新カント派の興廃と対比して新ヘーゲル派の運命をトし且つ警めている。前者の生成の過程を顧るのに、第一に明確にカントへの帰依を示さないが、綿密な文献学的研究の遂げられた時期があり、フィシャー、ツェルラー、エミル・アーノルト、アディケスなどの仕事がこれに属し、第二はランゲ 【Friedrich Albert Lange】（唯物論史）、コーヘン 【Hermann Cohen】（カントの経験説）、リール 【Alois Rein】の「哲学的批判主義」巻一、ヴィンデルバントの「近代哲学史」などに示されるような、一面的な然し力強い偉大なる一面的なカント解釈の仕事であり、第三はコーヘン、ナートルプ、ヴィンデルバント、リツカートなどのその後の成果にみられるような体系樹立を企てる時期である。新カント派はこの第三期の全般的体系意志のために崩壊した。彼らは科学の概念が変わりつつあることを覚らなかったのである。精確の理想に対して精神科学は冷淡であり、認識論と方法論は存在論に場所を譲り、心理学が再認し始められた。新ヘーゲル主義もこの気運に乗じたのである。ところでこの派に於いても既に新カント派の種々な時期に現れた特徴が呈露している。ヘーゲル・フィロロークとしてはデイルタイ、ノール、ラッスソンを初め Theodor

L. Haering 【Theodor Lorenz -, 1884-1964】、Hegel, sein Wollen und sein Werk I. Bd. 1929. を算え得るし、第二期的研究としてはクロナーの「カントからヘーゲルへ」があり、第三期的作品の代表はニコライ・ハルトマンの「ヘーゲル」であるというのである。では如何にして新ヘーゲル派は新カント派の没落の運命を免るべきか。それには文献学的研究と体系的研究とが提携して、一面性を抑えると同時に常に新たな飛躍への鼓舞を必要とするグロックナーは考えている。

もう一つ注意したいのは記念論文の中に「実存思想」Existenzgedanke とヘーゲルとの関連を問うたものがあることである。「ロゴス」にはNadler Käte 【Käte Nadler, 不詳】という人がHamann und Hegel, Zum Verhältnis von Dialektik und Existenzialität を書いている。レヴィ・ブルジュールの編纂にかかる "Revue Philosophique" もまた昨年の十一月—十二月号をヘーゲル記念に献げているが、その中にも J. Wahl 【Jean André -, 1888-1974】、Hegel et Kierkegaard が巻頭の数十頁を占めている。これはキエルケゴールの独訳によってまた主として独逸人の文献に基づいて成された研究であるが、ヘーゲル主義と関連させてキエルケゴールの思想発展をみ、彼のヘーゲル批判を叙述し、最後にヘーゲルが彼の思想に及ぼした影響を論じて結んでいる。とりわけ新し味があるわけではないが、入念な討究である。

三

単刊本に就いてはとり立てていう程のものは最近にはでないようだ。際物のないのは却って愉快である。いづれはBinder, Busse, Larenz のトリオになる Einführung in Hegels Rechtsphilosophie に関説するに止めよう。

これはゴッティンゲン【Göttingen】のゼミナールの産物だという。カール・ラレンツ【Karl Larenz, 1903-93】が総論を引受けている。彼は「ロゴス」にも「ヘーゲルの意志の弁証法と法律的人格」という相当長篇を寄せているが、彼の叙述はかなりに明快であり、狙いどころも正鵠を得ているようである。マルテン・ブッスセ【Martin Busse, 1906-不詳】の役目はヘーゲルの体系の中から法の概念を導出すること、その諸契機への分岐を検出することにある。彼は別に昨年の初に“Hegels Phänomenologie des Geistes und Staat”というある意味で注意すべきモノグラフィを公にしている。それだけあつて彼の演繹の仕方は精神現象学における運び方に基だ似通っている。少々難澁だが他方に厳密である。ユリウス・ビンダー【Julius Binder, 1870-1939】は師匠として締括りを与えている。ヘーゲルにおける法の哲学の課題は単に法の論理学あるいは顕現する法意識と観照する意識とを合わせみるところの法の現象学ではなく、法の実在性の妥当をその観念性から証示すること、即ち現実の法を精神の働きとして把握することを目的とするところの法の形而上学に存する。さて法の哲学の体系は三つの部門、抽象的法、道徳態、共同倫理態に分れるが、この部門分け及び相互の間の意義に就いて屢々誤解がある。第一の部門が現実法の私法に、他が公法に相当するというように考えたり、或いは後の二部門が相合して道徳哲学を成しそれが第一の法論に対立するように解したりする。然るにビンダーによればどちらも誤りである。前の考えは現実法の区分を押しつけるものであり、後の解釈は法の哲学と道徳哲学を無理に分けようとする悟性の哲学の考を踏襲しようとするものだ。ヘーゲルはこれに反してこの対立を相対化しより高い概念に止揚する。ひとは屢々ヘーゲルの体系の中に倫理学がないと言つて非難する。然しそれはひとが思惟、情感、意志というような能力心理的区分を固執するからである。ビンダーの解釈に

従えば、寧ろヘーゲルの体系は全体からみても部分的にも、倫理学に結末するとみることを得べく、彼は汎論理主義者というよりも汎倫理学者の名に値いするといふのである。そしてこの倫理学こそ法の哲学に外ならない。法は古い自然法がそうでありカントやフイヒテがそうしたように倫理学の内部で取扱わるべきものであるばかりでなく、法概念の思弁的繙出はただ倫理学としてのみ可能である。ここに於いて再び三つの部門の間の連絡が顧みられ、彼自身がかつて陥つていた誤れる解釈、法の哲学を倫理意識のディアレクティクとみる言わばカント的解釈を改めると同時に、Rosenzweig【Franz -, 1886-1929】(Hegel und der Staat 1925)やGiese【Gerhardt -, 1901 - 不詳】(Hegels Staatsidee und der Begriff der Staatserziehung)が、ヘーゲルの法の理解がローマ法的私法に依拠していたとする誤れる觀念を却け、抽象的法も道德態も共同倫理態の契機として具体的に説明さるべきことを強調している。

それにしても左翼の側に於いてヘーゲルが如何に記念されることが乏しいのであろう。Rudolf Haus【生没不詳】のHegel oder Marx?という小冊子があるが今更ブレハーンフの記念文を再録したり、量に於いても質に於いても貧しいものだ。外にはブルジョア理論家のファースト【ファシスト】的魂膽を暴露したもののばかりしか見当らない。昨年の五月の“Der Rote Aufbau”にKurt Sauerland【1905-38】がHegels jüngste Epigonenと題して、国際ヘーゲル協会の第一同大会の報告書を基礎として「哲学のファッショ化」を看破したことは、翻訳もでたらしいから恐らく読者も御存じだろう。ちょうどヘーゲル百年忌に相当する一九三一年十一月の“Die Linkskurve”にはK. A. Wiofogel【Karl August -, 1896-1988】がDer Faschismus “berbt” Hegelという題の下にベルリンにおける記念会の様子を報じている。この会の有様は本誌一月号へ河野氏によって逸早く報

道されたところに照されたい。これも東朝【東京朝日新聞】のオベリスクに載ったことではあるが「ヘーゲル、マルクスとレーニン」、「ヘーゲルの歴史哲学と唯物史観」、「ヘーゲルと現代」、「ヘーゲルと唯物弁証法」、「ヘーゲルと国家理論」等について語るはずであったソヴェートの一群のヘーゲル研究者らの報告が司会者から「原則的」に許すべからざるものとして拒絶されたに拘らず、二人のファシスト・イタリーの代表者の宣伝的講演が看逃がされていると告げているのは再記に値するだろう。われわれはそれにつけてもソヴェートにおけるヘーゲル研究の情報を知ることに努めねばならぬ。担当者も極力手をつくすつもりだが読者の御助言をも得度い。

なおアメリカの雑誌 The Modern Quarterly Vol. VI. 1932 No. 1 に Sidney Hook 【1902-89】 , From Hegel to Marx という論文が載っている。

その他、本は手にしてみないが次のような書物が出ている、いずれ紹介する機会があるであろう。

Hegel und seine Erde. Beiträge zur marxistischen Kritik der Hegelschen Philosophie. Berlin 1932, 400 S. ルカッチ、ヴィットフォゲル等が寄稿しているらしい。

Marcuse, H. 【Herbert -, 1898-1979】 : Hegels Ontologie und die Grundlegung einer Theorie der Geschichtlichkeit. Freiburg 1932, 368 S.

次号の本欄は人間学に関するものを紹介するつもりだ。

海外哲学思潮 1932.5

人間学を中心として

一

人間学再興の声をきくのは既に久しいが未だ十分にその正体が掴まれていないというのが実情であろう。昨年十月「理想」人間学主題号には各種の文献をのせているが、シェーラーなき後のドイツ辺でもやはり文献模索時代であるのかも知れぬ。その証拠には近着の *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 1932 Heft 1. には、例の Erich Rothacker 【1888-1965】が "Zur Lehre vom Menschen" と題して有機的なものの哲学、哲学的人間学、精神科学、歴史哲学、文化社会学、文化哲学に関する新刊書の総報告をやっている。残念なことに未完で、今回の分はやつと有機態の哲学を終ったばかりである。余り珍しい書目も見当らないが試みに摘記してみよう。

彼は専門生物学者ならぬものに一般的な生命理論の概要を与える書として Hans Driesch 【1867-1941】, *Philosophie des Organischen*. 4 gekürzte und teilweise umgearbeitete Auflage. Leipzig 1928 [In Leinen RM. 14] を挙げている。これは一九〇八年に初版が出て以来、古典視されている。そこから一世紀に亘る機械論たい生気論の永い論争に依って明らかにされた生命現象の自律性、全体性、形態性、目的性、精気性、理解可能性などの主要概念が解るであろう。ドウリーシュのこの本を利用するについて理解を助け

i 1932 ~ 1934 の目次を巻末に収録した。

るであろうのは H. Woltstrecke 【Heinz --, 1901-不詳】と共に彼自身が編纂した『Das Lebensproblem im Lichte der modernen Forschung』Leipzig 1931 だとロータツケルはいう。こゝでは八人の専門家が夫々の部門を担当している。L. Weickmann 【Ludwig --, 1882-1961】と P. Mildner 【Paul --, 生没不詳】とが、地球上における生物生存の物理的前提および地球外の生命条件を教えており、L. Rhumbler 【Ludwig --, 1864-1939】は生命の有機・無機の限界問題、自生の問題、無機態の領域における有機的発展のアナロギー並に前階梯、生命の非有機的組成の特殊構造を、O. Kestner 【Otto --, 1873-1953】は生理学と感官心理学を、J. von Uexküll 【Jakob von --, 1864-1944】は有機体と環境との関係について、R. Woltstrecke 【Richard --, 1877-1944】は遺伝と伝承変易の現代学説の手引きを、G. Wolf 【不詳】は生命と心魂との関係について担当し、終にドウリーシヤが更めて有機体の本質を論じている。この内 J. von Uexküll は、別に Die Lebenslehre(Das Weltbild, Bücher des Lebendigen Wissens)Brosch. RM. 3, 30 を新しく書いてゐる。B. von Brandenstein 【Beia Freiherr von --, 生没不詳】、Metaphysik des organischen Lebens. もこの列に入る。生気説の批評したもののこゝつは生理学者 H. Winterstein 【Hans --, 1879-1963】、Kausalität und Vitalismus von Standpunkte der Denkökonomie 2Afl. 1928, Th. Haering 【Theodor Lorenz Haering, 1884-1964】、Über Individualität in Natur und Geisteswelt 1926、イギリスの学者 Samuel Butler 【1835-1902】の説について書いた Rudolf Stoff 【生没不詳】、Die Philosophie des Organischen bei Samuel Butler, 1929 が挙げられる。この中で特に精神科学者によつて資するものは J. von Uexküll の前記の著作であろう。しかしそれは John B. Watson 【John Broadus Watson, 1878-1958】、Der Behaviorismus や Hans Muchs 【1880-1932】、Das Wesen der Heilkunst. Grundlagen einer Philosophie der Medizin 1928, Helmut

Plessner 【Helmuth -, 1892-1985】 , Die Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie. 1928 等と共に既に固有の人間学の域に入るものとロッタツケルは決める。なお特に教育学への適用を示したものとして、E. Schwertfeger 【生没不詳】 , Die Vererbungslehre unterberücksichtigung ihrer philosophischen Grundlagen und ihrer pädagogischen Bedeutung(Pädagogische Wegweiser) がある。また E. Dennert 【Eberhard -, 1861-1942】 の七十歳誕生記念論文集、Abhandlungen und Fortschritte in Wissenschaft und Weltanschauung, 1931 にも一般生命論に因んだ諸家の寄稿がある。——それよりもわが国のこの方面の関心者は岩波哲学講座第二輯収録の丘英通氏述「機械論と生氣論」の本文およびそこに掲げた参考書目についてみるべきであろう。

二

さき頃自己の哲学体系とおぼしき "Philosophie" と題する大作を三巻までだした Karl Jaspers 【1883-1969】も生物学とは異った見地から人間学に関心を寄せているようである。体系の第二巻は Existenzzerhellung と名づけられている通り、彼の哲学は要するに一種の実存哲学を説くものらしいが、その要領をまとめたものとして Götschen 叢書の千巻目を占める彼の新著 Die geistige Situation der Zeit を推すことができる。その全体を叙述することは今の主題と離れ過ぎるから、その第五部を成す「今日如何に人間存在が把握されているか」と題する部分を紹介しよう。彼によれば現今、人間の学問として認められるものに三つある。社会学、心理学およびアントロポロジーである。彼は社会学の例としてマルクス主義を、心理学の代表としてフロイドの

分析説を、アントロポロギーの中心として人種論 *Rassenlehre* を挙げている。彼によればアントロポロギーは人種論上の主要概念（身体構造の諸型、性格、文化心 *Kulturseite*）の総括である。それは実在なき精神を思い浮べる観念論と人間を一つの機能に解消する唯物史観に対抗するものである。物的人類学は地球上に散布している事実上の種別に従つて身体構造と機能とを研究する。但しかかる知識は人間の本質の形貌的表現としてのみ重要さを取得する。ところでヤスペルスに従えばマルクシズム、心理分析、人種論この三つは大衆の存在と共に支配的になつた人間本質の隠蔽の尤なるものである。マルクシズムに於いては大衆が如何なる結合を需めているかが、心理分析ではそれが如何に現実の満足のみを欲しているかが、人種論ではどんなにそれが他に優ろうと求めているかが示されている。もちろんそれらの中にも真理はある。われわれの誰もが一度は共産党宣言に感激させられる。而もおそれらの認識の射程には限界がある。如何なる社会学も運命について明してくれはせず、如何なる心理学も、われが何んであるかを教えぬ。また元來の人間存在は人種学の前提するように培養され得るものではない。三つの方向ともに破壊的性質には適しい、人間が価値としてもつと思うものを無視する。これは虚無に急ぐことである。

これとは違つて彼の主張する実存哲学はこれら全ての現実知識を利用するが、それを越えて、人間が彼自らに成るための思索である。人間は常に彼が自らに就いて知っているより以上のものである。彼はいつも同じものではなく却つて道程である。悟性的に規定せらるべき定在であるばかりでなく、彼の事実上の行為に依つて彼がなんであるかを決定する自由をもっている。人間はその奥深い本質に於いて分裂している (*gespalten sein*)。彼は如何に考えるにせよ、考えることに依つて自己を自己自身にまた他のものに対立させ

る。彼はあらゆる事物を対立に於いてみる。分裂なくして人間存在はない。しかしそれに留めることはできない。如何にそれを超克するかが彼が自らをどう解するかその仕方を示している。自らを認識の対象とすることも解決の一つの途である。前記の人間に関する諸科学はこの途を逐うものである。ところが第二の方向は人間存在における分裂を定在においては止揚し尽し得ないところの限界状態とみて、そこから自己自身の決意をもって今まで隠されていた人間の超越性 *Transzendenz* を呼び醒そうとする。即ち彼の自由に訴えて従来あらざりし新なる自己に成ろうとするのである。ヤスペルスが実存の闡明 *Existenzhellung* と称するのはこのことである。かかる人間解釈と時代観、もしくは形而上学との関連に就いては別の機会に述べることにしよう。

三

実存思想の源泉がキエルケゴールに存し従つてその伝統をひくカール・バルト **【Karl Barth, 1886-1968】**らの神学と共通な根拠をもっていることは人々の知るところである。この方面からした人間学の研究に、**Adolf Sannwald** **【生没不詳】**, *Der Begriff der Dialektik und die Anthropologie*, 1931 がある。これは **P. Althaus** **【Paul Althaus, 1888-1966】**, **K. Barth**, **K. Heim** **【Karl -, 1874-1958】**の編纂にかかるプロテスタンティズムの歴史および教説研究叢書中の一冊であり、「ドイツ理想主義とその対蹠者の哲学における自我の理解の考察」と副題されている。著者もストウツトガルトの僧侶である。従つてその中心問題も哲学にはなく神学にある。且つまた理論上の根本概念に就いてはキエルケゴール、弁証法的神学者、ハイデッガーの考を踏襲するだけで重き

は寧ろバルトの提唱した神学における弁証法概念を繞る論争、その人間学的領域への推移をかなり細に描くこと、更にカントからフイヒテ、シェリング、シュライエルマッヘル、ヘーゲルを経て弁証法の理解が如何に転化したかを叙述することに措かれている。要するに理論的書物ではない。表題に興味を湧かした者は多少の失望を味うであろう。しかし特殊な人々しか関心を惹かなかった神学における弁証法論争を概観できる点に於いて便利である。それに神学という学問も哲学の側で新カント主義が勢力を占めればそれに、現象学が擡頭すればそれに、人間学が現れればそちらに好意を寄せるところの、案外ふらふらした学問であることを教えられる。それはそうとして一章毎に参考書目を挙げたりしているのも至便であろう。

四

ドイツ版「マルクス主義の旗のもとに」ⁱ【"Unter dem Banner des Marxismus"】誌のヘーゲル記念号がやつと着いた。この号にはマルクスやレーニンのヘーゲルに関する未発表の遺稿が四つまでのつてゐるのは注目すべきである。マルクスの遺稿の一は一八四五年の一月頃書いたというヘーゲル現象学の批判に対する個条的覚書で十数行に過ぎないものであるが、他の一八四四年の八月末にエンゲルスと会わない以前に書き残され「ヘーゲルの弁証法および哲学一般の批判」とも名づけられるべきものは量に於いても豊であり、内容に於いても著しく興味を惹くものがある。人々は今までマルクスの人間学などと声を大にしていたが何となく空虚な感を懷かせた。ところがこの原稿の含んでいる内容はまさにその名に適しいものを多量に蔵している。

i 巻末に1930～33の目次を収録した、

当時マルクスはいわゆる批判的神学者たちと闘争中であり、自らもなおフオイエルバッハの影響を十分に脱け切らなかったらしい。その痕跡は随所に散在している。Humanismusとか der praktische Humanismusとかいう名称を以て自己の見解を表そうとしている。なお現象学を以てヘーゲル哲学の真の生誕地にして秘密の存在する場所としてその展開を追いつながら、そこに示される弁証法的転化をフオイエルバッハの「徹底せる自然主義」に基づいて理解し直そうと苦心していることも興味が深い。それが後年のマルクスの本旨であったかどうかは別として、彼の思想の一道程を知る上に於いてかけ替のない文献である。ひとは今度こそ大威張でマルクスの人間学について喋々できそうだから是非一読を勧める。

前号紹介の補遺の意味でこの雑誌の内容目次を附記しておこう。【正確なものは巻末に1931 Heft 3】

M. F.; Zum Parteien Kampf um Hegel.

Karl Marx : Thesenentwurf zur Kritik der Hegelschen Phänomenologie.

Karl Marx; [Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt] (1844).

Zwei Eragmente Lenins zur Dialektik.

Vier unveröffentlichte Briefe Hegels.

W. Adolfski ; Marxismus-Lenismus und Dialektik.

F. Fogarraski ; Dialektik und Sozialdemokratie.

K. A. Wittfogel ; Hegel über China.

Ernst Kolman und Sonja Janowskaaja ; Hegel und die Mathematik.

なお前記の Deutsche Vierteljahrsschrift に於て【巻末に 1932 Heft 1】

Johannes Hoffmeister 【1907-1955】; Zum Geistesbegriff des Deutschen Idealismus bei Hölderlin und Hegel.

Janko Janoff 【1900-1945】; Zur Geschichte des russischen Hegelianismus. など載つてゐる。

五

最後に、現象学における実存問題の發展を取扱つたもの、現代の人間学の傾向とその解決の方針を示したものの、を紹介しよう。

第一の目的に当嵌るのは Hans Reiner 【1896-1991】、Phänomenologie und menschliche Existenz, Halle 1931 である。著者の就職講演である。フッサールも既に人間実存の一定の問題をその出発点とした。彼によれば人間は世界に対して答えを返すべき責務 Verantwortung を負っている。哲学はこの正しき解答を、即ち正しき世界認識を与えることを目的とする。本質直観はその道途であつた。シェーラー、ブエンダー【「ブフェンダー」Pländer, Alexander であろう】、ガイガーはフッサールの方法をとつて特に人間的実存の境に応用した。併し応用に止つた。ここでは認識問題が依然として中心を形作っている。ハイデッガーはこの制限を脱して、思惟を情感や意志と融合したものとみ、いわゆる全人の関心の仕方という立場から出発し直した。Sorge というのがかかる根本的規定であつた。

理性的人間学と自然主義的人間学の両方面を分ちそれを止揚することを企図するのは Friedrich Seifert 【1891-1963】、Die Wissenschaft von Menschen in der Gegenwart 1930 である。著者はミュンヘンの高工教授であ

る。彼は根本に於いて精神分析一派の Jung [Carl Gustav -, 1875-1961] の影響のもとにあるらしい。彼は現代における人間学の流を前記の如く二つに分ける。一は合理主義的観念論的であつて伝統的哲学の人間観は多くこれに属する。他は新興の傾向であつて人間の自然的・生物学的側面を重視する。前者が人間の理性、ロゴス、ラチオに注目するに反し、後者はその衝動、ビオスに眼をつける。ところがこの対立は心理学上の意識と無意識との対立に相当する。無意識は意識の前階段とみられることが多いが、無意識こそ意識の母胎と考えだされ始めた。それは煩悶なき衝動の世界である。これに復帰することは爛熟せる文明の病弊を救う所以とも考えられる。クラークスなどがかかる主張の代表者であるが、この観方は聖書の樂園物語にも比すべき虚妄なものと著者は評価する。ここでは歴史なく価値なき生物的個体としての人間が思い浮べられるだけで、人格としての人間は無視される。精神分析学者ユンクは一方かかる vitalistisch な立場にありながらそれに偏せず、Geist と Seele 即ち、ラチオとリビドとの止揚を志している。彼はこの両者を単なる矛盾とせず、二つのものの緊張のうちに新しきものの生産を思っている。彼が "Transzendente Funktion" と称するのがそれである。しかしユンクはなお意識と無意識の範疇の埒内にある。それでは依然として人格は捉えられぬ。動物の純粋性はその衝動性にあるとしても人間のそれは却つて人格のうちにある。それは道德的であり、神的なるものに近い。即ち自由の問題である。かかる意味の人間を把握するために従来 of どの側にも偏しない人間学を樹立することが著者ザイフェルトの念願である。

人間学をこういう二つの傾向に分けることはシェーラー以来顕著である。Fritz Heine mann [1889-1970] はフムボルトの人間学的論文を編するに当つて序文の中で、衝動と生命とを重視する側の人間学を以て大戦の

終り頃から勢力を得た表現主義時代の産物だとみて、再び精神主義のそれが復興するであろうことを告げ、フムボルトを押し立てている。以来、果して前記のヤスペルスの主張について知ったように人間学がこの方向に進められつつあるのは注目すべきである。その代りそこから性格学なるものが独立した。

—

ドイツでは既に学園内の左右両翼の政治的抗争が相当に激しいらしく、かかる政治的影響を除こうがために、全ドイツの社会民主主義教授たちによって「社会主義高等教育聯盟」*Sozialistische Hochschulgemeinschaft*なるものが設立された。近着の「社会主義教育」誌 *Sozialistische Bildung* 1932, März. によると、本年二月二十七日に柏林で同聯盟の創立大会が開かれた由である。三人の教授が「精神的決意としての社会主義」という共同の題目に就いて語ったことが報ぜられているが、就中、聯盟の首長グスタフ・ラートブルッフ *Gustav Radbruch*, 1878-1949 が開会の辞に代えて述べておところは、聯盟の趣旨を簡明に語ったものとして興味が深い。

それによると、この聯盟は社会主義的な専門校教授、学生、その友人および医師、弁護士の如き個々の学問の社会主義的代表者を包含する。目的は三つある、第一は社会主義的精神に従って高等教育を助成すること、第二は社会主義的精神に従って社会主義的学生を支持すること、第三は社会主義的精神に従って科学を実り豊にするよう希望するにある。

ひとは高等教育機関についてただ知識だけではなく世界観を、また政治的世界観を求めている、併し他方で高等教育は一面的政治家の犠牲になつてはならずまた諸世界観をもった教授の平等な陳列場に墮してゐな

らぬ。高等教育はむしろ偏見のない思索への教育に依つてあらゆる世界觀に一樣に奉仕する。高等教育は研究と授業とを相互に結合しようと欲する、蓋し教説なき研究は生に疎く研究なき教説は枯渇するであろうから。而も研究者は決して常に最も好き教師ではない、殊に今日の大衆的な講義、演習に於いてはそうである、そこで高等教育における授業の任務をその研究の任務と並べて従前よりもつと強調しなければならない。この聯盟はこれらの困難を解く為に一定のプログラムに縛られない。聯盟員は組織の指標であつてはならない。専門校の教授と云うものはあらゆる職業人の内で最も組織される事の困難なものである、この事は組織と云う手近い目的を思ふならば悲しむべきである、しかし凡ての組織が仕うべき遠い精神上の目的を思えば喜ぶべき事である。彼等は第一に教授であるとき最もよく社会主義に奉仕する事が出来るのである。法治国家は決してまだ社会主義ではない、しかし法治国家なき社会主義は存しない。従つて授説の自由はまだ社会主義的學問ではない、しかし學問の自由なくしては社会主義的學問もない。イタリーに於いては教授達がファシスト的統治に適切な市民を教育するように強要されて居る。彼等の内にあつても政治的命令よりも學問と彼等の良心を高く尊重したものがあつたがその勇氣は敬意を表さるべきである。

聯盟は貧窮學生を經濟的に支持するばかりではなく失業せる青年學徒の困窮を顧慮せねばならぬ。最後に社会主義は只に信条 *Bekenntnis* であるばかりではなく認識 *Erkenntnis* である、科學的社会主義は、社会主義を一つのドグマに縛り付ける事ではなくそれを固定せしむるあらゆるドグマを更めて打破する用意を持つことである。社会主義と科學の尊重とは離すべからざる關係にある。然るに科學の輕蔑、理性の過少評價、啓蒙の輕視が時代の流行となつてゐる。だが我々社会主義者は啓蒙時代の相続者である。生活における理性

の力、世界における科学の力の為に戦うと云う事はその天職である。まさに社会主義的労働者は科学に対して深い尊敬を払い来っている。この意味で聯盟は労働者と科学との結合をその任務のうちに数えている。——これがラードブルッフの講演の概要である。

二

四月号に予告した Herbert Marcuse, Hegels Ontologie und die Grundlegung einer Theorie der Geschichtlichkeit, Vittorio Klostermann Verlag, Frankfurt am Main 1932 が着いたから紹介する。マルクーゼの名は本誌でも兩三回かけるから、珍しく肩書を附していない。ドイツ社会民主党機関誌 "Gesellschaft" などに寄稿しているのをみもなく、彼自身も断っている通り寧ろハイデッガー的軌道を歩んでいると言えよう。本書の目的も歴史性ということの基本性格を掴むことにおかれている。これは歴史的で「ある」という場合のこの「ある」の意味を捉えることである。即ち学問としての歴史ではなく存在の仕方としての歴史に關している。そして更にこの存在が出来事に於いて、その運動性に於いて問われる。かくの如き問いはデイルタイの研究に端緒をもっている。「生」という存在概念を問題の中心とし、歴史的生を以て一切の存在者を「実現する」存在とし、また生を精神と規定することがその根本的趣旨であった。この事は、デイルタイは顯らさまには言っていないが、ヘーゲルの存在論が彼の地盤であったことを語っている。従つて後者は今日もなお歴史的なるものを哲学的に問題にする場合に伝統として遺っている。デイルタイに於いて萌芽的に存在する歴史的なるも

のの基本性格の獲得をヘーゲル存在論に閑説することによつて推し進めねばならない。そこでこの著作はヘーゲルの存在論を生とその歴史性の視角から解明することを企てる。それはヘーゲル「論理学」の新解釈の試みとして現れる。旧ヘーゲル学派以来の伝統的解釈は歴史的なるものの基本を主としてヘーゲルの歴史哲学講述の中に求めた、そして「論理学」を新に得られた存在概念の中心から展開しまたそれをより根源的な「生」の概念とその歴史性とに基づける途をとらなかつた。そこで新しい解釈は両者の連関をつけるためにヘーゲルにとつて彼の哲学の初源的情况からみて生きた現実でありまさにそれ故に顧らさまではなかつたところのものを全て明確ならしめねばならない。尤もこの著作は決してヘーゲル論理学の全面的にして十全な解釈を行うのではなく、存在概念とそれによつて把握された出来事の展開を試みるに過ぎないとマルクゼは述べる。

研究の道程はこうである——先ず問題史的に如何にヘーゲルがカントとの閑説に於いて新しい存在概念を案出したかが究められる。存在概念のきつかけとなる存在の基本意味は「主観性」と「客観性」との根本的統一である。ところがこの統一がヘーゲルに於いては一つにすること即ち存在するものの出来事と理解されるのだから、運動性が存在の基本性格と考えられる。かくしてヘーゲルは存在するものの歴史を以て、一切の存在するものが一般にあるところの出来事として繰りひろげる。ヘーゲルはこの存在者の歴史に於いて存在者が存在者としてその真理性に於いて現実となるまで充実されるのは「生」の存在に於いてであることを示している。生こそ「理念」即ち「実現した」、その「自由性」と「真理性」とに於いて現実な「概念」の「最初の」「直接の」形態である。ところが「論理学」における「生の理念」の展開は顕著な岐路に逢着する。

そこでは生の存在によって与えられた諸規定がその意味の上で歴史性における生の出来事に関係させられている、それにも拘らず「論理学」の中には一見、一切の歴史性の範疇が捨てられている。いわば生が「絶対知識」という本質的に非歴史的な形態に向上するに従ってその本来の歴史性を超克したのである。ここに示されている分裂は「論理学」の内に完結されそれを通してヘーゲル哲学の全体系に保存されている存在論的基本の決定的変更の残滓である。そこで解釈はそれ以前の段階たる「神学上の初期作品」や「現象学」に溯らねばならぬ。——かくて第一部をヘーゲル論理学の「新解釈」に費した著者は、第二部に於いてこれらの初期作品に返りそこに初源的な態におけるヘーゲル存在論の基本を探り、更に最後にディルタイの「アウフバウ」に対するその関連を見とどけようとする。「論理学」に歴史的なるものを求める意味では創見だとしても、ハイデッガーの構想の適用だと解すれば別段新しくもない。

二

例の Baemler 【Alfred Baemler, 1887-1968】と Schröter 【Manfred -, 1880?-不詳】編纂にかかる Handbuch der Philosophie は数年がかりで未だ完結しないが最近 Alois Dempf 【1891-1984】の Kulturphilosophie をだした。第一分冊であるが主要なる部分は尽されている。著者は中世研究家であるらしいが既に "Weltgeschichte als Tat und Gemeinschaft" 1924 のような文化哲学的研究も公にしているのである。

著者の見解によれば、二世紀このかた文化哲学への努力がなされているが、前半は歴史哲学、後半は社会学の隆盛をみたのみであった。学の発達期間からみて今日未だ文化哲学の完成を望むことは無理である。も

とよりこの著作もわれわれの精神状況を闡明し文化方向と文化目的に対する自らの眼を開かしめることに寄与する以外の意図をもつものではないのである。従つて文化哲学は今日、第一に文化批判であり世界観批判であり、種々なる文化観の批判史であり得る。即ち「われわれの現代の特質」を語るものでなければならぬであらう。しかしそこには或いは没落を予言する或いはユトピアを夢みる個人的妄見が入り来り勝ちである。文化の半面は運命であり、他の半面を政治家、哲学者、宗教家、倫理学者が規定するのである。哲学者は冷静に一般的見地から文化問題を解かねばならぬ。かくて著者はまず学究的な文化哲学を完成しようとする。

第一に文化概念は人々の性格、身分、国民に依じて区々なのであるから、それ自身歴史的にまた体系的に取扱われねばならぬ。チュルゴーからカントに至るまでがその前歴史を形成する。著者はかような見地から「文化概念の成立」を最初に述べる。かかる研究は「文化観の類型論」 *Typologie der Kulturschauungen* に連なっている。実存的な歴史哲学は歴史が政治的にもしくは神によつてではなく精神によつて嚮導されると信じているところに成立する。これに対して実存的社会学は歴史の運行が社会的に規定せられるとの信念のもとに成立する。一方は觀念論的、他方は唯物論的見解を代表する。類型学は双方の行き着くところを究め結局における欠陥を明らかにする。かかる意図を以て著者は第三節以下で啓蒙期の歴史哲学的見解から始めて類型の分析をやりかけている。

それより前に文化哲学の諸方法が反省されねばならぬ。類型の研究に適用されるのは文化社会学的方法、特に制度についてのかかる研究である。デンプの述べる第一の方法もこれである。これに続くのは文化批判

である。それは直接には一つの実践であるが、現実生活が普遍妥当的な価値と規範で料られる限りでは理論でもある。文化変動の現象と自由精神のそれへの干渉が文化批判の positiv な面と自然法的な面とを構成する。後の態度に於いて初めて具体的な文化形態の相対性を超越することができ哲学が positiv になることが可能である。併し抽象的精神は一定の立場、一定の階級の党派的なイデオロギーによって文化批判を行う。そこで第三にイデオロギー研究が方法として現れる。ところがこれら三つの方法ともに自然にしろ精神にしろ、経済にしろ国家にしろ一つの要因のみを絶対視し他を相対化する傾向を伝承している。然るに哲学はこれらを総体的に観察しなければ已まない。そこで最後に比較文化誌 *vergleichende Kulturkunde* の方法が顧られねばならぬ。尤もそこに自ら生れる生物学的な自然主義形而上学は、客観観念論的形而上学の構作と共に却けられねばならぬ。文化哲学は絶対的なものの学問ではない。文化哲学を倫理学に体系的に従属させることによって初めて歴史的なるものを偶像化することから免れることができる。かくすることによって初めて哲学的文化批判の途も開かれ、絶対的価値や人格に対する個人の倫理的・宗教的自由を確保すると共に、公衆をして身分や民族の記されざる社会的正義の至上な要求に対し義務づけることもできる。――著者がこれらの問題を取扱うに際して常に重要な役割を演じているのは職業 *Beruf* の概念である。この概念が嘗てカルヴィンによって社会倫理的思想の根柢に据えられたことを省るとき、著者の意図が那邊にあるかも察せられるであらう。

四

新カント派の後継者らは今どんな活動をしているか。マールブルク派についてならばカッシーラーやハルトマンの健在と転向とをわれわれは知っている。バーデン派のリッカート【Heinrich John Rickert, 1863-1936】も「哲学体系」巻一を上梓した後「ロゴス」などで主として現象学派に向けて逆襲戦を演じていたが、そういう活動が体系の完成の仕事と結合して「Die Logik des Prädikats und das Problem der Ontologie」1930なる著書をえなしている。近著の「ロゴス」*では前に Hegel-Renaissance という題を用いたことでわが国にも知られた Heinrich Levy 【1880-不詳】が新カント派的立場からハイデッガーのカント解釈を批判している。数年前東北帝大で哲学を講じたヘルリゲルもこの派の有力学者であるが、彼も決して無為なのではない。彼の最近の著書として次のものを紹介することも無駄ではなからう。その価値は読者の判定に委せる。

* Logos 1932(XXI Bd) Heft 1 の内容は【巻末に目次を掲載した】——

Heinrich Levy, Heideggers Kantinterpretation Rudolf Stadelmann 【1902-49】, Russische Geschichtsphilosophie und deutscher Geist.

Günther Jacob 【生没不詳】, Das Nichts und die Welt, Die metaphysische Frage bei Jean Paul.

Hermann Herrigel 【1888-1973】, Zwischen Frage und Antwort. Gedanken zur Kulturkrise, Berlin 1930 (?), 204 S.

ここで論ずる文化危機なるものは決して吾々の今日の生活の部分的現象ではなく、又部分的危機（例えば、学問の、芸術の、等々）の総和でもなく、寧ろ現代の批判的な全体的状態を指すのである。それが全体的なる危機を意味するのであるから、従つて吾々はこれを何等か客観的なものとして関心的傍観者の態度を以つ

i 日本に來たのは Eugen Herrigel¹ について Hermann はいつに於たる。次号で訂正される。

て眺めることは出来ない。蓋しそれが全体的たるの故に吾々自身が既に危機の中にいるのであるから。だから危機の問題は本来吾々の問題なのである。それが対象的なものでなく却つて吾々のものであることは例え
ば「Umdenkungsprozess」【再考】に注意することに依つて明らかとなるのであるが、更に右の言葉に含まれて
いる思惟を取上げて見ても今日に於いては最早智情意の三能力を立てることは許されない如く、思惟の概念
自身が「Umdenkungsprozess」の中にまぎれ込まれているのである。吾々現代の人間は常に共に出發すべき共通の
前提を持たないのである。それ故にここで問題となつてゐる文化危機自身に關してすらも既に内容的には無
数の見解が分れるのであつて、このことの故に今日では「具体的に語る」ことが要求されて來るのである。
一定の対象の下に同一のものを人々が理解する場合その対象が所謂「具體的なものでなくとも十分に具體的に
語り得るのである」。

かかる危機は哲学の問題でもなく、神学の問題でもないのである。哲学も神学もその他一切のものが共に
危機の中に置かれてゐるのである。一切のものが危機の中にあるということは一切のものが問題の中に置か
れ、問われているということである。一切のものが凡べて限界を喪失して渾沌の中に置かれてゐる。素より
この場合問われているということは何等か恣意に依つて問われているのでもなく、さりとて又原理的、理論
的に問われているのでもない。現実的に問われているのである。けれども問を追跡して行くことは決して答
を生むものではなく、問は更に次の問を、これは又これに続く問を生むのみである。併し問は答を要求し、
答なしでは済まされない。然らばこの答は何處から來るか。答は問とは全然別なもの、全然新しいものであ
り、別な泉源から來る。即ち答は意志の、決意のものである。更に言えば、答は單に理論的なものではなく、

却って政治的なものである。つまりそれは社会的、政治的現実から来るのである。

五

Karl Löwith 【1897-1973】 , Max Weber und Karl Marx, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 67. Band, 1. Heft, ss. 53-99; 2. Heft, ss. 175-214.

マールブルク大学私講師カール・レギトはちやうど『Das Individuum in der Roll des Mitmenschen. Ein Beitrag zur anthropologischen Grundlegung der ethischen Probleme, München 1928, XVI+180』【熊野純彦訳『共同存在の現象学』を公にした。暫くこの書に就いて述べれば、本書に於いて彼は、人間の *Miteinandersein* を以って人間の生活関聯の根柢的な姿として分析して行こうとし、その方法をフェノメノロギー、特にハイデッガーのそれに借り、且つ同時に何処までもアントロポロギー的に進んで行こうとした。その場合レギトの分析は二重の意味に於いてアントロポロギー的であつた。即ち彼の分析は第一にその理解の源泉及び理解の方途の根源性に関してアントロポロギーの立場に立ち、第二に人間生活の日常的諸現象から *Miteinandersein* の現象を發展せしめ、人間生活の最も要素的な構造関聯にまで進み、かくて内容的にアントロポロギー的地盤を獲得するのであつた。ところでこの様な人間の生活関聯はその基礎に横たわるところのエトスに關係する。このエトスは実に倫理学の根本的テーマに外ならぬ故、アントロポロギーの基礎づけが倫理学の基礎づけであることになる。けれども彼の分析に於いて倫理的とは何等単なる善、惡、倫理的価値と言う如きものに限せずして、却って唯 *Miteinandersein* の形式的構造に關する。

レギトは誰にも増してフオイエルバッハを高く評価する。フオイエルバッハに於いて、アントロポロギー的に哲学するということは、第一に抽象的思惟を先ず立証するところの感性への顧慮と、第二に自己の思惟を先ず立証する共在人への顧慮とに依つて特徴づけられる。哲学一般にかかる二つの特徴はフオイエルバッハの *Sensualismus* と *Altruismus* とにまで発展する。然るにレギトはフオイエルバッハを乗り越えて進もうとする。そこで次の様な三個の間をフオイエルバッハに叩きつける。一、人は如何にして諸他者中の「汝」に出逢うか。二、「汝」は正に唯吾の汝であるのみであるか。三、「吾」は正に唯汝の吾であるのみであるか。レギトは第一の間に關して第二章、*Strukturanalyse des Miteinanderseins* を、第二の間に關して第三章 *"Der eine und der andere in ihrer gegenseitigen Selbständigkeit"*、第三の間に關して第四章、*"Ich selbst" in meiner "Einzigkeit"* を記している。

さてこのレギトが今ヴェーバーとマルクスとに就いて語るのである。社会に關する科学として今日ブルジョワ社会学とプロレタリア的なマルクス主義とが対立している。その最も重要な代表者として差当りマルクス・ヴェーバーとカルル・マルクスとが挙げられるのであるが、期せずして両者の研究領域は全く同一のところ存する。即ちそれは近代の全經濟また社会の資本主義的構造これである。この問題が根本的意義乃至重要性を担う所以は、これが現代の人間をその人間性の全体に於いて捕え、かくして社会的又經濟的プロブレマティクの根柢をなすからである。結局のところブルジョワ的、資本主義的社会秩序のプロブレマティクは人間そのものに於いて顕わとなるのであるから、資本主義自体も亦その根源的な、純粹人間的な意味に於いて把握され得るのである。かくて資本主義的な經濟又社会の分析は一定の人間觀を明白乃至不明白な手蔓

として含むのであつて、ここに事実としての人間に対して一定のイデーとして人間が考えられることとなる。ヴェーバー及びマルクスの「社会学的」研究をその原理的意義に於いて把握せんためには畢竟この人間観また人間のイデーにまで溯らねばならないのである。

そこでレギトは本論文に於いて、ヴェーバーとマルクスとが経済及び社会の根柢としての夫々の人間のイデーとして持つていたものの比較を行おうとするのである。素より二人がはつきりと意識して一定の人間のイデーを持つておつたと言うのではなく、却つて寧ろ無意識的にこれを抱いておつたと言うのである。

さてヴェーバーはブルジョワ的、資本主義的社会を解釈するに當つて手蔓として「合理化」を使用するのであるが、この合理化たるや彼にあつては資本主義をその原理的意義に於いて特徴づけるものである。ヴェーバーは合理化の事実を「宗教社会学論文集」に於いて基礎的、世界的及びアントロポロギーの意味に於いて論じているが、實際人々の多くが考えている様に、ヴェーバーは決して宗教的信仰が資本主義経済を成立せしめたという風に説くのではなく、ヴェーバーは寧ろプロテスタント的信仰も資本主義的経済も共に一定の普遍的なエトスに基づくものと見るのである。プロテスタント宗教も資本主義経済も、ヨーロッパ・ブルジョワジーがこれの担い手となつているところの一定のエトスの上に立つものなのである。

ところがマルクスはブルジョワ的、資本主義的社会的解釈の手蔓として「人間の自己疎外」を用いる。ヘーゲリアーネルとしてのマルクスにとつてはブルジョワ社会は特に「非理性的な」現実性を、非人間性を示す。そこでマルクスにとつての根本的な課題は「人間の人間の解放」である。けれどもマルクスにとつて人間は常に具体的な人間を意味する。この点でマルクスに於ける「人間の自己疎外」はヘーゲルのそれと全く異なる。

蓋しヘーゲルにもこの概念は見出されるが、ヘーゲルでは人間は本質上却って精神なのであるから。マルクスに於ける人間の自己疎外のプロブレマティクは第一に商品世界に経済的表現を、第二にブルジョワ国家とブルジョワ社会との矛盾に政治的表現を、第三にプロレタリアートの存在に直接人間的、社会的表現を持つ。

海外哲学思潮 1932.7

—

吾々は五月号の本欄で人間学に関する若干の文献を紹介して置いたが、その補遺としてブランシュギツクの「自我の認識に就つて」(Léon Brunschwig [1869-1944], *De la connaissance de soi*, Paris 1931)を紹介しよう。ブランシュギツクは「パスカル全集」の編纂者として、又パスカル研究の権威として知られている。さきに三木清氏に依つて『パスカルに於ける人間の研究』を贈られた日本人々にとってはこのブランシュギツクの人間学的業績は特に興味深きものである。

ブランシュギツクの「自我の認識に就いて」は元来一九二九年——三〇年の冬学期にソルボンヌ大学で行われた講義に基づくものである。大体人間学への入門書とでも見らるべきものと思われる。先ず自我の認識とは如何なることか。それは「過去を蘇らすことを望んで、確実にその中へ没入することであり、更に自己の将来、運命に就いて問うことである。即ち自己自らに対して賭することである。」併しこの個人的な賭はより重要な賭へと導かれねばならぬ。より重要な賭とは所謂理性的動物としての人間が生活本能、社会的伝統に内在する必然性に対して、独自の進歩に於ける自律性を要求する時に自己自らに対して行うところの賭である。ここで自我認識はアントロポロジーの問題に発展する。

自己とは何か、とパスカルの言葉を引いて尋ねる。自己とは一 の概念ではなく具体的存在であり、その

本質は宇宙への順応を目指すところにある。氏は心理学又生物学がこの自己に就いて教えるところを簡単に語った後、Homo faber の問題に入り、古代から中世、近世へ、つまり魔術から、錬金術、機械への技術的進歩に依つて、「合理化」に依つて進み来つた人間の足跡を顧みる。これに対立するものは Homo artifex, l'agent moral, l'être spirituel としての人間と密接な關係に立つところの Homo religiosus である。然るに Homo faber と Homo religiosus とは対立しながらも Homo magicus たる点に於いて即ち客觀的威力への信仰に於いては一致する。氏は尚 Homo loquens, l'animal politique, Homo artifex, Homo sapiens, l'agent moral としての人間を語つて、最後に l'être spirituel としての自己をはつきりと見直そうとする。氏は頗る神秘的な調子で、靈魂と宇宙、人間と動物、精神と肉体、こうした諸關係を規定し、そして自己認識の試みは如何にして完成されるかと問う。氏に依れば、この試みは自然又伝統と不斷の戦をなすことに依り吾々の意識の本質に於いて完成されると言うのである。実にこの戦の危険を冒すことこそは生きることである、スピノザの言葉を藉れば、「血液の循環その他凡ゆる動物に共通な機能に依つてのみならず、就中理性に依つて、即ち眞の徳義に依つて、魂の眞の生活に依つて自らを規定すること」である。

二

この欄で表題だけを記したことであつたが、ロシヤの精神史とでもいうべきものがドイツで、それもヘーゲルのな視点から問題になつてゐるのは興味のあることである。それで重ねてその内容を紹介する。

その一は Janke Janett 【1900-1945】、Zur Geschichte des russischen Hegelianismus [Deutsche Vierteljahrsschrift

für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 10. Jahrg. Heft 1.]である。——ロシア精神界に於いては、シェリングを除けば、西欧の哲学者中ヘーゲルが最も影響を及ぼした。前世紀の三四十年はヘーゲル哲学が一番普くそして奥深く味得された時期であつた。その頃ロシア思想界に対立した西欧主義者も国粹スラヴ主義者も共にこれを味方にひき入れようとした。従つてロシアにおけるヘーゲル主義には最も保守的な型から最も急進的 破壊的な型まである。そしていずれの側でもヘーゲルは偶像視され、言説が宗教的色彩を帯びていた。とにかくヘーゲルの影響を考えないでは、ロシアにかくの如き深刻な思索は起り得なかつたであろう。

ロシア・ヘーゲル主義の第一期は一八三六年——四〇年の間で、主としてヘーゲルのロマン的、保守的、現実との和解の方面が伝えられた時期であり、第二期はその後、コントの実証主義的思想の輸入に至るまでであつて、前とは反対に破壊的・否定的方面が継承された頃である。実証主義、唯物論は暫くヘーゲルの名を隠していたが九十年代から再び復活し始めた。

ロシア・ヘーゲル主義の特徴を一般的に言えば、それが著しく神秘的・象徴的であり、啓示的であることである。これはスラヴ民族の思想的特質に根ざしているのであろう。であるからヘーゲル主義者と称する者も必ずしも純粹にして忠実なヘーゲル信奉者とは称し得ない。かかる人物の代表者はロシア最大の批評家、ビエリンスキー Visarion Belinski [Visarion Grigoryevich Belinsky] (1811-1848) である。彼は激情と憎悪の天才であつたが而も尚既存するものの凡てを肯定することを宗教とした。彼はシェクスピアを以て現実的世界と完全に融和している故に「永遠の美」の実現者と考へた。彼はツアの専制をも肯定した。併し一八四〇年以後、彼はシルレル的理想主義に立戻り、現実の不正、偶然、不合理を語つた。モスコウ大学の法律学

教授 Peter Redkin(1808-1891) もこの型に属している。彼はベルリンでヘーゲルの講義を聴いた最初のロシヤ人である。だが彼は最も皮相的にヘーゲルの図式を移し植えたに過ぎなかった。要するにこれらの人々によつてはヘーゲルの体系と理論が咀嚼されたに止つた。その最も甚だしい例は Nikorai Wladimirovitch Stankevitch(1813-1840)である。彼は予言者的熱情を以てヘーゲルを担ぎ廻つた。彼に於いてはロゴスは「生ける神の言葉」であつた。

著者は、しかし、バクーニン Michael Bakunin(1824-1876)の出現を以て、ロシヤにおけるヘーゲル主義に一時期を劃するものと考えている。バクーニンはヘーゲルを読まずとも弁証法論者になつたであらうような性格の所有者であつた。彼はヘーゲルの根本主張を革命的カテキズムに変更することを志した。けれどもバクーニンと雖もヘーゲルをスラヴ化した点に於いては同じである。彼に於いてヘーゲルは暴風的・悪魔的となつた。彼は否定の必然と苦痛とを陶酔的に証示する『精神の現象学』を愛した。彼と共に名を挙げらるべきは彼の友人ヘルツェン Alexander Herzen【ゲルツェン】(1812-1870)である。ヘルツェンはヘーゲル哲学を「革命の代数」として規定したので有名である。しかし彼はロシヤのヘーゲル主義者の中で、珍しく理論的動機からヘーゲルに赴いた第一人者である。彼は、バクーニンが狂信と情熱の人だとすれば、明白な見透しと形式とを尚ぶ人間であつた。この好學の青年は三十歳の頃フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を読んだ、彼のいわゆる「仮面」たるヘーゲル哲学を脱ぎ棄てた。尤もこの頃ロシヤの多くのインテリゲンチヤがかかる脱皮過程にあつた。チエルニシェフスキー Tschernyshevsky【Николай Гаврилович Чернышевский; Nikolai Gavrilovich Chernyshevskii, 1828-89】は他の側から即ち英国の功利主義の影響の下に唯物論への媒介者となつ

た。かくして六〇年代には唯物論的傾向が勝利を占めた。Pisarew [Dimitri Ivanovich Pisarev, 1840-68] など
はドイツ観念論は総じて「詐欺」「偽瞞」と罵った。ところがソロヴィエフ Wladimir Solowjew [Wladimir
Sergejewitsch Solowjow, 1853-1900] の宗教的形而上学の出現と共に再びヘーゲルの名が呼び醸された。

「ログス」本年初号にのつた Rudolf Stadelmann, Russische Geschichtsphilosophie und Deutscher Geist もまた
ロシアにおける歴史哲学がスラヴ主義、ヘルツェン、バクーニン、チエルニシェフスキー、ピサレフ、ツル
ゲネフ等の破壊万能的な虚無主義、非マルクス主義的な社会主義を説く人民の友一派、ゴーゴリからドスト
エフスキーに至る文学的現実主義、トルストイの反文明主義などに分流せることを述べ、それらに通ずる伝
統としてロシアを西欧と対峙して考えようとする傾向を指摘し、かかる特質を継承したものとして嘗てのマ
ルクス主義者で今は貴族主義的な立場をとる亡命の文筆家 Nikolaus Berdjajew [1874-1948] の近作を紹介す
ることを主たる任務としている。前の Janett の文もそうであつたが、この評論にしても、ソヴェート・ロ
シアの新しい思想的、哲学的動向に結びつけて、その来歴を説こうというのではなく、寧ろそれを無視して
反対な立場から過去および現在のロシア精神界を眺めようと企図しているのはどういふものであろうか。

三

五月号の本欄でマルクスの新しい遺稿が「旗のもとに」誌に発表されたことを告げたが、それはより大き
な連関のもとに綴られた原稿の一部であることが解つた。そしてその全文が最近、二つの形態で印刷に附
されたから紹介する。一は S. Landschut と J. P. Mayer との編纂により、他の一八四七年までのマルクスⅡエ

ンゲルスの初期の論文と共に、「Der historischer Materialismus」と題する Kröner Taschenausgabe の一環としての二冊ものの第一巻の中に収められている。それによるとこの遺稿は一八四四年マルクスがパリにあつて独自の思想を編み始めた頃に成つたものらしい。編者の言葉によると初め J. P. Mayer と Friedrich Salamon の編輯で "Karl Marx, Über den Zusammenhang der Nationalökonomie mit Staat, Recht, Moral und bürgerlichen Leben nebst einer Auseinandersetzung mit der Hegelschen Dialektik und der Philosophie überhaupt" と題して上梓される筈で、社会民主党文庫にあつた原稿を判読したのもこの兩人であつた。ところが後に至つてより、広汎な連関に於いて今回の版に組入れる可能性が生じたので、新に二回目の手稿整理がマイエルとランツフトの手で行われ、更に前記三人で最後の仕上げが遂げられたという。内容は経済学、哲学、社会主義に関する断片が一見、雑然と寄せ集められており、そこから一貫した思想を汲みとることは仲々困難なようにみえる。「広告」は「資本論」への鍵を提供するものなど称しているが、前回にも述べたようにパウエル一派には既に鋭く対立しているが未だフォイエルバッハの強い影響下にあり、その上、哲学的社会主義即ち wahrer od. absoluter Sozialismus への偏向も十分脱していないように思える。同じクロエネル袖珍版は未公表のドイツチェ・イデオロギーの残部全体をも示しているが、その中には明らかにこの派の考が清算されているのが見受けられる。要するにこの全篇二巻は首著に至るまでのマルクスの思想発展の道程を知るのに寔に便利に編せられていると考える。

さて前記の論文は同時にアドラツキー編モスコウ版全集の第三卷第一分冊の中にも Oekonomisch-philosophische Manuscripte (1844) と題して収められている。クロエネル版と比較すると配列も異なり、前者

で本文に入っているものも附録になっているような箇所もあり、また重要なことには諸処 *Lesart* を異にしている。原稿をみる便宜のない紹介者に優劣を語るとは勿論できないことだが、クロエネル版の方は不明な箇所には疑問符をうつ等、原稿のままを曝けだしたという風なところが多いが、モスコウ版の方は文章も意味が通るようになっており、項目の分け方なども読みよく、重複点を附録として別頁に移すなどの用意をしている。こういう風にいずれも特徴をもっているのだから、どうしても対照して読むことが必要なのだろう。

序でながら "Verlag für Literatur und Politik, Berlin-Wien" からマルクス・エンゲルス・レーニンの著作の廉価版が出ることをお伝えする。「資本論」巻一組麻装幀で、約七百頁が二四五馬克、五月末にはでるとある。而もマルクス・エンゲルス研究所の公認版である。なお両人の著作集は九巻にまとめられ、各巻二・八五馬克、レーニンのそれは十二巻で値は同じである。前者は今年中に後者は五月末に最初の巻を出すそうだ。

訂正。前号に紹介したヘルマン・ヘルリゲルを「元東北大学講師」のように記したが、嘗て来朝したのはオイゲン・ヘルリゲルだったので、それを仮定して書いた文句一切を削除する。

一

吾々は六月号の本欄に於いてヘルマン・ヘリゲルの文化危機に関する著書を紹介したが、そこでは現代に於ける精神生活の危機が中心の問題をなしていた。ここに吾々はゲーレンの「現実的及び非現実的精神」(Arnold Gehlen 【1904-76】 , Wirklicher und unwirklicher Geist Eine philosophische Untersuchung in der Methode absoluter Phänomenologie, Leipzig 1931, XIII+232)を紹介するに当って、ヘリゲルのそれとの出発点の共通を思わざるを得ない。即ちライプチヒの哲学私講師ゲーレンは現代に於ける精神の価値に対する不信から出発する。

さて哲学とは實在に於ける原基的なものの研究に携る学問であるが、人々が哲学するに先立って即ち存在の本質を語るに先立って、抑々思惟はかかる原基的なものに到達し得るか、又如何なる種類の思惟もこれに到達し得るかが問われる。蓋し現実 は万人の通じ得るものたるべきにしても任意の方法に於いて然るか否かは問題であるから。思惟が世界の認識に適當であるか否かは認識論の問題である。そして現実的及び非現実的という様な思惟の種類があるか否かは認識論自身にとって先決問題であり、実に又本書の問題なのである。ところでこうした問題が強要される理由は現代の精神生活の中にある。今日誰でも歴史的感覚を持ち合わせているものにとつては、精神の本質及び価値に関する著しき不信が他の時代とは比較にならぬ程強く行われ

ていることは明白である。宗教も形而上学も吾々の生活に対する影響力に關しては政治又經濟に席を譲っており、諸科学も亦これに似た憂目を見ている。勿論こうした精神への不信はカントからショーペンハウエル、ニーチェを通じてプラグマティズム、ベルグソンに到る歴史を持つてゐるが、現代程その熾烈なるはない。而もこの精神の非現実化、現実性の喪失は主観的な方面に於いて、即ち人格の生活に於いて若干の具体的現象を惹起している。即ち一、新しき知識が人格に対して動的影響を与えることが欠除している。二、凡ゆる認識に就いての主観性が確信されている。三、青年は体ばかり若くて精神的には何等の發展の可能性も持っていない。四、觀念と現実との対決を回避することから、假定、偏見、妄想への傾向が生れている。

併し真理の認識は絶対に不可欠である。自分自身又他の人々の凡ゆる確信への懷疑は却つて自分を絶対的フェノメノロギーへ導く。与えられざる一切のものに就いての假定を一般に断念し、一切の疑いから自由を与えられたもの即ち具体的生活状況の現象的内容のみに結びつくところの絶対的フェノメノロギーへと導くのである。直観的に与えられておらぬものに關係し得る様な人間の思维能力、思惟に固有の能力であるにしても假定する理由のない一切のものはこれを謂わば括弧に入れる。直観的に与えられたものの命名以上に、隠されたものの認識へ進まんとする思惟能力は正に問題のであり、且この問題こそ本書の問題なのである。吾々の対象は吾々の状況に依存する。かくて絶対的状況のみが絶対的対象を持つことが出来る。絶対的フェノメノロギーにとつて最も直接の内容は生ける状況の内面的論理の叙述であることとなる。——ニーチェに源をもちヤスペルス等によつて歴史哲学上の一の重要な概念として發展させられている状況 Situation の一解釈として興味をもたるべきであらう。

二

エルランゲンのルートドルフ・ツォッヘルという人が「フッサルのフェノメノロギーとシュッペの論理学」(Rudolf Zöcher [1887-1976], Husserls Phänomenologie und Schuppes Logik. Ein Beitrag zur Kritik des intuitionistischen Ontologismus in der Immanenzidee, München 1932, 280 S.)を書いた。彼は一九二五年にHeidelberger Abhandlungenの第六冊として客観的妥当論理と内在思想とに関する研究を公にしその中で“immanente” Erkenntnistheorieを企てたが、更にその詳細な基礎づけを行おうとしていた。本書は恰もこの基礎づけの準備作業であつて大体一、ゾルヘルム・シュッペの内在哲学、二、エトムント・フッサルの現象学的哲学、三、シュッペとフッサル、の三部に分れている。

フッサルの現象学的理念は直観主義的 Ontologismus と呼べるべき構造を持つているのであるが、これの内的構成は、所謂内在哲学として知られるシュッペの哲学と頗る親しい関係を持つ様に見える。成程フッサルは歴史的又形態的にはブレンターノと密接に結びついてはいるが、内在哲学としてはシュッペとも同じく密接に結びついている。このことが両者の哲学の構造的類似を生んでいるのであつて、この故に両者の綿密な比較研究が必要となる。吾々にとって特に興味のあるのは、両者の内在論が共に批判的に企てられた内在思想からの《intuitionistisch-ontologisch》Aberrationを示す点である。処で歴史的に見ると殆んど独立にシュッペとフッサルとの哲学の中に右の逸脱が存しているのであるが、こうした矛盾の両者に於ける成立の事情を夫々尋ね、そして自家の内在論の建設に資そうとするのが本書の目的である。

三

色々な意味で現在多くの関心の的となつてゐる哲學的問題の一つとして存在論が考えられる。今春フランスで出版されたラエルの「存在に於いて」(Louis Lavelle 【1883-1951】 , *De l'être. La dialectique de l'éternel présent*, Paris, Alean, 1932, 212 p.)を紹介することはフランス哲學に關して余りにも語ることの少いこの國に於いて特にこの際有益と思われる。

この書の目的は存在を *l'unité, la multiplicité, l'intériorité* の三様相に於いて把握しようとする處にある。

先づ *l'unité* に關しては第一に存在の優位が問題となる。吾々は存在の内部に於いてのみ、又その形式の間に於いてのみ秩序を見ることが出来、従つて例えば無から存在への道はあり得ず、却つて無に對しては既に一種の否定的存在が付与されており、かくて存在が無に根元を持つと言われる時には既に存在の部分たる無と觀念的持続(これは存在の一形式だ)とを仮定してかからねばならぬという不可能を持つことになる。無に對する存在の優位である。第二に存在の普遍性が問題となる。實に存在は實在的なものも現象的なものも、理性的なものも感性的なものも、その他一切のものを含むのである。可能なるものも存在に先行するものもなく又存在の外にあるものでもない。それは存在のアスペである。更に又存在を限定しようとするものすらも存在に含まれる故に存在はその限界を知らない。第三に存在の一義性がある。つまり存在には *degré* 又階層がないということであつて、これが存在の *l'unité* の基礎を形造る。

次に存在の *la multiplicité* に就いてであるが、第一に存在は内包に於いても外延に於いても一にして且

つ無限である。故に凡ゆる性質は種々の対象に於ける同一の個物に依り、又各対象の中の種々の個物に依つて見出されるが、凡ゆる客観的認識にして抽象的たる以上、吾々の持つ抽象的概念は具体的本質の象徴に外ならぬ。全体的存在の永続は個物の多様性を越えて外延と内包との差異を除く。第二に *existence* の判断が問題であるが、同一の形式を持ち唯内容のみに依つて区別される *existence* の批判の対象は思惟に関するすべての名辞である。第三に全体の存在と部分の存在とが論ぜられる。全体は部分の総和ではあり得ぬが、常に部分を生み出す観念的原理である。部分は現象的存在であつて意識に対してのみ意味を持つ。かくして存在は常に全体に属するのであるが、全体と部分との間の調停者は意識である。

最後に存在の *l'interiorité* であるが、先ず自我の存在に關して言えば、自我は存在の一部分であり、且つ部分への分割の当事者であり、思惟に依つて存在へと導き入れられるのである。デカルトの『*Cogito, ergo sum*』は存在を思惟に書き込むのでなく、思惟を存在へ導いたものである。第二に最も十全なもの、真なるものとしての存在の観念が説かれる。右の観念の中に於いてのみ自我の観念その他の一切の観念が考えられる。第三に存在の *présence* が取上げられる。吾々が存在を見出すのは自我の *présence* の発見を俟つて始めて可能である。現在はこの故に人間にとつて密接な關係を持つて来る。個別的な凡ての *présence* は相互的であるが凡ての絶対的存在の中に根を持つている。個別的な *présence* の一つ一つに於いて全体のそれを見出すことは吾々の課題である。

四

ドイツ觀念論の父、ニコラウス・クザーヌスの全集が新しくハイデルベルク学士院の手によつて編纂され直されているが、この程、第一巻が公にされた。クザーヌスの哲学上における意義はここに述べたてゝるまでもないが、彼は古典学者として、数学者、自然科学者として、神学者として、中世から近世への重大なる過渡期に於いて並びなき地位を占め、近世學術のよき萌芽を一身に包蔵した天才であつた。殊にわれわれの時代に向つて特別の関心を呼ぶのは、既にゴエルレス、ヨハンネス・ミュラー、ランケなどによつて注意された通り、彼が国家および教会の改革を企画するなど政治的行動に於いてもひげ、目を示していないことである。今回の全集計画は時の事情に制限されてあらゆる文献を網羅し得なかつたと断つてゐるに拘らず、特に国家理論に関するものはこれを収めている。ルネサンスの意義が新しく考え直されようとする時、注意すべきであらう。

従来クザーヌスの書いたものは四種の論集に収められていたが、その最も新しいものでさえ三百五十年以上も経つたもので今日稀觀書であることはもちろん、往々テキストを歪曲して伝えており原意と全く反対な意義を呈する場合さえある。今回の全集は一々散逸せる手稿に基づいて嚴密な考証と校合とを経て印刷されるものだから、十四卷三百マルクであり、時節柄かなりの豪華版ではあるが、ドイツ觀念論の熱愛者は是非顧みるべきものであらう。予約者のみに頒つという。扉名は左の如くである。

Nicolai de Cusa, Opera Omnia, Iussu et auctoritate Academiae Littrarum Heidelbergensis ad codicum fidem edita. [Verlag von Felix Meiner, Leipzig]

一

弁証法的神学者として有名なひとりであり、必ずしも神学に精通しない者にも比較的親しみ易いように思われるところのエミル・ブルンナー Emil Brunner [1889-1966] は随分矢継ぎばやに研究を発表するが、近頃、倫理学の方面へ積極的に乗りだしてきたように思えるのは注目に値いする。昨年 "Das Grundproblem der Ethik" と題する小冊子を公にした彼は、最近再び "Das Gebot und die Ordnungen" (Tübingen) を出した。七百頁に垂んとする大著で、自らも永年の成果であると言っているが、敢えて「プロテスタント的・神学的倫理学の企画」と副題している。

ブルンナーに拠ると、「われわれは何を為すべきか」という倫理上の根本的問いは、勝れて人間的問いであるが、キリスト教的信仰すなわち聖なる場所に至る入口である。これを通過せずしては其処に達するを得ない。けれどもそれはまた聖座から生へ返ってくる出口でもある。問いは同じ言葉で表されてはいるが、後の場合には新しい意味を取得してくる。もちろんその間、魔術が行われるわけではなく、入って来るのも出てゆくのも、同じ人間、迷い過ち犯すところの人間である。ところが聖座に於いて、たとえひそやかにして肉眼には判つきり認められないでも、人間は別の新たな人間に作られる、彼の眼と心は彼が以前に識ることのなかった實在、すなわち生ける神の實在に向って開かれる。

倫理学要望の声はしきりであり、これに対して確固たる答を与えないことは基督者の怠慢である。とはいえそれはカトリック教会の発するような、各人にあらゆる時にその行動を良心的に縛る絶対的法則の告示によつては解決できない。倫理学は最後の判定を与えようとするのではなく、時に応じて行おうとするものが、咎なく進むために熟慮をめぐらすように準備させることがその任務である。ところがブルンナーは“protestantisch”とか“evangelisch”とか呼ばれる倫理学者の中にも真にこの要望を充すものは殆どないと嘆く。宗教改革このかた新教的信仰の中心から企てられた倫理学は皆無だといつても過言でない、と彼は誌している。

さて今日プロテスタント的・神学的倫理学に需められる課題は二つある。一つは、正しき行動に関する福音書の教説の基礎と基本概念を新しく回想することである。ブルンナーはこれを個々の問題ではなく、全体に関する事で最も重大だと考えている。しかし、この方面は現代の神学が再び熱心に努力しだした点であり、彼もまた従来友人 Karl Barth, Friedrich Gogarten [1887-1967] らと共に力を致して来たのであるが、更にこの方向に一步進めようとすれば勢い第二の課題に関係せねばならぬ。即ち個々の生活圏の具体的問題を顧慮せねばならぬ。

本書は三部に分れているが、最初の部はいわば序論であり、「命令」Das Gebot と題する第二部が大体に於いて著者のいう第一の課題に充当され、「秩序」Die Ordnungen と題する第三部が第二の課題に相当するようになっている。われわれにとって特に興味を惹くのはこの第三部であろう。いままで弁証法的神学の提唱に於いて、個人的信仰は力を得たとしても、社会的制度、文化財というようなものをどう取扱うかは一つの疑

問と考えられた。それだけブルンナーが今回「秩序」の名の下にこれらの事柄に關説したのは興味深いことでなければならぬ。彼は先ず個人と協同態との關係を述べ、次いで生の協同態たる、夫婦と家族を論じ、更に「労働協同態」と称して經濟を、第四に国家及び法の協同態を、第五に科学と芸術と教化とを含む文化協同態を、最後に教会を論じた信仰協同態を叙述している。彼はデイレktanティズムを惧れているが、とにかく体系の拡大を慶ばねばなるまい。そしてこういう方面への進出は弁証法的神学の試練ともなるであろう。人あつてそういう人達はマルクス説をどう解しているかと問うならば、この本に現れた限りではシュパンとかヴィルブラントとかいう反動家の見解の受売であつて、他の方面もこうだとすると甚だ心細い次第だと答える外はない。(以上、本多記)

二

フッサールは以下の二論文を非難した由、

ルードルフ・ツォッヘルの「フッサールの現象学とシュッペの論理学」(Rudolf Zöcher, Husserls Phänomenologie und Schuppes Logik, München 1932)

ユリウス・クラフトの「フッサールからハイデッガーへ」(Julius Kraft [1898-1960], Von Husserl zu Heidegger. Kritik der phänomenologischen Philosophie, Leipzig 1932, 124 S.)

ツォッヘルの書は既に前号本欄に於いて紹介して居いたから、今はクラフトの書の大体を摘記することにして、「現象学的哲学の批判」の批判を読者に俟ちたいと思う。

なお、クラフトは嘗ってドイツの社会学雑誌たる *Kölner Vierteljahreshfte für Soziologie* VIII-3 に「自然現象としての社会現象」(*Soziale Erscheinungen als Naturerscheinungen*) なる論文を寄せたことがある。(この論文は清水幾太郎に依って紹介されている。「社会学雑誌」七四号、昭和五年五月)。……清水幾多郎筆

海外哲学思潮 1932.11

一、性格学的諸研究

ここ数年來いろいろな関心から、性格学的研究が隆になつてきた。体貌、氣質、性格の相関の見地から個人々格の構造と能作とを究めようとする一つの科学的傾向である。ここではその作品の目立つたものを紹介しておく。

E. Kretschmer 【Ernst -, 1888-1964】 , Körperbau und Charakter. Untersuchungen zum Konstitutionsproblem und zur Lehre von den Temperamenten, 4. Aufl. Berlin 1925. は既に世界的名声を博している。彼は精神病者の觀察に出発して、体貌を瘦せ細り型とずんぐり型と二つに分け、後者は主として憂鬱病に、前者は精神作用の内部連絡の欠除に陥り勝ちであることを示し、健康者における同様の対応にも及んでいる。

「氣質」、「性格」とかいう概念を一定の生物学的現象に相属させようと試みるのは G. Ewald 【Gottfried -, 1888-不詳】 , Temperament und Charakter. Berlin 1924. である。氣質は緊張感に依拠し、後者は新陳代謝の速度と良否に係る。これは個人の精神的感動性を規定する。性格は脳の生来的構造および内分泌系統の性質に依存する。この生来的性格が環境の影響のもとに後天的性格を獲得する。性格は分析されて十六の主たる集団に分割される。

H. Apfelbach 【Hans -, 生没不詳】 , Aufbau des Charakters, Leipzig 1924. は合理的性格学の基本概念を提供して

いる。性格の基礎は諸本能、傾向、衝動、感情等のとりどりの交錯である。彼は先天的な性格要素を五つに分類し、性、心的態様、情意性、徳性、知性としている。これに加えて二つの後天的要素があり、その組み合わせから六十五の性格型がひき出される。

"Wege zum Wissen" 叢書中の E. Podach 【Erich Friedrich --, 1894-1967】、"Körper, Temperament und Charakter", Berlin 1927. は簡単にして通俗的な叙述を与えている。主として他説の紹介である。

批判的取扱をしているのは R. Wahle 【Richard --, 1857-1935】、Die Entstehung der Charaktere, München 1928. である。特に文芸的な非科学的傾向を責めている。彼はこれに代えて精確なる方法の下に精神態の生理的窮極力を摘出すべきことを勧める。

豊富な材料に基づき特に天才、芸術家等の創造的精神を題目としているのは P. Plant 【Paul Plant, 1894- 不詳】、Die Psychologie der Persönlichkeit, Stuttgart 1929. である。彼は旧い天才論を斥け、効率の代りに全能作を基準とする。全て生産的創造は人格と物の交響から起る、それは作品生産作用たるばかりでなく、実りある形象作用である。

性格学、類型心理学と結びつけて形貌学の体系を示しているのは W. Böhle 【Wilhelm --, 生没不詳】、Die Körperform als Spiegel der Seele, Leipzig 1929. である。彼の性格分類は Kretschmer に依拠し、性格学全体は Klages 【Ludwig --, 1872-1957】に倚っている。最後の章では性格型に対応して人種型をも論じている。

L. Klages は彼の性格学と形而上学を混ぜ合わせたと思われる大作 Der Geist als Widersacher der Seele を近刊した。その内 Die Lehre von der Wirklichkeit der Bilder, Das Weltbild des Relasgerturns が本年になつて出た。

カイロ生れの医者 Alberto Mochi 【生没不詳】という人が序文二四頁、本文五八二頁という膨大な *Confessions* を書いた。それは *Science et Morale dans les Problèmes sociaux*, Paris, Alcan, 1931. である。全体としても興味の無いものではないが、学問的に見て差当り問題となるのは六〇〇頁中の二章、八〇頁である。著者の見解に依ると、社会学は歴史哲学と同一であり、従つてギコ【ヴィーロヴィコ】まで溯ることが出来る。ギコの *corsi e ricorsi* は著者に翻訳されて「善と悪」になる。ところで社会学の対象は善、悪という根本範疇の中で、一義的に表現され且つ普遍妥当的に承認され得る部分である。このものは科学的道徳学や前提をなし、社会学的根本範疇 (*Pré-supposée*) たるものである。この根本概念は勿論アプリオリなものであるが、経済、法律、政治の如き一義的ならぬ諸原理の分析から得られるものである。右の根本概念はその一義性及び普遍妥当性を「道徳的なもの」の三様の形態の中に消極的に見出すことが出来る。即ち一、非人間的なるものが人間に害を与え或は少くとも無益である時、二、同一の人間が同時に裁くものであり且つ裁かれるものである時、三、或る人間の身体的又精神的能力に依存せざる原因に依つてその人間に効果が来り又来らざる時、悪である。さて科学一般の方法がそうである様に、社会学の方法もその応用に依つて規定せられる。ここで社会学は特に実証的社会学であるが、それは生物学、生理学に依存する。著者曰く「一義的三原理は事物の三性質を定立する。即ち、一、人間に対する自然の最大限の效用、二、独立なる判断、三、労力と効果との完全なる均衡。吾々が未だ右の三性質を測定し得ないからといって、その存在せぬ旨を結論すること

は許されない。吾々が何か現実的なものを追求しているとの確信を持たぬ時は、右の性質の発見、その存立の諸制約の規定は到底望むべくもない。その存立への確信のみが、吾々をして社会的領域に於ける原因と結果との関係に就いての厳密なる概念構成を可能ならしめるのである。」

道徳的感情は重力と同じ意味で力である。それは起動原因である。吾々にとって問題なのは、他の諸原因も社会諸現象に影響を与えるか否かということであるが、實際道徳的感情は *cause verue* であつて、他の諸原因は凡てこれに従属する。曰く「吾々は一義的諸原理から出発して、社会発展を操縦するところの目的原因をも規定することが出来る。吾々は進歩を規定することが出来る。自然をより宜く支配し、主観的判斷の實踐的影響を万人の希望及び要求を顧慮することに依つて避け、各人に対して彼の能力及び傾向の發展に必要な前提を提供する、可能性の中に一切の進歩は存する。」——これがカイロ生れの医者和社会に関する學問的見解である。

三

文化社会学がドイツ社会学界の主流をなしているが、文化社会学は、一方例えばアルフレット・ゾーベルの代表する様な一般的な文化社会学であると共に、他方又個々の文化領域の社会学でもある。特に文化社会学が仇花に終わらないためには後者の盛に行われることが肝要である。ところが従来余り積極的に研究されなかつた演劇の研究が、それも「社会学の光に於ける」研究がバープという人の手でなされた (Julius Bab [1880-1955], *Das Theater im Licht der Sozialogie. In den Grundlinien dargestellt. Aus "Zeifragen aus dem Gebiete*

der Soziologie". IV. Reihe, Heft I, herausgegeben von Julius Bunzel, Leipzig 1931, XVIII+227.)。

今日まで演劇の問題は主として文学史的又美学的見地に於いて見られており、時に「演劇社会学」と呼ばれるべきものがあつても常に断片的たるの域を出でなかつた。然るに本書は演劇の諸問題を社会学の見地に於いて見、かくして文化社会学の一部門としての芸術社会学に資そうとする。ところで演劇の根幹形態に注目する時、それは人類の最も原始的なる芸術であり、一切の芸術中最も社会的なるものである。バープは演劇的体験の根幹形態、演劇の「実質的根本意志」を凡ゆる時代、凡ゆる民族の演劇的行為の種々相から摘出しようと努めるのであるが、これの研究と説明とに依つてのみ演劇の社会的作用が了解せられる由である。バープは演劇の原始的過程たる宗教的、呪術的舞踏を以つて、熱狂に依つて恐るべき自然の魔神を征服せんとする原始人の試みと見ている。著者は一方に於いて呪術的、集团的舞踏から、神々及び英雄の神話の叙述への、古代の悲劇及び喜劇の成立への、ドラマの（宗教的、陶酔的ドラマと身振役者の自然主義的、民衆的、喜劇的ドラマとへの）分裂への、転化を叙べ、尚他方演劇的過程に於ける統一性の分裂、即ち大衆の中から共同感情の指数としての叙述家の出現、叙述家から詩人の分離が記される。ここでバープは演劇の持つ強い否み得ない社会的基礎を示す。これを基礎として更に演劇の内的、社会的特質及び諸部分の意義が解明される。ドラマ、オペラ、詩人、役者、公衆が演劇体験に対して持つ意義、それ等に対する右の体験の作用、就中両者間の相互作用が究明される。バープはこれに結びつけて「経営」、劇場、パトロン、経済的基礎の問題を論じ、最後に演劇を宗教心、道德、政治、検閲との關係に於いて觀察して結んでいる。

所謂社会学者としてよりも、演劇研究の専門家としてのバープの書は紙幅の小なる割合に宜く諸問題に触

れており、この意味で今後の研究者にとって便利な資料を提供することになろう。

四

Werner Heider 【1902-不詳】，Die Geschichtslehre von Karl Marx, Stuttgart 1931.

この書はマルクス主義者によって書かれたのでないことを特色とする。そのことの良い悪いはとにかく、政治的、煽動的色彩のないことを標榜している。即ち史家 Kurt Breyzig 【1866-1940】の方法に従って、何らの歴史哲学的成心なく写真的に忠実にマルクスの歴史観を描きだすことを心がけている。

Die Naturwissenschaft in der Sowjet-Union. Herausgegeben im Auftrage der deutschen Gesellschaft zum Studium Osteuropas von Oskar Vogt.

本書はロシヤ及びウクライナの各種科学の代表者十八人の講演から成っている。ソヴェート同盟における自然科学の発展も窺うに便宜な書であらう。

五

今月は大方雑誌がたまつたからその主な題目を掲げておく——

Logos, Juli 1932.

H. Rickert, Thesen zum System der Philosophie.

Erwin Panofsky, Zum Problem der Beschreibung und Inhaltsdeutung von Werken der bildenden Kunst.

H. Glockner, Kühnemanns "Goethe". 【附記 Goethe】

Joseph Münzhuber, Ding oder Gegenstand. Eine Orientierungsfrage.

***Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 1932 Heft 3.**

Levin L. Schücking, Literarische "Fehlurteile".

Ein Beitrag z. Lehre vom Geschmackssträgertyp.

Hans Naumann, Höfische Symbolik. I. Rüdigers Tod.

Max Itenbach, Höfische Symbolik. II. Helmbrechts Haube.

Hugo Friedrich, Montaigne über Glauben und Wissen.

K. Vossler, Zwei Typen vom literarischen Virtuosenentum: Lope de Vega und Góngora.

M. Hoerner, Gegenwart u. Augenblick. Ein Beitrag zur Geistesgeschichte des 17. u. 18. Jahrhunderts.

H. Dieckmann, Goethe und Diderot.

F. J. v. Rintelen, Über werphilosophische Strömungen der Gegenwart.

***Unter dem Banner des Marxismus* VI. 1, Juni 1932.**

Der Siegeszug des Marxismus-Leninismus

H. Linde, Die, ideologische Vorbereitung der Intervention durch die II. Internationale.

L. Rudas, Wie Engels von bürgerlichen "Wissenschaft, "widerlegt wird.

N. Lukin, Protokolle des Generalrates der Internationalen Arbeiter-Assoziation als Quelle für die Geschichte der

Pariser Kommune.

K. Schmidt, Eine sozialdemokratische Fälschung des "Kapital".

Sozialistische Bildung August 1932.

H. Berg, Kulturbolschewismus oder Kulturfaschismus?

ペーペン内閣の弾圧政策、そのインテロキリーニズムの "Christliche Wehrkraft" 義軍中の Karl Nötzel, Gegen den Kulturbolschewismus と抗ったもののため。

E. Ollenbauer, Der freiwillige Arbeitsdienst.

O. Greiner, Die Technik der geistigen Arbeit

Linkskurve, August 1932.

Schriftsteller stellen sich : Briefe von Hasenclever, Stenbock-Fermor, Toller, Wolftradt.

K. A. Witfogel, Der Kulturod des faschistischen Italien.

A. Gabor, Umbau der hieratischen u. künstlerischen Organisationen in der Sowjetunion.

A. Kurella, Ein deutsches "Institut für faschistische Mystik" ?

etc.

海外哲学思潮 1932.12

一

英国の政治学者ラスキ【Harold Joseph Laski, 1893-1950】はよく現下の時事問題について意見を發表していくつかのパンフレットがわが国にも伝えられているが、この四月 Conway Hall における記念講演として述べられたという“Nationalism and the Future of Civilization”が最近目を惹いた。国民か階級か、国民主義か国際主義か、という岐路に各人が迷っているとき、この有名な政治学者から何事かが教えられれば幸である。この講演はかなり感興を喚んだとみえ、“Die neue Rundschau”の八月号にはドイツ訳がついている。しかし不幸にしてラスキは最初の問題には触れていない。ただ後の問いに対しては多少の進歩的意見を表示している。

人類は十九世紀の間に国民主義的に考えることを学んだ、そしてそれは歴史的発展の当然の結果であつた。それと全く同様に二十世紀に於いては、国際的に考えまた国際的協同体の基礎を築くことを学ばねばならず、そして学び始めている。文明の進歩は国民的伝統として保持されてきた、そうであるならばこの伝統の主張と確保のためには、どれほど大きな権力が許されてもよいのか。国民的主権はどの点でも制限を受けてはならないのか。これがラスキの設問である。各国民の無制限な主権の容認は、しかし、既に世界大戦の悲劇を醸したし現に同じような不幸の種を蒔いている。それは必然に資本に奉仕する帝国主義の結末に陥らざるを得ない。そこで著者は排他的、独尊的な国民国家を捨てて、国家聯合の理念を描く。それは必ずしも現存の

国際聯盟と等しいものではない。寧ろ彼は国際聯盟における幾多の欠点を認める。では彼のいわゆる国家聯合が具体的に如何なるものであるかは、この文の限りでは分明でないが、とにかく各国家の主権が重大な制御を受くべきような超国民国家であることは確かである。彼はこれを *Civitas maxima* という名称で表している。

二

アルフレート・クラインベルグの「近代ヨーロッパ文化」(Kleinberg, A. [Alfred --, 1881-1939] Die europäische Kultur der Neuzeit. Umrisslinien einer Sozial- und Geistesgeschichte. Leipzig und Berlin, B. G. Teubner, 1931, 233 S. 【田中友次郎訳『近代欧州文化史』】)。表題からしても察せられる通り、著者はルネサンス以後のヨーロッパの社会史及び精神史を讀者に示そうとするのである。クラインベルクは極めて膨大な材料を相当巧みに使いこなして、近代的思维の發展をブルジョワ社会の生成との相互的関聯に於いて把握しようとする。ヨーロッパ發展の根本的特徴は右の近代的思维及び社会過程と中世の精神的及び社会的秩序との闘争の中に見出されるのであって、最近六世紀の歴史は機械論的、自然科学的、合理的なる思维形態及び生活形態と身分的、神政的、封建的なるそれとの絶えざる弁証法的相剋である。而もこの相剋を通じて前者はついに優勢なるを得たのである。後退しつつある後者は反宗教改革、王政復古、ロマンティク、最近の非合理的諸努力に於いて反動的影響を与えて来た。著者は宗教改革、絶対主義、啓蒙運動を準備的段階として軽く論じ、重心を十九世紀に置いて王政復古時代、一八四八年の革命の發展、高度資本主義の形成、帝国主義の發展に詳細

な叙述を与え、世界大戰發生の徑路を記している。

最初に言つた様に頗る豊富な資料を使いこなしてはいるが、社会史的過程と精神的過程との関聯が極めて曖昧であるという非難は免れまい。著者は時々史的唯物論を借用しながらも、一般に右の二過程は單なる平行關係として把握されるか、或は暴行的に後者が前者への被规定的關係に立たしめられて牽強付会に終つてゐる様である。こうした欠陥が著者の資料蒐集的努力の或る部分を空に歸せしめると言つて宜からう。著者が徹底的に史的唯物論を以て當つたならば恐らくもつと意義ある結果が生じたに相違ない。

三

スラニユイ・ウンゲルが小さな「經濟哲学史」を書いた (Surányi-Unger, Theo [-- Tivadar, 1898-1973], Geschichte der Wirtschaftsphilosophie, Geschichte der Philosophie in Längsschnitten, Heft 1, herausgegeben von Prof. Dr. Willy Moog, Berlin, Junker und Dünhaupt, 1931, 70 S.)。著者が嘗て公にした二冊物の "Philosophie in der Volkswirtschaftslehre", Jena 1923-1926 は本書にとつての予備的作業であつた。彼に依れば經濟哲学の任務は一種の橋渡しのものである。即ちそれは第一に經濟学の論理的、認識論的、方法論的な概念の闡明を任務とし、第二に個別的諸科学の究極の結果の綜合を任務とする。ところで經濟学を上位の秩序へ編入することは、著者の意見ではフュイジオクラートやデモクラシー的自然法学者の功績ではなくて寧ろマーカンチリズム又絶対主義的自然法学者の功績である。經濟学の組織論、方法論という点ではブルフ、トマシウスの業績が認められねばならない。

著者は価値概念を取扱う主要傾向としてマルキシズム、限界效用学説、経済的均衡論、ケンブリヂ派、クラーク派の五つを挙げ、他方価値概念を論ぜぬものとしてカッセル派、リーフマン派、社会法学派、普遍主義、インスティテューションリズムの五つを挙げている。更に経済理論と経済政策との関係に至って前者は哲学的制約を受け、後者は世界観的制約を持つなどと言っている。最後にシュモラーとメンガーとの古い方法論争を顧み、これと最近の評価的科学対価価値的科学の夫々の代表者の間の論争とを結びつけ、ここから哲学的根本態度としての目的論と因果論との対立を見出し、そして全経済哲学史をこの見地の下に整理しようと企てている。目次。「経済哲学の対象と限界」、「経済理論の哲学的基礎」、「経済政策的諸潮流の世界観的出发点」、「価値判断に関する論争」。

四

フロイト主義に依つて政治生活を解釈しようとする試みが屢々見られるが、例えばその例として "Lasswell Halold D. 【Harold Dwight Lasswell, 1902-78】 , *Psychopathology and Politics*", Chicago, The University Chicago Press, 1930, 285 pp. の如きも挙げられよう。ラスエルは一九二七年に "Propaganda Technique in the World War" を出した。後者では人間大衆が一定のシンボルの影響下に置かれた場合の集団的態度の発展様式を研究しているが、今その大体をここに伝えようとする前者では個人の政治的行動様式——これの錯綜が政治過程をなすのである——が一個人の発展の中に如何に現れて来るかという問題を論じている。この場合生具的行動様式と獲得的行動様式との関係、及び行動体系、文化様式、象徴化の成立などに関する社会心理

学的認識が前提されている。全十三章は方法的なもの、具体的材料、政治生活への根本見解を雑然と包含している。先ず方法に就いて言えば、一方精神分析的考え方を採用する。懺悔者の深い動機を発見し、彼自らをしてこれを知らしめ且つ客体世界の一客体としてこれを取扱わしめるべく教えるという精神分析の遣口に倣つて、今日の世界的危機の中で目標を見失つた人々をして、權威の力に依らずに自己認識に依り、これに應じて、世界内の自己の位置の新しき定義に依り自らを救わしめるという方法が採られている。ところで他方ラスエルは狭義の精神分析的考え方を越えて、「傾向」（願望、本能、衝動など）から行動を理解することを以て反射的行動様式に基づく解釈を補うものと見ている。著者はかくて政治的態度の分類を掲げ、そして最近の心理学的人間類型論に従つて政治的人間のテュイポロジーを構成し、政治的人間を「發展的人格に於ける衝動の組織化の諸段階」から解釈しようとする。次に証明材料としては、最近アメリカ社会学が用いる method of life history を使用し、約一〇〇頁に互つて政治的生活に於いてアジテーターまた理論家として活動した人間十九名の生活發展の分析を行っている。最後に政治的生活及び国家に関するラスエルの根本の見解に就いてであるが、彼に依ると政治的諸過程にとつて根本的なものは個々の人間の衝動及び衝動的に規定された反射作用である。政治的生活は熟慮の場所ではなくて、非合理的な様々の傾向及び感情の衝突の舞台である。云々。

尚ラスエルと似た方針を探るものとして Behrendt, R. [Richard Fritz --, 1908-72], "Politischer Aktivismus-Ein Versuch zur Soziologie und Psychologie der Politik", Leipzig, L. Hirschfeld, 1932, 182 S. がある旨を附け加へて置かう。

五

最近ギントウイス【Josef Winthuis, 生没不詳】の "Das Zweigeschlechterwesen bei den Zentralsustraliern und anderen Völkern" (Forschungen zur Völkerpsychologie und Soziologie, Band V) 及び "Die Wahrheit über das Zweigeschlechterwesen-durch die Gegner bestätigt-nach fester begründet" が大分論争の的となつたが、同じ著者の著した本が出た (Winthuis, J., Einführung in die Vorstellungswelt primitiver Völker. Neue Wege der Ethnologie, 1931, Leipzig, C. L. Hirschfeld, 364 S)。反対論は例のシュミット (P. W. Schmidt [p. Wilhelm --, 1868-1954]) から出ている。論争は理論の領域を飛び越えて感情の問題となつてゐるらしい。併しシュミットの「文化史的方法」は元來彼が所謂文化圈理論を頼りとしながら書齋で造り上げたものである。それが今十二年間の久しきに亘つて南洋のノイボンメルン半島の土人の間に宣教師として生活して來たギントウイスの实地踏査に依る研究資料の前に立たせられることは愉快である。ギントウイスの新著に於いて特に注意を惹く点、つまりそれは彼の齎した新しいものであり、且つ論争の中心に置かれたものであるが、これを次に示すことにしよう。

第一にギントウイスは性的象徴の意義を頗る強調する。これは何人も内心は承認するところであるが、いざとなると気取つて横を向いて通り過ぎて了うものである。それかあらぬか、ギントウイスはフロイト説の信奉者なり、というデマが飛び始めた。併し著者はフロイトを知らないらしく（事実フロイトと衝突する点が多い）材料の帰納的研究に依つて右の主張に到達したものと思われる。第二に Kohabitations-

ZeremonialismusがFruchtbarkeitskultとして示されている点である。これはさまで新しいことではないが、トミズムとの関係を明らかにしているところに注目すべきものが見られる。第三に（これは著者の独特の見解である）Zweigeschlechteswesenに関する説である。彼はKohabitationsaktの興奮の永続性を神的なものとして、このことを立証せんとして原始的表現手段（両性の神の神話、同じ種類の絵画その他）を利用して叙述を企てている。吾々には原始人のかかる考え方が一体何処から来ているのかを明らかにされていない憾みがあると思われる。

海外哲学思潮 1933.1

一

文化に於ける技術の意義は漸次に高まりつつある。それは最早、手段的価値を越えて自己目的となつたともいふのであろう。この時、技術の哲学あるいは社会学が唱えられても不思議ではない。それに関する文献を網羅し系統づけることは他日を期したいが、ここでは目についたものの一つを紹介することに止める。

Eugen Diesel 【1889-1970】 , *Völkerschicksal und Technik*, Stuttgart 1930.

この本は技術に関する論考ではなく、現代の機械技術の社会的影響を精彩な筆で描写したものである。著者は既に "Der Weg aus dem Wirtsal" や "Die deutsche Wandlung" によつて文化批判家として名声を挙げている。彼は本書では機械技術が人類に対して如何に大きな力を及ぼしたかを叙べる。人類が幾千年かの間、縛られていた旧き体制が、機械のために破れた。しかし彼は、今日なお多くの人々がその内に生きておる矛盾を見逃しはしない。人々は行動に於いて人類の超国民的機械技術文化に奉仕しながら、未だに過去の幻想に囚れることを止めない。「吾々はドイツの農業経済を破滅させるに違ひないような性質の、国際的色彩をもつた株券の一束を所有している人たちをみる。然るにこの所有者らはドイツ農業の保持を唱導するのである。……吾々は旧い国民的考えをもちながら、而も旧い国民的なるものをただ破壊させるであらうところの機械を作りつつある技師をもっている」と彼は云う。かくて著者は現在の混乱と緊張をかかる矛盾のうちにみ、

その解決を技術の發明が變革的效果を及ぼして後にはそれを人間尊嚴と調和する形で整備することに求めている。この書は社会主義的立場から記されたのではないが、シュペングラーなどとは反対に「人間と技術」との問題を樂觀的、積極的に展開したものと興味がある。

二

最近到着した Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 68. Band, 2. Heft, November 1932. はマルクス主義に關係した二個の、或る意味で注意すべき論文を含んでいる。両者は何等か共通なものを持つており、且つ日本に於いてもこの様な試みが見られる時、ここに紹介の勞をとることは無駄ではあるまい。その一はマルクス主義の「純粹な形態」をマルクスの初期の見解の中に発見して、ヘーゲルとの親近を力説しようとするものであり、その二はジョーレスの歴史觀を史的唯物論に置きかえようとするものである。嘗つて吾々は本欄（一一一）号【1932.6】にレギトの「エーベルとマルクス」に於けるマルクスのアントロポロジー的解釈を紹介したことがある。今その大要を伝えようとする二論文はレギトと共に何等かの形態で、フオイエルバッハの徒であつた初期のマルクスに依つてマルクス主義を解釈し直そうと企図するものである。かかる解釈のためにマルクス主義は如何なる本質的契機を喪失し、如何なるものがその中心に押し出されて来るか、そしてこの様な企図が哲学のレーニンの段階に於いて如何なる意義を持つか。読者はこれを見るであらう。ゾルネル・ファルクの「マルクスの弁証法に於けるヘーゲルの自由のイデー」(Werner Falk 【不詳】、Hegels Freiheitsidee in der Marxschen Dialektik) から始めよう。

現代のドイツを襲っている危機は一方資本主義的競争經濟への愛想づかしと新經濟組織への要望とを生み出すと同時に、他方ブルジョワ文化への非難と新しき文化への期待とを惹起している。就中中産階級はその生活上の理由から道德的な側面に於ける危機をプロレタリアートよりも深刻に感じている。思うに新しき社會秩序の建設は決して經濟的新組織の構成のみを以て尽されるべきものではなく、精神的、文化的なるものの領域に於ける新組織の構成をも同時に含まねばならぬ筈である。然るに今日の社會主義はこの点に於いて由々しき矛盾を持っている。蓋し、社會主義運動は労働者階級に対して文化的、教育的な（輕蔑された）事業をも兎に角やっているのに、社會主義理論は文化的なるものに関しては一顧も与えることなく全く經濟一点ばりである。かかる状態はマルクスの本旨に叛かぬものであろうか。これが正しき方針であらうか。

右の疑問を抱くファルクは最近公にせられたマルクスの初期の文獻に依つてこの疑問を氷解せしめることが出来た。即ち初期の論文に従えば、マルクスは、今日のマルクス主義者の見解に反して、決して經濟一点ばりではなく、常にその時代を全体的に觀察しており、政治學者、經濟學者、歴史家としてのマルクスの背後には哲學者マルクスが儼として存しておつたこと、即ち、その時代の人間の全問題を解決せんとした思想家、そのためにこそ政治學者、經濟學者、歴史家たらねばならなかつたところのマルクスであつたことが明白に理解される。初期の文獻に於けるマルクスこそは「純粹なる形態に於けるマルクス」である。マルクスの問題はブルジョワ社會に於ける全体的人間の中にあり、彼の批判はその時代の一、般、的、欠、陥、へ向けられていた。だからマルクスにとって危機は先ず經濟的危機であるよりも全体としての人間の危機であつた。従つて問題解決のための方法も諸個別科學の中にはなく、却つて正に哲學の中に求められるの外はなかつたの

である。素よりここにマルクスが哲学者と呼ばれるのは学校概念としての哲学者ではなくて、ヘーゲルに於けると同じく「現在のもの及び現実的なものの把握」を目指し、「時代の子である」様な哲学者である。ところで近世の初頭以来、人間を一切の人間外の束縛から解放してその自立を与えんとする努力が顕著になっている。かくて過去の目的は実に理論又実践に於いて人間の究極的「解放」と社会又国家を「人間理性」の上に基礎づけることにあつた。歴史を貫いてヘーゲルに及ぶこの思想は又マルクスがヘーゲルから学び、身に体したところのものである。

この様な自由のイデーを提げたマルクスは、衆知の如く、青年ヘーゲリアンから出ている。併しマルクスは他の青年ヘーゲリアンよりも遙かにラディカルであつた。後者が結局ブルジョワ共和政を要求し、これに満足する時、マルクスは更に進んでブルジョワ共和政の矛盾と欠陥とを批判した。マルクスのこのラディカルな態度は何に基づくか。それは実にヘーゲルの理性概念又自由概念の鋭き把握の土台の上でのみ可能であつたのである。ところでヘーゲルはフランス革命を讃美し、歴史を自由の觀念の進歩に於いて見たのであるが、早くもブルジョワ社会に於いては真の自由のついに実現せられざる旨を觀取し、これが除去を決意することはなかつたものの、結局ブルジョワ社会を高次の審判所の下に従属せしめ、そしてそこでは主観性と恣意とが狭限せられ、普遍性及び必然性へ変形されざるを得ないようにしたのである。

マルクスは、哲学者としての純粹なるマルクスは、ブルジョワ社会の批判に於いて全くヘーゲルと同様である。ヘーゲルが市民社会に於いては「各人が自己を目的とし、他の一切のものは無である」と言う時、マルクスにとつて市民社会に於ける人間は「自己自身、個人的利害、個人的恣意へと退き、共同体から隔離さ

れた個人」であつた。この様な例は無数にあるが、つまるところ市民社会に於いては人間は一見自由でありながら、その実他への依存から未だ解放せられていないと言ふことになる。市民社会への批判に於いてだけでなく積極的方面、即ち市民社会に続くべきものに関する見解に於いてもマルクスはヘーゲルの徒である。とは言えヘーゲルとマルクスとの間には差がある。マルクスはヘーゲルよりもラディカルである。ヘーゲルが市民社会の領域に相対的生存権を与え、国家に従属せしめるに反して、マルクスは営利組織全体の止揚、その政治的対応物としての国家の止揚を説く。ヘーゲルが国家の権力を強めることに依つて特殊性と普遍性、利己心と倫理との二元論の克服を目指すのに反して、マルクスはかかる解決方法がブルジョワ共和政の誤謬に陥っていることを指摘する。併し又他面に於いてマルクスが「利益社会」から「共同社会」への転移がデモクラシーに於いてのみ、即ち「特殊な国憲としての社会化した人間」に於いてのみ実現されると考える時、かかる市民社会の止揚は、ヘーゲルの国家の根本に横たわる要求の実現であるに外ならない。かくてマルクスに於いて「一般的解放」はヘーゲルの自由の実現に外ならず、依つて以つて主観的意志が自己の中に客観性を獲得するところの「教養の事業」に外ならない。

純粹なマルクス、哲学者マルクスの見解を生かして現代社会主義に活を入れることが刻下の急務である、と言ふのである。

三

ヘートギヒ・ヒンツェの「ジャン・ジョーレスと唯物論的歴史理論」(Hedwig Hintze 【1884-不詳】、Jean

Jaurès und die materialistische Geschichtstheorie)は、ジャン・ジョーレスは唯物史観に対して如何なる態度を採ったか、何をそこから摂取し、如何にそれを解釈し、マルクス主義の外から如何なる要素を取入れて唯物史観を發展せしめたか、の諸問題を解こうと試みるものである。

マルクス主義には二つの極がある。一はそれを革命的闘争の具の如く見えしめ、他はそれを純粹科学的認識手段の如く見えしめる。この故にベルンシュタインはマルクス主義に関して理論を応用から截然と區別した。尚これと結びついてマルクス主義は社会的、歴史的現實に於ける經濟的要素のみを重要視するかの如き見解が流布している。更にこれと關係してマルクスと觀念論者ヘーゲルとの連繫に就いても様々の意見が行われている。ベルンシュタインはヘーゲルの弁証法を以つて「マルクスの教理に於ける叛逆的なもの」と呼び、カウツキー、アードレル、プレングは反対にマルクス主義に於ける弁証法の意義を高く評価する。

ところでヘーゲルとマルクスとの精神的聯関を最も明白に把握したものは外ならぬジャン・ジョーレスであった。ジョーレスは一八九二年のドクトル論文「*De primis socialismi germanici lineamentis apud Lutherum, Kant, Fichte et Hegel*」以来両者の深い關係に就いて語っている。ヘーゲルの意義を頗る重要視する彼に依れば、自分の歴史理論は唯物論的―觀念論的なのである。史的唯物論と史的觀念論とは決して論者の説く如く相對立して、調和し得ぬものではない。例えばマロンの觀念論とマルクス主義者の唯物論との間には根本的對立があるのではなくして、唯單なる叙述方法の差異があるのみである。一見相互に排斥し合う如く見える唯物史観と觀念史観とは「現代の意識」に於いて融合し、調和しようとする。「唯物史観と觀念史観との調和は實際社會主義的意識の大体盲目的な衝動に依つて實現されている。」更にジョーレスに依れば、ルネサンス以来

人間の精神は「対立、否矛盾の調和、綜合を實現せんとする」事業を任務として來たのであつて、カントのアンティノミーから導かれたヘーゲルの弁証法の中に「合理的なるものとイデーなるものとの同一性に依る対立の綜合又矛盾の調和」が見出され、ここに右のルネサンス以来の事業の大なる發展がある。ヘーゲルは「思惟及びこの思惟に適合した精神の中に弁証法的矛盾を見出した」のみならず、「經驗的世界の中にも闘争、対立」を発見し、これ等を調和しようと試みた。ジョーレスは、マルクスがこのヘーゲルの衣鉢を継ぐものであることを強調する。彼は又言う。「經濟的必然性に依つて支配される歴史の断片、純粹なるイデー、概念に依つて方向づけられる歴史の断片の存することを、承認しようとは思わない。唯物論的見解と觀念的論見解との間に障壁を設けようとは思わない。私の主張では、右の両者が相互に滲透し合わざるを得ぬこと恰も人間の有機的生活に於いて脳髓組織と意識の自發性とが相互に滲透し合うと一般である。」尚同じことを他の場所で言う。「人間を二分して、その有機的生活をその意識から切り離すことが出来ぬと同じく、歴史的人類を二分して、その觀念的生活を經濟的生活から切り離すことが出来ない。」ジョーレスはこの点に於いて全く正当であるし、マルクス自身その初期の作物に於いて全人的なるものを論議の中心に置いており、プロレタリアートを「人類の本来のイデー」の實現のための起動的、人間的契機としている。

最後にジョーレスとラファルグとの有名な論争に一寸触れる。この論争でジョーレスがマルクスを正當に理解しているに反し、マルクスの女婿ラファルグは却つて自然科学的唯物論に陥つてゐることが明らかとなつた。大切なことはジョーレスの人格と教説とを貫いてゐる倫理的動機が惜しくもラファルグには全く欠如してゐる点である。

海外哲学思潮 1933.2

一

最近ドイツではハイデッゲルの影響の下に立つて社会諸科学を論じたものが少しづつ見られる様になって来た。経済学の方面では Back, J. 【Josef -, 生没不詳】、Die Entwicklung der reinen Ökonomie zur nationalökonomischen Wesenswissenschaft, Jena 1929 が注意すべきものである。教育学の領域では Riedel, K. 【Kurt -, 生没不詳】、Eigengesetzliche Bildungslehre, Osterwieck-Harz 1931 がある。教育学という学問程哲学思潮に對して八方美人的な学問はないと思われるが、この点では教育学の次に位する社会学も既に Löwith, K., Das Individuum in der Rolle des Mimenschen, München 1928 を持っている。この本は嘗て本欄に紹介したことがある。ところが先に Das Kollektivbewusstsein, Berlin 1928 を公にし、Dunkmann 【Karl -, 1868-1932】、Sauer mann 【Heinz -, 1905-81】と共に三人男として Lehrbuch der Soziologie und Sozialphilosophie, Berlin 1931 を世に出した Lehmann, G. 【Gerhard -, 1900-不詳】が Archiv für angewandte Soziologie, V. Band-Heft 1 に妙に人の氣を惹く様な題目で一文を書いている。「日常性の主体——ハイデッゲルの基礎的存在論に於ける社会的なるもの」(Das Subjekt der Alltäglichkeit. Soziologisches in Heideggers Fundamentationalogie) がそれである。サブタイトルでも判る様にハイデッゲルの中に社会学的なるものを探して行くのがこの論文の企図するところであるが、ハイデッゲルを紹介している個所を省いてその大意をここに伝えようと思う。

日常性という概念は直接的な生活経験から来ている凡べての概念と同じく極めて多義的である。差し当り日常的なるものと日常的ならざるものとの対立をはつきりさせることが近道の様に見えるが、この対立は頗る流動的である。唯流動的だというのみではなくて、日常性は常の中に日常的ならぬものを含み、逆に日常的ならぬものも必ず日常性を孕んでいるということのために、日常性の問題は謂わば弁証法的な構造を持つといわれよう。ところで日常性の、主観的に思われたる意味をその客観的内容から区別するという試みを行うに当つては右の弁証法は更に鋭くなる。日常性は、その概念に含まれているものたるをやめぬ限り、全体に互つて客観化することは到底不可能である。

社会学の対象は、一般的にいつて、人間の集合生活と呼ばれるであろうが、このものは日常的共同生活をも包含するものである。否、この日常的共同生活こそはこれから派生する一切の対象性にも増して社会学に近く立つものである。社会的大構成体は日常的共同生活の派生体である。フライエルの言葉を借りていえば、「客観的精神は吾々の慣習の沈澱物に外ならぬ。」だからして要素的なものから出発するところの社会学者達は日常性の問題に対して従来も余りよそよそしい態度を探らなかつた。タルドの社会学に於ける根本概念として模倣と発明とが挙げられるが、前者は外ならぬ日常的なものであり、後者は日常的ならぬものである。又イエーリンクは、道徳的感情が道徳の *Prus* ではなくて、社会的現実の *Posterius* であり、個人の倫理的決断は道徳の中に、道徳は一般的慣習の中に根を持つ、と主張した。更にテーニエスは好んで日常性を論じた。彼に於ける「本質意志」は生物学的に結合している諸個人の無意識的共同生活に基づくものであり、この限り慣習がその要素をなし、而も慣習の中に現れる日常性は実にテーニエスに於ける「共同社会」を形造

るものである。

以上に依つて、日常性の概念が社会学に疎遠ならざる旨を知り得ると同時に、日常性の意味の解釈が問題にさえならなかったことが判る。日常性が意味するところが何であるかは社会学の問題というより社会学の問題である。日常性はハイデッゲル以外にも例えばグリーゼバッハ (Griesebach, E. [Eberhard -], 1880-1945), Gegenwart, eine kritisch Ethik, Halle 1928) やヤスベルス (Jaspers, K., Philosophie, Bd. I-III, Berlin 1932) に依つて論ぜられているが、凡べてに共通な特質は、一方シェーレルの、現象学から哲学的人間学への転向に依つて制約され、他方キールケゴールに結びつく実存在の哲学たる点に求められる。

さて日常性はそれ自身一つの体系、慣習的なものの秩序、反覆的なもののリズムを持つことはいふに須いなが、そしてハイデッゲルの基礎的存在論もこの点を注意しているが、彼が日常性の現象の中で見出したものは夙に社会学的認識の対象として特殊な学問的体系を与えられている。これが如何なる程度で出来上っているかは論外におくが、兎に角それが社会学的諸理論の推進力たるは明らかである。成程ハイデッゲルは社会学への寄与を考えてはいない。併しこのことは彼が社会学に寄与したことを妨げぬ。ハイデッゲルの問題が社会学的領域の中にあることは誰の眼にも理解出来よう。日常性の代りに集合性 (Kollektivität) を置いて見給え。日常性の主体は集合的主体、日常性の自己了解は集合意識、Man は自己の集合的階層、Rede des Man は集合表象、Man の支配は慣習、道徳、輿論となる。併しハイデッゲルはこうした用語を使わなかった。そのために彼は一般に社会学上閑却されていたものをも見ることが出来た。で彼はすべての社会学的な集合性理論の此岸に立つと共に彼岸に立つものである。此岸に立つとは彼が生により近づいている

からである。即ち彼は、個人と集合体、共同社会と利益社会、実体と機能という様な範疇で整理される時には破壊されて了うところの諸現象をも把握する。集団の理論を説く人々は日常性の分析を社会心理学として行うことに依つてこの生への近さをこわすのである。ハイデッゲルが社会心理学的でないことは、彼岸に立つということからも判る。即ち彼は日常性を自己の中に於いて把握すると共にこれを超えるのである。ハイデッゲルにとつて問題は、本来の自己と集合的自己とを包括する一つの存在構造内部に於けるこの両者の分離にある。そこで彼に於いて日常性の主体——それは Man であるが——は決して擬制的でなく、反対に極めて実在的な主体として把握されている。この際現象を例えば多数の主体の共在の結果として説明することに依つて現象が存在論的に解釈されたなどと思つてはならぬ。却つて存在概念の構成自身がこの動かし難き現象に従っている。又日常性の主体は普遍的主体としても考えらるべきではなくて、日常性は正に実在的なものとして現実存在自身に於いてのみその主体を持つものである。

最後にハイデッゲル批判に就いてレーマンも詳しく述べてはいないが、その結論を言えばこうである。日常性の主体を Man として規定して行く日常性の現象学は一面的たるを免れない。一面的であることは、彼が現象関聯を断片的に取上げているという点よりも、寧ろその出発点を日常性の現象世界の唯一側面にのみ求めている点に見られる。日常性は Man のみに依つて担われるものではなく、却つて Man は Wir の中に弁証法的対応物を持つのであつて、Man と Wir との関係こそ主体的なるものとしての日常性を結成する。即ち日常性は Man に於いて外化され、Wir に於いて内化される。云々。

「人類婚姻史」で有名なエスタマーク【Edward Westermarck, 1862-1939】に "*The Origin and Development of the Moral Ideas*" のあることは注意深い人々には思い出されるであろうが、その後永く故国フィンランドに沈黙を守っていた彼は、昨年 "*Ethical Relativity*" をロンドンで公にした。

序文にも言っていることであるが、彼は旧著では広く人類一般に互つてその道德意識、風俗習慣、法律制度を研究しようとしたのである。そこで得られた結論に依ると、道德的判断は知的考慮に依つても影響されるが、根本に於いては感情 (Emotion) に基礎を置くものであつて、道德的概念は一定の傾向を持つた感情の普遍化であつた。従つて常識や倫理学説に依つて与えられた道德的判断の客観的確實性は否定されたのであるが、新著に於いては特にこの点が強調されるのである。

倫理学の相対性とは「道德に於ける客観的規準の否定」を意味する。第一章、第二章は従来の道德的判断の客観性の批判に充てられ、人類学的、歴史的諸事実を照して、如何にこれ等の理論が啞うべきものであり、しかもこの諸事実こそ倫理的相対論の根拠がある所以を示す。第三章、第四章は共に道德的感情に於いて述べ、第五章は倫理学的概念、第六章は道德的判断の主体を問題にしているが、これ等の点では多く旧著の繰り返しである。それにも拘らず彼が新著を世に問うた所以は、旧著発刊以来二十数年間に提起された幾多の反対論に答え、且つ改訂増補に依つて更に明確なる見解を与えんがためである。彼は第七章に於いて道德的判断の变化性を論じ、「道德的判断の变化性は毫も道德の客観性を否定するものではなく、恰も或る一聯の事実に対する判断の種々異なることが真理の客観性を否定しないと同じである」とする倫理的客観主

義に対して、この変化性の因つて來たる諸事情の解明こそが、この論の当否を決するものなることを述べて一矢を酬いている。第八章、第九章は倫理学説の感情的背景を問題とし、利己的快樂主義、功利主義、最後にカントの倫理学説が主として吟味されているが、カントに就いて彼は言う。「人間の道德的体験をその理性的推理に調和せしめんとする彼の努力は大失敗であつたと言わざるを得ない。所謂理性の命令に於いても感情的背景がはつきりと浮び出ることとは既に指摘したところである。」かくて彼は道德的意識は究極に於いて感情を基礎とするものであり、道德的判断は客觀的確實性を欠くものであり、道德的価値は相對的たる旨を揚言する。

倫理学に対して唯物史觀の側から明確なる批判のある時、エスタマークのこの企ては極めて生ぬるき感を抱かせはするものの興味あるものたるを失わない。

—

近來の哲学が再び実体的なるものへの依拠を、弁証法的な融通性と同時に、共に求めているのだとすれば、両者がどう結合されるかは最も興味深い事でなければならぬ。従来、主として前者の要求だけを満すかと思えたカトリック思想の中にも、後者の成分が入込んできて一層大きな綜合が企てられているかの如くである。かくの如き試みの一つが近刊の Erich Przywara 【1889-1972】 , *Analogia Entis* であろう。本書は二巻に分れていて、第一巻は形式原理を取扱い、"Metaphysik I, Prinzip" と題されている。第二巻は「意識・存在・世界」に就いて闡説する予定だというが、未刊である。企図するところは要するに、カトリック的客観性を弁証法化する点にあるとみてよいであろう。それで必ずしも正統トミズムとも考を同じくせず、普遍と個体とを共に生かそうとする一種の「分化的普遍主義」を唱えようというのである。そしてその方法も「内在的・歴史的了解の方法」に拠ろうとしている。著者はシェーラーの系統に属するらしいが、遠くはアウグスチヌス、近くはクザーヌスの思想傾向に接近していると考えてよいであろう。それよりも彼が矛盾の論理と弁証法の論理の中間にアナロジーの論理を考慮して、アリストテレスに発してこの論理の本質と発展とを詳説しているのは、最も傾聴すべき点である。

二

法律哲学は他の文化圏の哲学に比して、旧き伝統をもち、また割合にまとまった素材をもつと考えられるにも拘らず、未だ定本ともいわれるべきものを見ないのは不思議である。先頃ラートブルッフ【Gustav Radbruch, 1878-1949】が彼の旧著を改訂増補したが、それさえ毀誉まちまちである。一体こうした社会哲学は一般に方法論に終始して実質に入らないと非難されてきた。法律哲学だけで言えば Erich Kaufmann【1880-1972】の著書などは、そうした非難をまともに受くべきであろう。同じ新カント派に結びついていても前記のラートブルッフ、Max Ernst Mayer【1875-1923】などはまだまだ実質的であり、法律学に余された価値の問題を内容的に説こうと心がけている。Julius Binder がヘーゲルに結びつき、A. Reinach【Adolf -, 1883-1918】、G. Husserl【Gerhart -, 1893-1973】などが現象学と提携しようというのも、同じ欲求からに相違ない。こうした要求がはき違えられると、誰にでも救いの手をさし伸べるものと見える。そうした試みの見本が Georg Stock【生没不詳】、Rechtsphilosophie, Die Erkenntnis von Rechtswirklichkeit, Rechtsidee und gerechter Lebensgestaltung, 1931. であろう。彼はシヨオペンハウエルに頼る。しかしこの書は専門的著作とは称し難い。彼が法の理念として前提するところの国民国家的自由主義、人間性、正義、思想自由等は概ね後期啓蒙時代のそれを踏襲しているもので到底、現代に意義を発揮するとは信じられない。

三

「革命の社会学」とは現代にとって特に魅惑的な課題である。しかしそれだけ満足な取扱いを見出すこと

が困難である。かかる中であつて

Eugen Rosenstock 【Eugen Rosenstock-Huessy, 1888-1973】; Revolution als politischer Begriff in der Neuzeit, 1931.

は、社会学というより文献学的・歴史的研究ではあるが、趣の異つたもので教えられるところも多いと思う。ダンテなどが“*evoluzione*”という言葉を使つてるとき、それは天体の遊行についてであつた。それが漸次に天文学を離れて、自然力一般に及ぼされ更には *physikopolitisch* な概念に移り、星辰が地球に及ぼす力として考えられるに至つた。「革命的な政体変化」として用いられるようになったのは、従来そう思われていたアンリ四世の時代ではなく、十四世紀イタリアの都市国家に於いてであつた。次いで“*glorious revolution*”, “*industrial revolution*” などという用法が生じたが、未だ政治行動団体の「標語」とはなつていない。例えば「名譽革命」におけるその語は「人間の恣意および強力に基づく一回のな政治的全般変革」を意味した。処がフランス革命の前史に到つて新しい用法の変化が起つた。「関係の客観的革命化」とか“*revolution dans l'esprit humain*” (Voltaire) などという句が用いられる。ただしここでは未だ客観的なもの“*das Erittene, das Passierte*”が指されている。十九世紀になり、特に復古運動との闘争の過程に於いて、革命概念は能動的、主観的意義を獲得した。即ち一八三〇年以後の革命は“*gemachte*” *Revolution* と規定された。かくて共産党宣言では「革命的精神は持続的狀態であり、革命の実践は、合則的な、いわば手工業的にして技術的な觀察の対象である」と述べられている。最近のロシヤに於いては自然力の代りに「經濟過程」の強制、自然にして且つ突発的な「永久革命」の必然性が考察されている。これに反して、「改革の国」ドイツに於いては革命の研究もやつと緒に付ただけである。

四

アウグスト・タールハイメル【1884-1948】の編纂でフランツ・メーリンク【Franz Mehring, 1846-1919】の「哲学史」が出た（Mehring, F., *Zur Geschichte der Philosophie. Mit Einleitung und Anhang von August Thalheimer, Soziologische Verlagsanstalt, Berlin 1931, 420 S. br. RM. 65.0*）。編者はメーリンクの哲学史に関する仕事を分けて次の四群にしている。一、ドイツ古典哲学の遺産の紹介と吟味、二、ヘーゲル哲学から新ヘーゲル学派及びフォイエルバッハを越えてマルクス、エンゲルスの科学的社会主義に到る経過の研究、三、史的唯物論の解説と適用及び反対者の批判、四、宗教一般、特にキリスト教の批判的分析。前二者に関する論文がその大部分を形造つていえると言える。タールハイメルが序論で断つてゐる様に、論理学や認識論には殆んど興味を持ってゐず、ひたすらに歴史的研究に心を向けておつたメーリンクのこの書は、或る人々に依つて「時代遅れ」と評されてはいるが、現在参照されても宜いものと思われる。

五

フランクの「因果法則とその限界」（Frank, P.【Philipp --, 1884-1966】*, Das Kausalgesetz und seine Grenzen, Juris Springer, Wien 1922, XV+308 S. br. RM. 18.60*）が日本の書店のカタログに顔を出したのは昨秋だと覺えているが、この本は、物理学の最近の発展、特に量子力学、波動力学以来の、動的合法則性から静的合法則性への移行以来の物理学の発展に依つて、因果法則の意味と適用可能性とに關して生じたところの諸帰結を

俗判りのする様に平明に論じようとするものであるが、この際科学的厳密性を見失わぬように心掛けているらしい。

フランクの叙べているところでは、最近物理学の發展は、多くの科学者諸君の期待に反して、「機械主義的」因果性の嚴密さを離れて「全体」、「プラン」、「目的」といった様な「有機的」な觀念へ向つて行くという点にあるのではない。寧ろ中心にあるものはやはり原理的には旧來の因果法則の定式化の必然性ということであつて、それが最近の發展に依つてよく實現されたまでのことである。この定式化に依つて自然法則は一方一切の形而上学的、先天主義的タワコトから解放されると同時に、他方單なる普遍的同語反覆から特殊な、經驗上決定的な現實的命題へと進むことが出来るのである。このフランクは又哲學的マツハ主義者達に対するレーニンの闘争の中には「科学的諸理論の社会学の見地から見て多くの正しきもの」があつたと語つており、現代の哲學及び科学に於ける形而上学的諸潮流に対しては嚴しい批判を加えている。各章毎に「サゴート・ロシヤに於ける哲學的闘争」とか、「弁証法的唯物論」とか、「唯物史觀に於ける因果性と偶然との役割」とかに頁を割いておるが、結局全巻を通じて強調せんとすることが實証主義的唯物論と弁証法的唯物論との共通の進歩的根本傾向であるところを見れば、實証主義が彼の本領らしい。

六

「凡べてのものは相對的である、ここに唯一の絶対的原理が存する」とコント【Auguste Comte, 1798-1857】は言つたが、この相對主義者に於いても「人類」の觀念は絶対的なものであると言われる。特に所謂後期に

於いては人類は礼拝の対象とされ、「人類教」(Religion de l'Humanité) が説教されていることは「実証政治学体系」(Système de politique positive) や「実証主義問答」(Catechisme positiviste) を読めば判る。そこではインテリゲンチヤが僧侶となり、コント自らが僧正となっている。イギリスではリチャード・コングリーブ (Richard Congreve 【1818-99】) が最初の実証主義協会を設立し、一八七八年にそこからハリスン (Frederic Harrison 【1831-1923】) 'ブリッヂス (John Henry Bridges 【1832-1906】) ' ビースリ (Edward Spencer Beesly 【1831-1915】) の指導下に立つ一団が分れた。今ここに紹介しようとするマクジーの「人類十字軍」(McGee, John Edwin 【1893: 不詳】 , A Crusade for Humanity: The History of organized Positivism in England, Watts & Co. London 1931, 234 P., Sh. 21.-) はイギリスに於ける右の二つの実証主義協会 (共にロンドン) と地方支部との歴史を叙述するものであつて、その興廃を論じて現在に到っているが、今日ではラッセルズ (Lascelles, T. S. 【生没不詳】) の指導の下に小団体が一個ロンドンにあるのみである。現在その使徒は非常に貧弱なものとなっているが、政治上の大問題に対しては新聞紙を通じてその態度を明らかにしている。著者はこの指導者達が非政治的な科学的態度を持っている所以をその非通俗性に求めており、且つイギリスの政治的、社会的対立の調和に貢献したこと尠からずとなっている。

マクジーはその対象を全然歴史的に取扱つており、指導者の生涯に於けるエピソード、政治的問題に対する彼等の——無力な——科学的態度を叙しているが、こうした宗教の本質に深く立ち入つて分析するということとは全く行っていない。予言者コントはその有名な「三段階の法則」(Loi des trois stats) に基づいて将来社会に於ける実証哲学の支配を語つたが、ミル (Mill, J. S.) を通じてフランス本国に於けるよりも宜く

それが弘通されたイギリスの実証主義協会 of the history of the philosophy of science を見ることは、コントの偉大なる気魄を知る人々にとって興味深いものがあるに相違ない。

七

ホーンとロッシとの共著「バークリ僧正。その生涯、著述及び哲学」(Hone, J. M. [Joseph Maunsell -, 1882-1959] and Rossi, M. M. [Mario Manlio -, 生没不詳] Bishop Berkeley. His life, writings, and philosophy, London 1932) はその書名の示す様に、唯物論の声喧しき今日ひどく不評判なバークリの思想と生涯とを忠実に描き出すことを念とするものであつて、口喧しい論争家にして夢想的計画者たる彼をはつきりと示して、且つその思想の矛盾をも容赦なく指摘しようとする。彼の数多い著作の綿密な考証、ロック、マルブランシュ、ス・キフト、シャフツベリ、マンダギル等との交渉、或はダブリン、或はロンドン、或はイタリヤ、或はアメリカと廻り歩いたその前半生、異郷に思索の地を求めてサマー・アイランズ (Summer Islands) に Bermuda の建設を思つた彼など生き生きと描かれている。

著者が賞讃を以つて語るところに依れば、バークリ僧正は決して *philosophus pursus* ではなく、象牙の塔を捨てて、時代の危機と悲慘とに立ち上り、大衆の要求を身に体して闘い続けた街頭の闘士であつた。彼の計画の失敗は彼を夢想家として呼ばせたにしても、それは完全なる論理的可能性のみを洞察する彼の素質の故であつた。若き日の合理主義への主張は老いて尚渝らず、その情熱に倫理的思想と社会的関心とは根ざしているのであるが、併し彼の倫理学は又終に失敗に終つた。即ち *Principles* の第二部は完成されず、而もそ

ここではロックの経験論を一步も出でず、当時の思想的アナキーに統一を齎すことはかくて不可能であつた。多くの人々の考える様に、バークリを以つて近代觀念論の源流と見ることは事實を誣うるものであると著者は言う。esse est percipi は「存在することは知覚されることである」などと訳されてはならぬ。バークリに於ける知覚とは知識形式の鞏固なる経験的概念であつて、實在を純粹に經驗的なものとして考えることである。理性が、即ちその constancy と coherence とが外部から——知覚者からではなくして神の合目的理性から生ずる複合であると考えることである。精神活動に対する彼の独創的把握はペリパトス派に於ける神の本質としての pursus actus と異り、近代觀念論の純粹作用とも遠く離れている。

—

認識論といえ、論理主義的であると本体論的であるとを問わず、先験論に与することが当然と考えるようなドイツ風な慣しに対し、ひとたび約束が代えられれば、なお十分に疑問の余地が存することであろう。プラグマティズムは既にこの方向に途を拓いておいた。しかし認識論の経験的もしくは経験論的取扱いの可能性はそれだけには限られてしまい。そこで先験論を批判する意味ではプラグマティズムを参照しながら、而もそのよき理解をもちながら、それにも拘らずなおプラグマティズムをも批評しようとする立場にあるのが――

W. T. Stace 【Walter Terence --, 1886-1967】 , The Theory of Knowledge and Existence, Oxford 1932.

である。十九世紀の科学的最大の事実は進化論の建設であった、と著者は考える。知識もまた他の人間事と同じように、生存闘争の内に成長した。知識は実際活動の侍女である、このことは哲学における新思想であり、進化論以前の古典的諸体系には見出し得ないところである、と彼は主張する。この点プラグマティズムと出発点を等しくするように思えるが、彼はこれをも批判して更に生物学主義に徹底しようとするもののである。

二

自然法思想の復活がいろいろの方面から号ばれるようになってゐる。前世紀に於いては主として法律学の領域に於いて、自然法とその歴史が研究され、この見地からの資料としては、ギイルケの包括的叙述を今日あまり出ることとはできない。今世紀になつてトロエルチなどによつて宗教社会学的資料が附け加えられるようになった一方、法律哲学の諸流派が自然法の哲學的基礎づけを企てるようになったが、これは依然ドグマとしてであつて歴史的研究ではなかつた。この時に自然法を法律哲學の問題としてではなく、哲學史、思想史の一部門として歴史的に取扱つたものが――

Johann Sauter 【1895-不詳】、Die philosophische Grundlagen des Naturrechts, Wien 1932.

である。自然法の体系は決して孤立して成りまた移るものではなく、一般的世界像の一分肢として後者の変易に従つて姿をかえる。かくて著者はヘラクリットから十九世紀中頃までの自然法思想變化の過程を追究する。この際、從來あまり顧みられることの少かつた人々でこの發展の線に關係させられた数も百に余つてゐる。しかし何ごとよりも著者が重きをおこうとするのは、自然法思想の連続性についての確信である。プーフェンドルフ以来の自然法をグロチウスに帰そうとする考えを、徹底的に批判しこれを一つの寓話だと断じ、寧ろグロチウスと十六世紀時代のカトリック自然法との直接關係を証明しようと試みる。即ち中世紀自然法からの系は切れていないのである。のみならず、そこからアウグスティンを経てアリストテレス、プラトーン、ソフィストを通つてヘラクリットへの系統がさぐられ、この大脈系に比すると、從來、自然法に於いて重要な役割を占めると信じられていたストア派は却つて副流の如くに取扱われる。

もちろん著者の見解にもかなりの独断が潜んでおるようである。自然法を解して、良心を媒として墮落せる人間に働きかけると考えるのと、これを人間性そのものの表現だと考えるのでは、自ら大きな結果の相異を来す。著者は後者に与みして自然法を *onisch* に土台づけようとする頗る樂觀的な立場に拠っている。かくてアウグスティンとトマスの差を消し、ライプニツ、メランヒトン、グロチウスらを一概にプロテスタント的自然法家にくみ入れ、アウグスティンのプラトンの前提を否定し自然法の実存を否定するカルビン、ルツテルとの相違を見ない。従つて啓蒙期の形式的な自然法の基礎づけの背後にプロテスタント風な悲觀的理論のあることを理解しない。

それにつけても抑々自然法なる概念の規立に當つて凡そ三つの態度のあることに注意し、そのどれに重点をおくかを先ず見定めておく必要があるのであらう。即ち一つはプラトー、アリストテレス、トマスにおける如く法概念の本体論的研究であり、実定法と妥當なる自然法との距離を示し、どちらかといえば保守的なもの、その二は実定法を捨象して、自然状態における個人の活動形式の根本規立を定めようとするものであり、ストアに源をもち、被圧迫階級のルサンチマンとして意味を有するもの、その三は具体的規範を建てるために自然法の体系を顧みるもので、啓蒙期の初めには革命的役割を務めたが、保守的目的のためにも適用され得るものである。

三

現代自然科学がどんな世界觀的帰結をもたらすか、これはある意味で刻下の重大問題である。左翼理論家

がこれをイデオロギーの埒内に引入れて以来なお更そういう趣をもちだした。なかでも旧くはラッセル、近くはエディントンの所説が賛否の中心を形づくっているかの如くである。この時、必ずしもイデオロギーの平面からではなく純理論上から、これらの人々（前記の二人に Jeans を加えて）に批評を加えているのは――

C. E. M. Joad 【Cyril Edwin Mitchinson --, 1891-1953】 , *Philosophical Aspects of Modern Science*, London 1932.

である。著者は総じてこれらの学者のもつ観念論的結論に飽きたらなさを訴える。Jeans は先ず現代物理学の方法的原理よりも成果から出発して、やたらに形而上学的思弁に飛躍する。物理的世界はあらゆる意味で数理的世界となり物質の存在はなくなつた、そして数学の対象は思想であるが故にそれは観念界に外ならない、こういうのが Jeans の推論である。これに対して著者は、たとえ bulk and figure が消失したからといって atom が spirit に化するわけではない。物質は数学法則に従うと共に、経験さるべきものでもある筈だ。もし物質が前者によつてのみ十全に規定されるものであるなら、それはデカルトにおける如く心とほど遠い実体とならざるを得ない。ところが意識はただ物質の普遍法則に服従するのではなく、寧ろ物質の法則を *exognition an recognition* する関係にあるのである。二つの実体に共通なるものが存する限り、物質が認識され、法則が定められるのである。

エディントンは一層深く新物理学の方法原理を哲学的に評価する途を知っている。彼は諸感覚の関係、それに基づく pointer-readings、更に数学的構成、科学者の意識、竟いに宇宙的意識に説き及ぶのであるが、評者の見解に従えばそれらの関係がいかに曖昧である。エディントンの弱点は知覚問題の認識論的取扱いの失敗に因り、かくて易々と擬人的衝動に身を委ねた点にある、と著者は断定する。

終りに著者自身の知覚論を展開しているが、認識作用の対象はどれも作用から独立する、という命題はよいとしても、sensory objects, common-sense objects, physics の対象を分ち、前なるものが後なるものを "suggest" するというだけでは、甚だ物足りない感がある。

四

社会学者はあらゆる試みを冒す。その中でも形態説の考えを、社会学の概念構成の基礎として応用することは必ずしも新しいことではない。

W. Verhofen 【Wilhelm Verhofen, 1878-1960】 , Die Stufen der Sozialität, 1931.

もかかる企の一つの見本である。彼は複合対象はただの合計ではなく、多かれ少かれ形態化されている。そこで部分（肢体）の相属の仕方に従つて Gefüge と Gebilde が分けられる、という。前者はまた Bestandstücke が固定して配列されるか、 Gelenkstücke が運動するよう装置されるかに応じて Aggregate および Mechanismus に分けられる。また Gebilde はその肢体が器官なる限り Organismus であり、肢体が selbsteigige Einzelwesen なる限り Sozialität である。Organismus に於いては、それが刺激生活を営むか、記憶生活か、意識生活か、に従つて植物、動物、人間が分けられる。同様に Sozialitäten にも三階段が区分され、植物の如く刺激受容に終始するものは隣接的 Gruppierung を、動物の如く衝動に生くるものは Gesellschaften へ、共働体をもつ人格的存在者は Polarijunktions に於いて結合することが可能である。最後の結合に於いては「精神」が支配的原理となり、肢体はそれに直ちに服従するのではなく、属すると共に争い、縛られると

共に自由であり得る。

五

ローザア・ベーコン【Roger Bacon, 1214 頃 - 1294】のアリストテレス形而上学に関する論文のうち、従来印刷されたことのない部分が本になった。即ち――

Opera hactenus inedita Rogeri Baconi. Fasc. XI. Quaestiones supra libros prima Philosophiae Aristotelis (Metaphysica I-IV) Quaestiones supra de Plantis nunc primum editit Robert Steele collaborante Ferdinand Delorme, O. F. M. Accedit Metaphysica vetus Aristotelis e cod. vetustissimis nunc primum editit Robert Steele. Oxonii e Typographeo Clarendoniano Londini apud Humphredum Milford. MCMXXXII. Pp. XXX, 334.

今度発表されたものはベーコンのアリストテレス形而上学に関する編述では最後のものだという。編者は原稿の出所を明らかにしていないが、多分 Amien のそれだろうと推されている。同じ叢書の他の巻よりも、よりよく編纂され、校訂も確かだそうだが、未だまだ完璧ではないとの専門家の批評である。

【OpenLibrary より取得 : Quaestiones [alere](#) supra libros prime philosophiae Aristotelis (Metaphysica I-IV) Quaestiones supra De plantis nunc primum editit Robert Steele, collaborante Ferdinand [M.](#) Delorme, O. F. M. accedit Metaphysica vetus Aristotelis e cod. vetustissimis, nunc primum editit Robert Steele. Published 1932 by e Typographeo Clarendoniano in Oxoni. Written in Latin.】

海外哲学思潮 1933.5

フィリップ・フランク「因果律とその限界」。——マキシモフ「レーニンと自然科学」。——政治学と精神分析学。——社会学の方向。——マルセル・ブルーストの美学。——最近のホップス研究文献。——「政治的性格学原理」——ブーグレの「フランス社会主義」。

一

前回に自然科学わけでも理論物理学の根本前提の動搖に際して種々な哲学的立場から各々自らの解釈にひきつけて、新しい要素を有利に摂取しようと企てられていることを述べ、それが大きく党派的对立にまで及んでいることを仄めかした。それで今回はいわゆる唯物論的弁証法の側からこの問題を取扱った一、二の論文を紹介する。ところがこの側の陣営にも細い分裂がある。即ち社会民主主義に盟みする者とボルシェヴィキに属するものとは必ずしも見解を一にしない。先ず前者に数えられその中でもウキン一派の主張を代表すると考えられるのは——

Philipp Frank, *Das Kausalgesetz und seine Grenzen* Springer, Wien 1932 【既出 1933.3】

である。本書は素人に物理学の最近の進歩を解説し、この進歩を反動的傾向の助成のために濫用しようとする諸々の試を撃破することを目的という。ところで反動傾向は一方に神の概念の転置に過ぎない

Ganzheit, Entelechie, Atomseele, Plan, Finalität 等の範疇を密輸入すると同時に、他方では量子力学を誤解して因果法則を解消せしめようとする。そこで闘いは二面的となり一は因果法則を先験論的に理解する無意味、形而上学的トートロジーに向い、他は法則性一般の否定者に対する。著者フランクは自ら形而上学的な仮空な問題を去り経験と現実に適う科学的な因果法則の概念を樹立すると称する。この際に彼は唯物弁証法を援用しマルクス主義的科学論の発展の叙述に一章が割かれる。この場合、著者がとる根本の見解は、科学論における形而上学への闘いは科学の領域を土台としてそこで戦われるのでなく、却つて社会的現実に於いて決せらるべきだ、という事である。かかる見地から彼は量子力学によつて唱えられる統計的法則性と史的唯物論における法則性との間に並行線をひき、自然と社会とに通ずる因果法則の妥当性を具体的な適用を以て確かめようとする。そして両者は共に Makrozustände には妥当するが、Mikrozustände には無効で、従つて個体と粒子に於いては何らの予測も可能でない、というのが著者の結論である。この帰結はブレハーンノフ的であり、メンシェヴィキ的であると云われる所以であらう。

これに対して雑誌 "Unter dem Banner Marxismus" 1932, Sept. につづる A. Maximow 【不詳】、Lenin und die Naturwissenschaft は自然科学におけるレーニンの段階を叙述したものである。商業資本の覇を握つた時期の自然科学の方法をマルクスとエンゲルスは形而上学的と呼んだ。この時期の自然科学によつて選ばれた諸範疇は絶対的に固定して動きのとれないものであった。工業資本主義の興隆と共に社会の生産力が俄に増大すると共に、自然科学の研究の上にも大なる変革が遂げられ、固定した範疇は流動した範疇に代えられ自然現象の関連と運動とを写すものとなりエンゲルスのいわゆる「唯物論的な自然認識の体系」が建設さるる

に到った。然るにこの自然科学の自らなる発展は科学者がこの発展の意義を覺らざる限り、桎梏と化せざるを得ない。ここに現代自然科学の矛盾と危機が存する。レーニンの『唯物論と經驗批判論』における自然科学上の觀念論に対する批判は実にこの矛盾を指摘し、その解決はただ弁証法唯物論の方法を以てする外はない所以を説いたものであり、エンゲルスの亡き後レーニンの出現によつて初めて無成果な科学的日和見主義が打破されたというのである。しかし公平にみてマキシモフの説述は甚だ公式的で何等潑刺と人を打つところがない。党派性を余り厳しく主張する余りソヴェートの理論家が萎縮しつつあるのでなければ幸である。

二

科学としての政治学は如何にして可能であるか、体系的政治学は果して現実の政治問題を適當に処理できるか、否、一体、政治とは何であるか、こういう根本的諸問題が特に政治的なこの時代に於いて尋ねられるのは当然である。しかし未だ權威ある所説に接するには到っていないのは遺憾である。それにこの学問の若さの故か社会学などとも同じように他の学問の新傾向というやうなものに無闇に頼ろうとする弊がある。現に興味ある内容を取扱っていると思われる――

Richard Behrendt 【Richard Fritz -, 1908-72】 , Politischer Aktivismus, Ein Versuch zur Soziologie und Psychologie der Politik, Leipzig 1932

などもフロイド主義に偏り過ぎているように思われる。著者の意見によれば精確な社会学的研究は心理学的とりも直さず精神分析学の提供する素材に基づいて行われねばならぬ。政治は一方に於いてある目的達成の

ための一般的表象の内で正当づけられるイデオロギーの流露であるが、それだけではなく相反する影響勢力のあることを必要とする。一般に政治行動へのエネルギーは *Asozialitätskomplex* から出てくる、せかれたる衝動傾向によって個人は社会環境を改変しこれを己れの精神状況と調和させようと試みるのである。多くの時代の正常人は全て非政治的なのを常とする。今日の人間が、然るに、異常な政治的活動性を示しているのは大なる社会形象がもはや教育的・規制の力を失い、それに精神的に固着することが不可能になったからである。満足されぬリビドが新しい対象と *Gruppenagressivität* に於いて感情的実現を望んでいるのである。

Adolf Grabowski 【Adolf Grabowsky, 1880-1969】 , Politik, 1932

は右のものより問題を一般的に取扱ひまた實際問題にも触れようと努めている。けれども著者は政治学を「指導層の育成のための形成原理」とみることによって著しく国家学に近接しており、ただ政治学の動的性質を強調してヤコブ・ブルックハルトのいわゆる "Kontemplation als Freiheit im Bewusstsein der Gebundenheit" を越えて行為へ訴えることを奨めている。

三

社会学は今、内容を需めている。もはやそれが現実生活、就中政治行程と遊離しているなどとは考えなくなった。而もなお一定の政派の婢となることを潔しとしない状態にある。政治的に中立を守るということは科学性の故にそれが信条とするところである。歴史主義的な「閥聯主義」もその一つであるが、統計という一見公平にみえる武器を用いて、しかも社会の中間に立つ知識階級、中産層の諸問題を取扱うという傾向が

あっても不思議ではない。Alfred von Martin【Alfred Wilhelm Otto von -, 1882-不詳】、Sigmund Neumann【1904-62】、Albert Salomon【1883-不詳】によつて編せられてゐる叢書“*Soziologische Gegenwartsfragen*”のその一つである。第一編はTheodor Geiger【- Julius -, 1891-1952】、*Die soziale Schichtung des deutschen Volkes: Soziographischer Versuch auf statistischer Grundlage*が選ばれ、イデオロギーに対しより根源的な結合として Mentalität を挙げたりしている。その外、同じ方法によつて「政治的決意における婦人」と題し婦人選挙権問題が論ぜられ、「ドイツにおける使用人の社会学」の下にサラリーマンの問題が扱われ、次で「現代学生の社会的地位」、「アメリカ知識階級の社会学」、「政党社会学」、「ドイツにおける政治的知識階級の社会学的構造」、「映画の社会学」、労働組合、都市と農業その他の問題が究明されることになっている。

四

最近号の「ルギュ・フィロゾフィク」にイタリヤ人アドリアーノ・ティルゲル【1887-1941】が「マルセル・ブルーストの美学」に就いて書いてゐる。(Adriano Tilgher, *L'esthétique de Marcel Proust, traduit de l'italien par Elena Boubée et René Maublanc, dans Revue philosophique, Année-N08 1 et 2- Janvier-Février 1933*)

ティルゲルの考えでは、ブルーストの芸術論の中には三つの思想系統を区別することが出来る。第一のものはプラトンの又プロティノス的な思想である。即ち彼は芸術を現象の世界から實在の世界へと進むための手段であると考え。ところでこの現象の世界は實在の世界を蔽い隠すと共に又顕わにする。芸術家は感覚的な現象から永遠の法則の世界のシンボルを造り出すべきものである。芸術家は現象の蔭に潜むこの永遠の

世界を、永遠の法則を吾々に示すことに依つて始めて芸術家たるの資格を得ることが出来る。芸術家にとつて必要なのは発明でも、空想でも、想像でもなく、唯實在に従うという態度のみである。

第二のものはベルクソンの思想と呼ばれよう。即ちブルーストに依れば、芸術は習慣や実践的生活や、功利的知識から解放された新しき眼で世界を視ることの中にある。知識、習慣、利害は本源的な印象を厚い被の下に隠してう。芸術家は独自の眼を以つて、オリヂナルな仕方で世界を視ると共に、更に他の人々に向つて彼等が世界を視るべき眼を要求するものである。芸術はかくて本質上オリヂナリテである。

深き印象なくしては眞の芸術はあり得ない。そしてこの印象は正に吾々のものである。これこそ吾々の努力に依つて深い闇の中から引き出さねばならぬものである。純粹なる知識の諸観念は一つの論理的真理であり、可能的真理ではあつても、吾々はそれが眞なりや又現実的なりやを知らない。実に印象のみが真理の規範であり、想像の夢に対して實在の品位を与えるものである。

併しながらプラトンの又プロティノスの思想もベルクソンの思想も共にブルーストの美学の眞のオリヂナリテを尽くすべきものではない。然らばブルーストに於いて眞にブルースト的なものは何処にあるか。

一杯のお茶の香りが過去の印象と同じものをまぎ／＼と喚び起す。香り、響き、手ざわりは忘却の闇の中から新に過去と同一の印象を喚び起して来る。過去の闇から現れて来るものは現実の、現在の感覚と同一の感覚ではない。それはこの感覚が感ぜられた時に精神が生きたところの生命の一片に過ぎない。この感覚が沈んでいる忘却の闇が深ければ深い程、その復活は全体的であり、完全である。忘却はその純粹性の中にこの感覚とそれに結びついている生命とを保っている。忘却は死であると共に若さの泉である。併しこの感

覚が始めて感ぜられた時にはそれはこうした喜びを与えなかった。又精神が今始めてこの感覚を持つとしたならば同じくかかる喜びは持たぬであろう。——ここにマルセル・ブルーストの芸術哲学の中心問題がある。——精神は幸福である。蓋し精神は、追憶である知覚、知覚である追憶という様なこの自発的な作用に於いては現在に生きると共に過去に生きるからである。否、精神は現在と過去との外に、永遠の中に生きるのである。現在と過去とが結びついて一つの統一をなすところのかかる経験の中に於いてのみ人間は完全と絶対的喜びとを味うことが出来る、というのはかかる経験に於いてのみ生命は一つの行為としてでなく、正に生命として実現されるからである。人間は芸術に於いてのみ絶えざる時の流れを超えて、暫く永遠に参与することが出来る。ブルーストはかくて語る。——*Si le souvenir est le temps retrouvé, l'art est le temps dominé, condensé, universalisé pour l'éternité.* じつにブルーストをして実にブルーストたらしめる所以のものが見出されねばならぬ、とアドリアーノ・ティルゲルは言う。

五

今日ホッブス研究が世界的な流行をなしていることには当然の理由が考えられる。ここに紹介しようとするのはベルナル。ランドリのホッブス論である。(Bernard Landry【生没不詳】、Hobbes, 1 vol. de la collection 《Grands Philosophes》, Paris 1930, 278 p.) ランドリと言えど、嘗て Duns Scotus 【*"Duns Scot"*, 1922】及び *L'idée de chrétienté chez les scolastiques au XIIIe siècle* を書いたことがある。彼は哲学者を研究する際、その人の実在に関する形而上学的教説とその道徳的、社会的見解との間の密接な結合又相互依存関

係に注意を向けるという遣口をとるのを常としている。ところでホッブスを研究する場合にもランドリはこの方法を用いている。特にこの点を明らかにしている個所を左に摘記しよう。

ホッブスの絶対主義は彼の唯物論的宇宙論に依つて非常に有利にされている。ホッブスは一切を運動で説明する。彼に於いて全体は部分以外の何ものも含んでいない。さてかかる自然哲学に見事に利己主義的社会学に結びつく。つまり物的世界の機械主義的理論は人々に社会を単純な人為的機械として考えさせるからである。かくて諸個人は相互に敵意を抱く危険なものとして現れ、外的權威は秩序と平和とを維持する上から見て必要となる。機械論者ホッブスを生み出したものは社会学者ホッブスである。

この考えがランドリの書の全巻を貫いているのである。だから例えばホッブスの幾何学上の誤謬が彼の絶対主義論に結びつけられる。幾何学上の誤謬というのは彼が数学的空間を認めなかったことに由来するのであるが、この数学的空間は如何なる権力も破壊することの出来ぬ一塊をなすものである。然るに絶対主義の理論家はこのような真理の存在を知らぬ。かかる真理は実に国家の権力を以つてしても抑えつけることの出来ぬ島を形造っている。ホッブスにあつては、科学の領域内に於いてすら主権者が真理を決定するの権利を持っているのである。科学的領域への主権者のこうした干渉はホッブスに於ける諸仮説と結びついているものである。

テーニエスのホッブス論は勿論信頼すべき權威の書たるに相違ないが、フランス人ベルナル・ランドリのこのホッブス論も、特にイデオロギーとしてホッブスの思想を吟味する場合大いに参照さるべきものを含んでいると思われる。

序でに最近のホッブス文献を尚一二紹介しておこう。ブランドの「トーマス・ホッブスの機械的自然観」(Frithiof Brandt【1892-不詳】、Thomas Hobbes, *Mechanical Conception of Nature*, Levin & Munksgaard, Copenhagen. Librairie Hachette London 1928, 396 p.) は十数年前デンマーク語で出版されたもの(Den mekaniske Naturopfattelse has Thomas Hobbes, Levin & Munksgaards Forlag, kbenhavn, 1921, XII + 408.) の英訳である。翻訳は先頃物故した Vaughan Maxwell【生没不詳】及び Anny Fausbøll【Annie I. Fausbøll, 1876-不詳】の手で出来た。著者ブランドはヘフディングの椅子を襲った人である。従来ホッブスに就いて書かれたものは極めて多くあるが、それ等に依つて殆んど触れられなかったものはホッブスの自然科学的業績であると言われよう。この部分を特に立ち入って研究しているというだけでもブランドのこの書の存立理由は見出される。就中今日まで等閑に附せられていたホッブスの光学に関する貢献に就いて頁を費していること、又彼とデカルトとの関係をも相当詳細に論じていることは本書の意義を高めるものと思われる。大英博物館所蔵のホッブスの手稿に関してブランドが自身の注を附していることも研究者に便宜を与えるであろう。

ホッブス文献をもう一つ。アドルフ・レギの「トーマス・ホッブスの哲学」がそれである。(Adolfo Levi【1878-1948】、*La Filosofia di Tommaso Hobbes*, Società Ed. Dante Alighieri, 1929, 423 p.) 著者はパヴィア【Pavia】大学の教授。イタリア語で書かれたホッブス文献としては、Arturo Bersano【生没不詳】、*Per le fonti di Hobbes*(Estratto della Rivista di Filosofia etc.), Bologna 1908.——Giuseppe Tarantino【1857-1950】、*Saggio sulle idee morali e politiche di Tommaso Hobbes*, Napoli, Giannese, 1900.——Rodolfo Mondolfo【1877-1976】、*Saggi per*

i トーマスは底本では以下、Tomasoと表記されているが、イタリアではTommasoとなる様だ、Tomasoでも可なり。

la storia della morale utilitaria. La morale di Tomaso Hobbes, Fratelli Drenker. 1903, 278 p. 等若干あるが、レギの書物は包括的なものとしては最初のものであると言われ得る。先ず体系の前提をなすものに就いて詳細に述べ、次に心理学、道徳学、政治学の順序で叙述を進め、結論に於いて批判を加えており、この際政治的、社会的なるものを特に中心に置いている。著者はホッブス文献にはかなり通曉しているらしく、この点吾々にとつては便利である。且つホッブス以前の契約説の歴史を大体ギールケなどを材料にして詳論している。

六

アードレル派の心理学者キュンケルの「政治的性格学原理」(Fritz Kunkel [1889-1956], Grundzüge der politischen Charakterkunde, Junker und Dünhaupt, Berlin 1931, 113 S.) は色々な意味で興味を惹くものであるが、ざつと紹介しよう。

先ず、個々人の行為が国家の行動に対して影響を及ぼすという時、その行為は政治的と言われねばならぬ。ところで政治的性格学の目的はと言えば、新しい創造的、生産的洞察を造り出すことに貢献しようとするところにあるらしい。然るに政治的性格学の建設も今日ではマルクスを頼りとせずには不可能であると見えて、キュンケルはマルクスに於ける「意識の存在への依存性」、「教育者の教育」の二原理をこの場合拉して来る。キュンケルに従えば、マルクスに於いては丁度中間項が欠如している。でこの欠けている部分を内容的に補うのが政治的性格学にとって課せられた仕事となる。さて社会的構造は既に極めて幼い時代に於いても人間の性格の構成及び形態を制約する。そして信念、世界観、個人的態度はこれに依つて規定される。性格の形

成及び教育の可能性に依つて生産的、構造的変化が生じることによってキュンケルはマルクスを超越したと考える。社会学的原理と性格学的原理とのこの様な結合はこの書の全体を貫くものであるが、これに対応して全体は二つの部分に分たれる。即ち社会に依る人間の形成を論ずる部分と人間に依る社会の形成を取扱う部分とである。マルクスを援用したキュンケルは今度は更にテーニエスを引き合に出す。共同社会と利益社会との二概念はテーニエス自身に於いてはメインの所謂 *from status to contract* として考えられているのであるが、その後の形式社会学の発展はこの概念を全く形式社会学的に改釈して、万能膏の如く使用されるに到った。キュンケルは共同社会と利益社会とを性格学的に利用する。その手際を見ようではないか。政治的性格学には二個の根本概念として *Wirhaftigkeit* と *Ichhaftigkeit* とがある。この前者はテーニエスの共同社会に対応するものと言われる。ところが資本主義の発展につれてこれは後者にその席を譲らねばならぬ。この性格学的範疇に対応するものが利益社会だというのである。併しそれだけではない。*Ichhaftigkeit* の危機の中から現れる新しき *Wirhaftigkeit* は今や漸次 *Ichhaftigkeit* を弁証法的に止揚せんとしてつつある由である。

七

クレッソンの「フランス哲学史」(André Cresson [1869-1950], *Les courants de la pensée philosophique française* 【川口篤訳『フランス哲学思潮』)や、マティエの「フランス革命史」(Albert Mathiez [1874-1932], *La révolution française*, 【"160 /", ねづ・市原訳『フランス大革命』)などを始め、多数の重要な著書を廉価で吾々に提供してくれる *Collection Armand Colin* は昨年ブーグレの「フランス社会主義」(Célestin Bouglé 【Célestin

Bouglé, 1870-1940】、*Socialismes français. Du socialisme utopique à la démocratie industrielle*, Armand Colin, Paris (1932)を世に送った。ブーグレは人も知る如くソルボンヌの教授で、社会学者として既に多くの著作を持っている。二〇年以上もソルボンヌで「社会経済学史」を講じており、嘗て『ブルードンの社会学』を公にしたことのあるブーグレは「フランス社会主義」を書く資格を持つていえるとも言えるかも知れない。その序論で断っている通り、彼はこの書をなすに当って、純粋にアカデミックな態度をとるといふよりも、寧ろ絶えず現実生活の諸問題に対して強き関心を抱きつつ筆を進めたことは読者にとつてはつきりと感ぜられるところである。ブーグレの政治的立場は全く自由主義的なデモクラシーにあると言ふことが出来ると思われる。(尚同じ様な立場から書かれたドウレフスキーの「フランス社会主義史」のあることを附け加えてをこう。

J. Delevsky 【Jacques --, 1865-1956】、*Les antinomies socialistes et l'évolution du socialisme français*, Marcel Staud, Paris (1930)

*Socialismes français*であつて *Socialisme français* ではない。つまりフランスに於ける社会主義諸体系という程の意味に解されて宜からう。で諸体系の中へ含まれるものは、セン・シモン、フリーエ、ブルードンであつて、この叢書の大きさから言つて、全体系の網羅とか、労働運動の叙述などは到底望めない。併しブーグレが右の三者に就いて述べるに先立つて、「一八世紀の遺産とフランス革命」とのために相当詳しい叙述を与え、一九一頁中七二頁、一〇章中四章までもこれに費していることは注意に値する。彼はそこで一八世紀の哲学者達やフィジオクラットの理論、農民問題、プロレタリア階級の出現(ブーグレはバブーフをその戦士と見ている)などに関して、常にその現代的意義を念頭に置きながら論述し、それ等が今日の自由党、急進

党、共産党のプログラムの中に尚生きていることを指摘する。ブーグレは次に「フランス革命の社会主義的歴史」の著者ジャン・ジョーレスこそ一七八九年の精神に貫かれたものであるとして、更にマルクスが彼に与えた影響などを記しているが、読者が未だセン・シモン、フリーエ、プルードン等に就いて知らない時にジョーレスが持ち出されて来るのは稍その場所が当を得ていない様に見える。

「マルクス主義の強力な総合の中にはフリーエ主義もセン・シモン主義も共に含まれていると言える」とブーグレに言う。そして続けて「マルクスは先蹴を抹殺することに依つて彼等を利用した。マルクスは彼等の恩恵を忘却に委ねることに依つて、彼等の思想に生氣を吹き込んだと言える」と記している。プルードンとマルクスとの関係はこれと異なる。プルードン通として有名なブーグレも「経済的矛盾の体系」の著者の矛盾の多い思想には閉口しているらしく見受けられる。セン・シモン及びその徒に就いては「コレクティヴズム」、「生産者組織」が強調され、フリーエは「消費者の幸福を一〇倍にする組合的社会主義」の代表者として、プルードンはセンディカリズムの代表者として語られる。ここからブーグレは現代に於けるセンディカリズム、デモクラシー・エンデュストリエルの問題を論じて、フランスの前途に対する憂慮を洩している。ブーグレの愛するものは学問の進んだブルジョワジーのフランスであり、私有物に執着する小農のフランスであり、リベラリズムのフランスである。彼の嫌いなものはイタリヤ的ファシズム、アメリカ風のエンデュストリアリズム、ドイツ型の社会主義である。この嫌いなものに対して祖国を守るものこそはフランス革命の伝統であると彼は言う。

海外哲学思潮 1933.6

ベルクソン「道徳と宗教との二つの源泉」——ソレル文献二つ。——ハルトマン「精神的存在の問題」。

——ガイゼル「因果律」。——社会学文献二つ。——ハーバート「生活と芸術における無意識」。

一、ベルクソン「道徳と宗教との二つの源泉」

既に幾つかの著書、特に「笑」に於いて社会学的なるものを示したベルクソンは昨年出た「道徳と宗教との二つの源泉」(Bergson, H. [Henri -, 1859-1941], *Les deux sources de la morale et de la religion*, Alcan, Paris 1932, 364 p. *Fres.* 25. - 【森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』])でその社会観をはつきりと論じている。デュルケイム主義の硬化が伝えられる時、この書は興味あるものでなければならぬ。

ベルクソンが社会的なるものに近づいて行くに当って、彼は決してその哲学的見解を機械的に社会に対して押しつけるというような態度をとつてはいず、寧ろ社会的現実に率直にぶつかつて行くという遣口をとつてゐる。ところで先ず注意すべきことは、彼が道徳と宗教とを論ずる際、フランス実証主義者と共に、これ等を社会の要求から説いている点である。道徳は「閉せられたる道徳」(*morale close*)と「開かれたる道徳」(*morale ouverte*)とに区別される。前者は勝れて現存の社会構成物の保持に向けられており、自己の集団を支配する慣習の体系に服従しようとする各個人の本能に対応する。この「閉せられたる道徳」は各人が自己の属する社会的統一の成員として振舞うといふ点に存するものであつて、各人を家族、国民に結びつけ、他の家族、国

民からひき離すところのものである。次に「開かれたる道德」であるが、一般的な人間愛は特にこれに属するものであつて、それは断じて右のやうな直接的な、本能に近い感情の拡張などと考えられてはならぬ。対象が量的に大きくなつておる今の場合、これに対応する感情は質的に別のものとなつてゐる。「開かれたる道德」はその時々、の形而上学的な生の流れの人間歴史への侵入と考へうる。侵入は偉大なる人々 (Certains hommes, dont chacun ce trouve constituer une espèce composée d'un seul individu) を通して行われる。この人々は全く新しい世界感情に表現を与へ、そしてこれは多くの人々に影響し、模倣される。

「閉されたる道德」及び「開かれたる道德」が社会的制約を持つということはベルクソンに依つて認められてゐない。彼は哲学に於いて直観と分析的科學とを區別するが、これに対応して、前進的な道德的直観と閉されたる社会の自己保持に向う慣習の体系とを峻別する。従つて彼は歴史に於ける前進的モメントと停留的モメントとの弁証法を理解することが出来ない。

二つの道德に應じて、今度は二つの宗教、即ち「静的宗教」(religion statique)と「動的宗教」(religion dynamique)とが區別される。ベルクソンは「静的宗教」を物語の体系と見ることに依つて再び実証主義的ナチュリスムに近づく。「静的宗教」は死の不可避性の觀念に対する自然の防禦的反作用であり、而もそれは人間の説話形成的能力に依つて媒介されたものである。つまり叡知を附与された生命が動物との対立に於いて必然的に持つところの人為的方策であるに外ならぬ。この宗教も亦社会の福祉に利己的目的を従属させるものではあるが、と言つて「閉されたる道德」と直ちに同一な訳ではない。この道德がその機能に於いて

国民的諸要求と直接に結びついているに反し、この宗教は固有の歴史を持ち、これなくしては一部の社会的紐帯が失われるところの社会的義務を含むだけのことである。「静的宗教」は、人間が生命の流れ、即ち一切の個人的生命を超えた創造的力との同一を感じるところたる神秘的確実性の悟性的把握である。さて「動的宗教」の方は吾々の内部に発見される生命との同一化に存する。一切の伝説、神々は、宇宙をも造り出すところの創造的努力の所産である。真のミステイシズムはエクスタイズにとどまるべきではなく、それ自らが創造的な力とならねばならぬ。》*Sa direction est celle même de l'élan de la vie; il est cet élan même ...*》

尚ベルクソンは将来社会に就いて語る。エンデュストリアリズムとマシニズムとは望ましき幸福を人類に与えはしなかった。彼は晩年のシューレルと同じく、ヨーロッパ、否全世界の人口過剰を確信し、マルサス主義を説いている。今日人々の努力の対象となつてゐる物質的幸福が神秘的直観の前に色褪せて行くものとすれば、「簡易なる生活」こそは現代のメカニズムを克服し得るものである。（併し「簡易なる生活」が現代の病弊を救い得るものなら、とうの昔に救つていたであらう。故に永い間社会成員の大部分はこうした生活を強いられてゐるのであるから。）又或る個所で現代の人々の不幸の源を次の点に求めている、*que la production en général n'étant pas suffisamment organisée, les produits ne trouvent pas à s'échanger. かつを更に深めることに依つてベルクソンは形而上学から本当の科学へ進むことが出来るのである。*

一昨年雑誌「社会」(Gesellschaft)で「ジョルジュ・ソレルと反革命」(Georges Sorel und die Gegenrevolution)を論じたフロイントが昨年「ジョルジュ・ソレル。革命的保守主義」なる一書を公にした。(Freund, M. 【Michael --, 1902-72】 , Georges Sorel, Der revolutionäre Konservatismus, Vitorio Klostermann, Frankfurt a. M. 1932, 366 S. RM. 12.50)

この本でフロイントが果さうとする課題は、ソレルの思想の根本的特徴として「革命的保守主義」を指摘し、この見地の下に、思想家にして評論家たるソレルの三〇年の久しきに亙る多様な矛盾多き思想的発展を一括して考察しようとするところにある。著者は豊富な材料を駆使して、ソレルの精神的発展の諸相の概観を試み、その歴史的背景を論じ、同時代の類似現象との密接なる関聯を叙述しているが、読者にとつて殊に有益なのはソレルの著述の年代的一覧表であると言わねばなるまい。本書の意義はこうした資料的側面により多く見出される。と言うのはこうである。クローチェは嘗つて「社会主義が持った唯二人の独創的思想家はカール・マルクスとジョルジュ・ソレルとであるが、二人とも戦闘的な、そして或る意味では保守的な精神に充されていた」と言つたが、フロイントはその書の標題が既に示している通り、このクローチェの言葉を全く一面的に解し、この言葉を正当づけるという意図に依つて三六六頁の書物が貫かれているからである。

もう一つ。サントノスタースの「ジョルジュ・ソレル」(Santonostasio, G. 【Giuseppe --, 生没不詳】 , Georges Sorel, Laterza, Bari 1932, 145 p. L. 12. --)を紹介して置かう。

サントノスタースはこの本で、ソレルの理論の諸側面を明らかにし、彼に与えられた様々の影響、就中べ

ルクソンの影響を論定し、所謂ソレルの反叡知主義なるものが l'action pour l'action のドグマを超える真のソフィスト的叡知主義に如何にその席を譲っているかを究明している。ソレルはキリスト教の中に生産者革命のアナロジーを見ているのであるが、この点も著者に依つて触れられており、更にソレルの思想の最も深いところに根ざす神秘的ペシスムも適当に闡明されている。一般に敘述はかなり無味乾燥であつて、余り突き込んだ批判も見当らない。ソレルの著書、ソレル関係の文献のビブリオグラフィーが添附されているが、完全なものとは言われない。

三、ハルトマン「精神的存在の問題」

ハルトマンの「精神的存在の問題」(Hartmann, N. 【Nicolai -, 1882-1950】 , Das Problem des geistigen Seins, Walter de Gruyter, Berlin und Leipzig 1933, 482 S. RM. 12. - 【高橋敬視訳『歴史哲学基礎論：精神的存在の問題』(抄訳)(国会図書館デジタル化資料)) は「精神の現象学」への一つの試みである。と言つてもヘーゲルの意味に於いて精神発展の弁証法を論ずるものではなくて、「精神」の現象様式の現象学的記述を任務とするものである。三部に分れる。「個人的精神」——これは「人格の形而上学」まで高められる。「客観的精神」。「客観化されたる精神」、即ち「創造されたる業績」の精神。ハルトマンは言う。「個人的精神のみが愛し又憎むことが出来る、これのみがエトスを持ち、責務、責任、罪、功績を持つ、これのみが意識、予見、意志、自意識を持つ。」……「客観的精神のみが厳密且つ本源的意味に於ける歴史担荷者であり、これのみが本来『歴史』を有する

ものである。」……「併し客観化されたる精神のみが無時間的なものの中へ入り込み、従つて理念的なるものと超歴史的なるものの中へ入り込むのである。」

四、ガイゼル「因果律」

一三〇号【1933.3】及び一三二号【1933.5先月号】本欄に於いてフィリップ・フランクの「因果律とその限界」(Frank, P., *Das Kausalgesetz und seine Grenzen*, Julius Springer, Wien 1932, XV+308S. RM. 18.60)を紹介して置いたが、例のヨーゼフ・ガイゼルが今年に入ってから「因果律」(Geyser, J. 【Joseph --, 1869-1948】), *Das Gesetz der Ursache Untersuchungen zur Begründung des allgemeinen Kausalgesetzes*, Ernst Reinhardt, München 1933, 163S. RM. 6.5.)を世に送つてボン学派、就中前記のフランクに対して激しい批判を加えている。ガイゼルは近代的、自然科学的形態に於けるものをも含めての因果律の基礎づけを企てているが、それは全くアリストテレス的又カトリクの範疇に於いて展開されている。彼は言う。「一瞬間に或るものがあり又あらぬということとは不可能である。」

五、社会学文献二つ

フランス語以外の言葉で書かれたデュルケイム文献としては従来 Gehlke, C. 【Charles Elmer --, 1884-1968】), *Emile Durkheim's Contributions to Sociological Theory*, 1914. あるのみと言えたが、今度ドイツでマリカの「エ

ミール・デュルケイム」が出版された。(Marica, G. M. 【George Emil -, 生没不詳】, Emile Durkheim, Soziologie und Soziologismus, Gustav Fischer, Jena 1932, VII+263S, R.M. 9.-) フランズなどに社会学はないと極端な無視に終始して来たドイツ社会学界としては珍しいことである。マリカはデュルケイムから多くの若干乱雑な引用を重ね、且つかなり早急な批判を下しているが、色々な意味で現在デュルケイム批判は重要な仕事と考えられる折柄、もっと慎重な批判がほしいと思われる。でマリカに依れば、有名なデュルケイムの自殺研究の如きは自然科学的思想世界に捕われているものとされる。蓋しそれは精神的作用を唯外部から、その意味内容とは独立に把握しているから。この調子ではデュルケイム批判に立ち入るに先き立つてデュルケイムと手を切っているようなものである。マリカはこの本の第一頁に、デュルケイムの仕事は大掛りなものではあったが、無駄であった、と記している位である。

さてマリカはデュルケイムの事業を三つの時期に分つ。一、一八世紀的アトミスムへの反動としてのソリダリテの観念。二、彼が道德学に寄せている大なる期待に現れているところの一九世紀的シャンティスム。三、独立の価値領域の発見という二〇世紀的なもの。

もう一つはマクス・ルンプの「社会生活論」。(Rumpf, M. 【Max -, 1878-1953】, Soziale Lebenslehre. Ihr System und wissenschaftlicher Ort, Hochschulbuchhandlung Kriese, Nürnberg 1932, IX+263S, R.M. 8.60) 個人を社会的全体の前に拝跪せしめることは社会学の原理の一つである。デュルケイム社会学がブルジョワ社会学として獲得した名声は正にその神秘的全体主義に由来するものであるが、ナチスの国ドイツでも大いに時宜に

適した社会的全体主義の社会学が簇生しているようである。ルンプの書も亦その一つである。ルンプにとつては社会秩序、集団、全体としての社会生活は「優しい礼拝の対象」である。社会学的概念は何等分析の道具ではない。分析を好まぬルンプは社会的全体の具体性に陶醉する。「現存の社会的多様性の具体的なる姿を享樂的に觀察する」のが著者の念願である。具体性には程度がある。カトリク的な集団的秩序の段階がある。この程度又段階は「主観的意味充実」と共に高まる。彼は言う。「主観的に意味の充実した集団が友人―敵対関係の中に見出される限り、吾々は最高秩序の集団を語ることが出来る。そこには本源的な社会生活が不断に力強く流れ、湧き立っている云々。」このような具体性のパトスに貫かれている社会学がルンプに依れば「實在主義的又經驗的社会学」なのである。彼は經驗主義者のモットーとしてリルケの言葉を引用している。「余は事物の歌うのを聴くを好む。」

六、ハーバート「生活と芸術とに於ける無意識」

Herbert, S. 【Salmon -, 1874-1940】 , *The Unconscious in the Life and Art*, Allen & Unwin, London 1932, 252 p, sh. 6. これは精神分析の方法の人間文化への適用の通俗的敘述である。精神分析に対する彼の見解は大体首肯出来るが、精神分析に依つて無意識の表現の中に発見されるシンボルと普通に人々が考えているシンボルとの差異をはつきり掴んでいないことは如何かと思われる。extrovierter Mensch と introvierter Mensch とに関するユンクの区別は芸術史又一般に文化史の理解の鍵として考えられている。道德的問題に於いては自由主義

的理想を擁護し、社会学的問題に就いては心理主義的見地を固執している。「愛は憎惡に対して二次的である。愛は見知らぬ人に馴れるという相当永い期間を経て始めて憎惡に打ち克つことが出来る。このことは、各人が平和を云々しているのに、各国民は相互に軍備に努めているといふ注意すべきパラドクソンを説明し得るものである。」

海外哲学思潮 1933.7

リッケルト、カッシレル、ホエフディング近況。——「因果の問題」。——職業社会学。——
ロシアの法律哲学。——フォン・シュタインの歴史哲学。

一

リッケルトは本年五月を以て七十の誕辰を祝つたそうであるが、倦まず自己の主張を公にして未だ老いなき証拠を示しているのは、その主張の時代に対する意義というようなこととは別に、とにかく驚嘆すべきことである。つい昨年のロゴス誌上に『哲学体系へのテーゼ』を発表したばかりだが、今年初頭の同じ雑誌に又もや『科学的哲学と世界観』と題して書いている。今度のものは現時流行の世界観哲学に対する自己の立場の防衛と見らるべきものである。往年の「生の哲学」に対する批判の延長とも考えられよう。ハイデッガーその他にみられる現今の世界観哲学は「全人」「生」「実存」という合言葉の下に哲学を超科学的性格のものと定めようとする、かかる思想がドイツ浪漫思想に由来することは容易に察し得べきである。ところでリッケルトによれば哲学は世界全体の把握の外の何ものでもない。世界観哲学者らが、實際的関心から出発することは、しかしながら却つて世界を限定することである、即ち世界の部分だけをみることである。世界の全般性、全面性、統体はひとり理論的認識にのみ可能である。哲学は冒険であるといわれ、真理の勇氣という

ことが語られるが、その意味は、かりにも学問上の真と背馳する以上は、情意や行動の欲求を傾向として排除するだけの勇氣をもたねばならぬ、ということを示すに外ならない、とこの老哲学者はいう。

二

エルンスト・カッシレル【Ernst Cassirer, 1874-1945】、彼もまた齡こそかなりに隔りがあるが、風格の固つている点でリッケルトに匹敵させられてよいであろう。精力的な点でも似ている。先に『英国におけるプラトンのルネサンス』なる著書を示した彼はひきつづき『啓蒙期の哲学』“Die Philosophie der Aufklärung”, Tübingen 1932【中野好之訳『啓蒙主義の哲学』】を公にした。例のクローネル『カントからヘーゲルへ』などで知られているF. Medicusの編纂にかかる『哲学諸科の概要』叢書の一環である。この書は通常の哲学史とは異つて、この時期の精神に触れることを念願とし、前世紀（十七世紀）の諸家と対照しつつまたカント哲学への準備として、この時代に活躍せる「思想の劇的動作」を描きだそうとする。カッシレルはこの期を理性の時代、主知主義の時代とする見解に反対して、十八世紀の論者は十七世紀の「体系」に信頼をおかず、理性の力を掀げるよりは寧ろ狭め弱める傾きをさえもっている。尤もこの時代の代表者は思想を一群の前提としてのアキシオムの網の中へおしこめ、そこから演繹するという esprit de système に反対するが、必ずしも esprit systématique を喪つたわけではない。却つて思想にその内在的運動をなす自由を与え、自然界・精神界を通じて實在性の根本形式も開示しようとした。カントが「理性の批判」を課題としたのもその意味に於いてであつた。だからヘーゲルが『哲学史』に於いてこの時代を *reflektiv* であるとして、思想の自発性の欠乏

せる時代と考えているのは誤解である、同じヘーゲルにあつても『精神現象学』における取扱ひの方が正しい。かくてこの時期の特徴は一般に人間悟性と神的悟性、*intellectus ectypus* と *intellectus archetypus* との關係の転換である。十七世紀の形而上学におけるように有限者は無限者の限定としてのみ存在するとはもはや考えられなくなった、却つて後者に反してでもその存在の特殊の形式を主張する権利をもつに到つた。

三

Herald Høffding 【Harald Høffding, 1843-1931】 というデンマークの思想家もこの国にとつてかなり縁の深い学者といつてよい。彼も今年九十歳に達するのだから驚く。昨春（三月十一日）彼の八十九の誕生日に方つてコペンハーゲンの大学に於いて門弟らによつて試みられた記念講演が英訳されて上梓されている【彼の没後・次号に訂正注あり】。即ち――

H. Høffding--In Memoriam. Four Addresses delivered in Copenhagen University on H. Høffding's 89 Birthday, 11 March 1932, by F. Brandt, J. Jørgensen, V. Kuhr, E. Rubin.

その中である者は、総論的にホエフディングが元來、絶対主義に対する反対者であつたことを述べ、他の者は師の「認識論と形而上学的立場」を説いて、彼が常に心理的・歴史的原理を守り人間的限界を越えなかつたことを示し、また他の者は「人格と学説との交渉」をたずねてデンマークの思想的先駐者 Sørensen 【Frederik Christian Sørensen, 1785-1872】、Kierkegaard への関連を論じている。要するにこの碩学は哲学者である前に、より多くヒューニストであつたらしい。巻末の著書目録および文献集は参照するに足るだろう。

四

因果律に関する文献は殆んど毎号の如く掲げられてきたが、西部アメリカの大学に於いてさえこの問題が興味を見出しているらしいのは注意すべきである。昨年カリフォルニア大学の哲学会が「因果の問題」を心に教授たちのシムポジウムを企てたものが印刷されている——

Causality, Lectures delivered before the Philosophical Union, University of California, 1932.

この討論乃至は綜合談話会は、問題の限定と分担の連絡がうまくついていなかったとみえて、焦点が散漫で各人全く思い思いの内容をあてどなく投げだしているという具合で折角プロフェサーと名のつく人たちが集った意義を没している。それに各人それぞれの主張も何ら鋭角的なものをもっていない、つかみどころのないうちに終わっていると考えるのは読む方の偏見のためであろうか。

五

Beruf という概念が階級概念に対抗して次第に重要性を獲得したっている。本欄でもかつてデンプの『文化哲学』がこの概念を中心として紹介した。この国では「職業調査」というような別の関心から特に社会学者の注意を惹いている。『コェルン季刊社会科学』に“Der Beruf und Erwerb”という論文を書いたことのある Fritz Karl Mann 【1883-1979】という人が“Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik” April 1933 に“Zur Soziologie des Berufs”と題して論じている。やはり Berufsethos の頽廃に動機をもったものらしいが、ベ

ルーフの觀念に於いて必ずしも宗教思想史家たちの見解に盟みせず一応、客觀的分析を試みているのを特色とすべきだろう。

この概念の規定に際しては、前社会学的な觀念、人間の携わる仕事を全てそう呼ぼうとするもの、その内特に継続的なものに限ろうとするもの（例、Lebensberuf）などあるが、社会学者は結局、主觀的と客觀的との両意味をとりわけて考察すべきである。主觀的意味におけるそれは、個々人にとってその素質や傾向上、彼がそこへ「召されている」と感ずるところの行為であり、従つて彼はその行為に於いては他人よりも優れて効果をあげ得ると確信するものである。例えば Dunkmann は『労働科学便覧』の中の「労働の社会学」でそういう考をとっている。然し論者によれば、これは本来の社会学の対象ではない。第三の客觀的意味におけるこの概念は先ず「社会的全体や目的」を前提する。そして職能はこれに調和的關係に立たねばならぬ。かつてジムメル（社会学）はこの調和の原理を（一）各人が能力、性向上、他人のそれよりも、彼に適合せる職能をもつこと、（二）その能力・性向上に全体の関心を充すべき社会的課題が対応すること、（三）各職能の間に相互依存があり障碍とならぬことという三つの原理を掲げた。第二に客觀的意義におけるこの概念は、一定の行為を予想する、だから「労働者」というのは「職業者」を意味しない。第三に Einzelwerk と Gesamtwerk との交互連関が何人にも明白でなくてはならぬ。即ち Berufsbewusstsein が前提されねばならぬ。かくして論者はいわゆる「没価値的な職業概念」^{ベールフ・スベックリフ}に到達する。彼は特にこの概念を倫理化することに反対し、倫理化主張者が經濟行為を「非職業」とすることを Beruf と Erwerb とを混同するものとして排斥する。但しゾムバルト（社会学便覧）のように、違法的な密輸、乞食、売淫等々をも職業に数えることに反対する。最後に

この論文は「職業思想の崩壊」を社会学的に究めているが、その原因として「機械装置の支配としての非人格化」、「組成の同形性」、「唯物的世界観」を挙げているが、機械と組織による単調と繰返しが必ずしも当事者にとって有害でも苦痛でもないことを述べて、甚だ樂觀的である。ただ論調にヤスペルスの影響を多く印していることは、かの国における哲学思潮の巡り方の速さを思わせる。

六

本欄は一度ロシヤにおける歴史哲学の発展に関する小論を紹介したことがあるが、重ねて Max Laserson (Riga) 【Max M. Laserson, 1887-1951】、Die russische Rechtsphilosophie (Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie, April 1933) について報告する。作者は前世紀以来の法律哲学的思想を觀念論、実証論、マルクス主義に分つて個々の学者について列挙的に叙述しているが、もちろんここではそれを伝える余裕はない。ただ彼が「ロシヤ法律哲学・国家哲学の歴史的・社会的環境」と題して前置しているところは、興味ある思想を含んでいる。ロシヤの社会史を西欧のそれと比論的に概括することは誤っている。封建制の存在についてもただ Pawloff, Silvansky, Plechanow 【Georgi Valentinowich Plechanow, 1856-1918】などの論者がこれを予想するだけである。九、十世紀の頃ビサンツおよび北方ゲルマンから來つた西欧的国家伝統が、十三乃至十六世紀の間の韃靼人の侵入によつて曇らされた。この西方的と東方的との対立は永く今日までつづいている。××主義的思想に於いてさえ認められるとこの作者は考える。しかし韃靼との関係は貢税その他の政治的方面に限られ、宗教的乃至は国民的法意識には何らの影響もみられない。そこでロシヤでは被圧迫国民に特有な、国民主義的法

意識も鍛えられることはなかった。また国土の广大と自由転住のために、ここでは西欧的な農民戦争というものもなかった。領土の拡張は何らの国民主義・帝国主義なくして行われた。それ故にロシアは固有の宗教上・法制上のプロテスタンティズムをもたない。綱領をもつ政治運動はやつと十八世紀の初めの三分の一に始つたに過ぎぬ。それも王に対する貴族の勢力争いであつた。十九世紀になつても国民の法意識は高まらない。それにロシアには西欧風な「市民層」^{「ブルジョア」}中産階級がない。このことが市民意識を弱め法秩序の脆弱を促した。従つて個人主義、契約の觀念は理解され難い。かくてロシアの法律哲学は著しく超個人的である。国粹論者たる Slavophiles は国家を全体に従属させ、法を倫理性の下におく。十九世紀後半、自由主義の興起とともにドイツ觀念論の形而上学的・倫理的自由が受け入れられたが、ヘーゲル就中多面的なシェリングが全体主義に合致した。これらを通じて共通なのは、旧い教文に発する apothäische Theologieⁱであり、西欧的な kathäische Theologie と異り、神を性質なきもの、何ら個々に定め得られぬものとする思想である。それに従つて個人が全体に没入すると共に絶対自由を確保することができる。実証論的法学思想もマルクス主義的それも共にその影響に染められている、と説明される。

七

ドイツ社会学にとってフォン・シュタイン【Lorenz von Stein, 1815-90】の名は逸することができない。昨年“Historische Zeitschrift”は附録として

i 底本のマテ。apophatische, kataphatische のことか？

Heinz Nitschke 【生没不詳】，Die Geschichtsphilosophie Lorenz v. Steins. Ein Beitrag zur Geschichte des neunzehnten Jahrhunderts.

を送った。

シュタインにとって学としての歴史は、それが世界史的過程の法則と有意味性とを究める限りに於いて、社会学である。社会学はそしてシュタインにとって人間社会とその歴史との全般科学である。出来事としての歴史は国家と社会との永久の衝突であり、不正な社会状態を克服し、調和的活動、より大なる自由獲得という意味をもっている。シュタインは総じて当時の思想傾向に抗して、歴史は政治史以上のものであることを主張した。論者はここにロマンティク、フランス社会学、社会主義、就中ヘーゲルの影響をみようとすること。シュタインの理論は、労働による財産取得の上に立つ調和ある階級社会である、即ち階級の倫理的正当づけ、不平等と財産の肯定にある。

海外哲学思潮 1933.8

一、フオントネル文獻 二、『コント書翰』 三、ポーランドとチェコスロヴァキヤとに於ける実証主義 四、『ロゴス』の「リッケルト記念号」 五、グイスバッハ『一七世紀フランス絵画史』

一 フォントネル文獻

デカルト哲学を凡ゆる領域へ浸潤させる上で功績のあつたフオントネル【Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657-1757】はフランス哲学史を顧みるものにとつて大きな意義を持つてゐる。ドイツの哲学だけを哲学だと思ひ込んでゐる日本では殆んど知られてゐない、このコルネイユの甥に關する二つの新刊書を次に紹介しよう。特にその中の一つに就いては稍詳しく述べる必要があると思われる。

昨年フオントネルの名著の新版が出た。Fontenelle, *De l'origine des fables*, Edition critique avec une introduction, des notes et un commentaire par J. B. Carré, in *Textes et traduction pour servir à l'histoire de la pensée moderne*, Collection dirigée par Abel Rey, Paris, Félix Alcan, 1932.

ところが右の序文、ノート、注釈を書いたキャレ【Jean Raoul Carré, 1887, 不詳】が同じく昨年『フオントネルの哲学、或は理性の微笑』なる本を公にした。J. B. Carré, *La philosophie de Fontenelle ou le sourire de la raison*, 1 volume gr-in 8° 706p. - Bibliothèque de la philosophie contemporaine, Paris Félix Alcan, 1932. これは前者

に対する更に綿密なる注解と考えられると同時に、ルイ一四世時代（一六八〇—一七一九）の後半及びルイ一五世時代（一七二五—一七五七）を通じてのフランス思想史の研究にとつて是非参照さるべき文献の一つである。（尚フオントネルは一六五七—一七五七。）

キャラがこの本の中で答えようとする三つの問題はこうである。

一、フオントネルの思想は彼が考え、書きそして人々に働きかけた一世紀に互る生涯を通じて進化したであろうか。

二、フオントネルには彼の名に値する独自の哲学があつたであろうか。

三、若しそれがあつたとすれば、彼の著作はその後数世紀のフランス思想と如何なる関係を結んでいたであろうか。

一、最初の問題に対するキャラの答解に依れば、言葉の真実な意味に於いてはフオントネルの思想の進化は認められぬと言わねばならぬ。蓋し彼の *De l'origine des fables* は、彼が既に二三歳（一六八〇）の青年時代に人間精神の本性、知識と信仰との關係に於いて一家の見を持っていたことの確かな証拠を提供しているからである。その後の数十年間、この思想は更に成熟を遂げたとは言えよう。併しそれが変化したと考えるべき理由は見当らない。寧ろ唯表現が次第に正直でなくなつたと思われる。

二、第二の問題は頗る困難である。彼は余り組織的な精神ではなかつた。彼をデカルト、マルブランシュ、ベーコン、ロック、ニュートンの如き人々の単なる使徒として考えることは出来ない。フオントネルはデカルト物理学をメキヤニスム・ユニヅルセルの最も明晰且つ堅固なる方式と見做しはするが、本有觀念と機會

原因とを排斥する。イギリス哲学の実験的方法に同情は持つものの、彼が觀念の起原の研究に際して用いる方法はロックの方法と異なる。彼はベーコンに於ける実践的方針に賛意を表しはするが、『ノーヴム・オルガニスム』の著者よりもつと広汎な形態に於いてである、つまり彼は方法的懷疑への忠実という点ではカルテジヤンであり、経験への信頼という点ではベーコンニヤンである。けれども吾々は「フオントネルの哲学」に就いて語ることが出来る。すべて哲学は一つの人間理論、一つの自然理論を持つという見地に立つて、キャレはフオントネル哲学に光を投げようとする。

彼の哲学は経験に弁明を求めるところの機械主義的合理主義である。この合理主義はデカルトの教説の側面、即ち *Méthode* の第六部、*Passions de l'âme* 及び *De l'Homme* に現れている側面である。人間の研究に於いて、フオントネルにとっては合理主義は人間の本性の觀察に到達するものであり、従つて情念の優れた地位を承認するものである。ところで他方機械主義は彼の研究を導くものであるが、動物のオートマティスムの如き一面的な見解とは異なる。結局フオントネルは自然の複雑性と経験に内在する偶然性に衝突する。

彼と一七世紀カルテジヤンとの重大な差異は、彼が歴史、就中觀念の歴史、その中でも科学及び学者の歴史に寄せている興味にある。その証拠は *L'origine des idées* が与える。歴史は本来無数の小原因の衝突である。併し人間の本性を十分に見究めることの出来る人々は、些事のために道を見失うことなく、そこから歴史の基礎を演繹することが出来る。「歴史的瞬間は事實上還元し得ないが、権利上還元し得る。」歴史は科学を完成するものであり、これと引き離すことの出来ぬものである。ブルテールとチュルゴーとは歴史を利用し、ギコはこの真理の多産性を論証した。

この科学的哲学から二つの実践的帰結が生ずる。一は否定的であり、他は肯定的である。前者は超自然的なるものへの軽信に不信任を表明することであり、後者は一般の福祉の増進を任とする道徳と政治とに対する科学の協力である。

超自然的なるものに対するフォントネルのポレミクはキャレに依って詳述されているが、起自然的なるものとは一体何を指すか。それが超感覚的なるものでないことは明らかである。何故なら彼は感覚的世界の中に合理的なるもの、叡智的なるものを探ね、この条件に於いてのみ科学は実現されると考えるからである。それは又自然が自己を乗り越えんとする傾向のことでもない。蓋し彼は生物の組織の中に目的原因又神の働きを認むべき理由を発見しているからである。さればと言つてそれは又恩寵の觀念でもない。彼にとつて超自然的なるものとは結局悪魔に憑かれた行動及びこの行動の信仰のことである。妖術が流行したルイ十四世時代にこれは甚だ有力なものであつた。(フォントネルはオランダ人 Vau Daleⁱ に依拠しつつ *Histoire des Oracles* を書いた。)

次の道徳及び政治に就いてはフォントネルは余りその性格を説明しているとは言えない。キャレはこのことを *Histoire de l'Académie des Sciences* や *Eloges* や *Du bonheur* も *Fragments posthumes* に依つて述べている。説明的科学のアポロジューはフォントネルを応用科学、従つて功利的道徳 (*l'Eloge de Vauban*) へと導く。そこで彼は彼一流の遣り方で幸福の本性、それと人間の完成、社会進歩、社会秩序、国家の狀態との關係を規定しようとしてはいるが、天文学及び物理学の進歩、科学的説明と超自然的信仰との關係程力をこめて論じ

i Antonius van Dale, 1638-1708 じやうたう。

はしなかった。功利主義と言っても、それは所謂「心理学的快樂主義」なるものとは大分かけ離れており、寧ろ彼はその本性上一時的である快樂を、「人々が渝ることなき持續を望むところの一つの状態、一つの状況たる」幸福に対立せしめる。人間の本性の完成ということはかなり疑わしいと彼は信じているが、然らば社会進歩の意味は何処に見出されるか。進歩の觀念の価値は就中吾々を諸々の伝統への窮屈な顧慮から解放するという点にあるとフォントネルは言っている。人々は当然ここで、フランス思想史上見逃すことの出来ぬ「古代人と近代人との優越に関する論争」(Querelle des anciens et des modernes)を思い起す必要がある。実に彼はこの論争の口火をきつたものと言わねばならぬ。著者キヤレの意見では、右の事情と關聯してフォントネルは種の変性に関する生物進化の理論を既に抱いていた由である。さて技術及び文化の進歩は土地よりも頭脳に影響を及ぼす。そこで自然は墮落するという思想は捨てて、却つてこれに対立する思想、即ち知識が時と共に増大し、継次的諸時代の努力の中にソリダリテがあるという思想をこれに置き換えねばならぬ。これこそ彼の『Histoire de l'Académie des Sciences』の原理的テーマをなすものであり、彼を有名なる「進歩の觀念」(idée de progrès)の流れに立つものとして、チュルゴー・コンドルセー・コントに結びつけるものである。

フォントネルは一体政治を彼の道德的又進歩の理論との關係に於いて如何に考えているか。キヤレはこれに就いて先ず資料を二つに分ける。一は Dialogues des morts 及び Eloges (特に d'Argenson, de Pierre le Grand と de Vauban)、他は République に関する断片である。前者は彼を開化せるデスポティズムの徒として示し、後者は彼をかなり大膽な改革者として示している。

三、最後の問題、即ち彼の哲学とその後の数世紀間のフランス思想との関係如何に就いてキャレの述べるところは、フォントネルの原始人の思惟に関する研究を根拠として彼をフランス社会学の先駆者と考えるレギ・ブリュールの説をその俚採用している。併し元来これだけの理由からフォントネルを社会学の先驅者と見ることはレギ・ブリュールのかなり我田引水的な理屈であり、基礎も薄弱である。彼は社会学にとつて必要の条件たる個人に対する社会的全体の優越の思想を決してはつきりと持つていなかったと言わねばならぬ。歴史を語り、進歩を語つても、フォントネルの場合は結局は人間の本性が最後の原理として持ち出されて来るのではなかったか。

大分長い紹介になつて了つたが、フォントネルに限らず、モンターニュにせよ、ラ・ブリュイエールにせよ、フランスは日本人に知られていない興味深い思想に充されている。この方面へ人々の心を向けることもこの紹介は目指していたのである。

二 『コント書翰』

オーギュスト・コントの思想は例のクロティルド・ド・ゾー夫人の死に依つて二つの時期に分たれるといふのが通説のようである。科学的精神に充ちたその前期は多くの人々に讚美され、宗教的情熱に貫かれたその後期は多くの弟子をもその師から離反せしめたと言われる。一つの魂の動きを最も鋭く伝えるものとして恐らく書翰に勝るものはないであろう。とすれば、昨年アルブース・バステイードが発表した『ブリニエール宛のコント書翰』(Comte, Auguste, *Lettres inédites à C. de Blignières, présentées par Paul Arbousse-Bastide*, J.

Vrin 1932, XXVII + 142, 1 vol. de la Bibliothèque des textes philosophiques) は或る意味で貴重なる資料と言われよう。元来この書翰はコントが晩年の弟子セレステン・ド・ブリニエールへ宛てて書かれたものであり、ドリュイソー (Dr. Druisseau) 氏の所有に属する。

これは何よりも先ず「導きの手紙」(lettres de direction)である。教父又カトリクの聖者が与えるところの「導きの手紙」であつて、単なる教師が生徒に与えたものではない。人々はこれを通して実証主義の精神を窺うことが出来る。実証主義は決して知識の体系化で終るべきものではない。数学の研究は必要である。併しそこにとどまるべきではない。これを超えて、歴史へ、詩歌へ、否魂へと進まねばならぬ。ブリニエールの欠陥は精神的なる乾燥である。愛の啓示を知らざるところにある。かくてコントはこの魂の乾いた弟子に向つて、過ぎし日の心情を日々に追憶し、又礼拝すべをことを熱心に説くのであつた。けれども吾々は又この書翰集に依つて、コントの政治的実践に於ける態度をよりよく知ることが出来る。コントが一方復古主義者と他方プロレタリアートに対して如何に尻ごみしていたか、そして彼が如何に保守的ブルジョワジーの善き友であつたか、がはつきりと語られている。

コント研究者又当時のフランス思想史を研究するものにとつて好箇の資料たるを失わない。

三、ポーランドとチェコスロヴァキヤとに於ける実証主義

最近日本では実証主義の研究が新しい関心を以つて迎えられている様であるが、コズロフスキー【Władysław Mieczysław Kozłowski, 1858-1935】の『ポーランドとチェコスロヴァキヤとに於ける実証主義』

(Kozlowski, W. M., *Le positivisme en Pologne en Tchécoslovaquie. Extrait du Monde slave*, Juin-août 1931) を一寸紹介しておくことは無駄ではあるまい。

著者は、地理的にも隣接しており且つ道徳的又政治的条件から見ても似ているこのスラヴ的な二つの国に於いて実証主義が如何なる泉源から生れているかを明らかにしようとし、併せて実証主義が各国民の精神を如何に覚醒せしめ、教育したかを見ようとする。ポーランドに於いては実証主義は謂わば自発的に、唯ベーコン及びその他のイギリス思想家の影響の下に成立したと著者は言う。これを代表する人々としては次の名が挙げられている。Staszic, Wronski, Śniadecki, Szulc, Krupinski, Limanowski, Świetochowski, Chmielowski, L. Kozłowski, Ochorowicz, Massonius. ロントの影響は後になつて漸次入つて来た。ポーランド実証主義は由來カント主義及びロマンティスムへの反動として起つたと見られる。

チエコスロヴキヤに於いてはコント哲学直系ではないが実証主義者としては Durđik, Masaryk, Krejci が数えられるが、何れもドイツ哲学に反対して生れたものである。併しマサリクは宗教に対する態度及び認識論の必要という点で実証主義的世界観から離れる。

ポーランドに於いても、チエコスロヴキヤに於いても哲学と科学とを結びつけ、政治的行動の方法をここから導き出すために努力が払われてはいるが、その結果は全く異なる。後者にあつてはマサリクの決定的影響の下にこの哲学は国民教育の有力な手段となつており、前者にあつては分割という事実を承認し、古臭い愛国主義を非難するという風になつてゐる。云々。

四、『ロゴス』の「リッケルト記念号」

本年五月二五日満七〇歳に達したハインリヒ・リッケルトのために『ロゴス』は特に「リッケルト記念号」(Ricket-Festsache)を出した。今各論文の内容を紹介する余裕を持ち合わせていないので、とり敢えず、目次を記しておくことにしよう。

巻頭にはイエーナのブルノー・バウフ (Bruno Bauch) が『Goethes geistige Gestalt』を書いており、次に、ユーリウス・ビンデル (Jurius Binder) が『Der autoritäre Staat』なる三五頁に亘る長論文を寄せている。Weltbürgertum und Nationalstaat の著者として有名なマイネッケ (Friedrich Meinecke) は一九三〇年に行った講演をまとめて『Geschichte, Staat und Gegenwart』を書き、シュプランゲル (Eduard Spranger) は『Die Individualität des Gewissens und der Staat』を、言語の研究で令名あるフォスレル (Karl Vossler) は『Puristische und fragmentarische Kunsikritik』を、例のデルフリン (Heinrich Wölfflin) はお得意の『Kunstgeschichtliche Grundbegriffe』を書いてゐる。謂わば編輯者協働者総動員でリッケルトのために祝つてゐるようである。論ぜられてゐる問題も夫々の独壇場である故、読んでも無駄はないと思われる。

五、ワイスバッハ『一七世紀フランス絵画史』(芸術社会学的一著作)

最近芸術の發展を所謂「芸術社会学的」に研究するという方法が屢々とられてゐるが、昨年公にされたエルネル・ワイスバッハ【Werner Weisbach, 1873-1953】の書は絵画の方面に於けるこの種の研究の圧巻と見らるべきものである。Weisbach, W., Französische Malerei des XVII. Jahrhunderts im Rahmen von Kultur und Gesellschaft,

Berlin 1932, Heinrich Keller, 381 S. (140 Abbildungen, 33 Tafeln). 以下簡単ながらその叙述を辿つて見ようと思う。

「芸術は生活上の出来事であり、生活目的に依つて規定されている」とグイスバッハはその首めに言う。一般に芸術家は自分のために創作するのではなく、寧ろ他人のために創作する。彼と他人、即ち注文する人、買手、公衆との関係は芸術の発展にとって重大な意義を負わされている。「芸術は注文される」と言うことが出来る。ところで注文する人は芸術家から何を期待するか。芸術家は如何なる程度で公衆に影響を及ぼすか。両者は如何なる程度に於いて時代的影響を蒙るか。芸術的見地に立つ创作者と非芸術的觀念に導かれる公衆との間の矛盾は如何なる程度のものか。芸術家はかかる非芸術的モチーフを如何なる程度まで芸術的価値に転化し得るか。グイスバッハが答えようとする問題は右の如きものである。一七世紀フランス絵画史というテーマに対して、著者は勿論形式の内在的論理を基礎とせず、社会的変化の過程を基礎として、近づくて行くのである。

絵画に於ける変化は社会に於ける変化の標徴である。画家の異なるに従つてその絵を買う公衆も違う。一定の社会層は芸術発展の行程に対して一定の影響を与える。ル・ネン (Le Nain) 兄弟の芸術は「市民的芸術」である。彼等の絵の買手はプチ・ブルジョワであつた。ルイ・ル・ネンは「国民的フランスの農民絵画」の創始者である。「彼は決して単純なる人々をその滑稽な、凡庸な側面に於いて捉えなかつた。彼はカリカチュアを描こうとしなかつた。」この点で未だフランスの市民階級が「国民」から分化せず、はつきりした階級意識を持つておらぬことが理解せられる。都市住民は農民から自己を区別せず、唯「国民」としてとどまつていたのである。ルイ・ル・ネンは「農民を市民化した。」一七世紀のフランスは絶対主義の下にあつた。

オランダに於けるが如き市民階級の勢力、従つて市民的絵画の勃興は見られなかった。古き世界と新しき世界との一種の勢力の均衡の上に立つこの社会では、すべては「太陽としての王」及びこれを繞る貴族を中心とする。manière ordinaire, gothique et barbare に対立する manière noble——これこそ當時の社会に要求されたものであり、そしてこの要求を充したのがプッセン (Poussin [Nicolas - 1594-1665]) の絵であつた。「古典的精神」はここに花を開いた。それは又一般に倫理的、教育的なるものを含む。プッセンは彼の芸術に依つて意識的に教化的課題を果そうと心掛けた。こうした態度はフランス芸術の中を今日まで流れており、社会に於ける芸術の品位と勢力とを人々に知らしめたものであると言えよう。とは言え、プッセンは芸術の独立的意義を確保しようとした。彼は「宮廷画家」たるに甘んじはしなかった。彼の顧客は主に裕福なアマチュアであつた。芸術の独自性は公衆にも認められた。併しながらルイ一四世が芸術に組織的、政治的任務もはつきりと与えようと努力するに到つて「王を光榮あらしめる芸術」としてのル・ブラン (Le Brun) がプッセンを押しつけねばならなかつた。

ルイ一四世はル・ブランを以つて、芸術的創作を統一的目的に則つて統制する術を心得た偉大なる組織者であると考えた。王のこの期待はついにコルベールをして、その後の芸術生活を支配した Académie de Peinture et de Sculpture を建設せしめた。自由なる芸術家はかくして芸術官となり、王権の命ずる公の任務を果さねばならぬ。ル・ブランはこの任務に極めて忠実であつた。コルベールの立てたマニユファクチュアは一切の物質的生産に従つた。そして右のアカデミーは一切の芸術的生産に従つた。芸術の領域に於ける素晴らしい統一は——そして二度と不可能な統一は——ここに齎されたのである。けれどもそこには当然一つの葛

藤が起らざるを得ない。即ち特に造型芸術に於いては一方芸術家の個人的な傾向又要求と他方彼に与えられた任務の命ずる方針との間に葛藤が起らざるを得ない。画家が自分のために、又知己のためにこつそりと描いた小さなスケッチは、彼がそれで鬱を晴らしていたことを物語っている。素よりこうしたスケッチなどは「サロンに合わぬ」ものであった。

併し又他面に於いて宗教も亦芸術に「注文した」。茲では宗教のために描いたジャン・ジャック・オリエ (Jean-Jacques Olier 【1608-57】) が代表者である。皮肉なことに画家自身の宗教的信仰は却つてその力を失い、彼は唯注文を発する人々の望みに従つて「敬虔な絵」をものするに過ぎない。(尚この問題に関しては次の二書を挙げる) ことが出来る。Bremonde, Histoire littéraire du sentiment religieux en France, — Flachaire, Dévotion à Marie dans la littérature catholique au Commencement du XVII^e siècle.)

更に興味のあるのは当時の肖像画の流行である。noblese de robe はその肖像画家をフィリップ・ド・シャンパーニュ (Philippe de Champaigne 【1602-74】) の中に見た。趣味は社会の上層から押しつけられる。「偉大なる趣味」は人格の芸術的高昇に依る、卑俗なる又自然的なるものの後退を要求する。そしてこの要求はリゴー (Rigaud 【Hyacinthe -, 1659-1743】) に依つて充された。リゴーはすべての王侯のために肖像画も描いた。それは肖像画一般の模範とされた。

以上その大綱を紹介したズルネル・ブイスバッハの著者は芸術の社会学的研究に於いて一つの規準的なものを示していると思われる。

追記 本誌前号の本欄、ホエフディングに就いての項目（二一五頁）に同氏がまだ存命中のように書かれてありますが、同氏は一九三一年七月七日に死んでいるにつき、その点正誤しておきます。（編輯者）

海外哲学思潮 1933.9

一、マルセル・ブルーストの心理学 二、ポール・ロワイヤールの外国人と滞在者 三、宗教及び
道徳に二つの源泉ありや（ベルクソン批判） 四、啓蒙の哲学

一 マルセル・ブルーストの心理学

イタリア人アドリアーノ・ティルゲルの「マルセル・ブルーストの美学」を紹介したのは本誌第一三二号【1933.5】の本欄に於いてであった。ティルゲルはブルーストの芸術論の中にプロティノス的なもの、ベルクソンのなるもの、ブルースト的なものを区別して論じた。ところで吾々は「マルセル・ブルーストの心理学」に関するシャルル・ブロンデル【Charles Blondel, 1876-1939】の近著をハツに一瞥しようと思う。(Blondel, C., *La psychologie de Marcel Proust*, J. Vrin, Paris 1932, XVII+191 p.) 著者ブロンデルはストラスブールの教授であり、既に次のような著述がある。1) *Les auto-multilaturs*, Rousset, Paris 1906. --2) *La psycho-physiologie de Gall*, Alcan, Paris 1914. --3) *La conscience morbide*, Alcan, Paris 1914. --4) *La psychoanalyse* 【Psychanalyse】, Alcan, Paris 1924. --5) *Les volitions, la personnalité*, in *Traité de psychologie*, par Georges Dumas, Tome II, Alcan, Paris 1924. --6) *La mentalité primitive*, Stock, Paris 1926. --7) *Introduction à la psychologie collective*, Collection Armand Colin, Paris 1928.

ブロンデルは、ブルーストが魂の画家であり、モネがその分野に於いて偉大である如く、ブルーストも亦

この分野に於いて真に偉大であることを認める。そしてこれを認めることは、彼の業績が、その美的価値から一応独立に、吾々をして精神生活をよりよく理解させ、心理学者の経験を豊富ならしめることが出来るということを語るものである。ブルーストは、疑いもなく、学者ではない。心理学の理論家でもない。彼は実に芸術家であり、「心理記述者」である。彼の芸術、彼の表現方法は精神生活の法則及び発展に關して独自の見方を支えている。かくして著者が最も真にして且つ最も人の心を動かすものと考えているこの内的世界の見方を明らかにするためには、*A la recherche du temps perdu* を心理学者として読むことが出来る。ブロンデルの仕事はここに始まる。

ブルーストの偉大なる発見はたくらまぬ自然の回想の価値を明らかにしたところにある。知的、意識的な記憶は劃一的であり、便宜的である。その本質的役割から見れば、実践的であり、過去に向うよりも却つて将来を目指すものであると言える。功利的なるこの記憶は当初の印象を裏切るものであると共に、その形を崩すものである。若しも實在が記憶に於いてのみ形成され、又若しも知的記憶が過去の姿を量し、毀つものであるならば、吾々は意識せざる回想に依つての外、即ち同一の感覚を介して過去に復帰することに依つての外、抑々如何にして吾々の生命に触れることが出来るであらうか。

このような回想は稀に且つ自然に起るものである。だがこのことは、若し吾々が吾々の中にある實在を再発見する方法に就いてこの回想が知らせるところの指示を念頭に置くならば、それは決して真実なるものを探究する上に於いて障礙となるものではない。過ぎ去れる束の間の印象を深めることに依り、その深点に徹することに依り、陰画をくり拡げる叡智に手を加えることに依り、精神生活の秘密は漸次吾々の眼の前に現

れて来る。吾々自身であるところのこの過去は主観的であり、異質的である。即ちそれは「差異の世界」である。而もここに於いてこそ吾々は事物の本質を見、又過去の感覚と現前の感覚との感情的同一性の中にある一切の主観的な本質を見、更に芸術の機微に依つて示されるところの主観的普遍性を見るのである。ブルンデルの語るところに依れば、精神的世界の極端なる異質性は普遍的なるもの及び法則的なものを決して排除するものではない。反覆は一般的観象である。精神的、肉体的なる遺伝的類似、環境の影響、他人又自己の模倣、これ等は凡べて反覆と普遍性との根源である。素より反覆は決して全面的なものではなく、諸の影響の交錯、組合わせ、対立から差異が生じて来る。時の流れの中に革命を完成するこの精神的宇宙は物的宇宙と同じく、一つの世界をなすものである。

ブルーストの心理学は無意識の心理学である。生きそして活かす無意識者の心理学である。ブルンデルはブルーストをベルクソン及びフロイトに対決せしめる。確かにブルーストはベルクソンと一致する点を持つてゐる。併し根本的に見て、ブルーストの事業の精神は決してベルクソンのものではない。『直接所与』の著者に於ける精神的又道徳的価値に対する顧慮はブルーストにとつて全く縁なきものである。他方彼はベルクソンのならぬ以上にフロイト的でない。フロイトとの間に見える類似は凡べて偶然の一致に依るものであつて、決して影響の問題ではない。

心理学者ブルンデルのブルースト研究は多数の著作からの正確なる引用に基づいており、幾多のブルースト研究文献中注目すべきものであり、真面目な研究者にとつて参看さるべきものの一つであると言えよう。

二 ポール・ロワイヤールの外国人と滞在者

パスカルをしてプロヴンシャル【Les Provinciales】を書かしめ、アルノー又ニコールの活動の舞台であったところの、そしてジェスイト教団との闘争の中に散ったポール・ロワイヤールは、特にフランスの精神史に与えた影響の点で断じて看過することを許されぬものであることは言うまでもない。フランス外に於けるジャンセニスムの影響はヨーロッパに於いてここ数年間多くの人々に依つて研究され、一七・一八世紀に於ける宗教的観念の動きと分化との解明は漸次実現されつつある。オランダ、イスパニヤ、イタリア、ドイツは夫々ジャンセニスムの歴史の研究に貢献すべきものを齎した。然るに最近イギリスもクラーク女史の『ポール・ロワイヤールの外国人と滞在者』に依つてこの研究の進歩のため一つの寄与をなしたのである。(Clark, R. [Ruth--, 不詳], *Strangers and Sojourners at Port-Royal*, Cambridge, University Press, 1932., 360 p.)

彼女がこの書で果そうとする課題はフランス及びオランダのジャンセニストとイギリスとの関係の跡づけにある。報告の基礎となるべき根本的資料は次のものから得られている。極めて豊富なるフランスの文獻、イギリスの立証材料、書簡、覚書、ジャンセニストの著作の翻訳、フランス、オランダ、イギリスの三王室に於けるカトリシスム関係の記録。

一般にイギリスのプロテスタンティスムは、反ロマニスム又反ジェスイティスムを特徴とする運動に対してかなりの同情を以つて臨んでおった。プロヴンシャルの英訳はイギリスに於いて大いに歓迎され、オルデンバラ、キリアムスン、ロックは事件の成行を異常な興味を以つて見ていたし、ゲイルはジャンセニストを目して「ローマ教徒中最上の人々」となした。ところがイギリスのカトリク少数派の人々は、勿論自己の

存在の危険に瀕しているからであるが、セン・シラン又その徒の影響を少しも受け容れようとはしなかった。兎に角、このようにしてイギリスとポール・ロワイヤールとの間には色々な関係が生れて来た。イギリス生れの人でポール・ロワイヤールにとどまっているものの数は相当あった。エリザベス・ハミルトンの両親、後のグラumont夫人の如きはその有名なものである。カルキチのベネディクト派はフランスに遁れて、ポール・ロワイヤールの保護を受けていた。等々。

クラーク女史はこうした歴史の薄片を丹念に集めている。彼女の本は好奇心を唆る小事実に豊富であるが、宗教上の諸概念又諸教理の根本に到つては余り明確であるとは言われない。ポール・ロワイヤールのこの友は哲学者でもなく、神学者でもないらしい。とは言え、彼女はジャンセニスムの歴史の微妙な一面に対して新しい光を投げるものには相違ないし、又この点に於いてセント・ブーヴ又ギャジェの所論を訂正せしめるものを含んでいることも事実である。ビブリオグラフィー及び綿密なインデクスは挿画、肖像と相俟つて研究者を益するものであることは疑いない。

尚ポール・ロワイヤールに関して、吾々は落合太郎氏【1886-1969】の名篇「ポール＝ロワイヤール運動」（岩波講座『世界思潮』所収）を恵まれていることを附記する必要がある。

三 宗教及び道德に二つの源泉ありや（ベルクソン批判）

道德と宗教とに於ける二つの源泉を説くベルクソンの新著 (Bergson, H., *Les deux sources de la morale et de la religion*, Alcan, Paris 1932, 364 p.) は本誌一三三号【1933.6】に紹介しておいた。ベルクソンが社会的なる

問題に近づいて行く場合、彼は決してその哲学的見解を現実に対して機械的に押しつけるような遣口はとらず、寧ろ率直に現実にあつて行くという態度をとるのであった。だがそのことはベルクソンが何処までも哲学者として道徳又宗教の起源の問題に向つて行くことを妨げるものではなかった。哲学者が取り上げた問題を歴史家が取り上げる時、そこには如何なる差異又対立が生れるであらうか。今年になつてから公刊されたロワジ【*Alfred Firmin Loisy, 1857-1940*】の『宗教及び道徳に二つの源泉ありや』(Loisy, A., *Y a-t-il deux sources de la religion et de la morale ?* Noury, Paris 1933, 204 p.) はベルクソン批判として恰もこの間の事情を語るものである。而もロワジが原始キリスト教研究の第一人者と目されている以上、この書は吾々の興味を惹くものでなければなるまい。

ロワジの著書は既にその標題に依つて彼の意図と結論とを十分に語っている。彼の問題とするところは、ベルクソンの新著に展開されている見解がベルクソンの体系の論理に調和するか否かという兎角人の取り上げたがる点ではなくで、却つて体系が人間的現実と矛盾しないかどうかという点である。つまり、宗教と道徳との二つの源泉の区別、即ち社会的本能と神秘的直観との区別はベルクソンの考える程ラディカルなものであるか、又一種の神秘的直観が人類の宗教的又道徳的進化の底に横たわっていないだろうかという問題がロワジの論じようとするものである。そこで彼が第一章に於いて述べるところに依れば、原始的なる宗教上又道徳上の禁示は決してベルクソンの言うように社会的本能などから生ずるものでない。プレシオンもアスピラシオンも、スタティクもダイナミクも共に凡ゆる時代にあるものである。従つてこう言われねばならぬ。「根本に於いては、道徳及び宗教には唯一つの源泉あるのみである。即ち、人間又事物に対する或る種

の尊敬を吹き込み、行動の準則及び宗教上の行為を規定するところの神秘的なる感覚があるのみである。」

ベルクソンが示そうとする「キリスト教の超越性」及び彼の神秘主義の解釈は余りにも狭く、且つ余りにも恣意的である。(第二章)さてロワジは歴史家の權威を以て語る。「實際、歴史家の眼から見れば、動的宗教は靜的宗教から出ている。それは自然的に、漸次的に出て来るものであつて、唐突な飛躍や、それに先立つ一切のものに対する突然の爆發に依つてではない。」キリスト教自身ユダヤ教の上に立つており、その根柢に到つては全くユダヤ教的なるを見よ。歴史家がそこに認める神秘主義はベルクソンが神秘主義だと規定するものと似ても似つかぬものである。同様に魔術と宗教とは決して平行的にあるものでない。(第三章)彼は言う。「若し呪術の中に祈祷があるならば、祈祷の中に呪術の存することを確説するのも困難ではない。」両者は共に最初は一定方式に基づく言葉自身の持つ力に対する信仰である。又犠牲は当初或る神に対する奉仕とか、供物とかではなくて、実に魔術的魅力を持つ一つの祭儀であつた。「未開人の魔術的祭儀と記念的犠牲との間には、宗教史家にとつて何等連續を中断するものは存在しない。」或る宗教から他の宗教への轉化にとつてと同じく、遺徳にとつても同一の漸次的進化があるだけである。(第四章、第五章)「ベルクソンの純粹神秘主義なるものは宗教ではない。唯或る人々の特權としか思われない。……一切のものに対する彼等の見方、彼等の直観は彼等の以前の信仰及びその歴史的環境の信念に依つて準備され、制約されている。」「彼等が本當に神秘的となるに従つて、ベルクソンが純粹神秘主義の代表者として吾々に示す人々は与えられたる宗教の擁護者となるであらう。」

ベルクソンが哲學者として語る時、ロワジは宗教史家として語る。ベルクソンが二元性と對立とを見出し

たところに、ロワジは統一を見出す。そしてその統一は神秘的なる感覚に於いて与えられる。宗教と道徳とは唯一の源泉をこの神秘的なる感覚の中に持つ。ロワジはベルクソン批判を引き受けた。恐らく吾々はベルクソンーロワジ批判を引き受けねばならぬであろう。

四 啓蒙の哲学

善く言えば多産的哲学者であり、悪く言えばブックメイカーであるカッシーレルは去年『啓蒙の哲学』ⁱ (Casirer, E., Die Philosophie der Aufklärung, Mohr, Tübingen 1932, 491 S.)を出した。温故知新という言葉が今日何か意味を持つとすれば、新しき時代が温めるべき故きものは正に啓蒙の世紀でなければならぬ。カッシーレルは古い著書でも一八世紀を論じているが、ここではこれを特に啓蒙の哲学として組織的に述べようと試みている訳である。啓蒙の哲学の特徴は一体何処にあるだろうか。

論議又分析は遠慮会釈なく一切の対象、芸術、道徳、形而上学、政治、法律に向けられている。人類は理性に依る進歩に対する堅き信念を以つて自己を研究の中核と考えている。ニュートンが物理的世界の研究に用いた手続の普遍化に基づく体系的精神は体系の精神に対立する。自然科学の進歩はこの手続に多くのものを負っている。精神的諸事実の一種の平等化。ライプニツの影響。——これが啓蒙の哲学の特徴である。ところで著者はこの哲学を六つの部面に分けて論じる。吾々も亦これに従う外はない。

一、自然の理論。右の諸特徴は先ず自然認識に現れる。自然は、精神が依つて以つて自己認識に到達する

i 以下特に触れられていないが、七月号の二で取り上げられたばかりである。

ための一つの媒介に外ならない。一八世紀はルネサンスの自然主義、就中自然がひどく貶しめられた位置にあった實在の身分的秩序に関する中世的思想を捨て去ったブルーノの自然主義を採用した。ビュッフォンは何等宗教的ドグマに頼ることなしに世界の自然史を書いた。他方この世紀は事物の本質の探究から去つてニュートンの「数学的経験論」に到達した。そしてこのものはヒュームの「懷疑的経験論」をその必然的帰結として持つ。「自然の斉一性の確信は一種の信仰に基づくかざるを得ない」のであるが、この信仰は一切の絶対的基礎を抜きにしているからして当然純粹に心理学的なる理性に頼らねばならない。そして最後に物理的決定論への信念は人間の自然を抛り所とせねばならない。一八世紀唯物論は事物の本質の記述と言うよりも、寧ろ吾々の行動を必然性に従わせんがために必然性の理解を要求するところの命令であると言われよう。

二、心理学。カッシーレルは啓蒙の心理学の中に全く性質を異にする二つの流れを区別する。一は即ちバークリの視覚論から出発するものであつて、空間知覚に於ける視覚と触覚との間に横たわる恣意的關係がそこから結論され、更に一般的に見て、各感官は夫々固有の世界を持ち、凡べての世界を掴むには經驗的にやるの外はなく、これ等を公分母とでも言わなければならないものに還元するのは当を得ていないという帰結が生じる。「啓蒙の哲学は倦むことなくかかる相対性を抛りどころとしている。」併し又他方能力の多様性中に於ける精神の固有の活動力を信じて疑わなかつたライブニツから発するところの純粹にドイツ的な流れがある。従つて心理学的事實の記述と分類とを以つて學問の生命なりと見ず、唯客觀的精神の理論の序説と考えるテースはバークリ又ヒュームに対立する。

三、宗教。ブルテール及びアンシクロペディストが宗教を敵として戦いはしたものの、一八世紀は決して無宗教の世紀とは言われない。この世紀は新しい信仰の理想を持っており、宗教のために新しい形式を求めてやまなかった。カッシーレルは特にドイツのことを考えている。そこに発展した思想はキリスト教的原罪の觀念と到底調和し得なかった。ルネサンスの精神は一八世紀の先驅者に依つて展開され、オランダのアルミニヤンと闘つたグローティウスに於いて、イギリスのピューリタンの敵たるカドワースに於いて、アウグスティヌスに抵抗するドイツ神学者に於いて發展した。自然科学から始まつて、道徳また政治の學問に到る一切の科學の還俗が始まる。一切のものに対する寛容が要求される。イギリスの理神論はこの点に於いて大きな力を持つていた。ところが又推理に基づく理神論に対立するものとして經驗がある。ヒュームは理神論が何等の經驗にも基礎を持たぬという点を指摘して、これを破壊しようとした。ドイツではレッシンクに依つて、實証的宗教の歴史的進化的知識に信仰の基礎を決めるところの全く新しい合理的宗教が建設される。「宗教の歴史的諸形態を残さず取り入れるところの絶対的宗教」である。

四、歴史。一八世紀は歴史を知らぬ世紀だと言われる。カッシーレルに依れば、これは全く『fable convenue』である。Dictionnaire の著者ピエール・ベイルは當時の思想の中に批判的、歴史的方法を導き入れたのではなかったか。彼は「普遍史」の理念に到達したのではなかったか。フォントネルは余り顧みられていないが、モンテスキューは歴史的類型の觀念を創造した人として、歴史哲學という言葉の創作者ブルテールはベイルの企図を實現したものととして重要視される。ブルテールは人間的自然の不變を固執した。併し他方歴史的生成に於ける非連続性を主張する觀念、人間的自然の進歩の觀念はヒューム以後漸次その勢力を増大し、かく

てヘルデルに到つて歴史の形而上学が建設されることとなる。

五、政治、法律。正義の中にプラトンの本質の姿を見るグローティウスはカッシーレルに依つて重要な意義を附与せられる。一切の法律を神の権力の中に置くカルギンの政治論に対する一六・一七世紀の反対者は凡べてエラスムス的人本主義の側に立つグローティウスの流れを継ぐものであり、一般に、啓蒙の哲学者達はグローティウスの「法律的先天的主義」の息がかかつていると言わねばならぬ。グローティウスが自然権運動の先頭に立つとき、ホッブスは社会成立の問題の唯一可能なる論理的解決法としての契約理論を以つて現れる。完全に孤立した個人が社会を形成するという問題は契約という觀念を俟つて始めて解決される。このホッブスの契約説から恣意的なるもの、暴力的なるものを排除したのがルソーの契約説である。

六、美学。カッシーレルは本書の最後の章を美学のために割いている。感性及び趣味性の中に知識に還元し得ぬ独自のものを発見した世紀は同時にこの趣味性に関する知識を求める。理性に対して一つの限界を設ける世紀はこの限界に対する知識を求める。こうした新しい美の理論は後にカントに依つて更に基礎づけられ、ゲーテに依つて実現されたところの芸術の新形態の母である。ところがフランスに於いては美学は常に当代芸術の批判と結びついてのみ現れる。物理学がデカルトからニュートンへ、合理的演繹から事実の組織化へ進んだように、美学はボワローの古典主義から芸術作品の直接の記述に向う。ここからして、趣味は演繹されず、又論証されぬという美的規範が生れて来る。このようにして美学は漸次直覚本位となり、天才の制作以外の規準を求めぬこととなる。批判に対して一種の創造的な意味を見出したのは何よりも先ずレッシングであつた。彼の思想の魔術は概念を変じて「本源的且つ創造的な力の單純なる結果」たらしめた。

彼の批判は「制作の内在的契機」であり、これに依つて芸術をその生成に於いて捕えることが可能となる。

大分冗漫に流れて了つたが、カッシーレルの著書の輪廓は大略以上の如くである。哲学者にとつて哲学をイデオロギーとして見ることは哲学の權威のために禁じられている。この制限は現代の著書の最も重要視すべき啓蒙の哲学を全く平板にしか論じさせていない。そこではイギリス、フランス、ドイツの一八世紀哲学が同列に取扱われている。併し一八世紀がフランスに依つて代表され、而も他の二ヶ国との間に立体的な必然的關係が横たわっている所以は、哲学をイデオロギーとして見ぬところに於いては把握され得ない。宗教批判に飾られる一八世紀が何故無宗教の世紀たり得なかつたか。ベイルが普遍史の觀念を導き入れながら尚一八世紀が「歴史を知らぬ世紀」と呼ばれねばならぬ理由は何処にあるか。ホッブスの契約説は何故ルソー的契約説にまで転化せねばならなかつたか。等々。吾々はカッシーレルに訊ね、詰問せねばならぬ多くのものを持つている。現代のブルジョワ哲学者が如何に一八世紀を取扱うか。如何にその革命性を抹殺するか。従つて如何に取扱い得ないか。こういう問題に就いてこの書は確実な証人として立つてあらう。

海外哲学思潮 1933.10

一 ベルクソン主義の近況（ル・ロワ、シュブリエ）。二、言語の問題（シュミット・ロール、フィーゼル）。三、初期のフツセルに於いて（イレマン）。

一 ベルクソン主義の近況

ベルクソン主義の陣営の人ル・ロワはベルクソンの形而上学的直覚主義の基礎づけと発展とのために、最近数年間コレ・ジュ・ド・フランスで行った講義を材料として一書を公にした。Le Roy, Edouard 【1870-1954】, *La Pensée intuitive, I. Au delà du Discours*, Boivin & Cie, Paris 1929, VII+205 p. がそれである。

ル・ロワに於いて直覚的思惟というのは形而上学的思惟又直接的なるものの思惟と同義である。認識は「生けるもの」に關係する時、直接的認識である。經驗の意味に於いてでなく、形而上学的意味に於いて直接的なるものは本当の出発点であり、絶対に真なる源泉であり、絶対に真なる内容であり、事実上は兎に角として権利上は根源的なる思惟作用である。だが純粹に直接的なるものは与えられてゐるのではなく、却つてそうなるものであり、これに立ち歸ることは「思弁的思惟の事實的なる生への転化」である。形而上学的に見て直接的なるものは勿論心理学的には最後のものであると言われねばならず、それ故丹念に尋究されて初めて明らかとなるものである。この直接的なるものへ立ち歸ることは直覚作用の第一段階を形造る。ところでル・ロワにとつて直覚は綜合的たると同時に直接的、單純たると同時に無限なる認識の謂であつて、こ

の認識こそは現前の生ける対象の姿を惜しみなく顕わにするものである。更に又直覚は純粹且つ完全なる意識の形式に於いて現れるところの認識である。それは回顧的でなく、展望的である。併しながら若しも直覚を以つて叡智の外に立つ洞見となすならば誤りである。それは寧ろ超論理的な、起思弁的な思惟作用とされねばならず、従つて超叡智的と規定さるべきである。かくてル・ロワは率直に言う。L'intuition est pensée: 直覚の対立物は知見ではなくて、思弁的な思惟である。直覚は Discours の此岸にあるのではなくて、却つて彼岸にある (au delà du Discours)。それは勇氣である。愛である。かくしてそれは又ミスティクと結びつかねばならぬ。

以上の如く、第一巻に於いてベルクソンの意味に於ける直覚を思惟の超論理的、超思弁的作用として特徴づけることに努めたル・ロワは更にその第二巻 (La Pensée intuitive, II: Invention et Vérification, 1930, 296 p.) に於いて第一巻に展開せられた諸原理の理論的及び実践的諸帰結を、就中発明と検証とを中心として論じ、これに依つて科学的、芸術的研究及び絶対的認識の獲得のための手引を与えようとしている。

ル・ロワにとつては発明も亦一つの直覚的思惟に外ならない。即ち発明は把握し得ざるものの中に於いて、矛盾に充てるものの中に於いて行われるのが常であり、この故に凡ゆる領域に於いて発明家は一切を破壊する革命家として現れるのが常である。発明も亦静的でなく、動的であり、論理的でなく、超論理的である。とは言え、如何なる発明と雖も深い科学的又技術的準備なくしては成立し得ない。一切の創造は凡ゆる伝統的な固定せる概念からの解放と共に、直接的なるものに溯ることを前提せねばならぬ。発明は無意識の中から生れて来ると言い得る。リボーがこれを Fantaisie créatrice 名づけたのは故なきことではない。元来発明の

行程なるものは「原理から事実への歩み」であり、觀念からドキュマンへの、目的から手段への、全体から部分への道である。

然らば次に検証の規範は何処に見出されねばならぬか。ル・ロワは先ずスケプティスムと独断的なレアリスムとを排斥する。彼はカントを批判するものの、彼の批判主義的精神はカントと堅く結びついていると見ねばならぬ。真とは何であるか。著者に依れば、それは精神の諸要求に由来するものの名である。経験の任務は伝来の原理を適用することにあるのではなくて、正に新しき原理を形成するにある。若しも現存諸範疇の克服を抜きにするならば、抑々科学の進歩は何処に求められるであろうか。理性は常に生成の裡にあり、真理は生と共に發展してやまざる創造である。真理を占有するということは実に「真理に依つて生きる」とでなければならぬ。この限りに於いて発明と検証との密接な關係が考えられる。直覺的思惟のみが完全なる真理及び絶対的認識の能力を持つものである。現実は何等比較され得べきものを含まぬ時に於いて絶対的となることが許される。一切の相対的なものは絶対的なものを含み、必然的なものの中にも偶然的なるものが見出される。吾々は絶対的なものに溯ることに依つて利己的個別化から脱れて、直覺的共同体に進み得る。結局凡ゆるものは神の中にのみその完成を期待することが出来る。

この場所でジャック・シュブリエの近著をも紹介しておこう (Chevalier, Jaques 【1882-1962】、L'Habitude. Essai de métaphysique scientifique, Boivin, Paris 1929, XV+252 p)。

この書はメーヌ・ド・ビランに始まり、ラズソソ、ブートルー、ベルクソン、ル・ロワを貫いて流れる

形而上学的、唯心論的実証主義に対する一つの重大なる寄与であると言えよう。著者は人も知るベルクソンの徒であり、最も重要な生物学的事実に対するその師の見解の意義を顕揚しようとするものである。サブタイルは彼の意図の奈辺に存するかを明らかに物語っている。彼は一方習慣の問題を論ずる場合に於ける形而上学の必然性をはつきり確信しながらも、他方それは自然科学の所与と密接な關係に立っている形而上学のみ妥当するものと考えているらしい。この点に於いて習慣の問題は正しく「特権的問題」でなければならぬ。蓋しこの問題は精密科学の諸結果に対して自己の存在を解明することが出来ると共に、又絶対的なものへの道を拓き得るからである。

若しも人間に於いて習慣のメカニズムが一つの精神的な力から生れ、そしてこの力が右のメカニズムを役に立たせ、それに意味を与えるものであるとするならば、又「自然は自己を真似る」とするならば、宇宙自らが創造的な、より高い力から来ているものと言われねばなるまい。この点こそシュブリエとアリストテレスからラズツソン及びその徒に到る「習慣の理論家」とを区別する所以であるが、彼は習慣が啻に生物に属するものではなくて、実に無機的世界のものでもあることを主張する。生命なき物質と雖も凡ゆる状態を通じて過去の遺産を相続している。こうした先行状態の存続ということは変化に対する抵抗に依つて表現せられる。併しながらシュブリエは例えばラマルキシズムのように習慣に対して進化過程に於ける誇張せられたる役割を帰する態度を排斥してやまない。外的諸影響及びこれから生れる習慣は変改的ではあるが、決して創造的でない。現存の諸類型の間に差異を生ぜしめはするものの、断じて新しい類型を成立せしめ得るものではない。生物の本性はその習慣の結果と見ることは出来ない。寧ろ生命はその凡ゆる世代に於いて習

慣から解放され、これに依つて初めて自己の本性を発見することが出来るということをクルーノーと共に主張せねばならぬであらう。素質の遺伝はあるが、獲得した習慣の遺伝はあり得ない。人間の発展は獲得した習慣から起るのではなくて、教育から起るのである。人類の進歩の根源は習慣にあるのではなくて、寧ろ記憶にあると言ふべきである。習慣は人間にあつては精神の道具であり、それが道具であればある程創造的であり、解放的であり、反対の場合には単なるメカニズムであり、病的なる形態である。習慣の解明は情力を變じて進歩又解放の具たらしめる役割を果すものである。習慣は経験の助けをかりて直覚を用意し、これを保存し、忘却から救済する。習慣は意志の霧である。人間はこれを通じて自己の本性に帰り、自由の障礙を變じて解放の道具と化するのである。

二 言語の問題

言語の問題は由來民族の問題と結びついて現れるのが定例である。現代も亦言語を問題すべき時であるように見える。シュミット・ロール【1890-1945】の著書（Schmidt-Rohr, Georg, Die Sprache als Bildnerin der Völker. Eine Wesens- und Lebenskunde der Volkstümer, Eugen Diederichs, Jena 1932, 418 S.）もこの意味で言語を論じている。

この書は凡ゆるドイツ人をして、ドイツ語がドイツ民族にとつて如何なる意義を持つてゐるかをはっきりと意識させようとするものであり、この意義を知ることによつて、絶えず自國語を捨てるといふ危険に瀕している外国及び辺境地方のドイツ人が敢然としてドイツ語を守るべく決意することを切望してゐるのであ

る。この本は右のような民族政策的目標に向うものではあるが、その内容はそう粗雑なものではなくて、認識論も、論理学も、言語哲学も一応は自家薬籠中のものとなっており、本書はそれに依つて相当堅固な基礎と広い視野とを与えられている。

本書の根本主張は何も新しいものではなく、民族の精神的特殊性は言語の特殊性から来るというフイヒテやギルヘルム・フォン・フンボルトに見られる見解と同じであるが、唯従来は単なる主張にのみとどまつていたこの見解を立証した点にシュミット・ロールの新しが見える、特殊な言語は特殊な精神的態度を創造するということを語るに先立つて、著者は一般に思惟過程に於ける言語の役割如何、言語と思惟との關係如何という認識論及び論理学の古典的な問題を相当突き込んで論じている。

言語全体、命題、判断に於ける諸概念相互の機能的諸關係の闡明はこの本の核心的部分をなすものと思われるが、この点に於いて著者が最近の諸文献の上に出でている所以は、彼が言語の問題を「余りに言語学的に」取扱つていないところにある。言語とは何か、と彼は尋ねはしない。却つて動的、生物学的、社会的見方に於いて、言語は何をなすか、と彼は尋ねる。人間は語り又判断するに先立つて、言語又言語集団が彼の中に生きている、と著者は言っている。

命題は二つの見地に於いて考えられる。第一に Satz an sich として、第二に Satz für sich として。そしてシュミット・ロールは、Satz an sich を理解するに當つて Satz für sich が創造的補充として如何なる役割を果すか。命題に於ける概念の数又種類の異なるに従つてこの補充は如何なる活動領域を持つてであろうか。これ等の問題に著者は答えようとするのである。

次に少し古いがフィーゼル女史の『ドイツ・ロマンティクの言語哲学』を紹介しつゝ(Fiesel, Eva【1891-1937】. *Die Sprachphilosophie der deutschen Romantik*, J. C. B. Mohr, Tübingen 1927, 259 S.).

一般に言語哲学の歴史に関する文献は頗る貧弱である。それ故ドイツ・ロマンティクの言語哲学に関するフィーゼル女史の相当大部な著書に対しては大いに感謝せねばならない。文献に精しく、言語の本質に関する綿密な理解を持ち合わせている彼女は頗る巧みにその対象の輪廓を描き出している。先験的な初期ロマンティクから、シェリングの同一哲学の影響下に立つオルガノロギー的ロマンティクを越えて、ロマンティクの言語哲学の経験的言語学への解消に及ぶ歴史的発展を辿っていることは特に本書の価値を増大していると思われる。而もこの叙述は言語の本質に関するロマンティクの理論的見解を指摘するだけでは満足に行われ得ない。更にロマンティケルの文学の中で言語が如何なる機能を持っているかをも明らかにせねばならない。この点に於いて彼女はフリッツ・シュトリヒの一派たることを示している。

併し著者がシュトリヒに依存していることは他面に却つて本書の弱い部分を形成している。シュトリヒと同じく、ここではクラシクとロマンティクとが対立させられており、この際「完成」と「無限」との二概念がこの対立を規定するものとされている。ところが彼女に於いては様式史的見地と哲学的見地とが混合しているため右の二範疇は甚だ不明確なものとなり、言語哲学的問題の原理的側面がこれに依つて殆んど明らかにされていないという結果が生じている。こうした概念構成の不十分さは、例えばギルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学をグイマールの古典的精神の中に編入するというような手続をとつていることの中にも

よく現れているが、寧ろフンボルトにとって特徴的なことは、極めて様々な思惟動機がそこに出逢っているという点であり、その中でもシェリンクに依存するオルガノロジー的把握が、仮令一方批判的見地に依り、他方経験的研究の結果に依り相当訂正されているにしても、兎に角それが前面に出ているという点であろう。

尚両シュレーゲルに対する彼女の評価に就いて一言する必要がある。彼女はフリートリヒ・シュレーゲルの言語研究上の功績を過大評価し、反対にアウグスト・ギルヘルム・シュレーゲルのそれを過小評価している。前者は天才的な、多産的な研究者であるが、後者は創造的觀念に乏しい経験主義者だということなことは今日到底許せない批評であろうと思うが、著者はこれを敢えて行っている。現代言語学から見てフリートリヒの“Über die Sprache und Weisheit der Indier”は単に刺戟を与えたものとは思われないが、ギルヘルム・シュレーゲル、ボップ、ギルヘルム・フォン・フンボルトの到達した水準からすれば恐らく開拓的なプログラムであつたであろう。併しそれ以上のものでは断じてなかつた筈である。言語研究に対するロマンティクの意義はフリートリヒ・シュレーゲルのような思弁的觀念の中よりも、寧ろ右の三者に萌芽を持ち、ロマンティク自身から出て来た言語学の中にこそ求められねばなるまい。

それにも拘らずこのフィーゼル女史の著書は更にこれを越えるものが出るまでは人々の参看に十分値するであろうと思われる。

三 初期のフツセルに就いて

日本のように『イデエン』に於けるフツセルしか知らぬ国では特に甚しいことであるが、フツセルの学問

の生涯の初期の發展、就中『論理研究』に到るまでの過程は殆んど注意を惹いていない。それ故イレマンがその時期のフッセルの根本的態度をスケッチして、これを現象学に於けるそれから区別し、更にフッセルに於ける現象学の概念には統一的な意味の發展が結びついているか否かを論じているのは見通し得ぬ貢獻であろう (Illmann, Werner 【不詳】 , Husserls vorphänomenologische Philosophie -- Studien und Bibliographien zur Gegenwarts philosophie, herausgegeben von Privatdozent Dr. Werner Schingnitz, I. Heft, S. Hirzel, Leipzig 1932, VIII+88 S.)。

この書のテーマは三つに分れる。一、『算術の哲学』に現れている心理主義、特に数概念を総体概念表象から導き出す試みに対する批判的研究。二、『論理研究』に於ける心理主義批判及び論理的構成体の観念性に関する吟味。この恐らくブラント的転向に対して著者は「相対的人間学主義」の中に論理的公理を人間の思惟構成と結びついているものとして示そうとしている。三、『イデエン』に於ける現象学的判断中止の導入に依つて初めて普遍的方法として可能となつた本来の現象学と前現象学的時期との差異。著者は両者に共通するものとして方法的手段としての反省の使用を指摘しているが、これに依つて『論理研究』は前現象学的根本態度に於いて而も新しき心理学への道を開くことが出来たのである。

判断中止の現象学を初期の著書から区別する大なる距離を看過してはならぬのは言うまでもないが、著者の如く、その發展の中に連続性を見ないのは正しいとは思われない。先験的現象学への転移に當って彼が以前論理学及び数学の「心理主義的」基礎づけとして要求しておつたものの意味の解明が中心になっていること、そしてこれが又心理主義の克服及び論理的構成体の観念性の形成と結びついていることが大切なのでは

ないか。フッセルが『形式的及び先驗的論理学』に於いて初期の諸研究に与えている解釈がイレマンに注意されておらぬのは残念であるが、若しもこれに注意したならば、判断中止的現象学に於いて初めて前現象学的モチーフが十分の権利を獲得することとなり、論理的構成体の観念性が人間学的に基礎づけられ得ず、却つてそれ自身構成的研究の課題を定立する所以が明らかにされたであろうが、これが欠けているために方法的手段としての反省の特徴も判明せず、『論理研究』の前現象学的態度と共に既に新しき心理学が發展して来たという主張も十分な論拠を持っていない。従つて又心理主義の克服にも拘らずフッセルに残存する心理学と先驗的現象学との密接な結びつき——そしてこれは凡べての心理学的分析は「符号の変更」に依つて先驗的、構成的なものに転化し得るといふ点に基づくと思われるが——が看過されている。

フッセルをその学問的生涯の全行程に於いて把握することは今日恐らく時を得ていると考えられるが、そうした試みにとつてイレマンの書は相当役に立つことは疑いない。

海外哲学思潮 1933.11

一、文化哲学

二、スローガンとしての「暗き中世」

三、フリーエ

一 文化哲学

嘗つて吾々は文化に関する諸理論の流行を経験した。然るに現代の危機の意識は以前とは異なる方向に於いてではあるが再びこの問題を日程に上せているように見える。文化建設にいそむ国と文化危機を嘆く国々との対立。文化研究に於けるイデオロギー的見方と観念論的手法との対立。併しながら最も科学的なるかに見えるこのイデオロギー的見地に於いても文化は唯文化としてしか見られていず、その内部的諸領域間の様々な関係は少しもその有機的聯関に於いて把握されていない。存在が意識を決定するというテーゼはそれが幾度反覆されたとしても、又それが重要な原理であるにしても、右の諸関係の解明に於いて積極的に働くのではなければならぬ筈である。この側に於いても文化の理論はもつと組織的に建設さるべきではないのか。併し今はデンプの『文化哲学』の紹介を以つて満足せねばならぬ。(Dempf, A., Kulturphilosophie, Sonderausgabe aus dem Handbuch der Philosophie, München und Berlin 1932, 148 S.)

吾々は既に多くの文化哲学を与えられている。併しそれは未だ単なる文化観の域を出でないものである。

i 以下には触れられていないが、既出である、1932.6のiii参照。

文化哲学の確立のための努力が払われるようになったのは僅か最近二〇〇年来のことであるが、而もその前半は歴史哲学の、後半は社会学の支配する時代であつた。このような事情を顧みるならば、今の文化哲学の眞の確立を企てることは尚早の謗りを免れ得ぬに相違ない。で本書は單に現代の精神的情勢を明らかにし、吾々の文化意志に対して文化の方向と目標とを知らしめるという事業に一つの貢献をすることを期待するに過ぎない。——かくて現代の文化哲学は先ず文化批判又世界觀批判たらねばならず、諸文化觀の批判的歴史たらねばならず、従つて「現代の根本的特徴」を示すものでなければならぬ。既に歴史主義及び社会学主義の花が咲いているにも拘らず吾々が現在何等指導されることなき文化運動に直面していること、文明が吾々の頭上に蔽いかぶさっていることは実に現代のこの上なきパラドクスである。更にこれに加えてこうした悲喜劇的狀態をユーモアなしに肯定したり、無意識的なる全体的生命の非合理的生活衝動を祝福したり、文化の諸方向の錯綜を民族又階級の闘争に依つてのみ決せんとする文化哲學者がいるとは又何としたことか。二〇〇年に互る *Genetivus objectivus* なき文化概念の独立化の行程、抑々何が文化的にさるべきかの問なき文化運動の觀察の途上に *Substantivum actionis* とつての文化の古き意義 (*die Pflege des Ackers und die Pflege des Geistes*) は完全に見捨てられてゐるのである。

如何になるべきかを文化批判的に論定しようとするや否や、既に略々嚴密になつた文化学 (*Kulturkunde*) の道を去つて人々は再び「没落の予言」乃至はユトローピヤに陥らねばならぬようである。併し実践的決定は政治家のなすべきこと、正しき文化政策的決定の哲学的指示は現代の倫理學者、文化批判家のなすべきことであると區別するのが大切である。文化は半ば運命であるにしても、他の一半は政治家、哲學者、倫理學者

等に決定すべきものである。文化的諸力の総括と文化的全体の指導への新しき勇氣とは世界概念としての吾が文化哲学の中に求めらるべきではないであらうか。それにしても学校概念としての文化哲学を総括しておく必要がある。チュルゴーからカントに到る学問史上の文化概念の地位は、精神と経済自動機械との仲の悪い兄弟に関するかのドラマを予め紹介するものであり、歴史哲学と社会学（これは仲の悪い姉妹である）との闘争の序幕である。歴史哲学は觀念論的文化觀であり、これにとつては自由なる精神並にイデーが生の運動の基礎をなし、社会学は唯物論的文化觀であり、これにとつては經濟がこれに代る。こうした文化觀のテュポロジーを補うものが歴史神学的及び国家理論的文化觀であり、更にこれに加えて諸制度の文化社会学がある。

文化批判は生命諸力の組合わせが他の組合わせ、従つて他の時代から分離される限りに於いてそれ自ら一つの實踐である。併し乍らそれは又一般的精神が普遍妥当的なる価値及び規範を掴みこれに依つて生の現實を測る限りに於いて理論であると言わねばならぬ。文化変遷の諸現象と自由なる精神の文化への干渉とは文化批判の二面——実証的及び自然法的——であるが、後者に依つて初めて眞の実証的哲学が始まるという皮肉な關係がここに横たわっている。併しながら抽象的精神はユトーピアに依り、一定見地、一定階級の党派的イデオロギーに依り實踐的文化批判を試みるのであるが、従つてイデオロギー的研究は文化現實の規定及びユトーピア精神の文化的全体に於ける影響の規定として一つの方法的課題を持つものである。この方法は既に行われており、その科学的資格は最早疑い得ぬものとなっている。所で自然にせよ、精神にせよ、また經濟にせよ、國家にせよ、一つの因子の絶対的支配の信仰が打破される時、文化の全体的考察への要求が始

まる。歴史哲学及び社会学の方法一元論、精神又經濟に依る文化の排他的被規定性の問題は消失して、ここに文化体、民族或は階級の文化的構成体が觀察の中心に現れて来る。こうした事情は吾々をして否応なしに比較文化學に論及せしめる。これは諸文化を自然的現象として見る限りに於いては、一九世紀、否一八世紀に準備されたものであり、當時の比較法學、宗教史、樣式史等の自然主義的進化構成は個々の文化体の全体的進化の図式を生み出す母胎をなすものであつたと言えよう。文化体が生物學的成熟及び死滅の過程を辿るものとされる場合、そこに文化の自然法則的形而上學が造り上げられる。これを批判する試みは既に幾度か行われたが、常に資料の不足という悩みを経験せねばならなかつた。文化的全体に関するかかる構成の批判の中から生れて来るものは即ち文化圈設定の問題であるが、この点に於いてはハンス・フライエル、フリッツ・カウフマン等の名が挙げらるべきであろう。最後に著者デンプは文化的全体に対する批判的觀察を記している。本書に於ける彼の意圖を総括して言え、文化哲學は素より絶対者の學ではない。客觀的精神の觀念弁証法的運動も、自動的經濟の社会學的、自然主義的運動も共に文化哲學の重要な章をなすことは勿論である。併し文化哲學を倫理學に完全に從屬させることに依つて初めて歴史的なるものへの崇拜から免れることが出来るであろう。かくてこそ伝統とユトローピヤ、文化の過去と未來とはひとしく正当に論ぜられ得るのである。又ここに於いて哲學的文化批判、絶対的価値及び人格に対する個人の道德的、宗教的自由、諸民族の社会的正義の無制約的要求に対する公衆の義務への道が開かれるのである。

以上がデンプの『文化哲學』の大綱である。果して現代は著者の言の如き時期であるか否かは議論のあるところであろうが、吾々にとつて本書の生命はそれが資料に豊富な点に先ず求められる。独りよがりな文化

社会学的文献に比して興味を以って読める書物である。

二 スローガンとしての「暗き中世」

一つの歴史的時代を非難の意を含めた言葉に依つて貶しめるということは圧縮せられたるイデオロギーの表現でなければならぬ。それは根本的に闘争を内容とするものである。そこには被搾取者の搾取者に対する敵意が示されている。スローガンは従来「卓越せる」地位に立っている人々の威光を掘り崩すことに依つて、それ自身新興階級の一闘争手段として役立って来た。併しながら古き権力の最後の残物が消失し、論争的態度がその目的物を失う時、又反対に新しき階級が古き階級へと帰ることによつて却つて自己の当初の氣魄を喪失する時、スローガンは直ちに捨て去られるのを免れ得ない。「社会的復古はイデオギー的復古を伴う。」このような見地の下に「暗き中世」なるスローガンを論じたのが Varga, L. 【Lucie --, 1904-41】, Das Schlagwort vom "finsternen Mittelalter". (Veröffentlichungen des Seminars für Wirtschafts- und Kulturgeschichte an der Universität Wien, 8.) Barden-Wien 1932, 152 S. である。

自己の力を自覚した初期の市民階級は封建的、僧侶的なる「暗き中世」に対して社会的、経済的、政治的、文化的闘争を宣言した。「暗き中世」なる言葉の中には封建貴族及び僧侶に対する反対的立場が明確に現れている。既に中世に於いても搾取者に対する被搾取者の立場は準備されており、そしてそれはイデオロギー的には僧侶自身の精神部分に依つて担われていたのであるが、中世に於いてそれが主として宗教的に動機づけられておったとするならば、近世初期に於いては特に市民的立場が見られる。それは即ち教養の僧侶的独

占及び精神的後見に対する新しき人文主義的インテリゲンチヤの反撥の中に、圧制者に対する農民的、市民的、中間層の反抗の中に、動産と（同じく動的なる）教養との結合の中にはつきりと表現されているのであるが、この最後の点は生活の都市化の結果益々重要性を加え、且つ商人及び科学者の精神を通して自由に基づく合法的秩序の觀念を代表し、これを介して経済的には封建制度に對抗し、精神的には体系的組織に、強制に對抗したのである。軍人の支配する社会の無秩序、僧侶の支配する社会の非文明に対して市民達は純粹世俗的な国家に依つて承認されたる法律上の安全を対立させたのである。

この自由なる市民階級に就いて語ることが本書の表面上の課題をなしているが、著者が大いに強調したいことは寧ろその背後にある（何故背後にあるかはこの書の成立事情を顧みれば判ることである）市民階級反動化の顛末である。彼等はプロレタリアートの擡頭に直面するや急速に自己の過去を忘れて、当初の敵であつた筈の封建的、僧侶的社会圈と結合し、ここに於いてスローガンに對する関心を完全に喪失する。古き価値の復活が祝福される。「北ドイツ的、プロテスタント的な『現実科学としての社会学』」はその反自由主義を「民族」の觀念に結びつけ、他方又カトリック的地盤の上にスコラの形而上学との結合が實現されようとしている。かくして「新しき中世」への復古的転向こそ現代を特徴づけるものである。市民階級と封建勢力との最初の平和条約たるロマンティク、即ち余りにも革命的となつた市民性への反動と共に始まつたこの傾向は今やその完成を祝おうとしている。ここに知らねばならぬことは、金の力と知識の力が共通の力を意味するということであり、教養資本と經濟資本とが如何にプロレタリアの進出に依つて脅かされているかということである。市民達は最早市民的であることが出来ない。

三 フーリエ

エンゲルスは「空想的外皮の下に遍く現れ且つ俗人共には判らない天才的思想の萌芽」をシャルル・フーリエに見、「現存社会状態のフランス式の気の利いた又それだけに深みのない批判」を彼の中に見出し、「彼の永遠に快活な性質が彼をして万世に卓越する最大の皮肉家の一人」たらしめたと語っている。社会主義史上に於けるフーリエの意義は勿論没し得ぬものであるが、その時代史的制約や個人的特性の故に彼の著書の中へ深く入って行くことは特に外国人にとつて極めて困難な仕事である。そこに眼を着けて編まれたのがポワソンの書である。

Poisson, E. 【Ernest -, 1882-1942】 , *Fourier: Reformateurs sociaux. collection de textes dirigés par C. Bouglé*, Paris 1932. これはフーリエ研究への道を開く一つの門である。

編者がフーリエに対して批判を行っている部分は大体フーリエの根本的主張たる組合制度の理論を中心としている。彼が「ファランステリウム」「調和の都」と呼んだものと現代に於ける消費組合の如きものとの相違というようなことを論じている。アトリエが偉大なる精神であつたことは確かである。現代世界を動かしている如何に多くの問題を彼は既に取上げていることか。一八三七年に死んだこの思想家は資本主義的社会秩序に固有なるアンティノミーを看取し、競争に依つて齎される経済恐慌、賃金奴隷たることを宣告されたる工業労働者の貧困化、陸海軍の寄生虫的存在、戦争への妄想、これ等の悲しむべき事実をフーリエは認識し、新しき社会秩序に依つてこれ等のものが克服される所以を説いている。彼は婦人とプロレタリアとが

資本主義社会の失権者たる旨を告げる。

少々フリーエ自身の説を述べて蛇足を加えたが、彼が如何にマルクス主義から離れているにしてもその歴史的地位は動かし得ない。フリーエに限らず、フランス社会主義の研究はもつと盛に行わるべきものであり、それは何時までもエンゲルスだけを頼りにすべきではないであらうし、エンゲルス自らも決してこれを要求せぬに相違ない。ポワソンの編書はこの意味に於いて利用されてもよいと思われる。

海外哲学思潮 1933.12

一、ウーティツ『人間と文化』。二、ハスハーゲン『宗教改革以前の国家と教会』。三、ギッチ『文学に於ける婦人被雇傭者』。四、パウロフ『ヒステリーの生理学的解釈』。五、スピール『批判哲学』

一 ウーティツ『人間と文化』

文化の自律性の喪失が疑い得ぬ現実となり、文化の悲劇的性格が明確に体験される時代は、文化又これと結びついて人間生活の意味を考え直す動機を与えずにはいない。この意味に於いて前号にはデンプの『文化哲学』を紹介したのであるが今エミール・ウーティツ【Emil Uitz, 1883-1956】の『人間と文化』に就いてその大綱を描こうとするのも同じ意味に於いてである。Uitz, E., Mensch und Kultur, Stuttgart 1933, VIII+112 S.

この書の目指すところは生、就中歴史的生活の意味に関する現代最も切迫した問題に対して一つの解答を与えようとするのであるが、著者は現実的生活の諸の困難を明らかにし、併せて一見無意味と考えられるものの中に意味を、一見価値に反せる如く思われるものの中に価値を発見しようとするのである。この問題は遺憾ながらスケッチ風にしか論ぜられていないが、他日更に詳細な取扱いを受けて然るべきものと思われる。ウーティツの見解は今日多くの人々が親しんでいる思想と結びついているものであり、根本的には価値、相対性、悲劇的性格との二語に尽きると言えよう。即ち人間の生及び文化は諸の価値に充されているのであるが、而もそれは人類の有限性と弱さとを如実に暴露するような仕方になのである。価値の創造と保持とは

その本質上屢々同時に価値を破壊するということを意味する。——著者は人間、文化、歴史、悲劇の四概念をその相關的關係に於いて捕え、これを以つて本書の指導的モチーフとしている。

ここに文化とは価値実現に向けられたる一切の人間の活動の沈澱物の謂であるが、これこそが人間を完全なる意味の人間たらしめるものであると共に他方又逆に人間に依存し、人間の本質に關係するものであり、特に人間の本質に横たわる分裂即ち人間は一面無限なる存在たると同時に他面有限的存在であるということと離れ難く結びついているのである。このことと対応して凡て人間の文化は客觀的価値を含むと共に流動する歴史性を負わされているのである。著者は歴史の概念に就いて余り明白な見解を示してはいないが、唯歴史の領域と文化事象の領域とは一致するという言葉を読むことが出来る。ウーティツに依れば、文化事象が歴史的生活に固有のものであるということはそれが單なる進化の意味に於いて考えられているのではなく却つて創造的形成及びラディカルな変革の意味に於いて考えられているのである。蓋し第四の概念としての歴史的世界の悲劇性、即ち一切の創造が同時に一つの破壊を意味するということは右の事情と密接に結合しているからである。対立せる諸要求の間の鬭争は人間生活にとつて實にティピカルなものであり、これは今日人々が好んで人間世界のデモニシユな性格と名づけている事實である。——更に著者は悲劇的なものの本質を語る際、意味なき不幸の領域としての自然的世界と悲哀の領域としての歴史的世界とを対立せしめているが、この自然的世界に於いて人間のなすべき又なし得ることは「不必要な」、「無意味な」犠牲を最小限度に引き下げるための努力だけである。ここに到つてウーティツの見解は頗る平俗に墮した傾きがあるが、それにしても安価な慰めに甘んずることなしに歴史的世界の悲劇的性格をはつきりと認め考え抜いて行かう

とするとところに彼の勇気が見られねばなるまい。

二 ハスハーゲン『宗教改革 以前の国家と教会』

ここに紹介しようとするのはユストゥス・ハスハーゲン【Justus Hashagen, 1877-1967】の新著である。Hashagen, J., *Staat und Kirche vor der Reformation. Eine Untersuchung der vorreformatorischen Bedeutung des Laien-Einflusses in der Kirche*, Essen 1931, XXXV + 569 S. 宗教改革以前の国家と教会との関係に就いてこのやうに大部な書物は従来公にされたことがない。尤も唯外形だけを問題とすれば P. Imbart de la Tour, *Les origines de la Réforme* に一籌を輸するかも知れない。併し後者が単にフランスだけを取扱っているに反して、前者はひとりドイツのみでなくヨーロッパのキリスト教諸国の凡てに亘つて多かれ少かれ言及している点、前者は一日に長が認められねばならぬであろう。研究の範囲がこのように広大であり且つドイツだけをとつてもその各地方に依り状態が全く様々であるから、厖大な史料を年代的に統一された順序で叙述する（例へばハレルのやうに）ということとは極めて困難である。ハスハーゲンの拵んだ方針はこれと異なる。彼の著書がハレル又ハウクの叙述に対する関係はベローの中世ドイツ国家史がブルネルのドイツ法制史に対する関係と一般であるとも言えよう。即ち彼は諸事件の経過、状態の変化の細叙を避け、その研究対象を体系的諸範疇に則つて分解し諸部分を一定の観点（諸部分は文献に於ける全体の解釈及び評価に対して従来如何なる影響を及ぼしていたか——という観点）に則つて整理するのである。そこで当然本書は次のような構造を与えられる。前半に於いてハスハーゲンは中世後期の領主の教会に対する影響を改革的王侯の教会支配の準備として見えし

めぬ諸要素を列記し、後半に於いてはこの準備として通用し得る諸事実が示されている。彼は莫大な特殊文献に見出される個々の観察を集め、对此せしめ、これに対して新しき問題を設定している。

著者の中心思想とも見らるべきものに就いてその二三を摘記して見よう。仮令【「仮令」か】中世の領主が教会に対して暴力的であり又利己的であつたにしても決して彼等が個人として信心探かつたことを疑つてはならぬ。領土内に於ける王侯の教会支配は法王庁との了解の下に行われたものであり、宗教改革以前に於けるこの教会支配から道は啻に宗教改革時代のプロテスタント的教会支配へのみならず、又この時代及び反改革時代のカトリクの教会支配へも通じているのである。Patronat や Vogtei に依つても嘗つて個々の場合に於いて特権であつたものが王侯の権能の流出として一般的に要求される様になつて行つたことが理解される。——特に注意を喚起するのは最後の二章である。"Der Laieneinfluss in der Kirche als rechtlich begründete Erscheinung" 及び "Gottesgnadentum und Kirchenregiment: Der Laieneinfluss in der Kirche in seinem theoretischen Zusammenhang mit der theokratischen Fürstenlehre" 王侯の教会政策の本質を掴むには実践的方面と共に理論的方面をも十分に究明せねばならぬという教訓が与えられている。

従来見失われていた個々の事実を正しき関聯に置き、今後の研究への有力な刺戟を与え、多くの新しきものを語り、熟知されたものを更に深く論証した点にハスハーゲンの書は光っている。併し著者の努力にも拘らず本書は当然結ぶべき実を結ばなかつた様にも見られる。その原因の一つに、彼が発展方向を厳密に指示するために一々の節に余りにも窮屈な構造を与えているところにある。例えばルードルフ・フォン・ハーブスブルク時代の事実を叙するかと思うと次に一二一六年——一二四五年の事実を記し、而もこれに就いて

彼は「特に十字軍に依つて法王の政治的權力の増大は齎されたのであった」と書いていたのである。第二の原因は、余り感心しない著書からの引用が多すぎる点にある。そのために誰も真面目に相手にしないような見解に対して煩わしいポレミクを行ったり、著者が自分の言葉で語りさえすれば避けられる筈の粗雑な判断を下すに至つたりしているようである。又逆にそれだけ文献資料に豊富なのであるから具眼の士には却つて益するところ大であると言つても宜いであらう。

三 ギッチ『文学に於ける婦人被雇傭者』

文化社会学者は文化と社会との關係の一般的論議に於いては多くの破綻を示している。併し若しも彼等が思い上つた抽象理論をやめて具体的文化形態の所謂実証的研究に従つて相当の効果を収め、その結果として却つて自己の文化社会学的方針を見直すようにでもなることが出来たら幸いである。その意味で實際に研究が行われるのは望ましいことである。さて「文学に於ける婦人被雇傭者」を社会学的に研究したのがヨゼフ・ギッチ【Joseph Caspar Wisch, 1906-67】である。Wisch, J., *Weibliche Angestellte in der Schönen Literatur*, Köln 1932, 64 S.

ギッチは先ずレーデル、クラカウエルに触れつつ被雇傭者層の大衆層への顛落を語る。「被雇傭者は事務技術的設備に於ける助手となる。」男子被雇傭者と同様に婦人被雇傭者もこの機械化過程に巻き込まれざるを得ない。併しながら婦人の生活上の必要及び機械化されたるパン獲得の要求から一つの闘争が生じ来り、そしてこれは婦人被雇傭者の生活上最も深刻なるプロブレマティークとなる。小説にせよ、自叙伝にせよ、

何れにしても文学の上にこの生活闘争が如何に反映しているかを尋ねるのがギッチの意図である。

詩人は無傾向的芸術の夢を追っているのではない限り、如何なる時代にあつても社会的不幸及び社会的問題の摘発者たらんとして来たし、又彼等の作品は社会状態の認識、ついには又社会状態そのものの変革を惹起して来た。それ故に社会批判は文学の一つの機能でなければならぬ。そこでマリア・ライトネル、アニタ・ブリュック等の作品をギッチは右の見地に立つて分析する。――婦人被雇傭者はそこに叙述された環境の中に自己のそれを認識すると信じ且つ自らに生活事情の現実から全く眼を逸らせている限り、自分を小説の女主人公及びその運命と同一化したがるものである。「読書の情操的影響」は彼女を圍繞する現実以上に彼女に働きかけて一定の觀念を形成せしめるものである。小説の分析を終つてギッチは全体の運命にとつてティピカルと考えられる諸結果を総括して提示している。

一、異つた諸層の婦人達が被雇傭者という職業に流れ込むこと。

二、婦人の職業団体の組織が不十分なため同僚的結合よりも寧ろ競争が支配的なこと。

三、個人的利害の相違。

四、老いこんで行く婦人被雇傭者の悲劇。

文学と社会問題との間の關係に就いて、著者は「作家は通話機であり」、「作品は時代の鏡である」と言っている。

四 パブロフ『ヒステリーの生理学的解釈』

ロシアの有名な生理学者イヴァン・ペトロヴィチ・パヴロフ【Ivan Petrovich Pavlov, 1849-1936】は今年八四歳の高齢であるにも拘らず、彼の条件反射の理論を絶えず新しい諸研究に依つて完成へと近づけ、又その適用範囲の拡大のために努力していることは驚くべきことと言わねばならぬ。彼が条件反射の理論に依り脳髓生理學上の方法たる省略法、刺激法、比較法の三者を以つてしては到達し得なかつたところの量的測定の問題を解決したことは衆知の如く高く評価せられてゐる。元來大腦を通過することなくして成立する無条件反射が優れて自然的なものであるに反して、大腦を通過することなくしては成立し得ないこの条件反射に或る意味に於いて文化的と呼ばれて宜いものではなからうか。何故かならば条件反射に於いては文化的環境規定が問題となり、單に習慣 *habitude* だけでなく實に慣習 *moeurs* もここでは顧慮され得るからである。この点に於いてパヴロフの『ヒステリーの生理學的解釈の試み』は注意されねばならぬものであらう。Pavlov, J. P., *Essai d'une interprétation de l'hystérie. L'Encéphale*, avril 1933. 【*Essai d'une interprétation physiologique de l'hystérie*】

彼はその方法を用いて純粹に神經病的なる状態を犬に於いて實驗的に再生産することに成功したのであるが、これを通じて彼は人間の精神病理學の研究へと導かれたのである。そしてその場合精神病理學と腦髓生理學との二つの領域が特に注目すべき様式に於いて相互に解明し合うという事實が確立され、彼はそこで早發性癲呆症及びヒステリーの如き或る種の精神病に生理學的解釈を施そうと試みるに到つたのである。然るに人間精神病理學の研究は人間の心理的機構と動物の心理的機構との間の重大なる差異を認識せしめずにはおかない。そしてこの点に於いて言語の持つ重要な役割が見出される。パヴロフは人間の複雑極まる言語的動作を前部腦葉の偉大なる發達に属するものとして考えるのであるが、併しこれは彼自身從來何等特別な役

割を果すものとして見ておらなかつたものである。彼の言葉を次に掲げておこう。

「今日私は高等な精神活動をすべて次のように考えている。人間を含む高等動物に於いては環境との複雑な諸關係の第一の結び目は下皮質中心に依つて、つまり私の用語法に従えば無条件反射に依つて——通例の雑多な用語法に従えば「本能」、「感情」、「傾向」、「情緒」に依つて構成せられている。こうした諸機構は出生後比較的少数の外的能因に依つて活動せしめられる。環境内に於ける非常に局限された orientation はこれに基づくものである。この orientation は第二の結び目と共に拡大する。それは即ち前部脳葉を除いた脳半球である。条件的連鎖に依つてここに他の行動原理が現れて来る。絶えず分析され又綜合される他の無数の刺激に依る、少数の無条件的刺激の記号化がこれである。これこそは生活条件に対する極めて微妙な適応の可能性を約束するものである。この記号組織は動物にあつては單獨に存するものであり、人間に於いては最初に存するものである。発声器官を刺激することに依りこのものを表現し且つ象徴する記号化の他の組織が人間に於いては前部脳葉の中に現れるということを認め得る。かくして吾々はここに神経活動の新原理を導入するのである。曰く、第一の組織の無数の記号の抽象化と普遍化、及びこの新しきプランに基づいて、これ等の普遍化されたる記号の新しき分析と新しき綜合これである。この原理こそは周囲の創造されたる世界に於ける無限の orientation の可能性、最後には人間の優れたる適応、科学を吾々に与えるものである。」

さてヒステリーであるが、パブロフの到達した解釈は彼とは獨立に条件反射の觀念を利用してヒステリーを説明したマリネスコの解釈と甚だ近いものがある。彼の見解は次の三つの現象に依つてその特徴を附与されているのであるが、勿論この三者は皮質の欠陥という一般的基礎の上に夫々結合をなして發展するものな

のである。

一、極端な暗示感受性、二、皮質中心の支配に依る皮質内神経過程の甚しき固定性、三、皮質内に於ける吸収の分散の容易なること。尚その治療に関しては「病理学的なる各個の場合に適用された条件反射に依る脳髓訓練に関する吾々の実験は、吾々に非常に元氣をつけるような印象を与える」と彼は書いている。

五 スピール『批判哲学』

前世紀末のフランス哲学界の活動を示すものとして一八八七年に書かれたスピール【African Spir, 1837-90】の『批判哲学概説』がある。約半世紀後に到つてこの書の新版がレオン・ブランシュギクの序文を附して公にされたことは今日尚この著書が何等かの意味で読直さるべき重要性を持つていることを立証するものとも言ふべきか。Spir, A., *Esquisses de philosophie critique, Introduction par M. Léon Brunschvicg*, Nouvelle édition, Paris 1930, XXI-167 p.

スピールは「唯物論的実証主義」を敵として戦つた。真理は外から来り且つ外的な啓示に依つて形成せられるとなす教説 (extrinsécisme) の批判に向つた。そしてこの時内在性と直覚との哲学の確立が告げられたのであつた。今日この意味に於いてはスピールの書の意義はあまり認められない。けれども彼が説明狂 (mania de l'explication) と名づけたものは現在尚スピールの批判を待つてゐるのではないか。彼にとつて説明することとは真理の規範に立ち帰ることであり、正当化することである。物理的事実を説明することはこれを真の實在性なき現象たらしめるものであり、犯罪、錯誤を説明することはこれを真理たらしめることである。かか

る諸の説明は人間に共通な運命たる欺瞞に基づくの外はないのであるが、すべて説明は物理的實在及び自己をその俚実体と見るところに成立するのである。ところで哲学者の任務は寧ろその背後に廻つて偽瞞の原因を明らかにする点にあると言わねばならぬ。「諸事實が説明され得るか否かを尋ねる前にそれを偏見なしに確説し且つありの俚にそれを認識するという習慣をつけるべきである。そうすれば道德及び宗教の諸問題に關する一般的一致は容易となるであらう。」——アノルマルなものを説明するという問題は決して解決を見ることは出來ず、アノルマルなものは唯確説し得るのみである。かくして「神の觀念は物理的自然の説明には役立ち得ない。蓋し規範はアノマリイの十分なる合理性を含むことが出來ないからである。」説明するということは根本に於いては單純化することであり、従つて事物の諸の差異を否定乃至減少せしめざるを得ない。——道德の問題に於いてスピールの思想はインド人の思想に近づいて行く。複雑なアノルマルな個人的生活はスピールの厭うところである。とは言え、彼は又禁慾主義をも呪うものである。吾々の追求すべき目的は、崇高なる關心への献身に依り理性的存在たるの神聖なる品位と眞実の価値とを人間の個人的生活に与えるものである。人間の個人的生活は空虚である。スピールがこの空虚の感情を最も重視するものであることはこの問題のために多くの頁を割いていることでも判る。「生活をかくも薄暗く又無意味ならしめるもの、各人を窮屈な範圍の中に閉じこめるものは個人的關心への排他的な熱中であり、これ等の關心の間の差異及び対立であり、人間の持つ疑惑である。……けれどもこの不安及びこの疑惑は人々が完全に進歩した道德狀態に到達する時には全く消失して了う。ノルマルな狀態は決して秘密を含んでいない。正しき思维、正しき意志、道德的な感情はその本質上少しも個人的なるものを持たない。これ等のものはそれが出逢う一切の

個人に於いて同一である。」このようにして道徳はアノルマルなものから遠ざかり現象的存在の空虚を充すべき手段である。

海外哲学思潮 1934.1

- 一、マックス・シェーラーの遺稿第一輯、特に「模範者と指導者」及び「愛の秩序」について
- 二、非常時国家論 三、メーメルソン文献

一

マックス・シェーラー【Max Scheler, 1874-1928】の遺稿論文第一輯がハイデッガーその他の助力によって未亡人とおぼしきマリア・シェーラーの手によって世に送りだされた。特に「倫理学および認識論に関する諸論文」と断わられている。後書きによるとここに収められた諸論稿はおおむね著者がかつて「倫理学における形式主義と実質的価値倫理学」のなかで取扱った諸問題の範囲に属するものであり、いずれも構想の中心は一九一一年一九一六年の間にすでに出来上っていたものだという。従って今回の公刊は生前の主著に於いて約束したところを果したことになる。諸論文の名称は次の如くである——

Tod und Fortleben; Über Scham und Schamgefühl; Vorbilder und Führer; Ordo Amoris; Phänomenologie und Erkenntnistheorie; Lehre von den drei Tatsachen. 【シェーラー著作集第十五巻収録】

ここでは著者の興味に従って選択することを許してもらってその一、二を紹介することにする。

社会学や歴史哲学にとって指導者と追隨者の問題は極めて基本的な興味深い問題である。シェーラーは他の著作でも屢々この問題に触れているが断片的であり附随的であるのを免れなかった。その点で今回の「模

範者と指導者」と題する一文は正面から問題を取り扱っているのに注意すべきであろう。——いかなる種類の集団、にも政党、階級、職業団体、組合、学校、宗教団体のいずれなるを問わずそこに指導層をもたぬものはない。もちろん、各々の集団に於いて指導者への結び付きの仕方は区々であるが、広く指導者の概念は社会集団のそれと離すことはできない。ところがシェーラーはこの広義の指導者の下に狭義のそれと模範者の觀念とを分とうとする。そしてこの区別を明確にすることがこの文の眼目でもある。

第一に指導と追隨の關係は互に意識的である。指導者は彼が指導者であることを知っておりまた欲している。然るに模範と模倣との關係はそうである必要がない。模範者は模範であることを知り欲しなくてもよい。第二に指導關係は現実的であるに反して模範關係は時空、現在を越え甚だしきは原範者が歴史上実存しなくてもよいのである。われわれはソクラテスを、シーザーを、クリストを、いなファウストを、ハムレットやベアトリチェをさえかかる者として選び得る。国民にとつて神話・伝説上の諸像がそれである。のみならず非人格的なもの、作品、様式、形態等も模範たることに差支えない。第三に指導者は没価値的で社会学的概念である。それはひろく有機体にまで比類が及ぼされ得るところの生物一般の自然法則に根ざしている。これに反して模範という概念は常に価値概念である。何人も模範とするものを、善きもの、完全なもの、有るべきものとして尊敬するのである。その間にいつも愛が、暖き情の關係が支配する。

この愛の結合關係がシェーラーにとつて基本的であることはよく知られている。ここでも彼は例によつて人間の心的領域を三層に分ちその最も深奥なるものとして精神的・理性的中心すなわち人格を認め、それに対応して社会集団に於いても、大衆・有機的生活共同体、人為的目的社会体、おわりに精神的な集合人格体

を区別しているが、最後のものに於いて人格中心が明白となり従って指導ではなく模範の關係が純粹に作用するに到る。そしておよそ如何なる團結に於いても中心に立つものは人格すなわち少数の模範者であり、次いで同じく少数の指導者であることを主張して、種々なる意味における社会学上、歴史哲学上の集合主義に反対するのがシェーラーの趣旨である。

模範の内容が人から人へ伝わる仕方に三つある。一は血統の伝承であり、二は伝統であり、三は模範者とその価値との明白な愛と認識に基づく信頼である。第一の關係に於いて来るべき時代の像が設定され、第二に於いて個人のまた集團の運命が決められる。われわれが人を愛憎するのは、その者があれこれのことを為し、言うからではなくそれより前に全人格的に彼を愛しまた憎むのである。ここに初めて無意識的な模倣と異なる自由なる追慕が成立する。その著しい例が「キリストのまねび」である。

かかる立場からシェーラーは続いて、聖者、天才、英雄、などいわゆる模範者のモデルについて個々に叙述している。

愛憎の態度はシェーラーにとって人間の根本的規定であつて、彼の倫理学も要するにかかる信念の上に築かれていたのであり、また彼の「共感」の研究をみれば社会的結合の根拠をもそこにみているということができよう。この愛憎の觀念へより形而上学的に基礎を与えたのが今度の“*Ordo Amoris*”と題する一文である。「人間の愛の秩序をもつ者は人間をもつ者である」と著者は始めている。けだしかかる人は道德的主体としての人間に対して、結晶態にとって結晶方式であるところのものをもつからである。即ち空間に於いて道德的環境として、また時間に於いて運命としてつき纏うところのものを根原的に規定する源泉を見出したも

同様である。運命と環境とは人間の愛の秩序の同じ要因に基づいている、ただ時空の次元を異にするだけである。運命は欲せず予期せざるに來る、しかし単に因果の強制に従うというのとも違う、そこには人間性格と事象との間における個別的な本質連関が存在し、それが一貫せる意味の統一として人間の周囲に人間の中へ示現する。永年にわたる個々の出来事がどんなに偶然にみえても、それを総括してみるとその人間の核心と思わねばならぬものを反映する点に運命の特質がある。かく生涯を通ずる一つの意味の中に示されているのはわれわれの意欲、希望から、また偶然にして客観的な實在事象からも、更に兩者の交互作用からも全く独立な、世界と人間との諧調である。道德的主体に対してあてがわれ彼の活動範圍を形作るのはかかる個別的な運命である。そして彼の運命内容の経過を支配するものが人間の事実上の愛の秩序の作られ方である。それは幼時における一次的な愛価値の対象が漸次、機能化されるという一定の規則に従って行われる。（これはフロイドを想起させる。）——元來、愛の秩序はわれわれに依拠するのではなく、物そのものの愛の資格から來るものである故に、数学や論理にも比せられる嚴密な方式をもっている。これを著者は「愛の秩序の形式」として論じている。

二 非常時國家論

『ログス』リッケルト記念号の目次は前々号【1938】のつていたが、それには不思議に非常時國家論とも呼べるべき論文が多い。マイネッケ、シュプランガーのものも夫々興味があるが、それは哲學雜誌十一月号にもかなり詳しく紹介されていた。そこで比較的看却されていたビンダーの論文“Der Autoritäre Staat”

——強力国家とでも訳すか——も結論はとにかく、哲学者が現実問題を割合に現実的に取扱つたものとして紹介する値があると信ずる。尤もこれはヒトラーが政権を握る以前、パーペン内閣当時に書かれたのだから、最近とはいえないが、わが情勢に対しても多くの暗示を含んでいる。

ドイツにおける非常時政府、従つて非常時国家論の動機と目的は、議会政治・政党制の行詰りによつて民主主義国家から如何にして權威ある強力国家を作り上げるかにある。而も憲法を変えることなくして別個な政体に到ろうとする、それにはかつて代議制王国に課せられた原理——議會は民主性を代表する、しかし統治しない——を再び議會に適用するにある。事態を憲法に適應させ人民の同意を通じて一九一九年以來の政党国家制を除こうとするにある。この目的に副うために国家の概念をドイツ精神に近づけねばならぬとビンダーはいう。本論もそのための努力であるが、著者は先ず他の学説の紹介から始める。第一に挙げられるのは Rudolf Smend 【1882-1975】、Verfassung und Verfassungsrecht, 1928 である。

この著者は国家生活の核心的過程を一つの積分 Integration として理解し、それは不斷の改新、絶えず新しく体験される過程であると考える。而してこの積分因子が歴史的に異なつて表れる。(一)十九世紀の市民的・自由主義国家にあつては、輿論、選挙、議會の討論と拒否権という形で、動的・弁証法的に、(二)君主国家にあつては王の人格、王朝とその伝統に内具する価値の連続として、(三)民主国家にあつては人民の種々な生活発現を貫徹する大きな恆常なエトスとして示される。その発動の様式は(二)も(三)も共に靜的である。この區別に従うとき民主的意志の作用は(一)の代議制とは縁なくむしろ君主制に照應した形で発現し得る。人民投票がそれである。以上の區別の重要さは、ビンダーに従えば、區別の標準を法の世界に限ら

ず法以上の超越的契機に基づけている点にある。即ち現行法の妥当性に甘んずる実定法主義を越えて現行法の妥当根拠を問うている点にある。

同じ目的を他の形で述べたものが Carl Schmidt (1888-1985), "Legalität und Legitimität", 1932 である。シムントによれば、国法学者の多くが民主主義の純粹な表現と考えるワイマル憲法も事実はその内容に統一がない。各部分に矛盾せる適法原理が存在し、政治情勢に応じこれまたはあれが取りだされているのである。第一部の人民意志に主権を賦与する原理は第二部の自由主義原理に対立し、第一部の内でも最初は民主主義と議会主義の觀念が支配的だが、突然、強力な指揮者という思想が潜入してくる。要するに (一) 間接の民主制すなわち代議制、(二) 強力政体、(三) 直接の民主制すなわち一般投票制の三原理が錯綜している。これを整理すれば、議會を排し而も人民を代表する政体が可能である。議會を否定することは人民主権を奪うことではないというのがその趣旨である。

諸種の国家形態が等しく成立し得るものとすれば、そのどれを選ぶべきか。もし国家を以て価値の一と解するとすれば、それを判定する標準となる最後の価値はなんであるかが問題になる。しかしこれはかく批判的觀念論の立場から決せられる問題ではなく、ヘーゲル (絶対觀念論) に従つて、主体としての対象、實在を自らの中から解放する精神、つまり価値ではなくそれを実現するもの、国家概念の実現として考察すべきだとビンダーはいふ。かくて彼は *Autorität* という文字を語源的に分析し「強力政府」について次の結論に達する——これは他の一切の関心、特殊の目的觀念の激発を一切排除し、かれ又はこれ、政党、經濟団体、利益団体ではなく、全体に即ち法の形態に於いて生活せる人民共同体に奉仕すべき国家意志と一となるこ

とを自覚せる政体である。

三 メールソン文献

哲学者が実証的諸科学の原理を討究しその批判を引受けるということはフランス哲学界の一つの喜ぶべき特徴であり伝統であると言えよう。現在この意味に於いて注目すべき哲学者を求めらば吾々は先ずエミール・メールソン【Émile Meyerson, 1859-1933】の名を挙げねばなるまい。メールソンには、

- 1) *Identité et réalité*, 1908(2e éd, rev et augm 1912).
- 2) *De l'explication dans les sciences*, 2 vols., 1921.
- 3) *La deduction relativiste*, 1925.
- 4) *Du cheminement de la pensée*, 3 vols., 1931.

のような著書があるが、日本に於いては彼の教説は少数の断片的なもの(佐藤信衛「仏蘭西哲学界の近状」——『思想』特輯「哲学の現勢」所収)を除いては殆んど見るべき紹介を持っていない。ベルグソンの新著が多くの紹介を有し又多く引用されているのに比較して片手落ちのようにも思われる。勿論相当の理由もある。吾々はその道の土がメールソンの著書又学説のよい紹介を吾々に提供してくれることを希望し、ここにはメールソン関係文献の二三の内容を大体伝えておくことにしよう。

Stumpfer, O. 【生没不詳】*, L'explication scientifique selon M. Émile Meyerson, ou la dissolution de l'être dans le néant par l'entendement pur, et rôle conservateur de l'irrationnel*, Luxembourg 1929, 75 p.

この書は二部に分れていて、「メールソン氏の認識論」と題される前半はメールソンの学説の紹介に充てられており、後半に於いて著者は自己の見地からこのフランス哲学者を評価している。

著者はメールソンの反実証主義を極めて重要視しているが、確かにメールソンの理論の基礎をなしているものはオーギュスト・コントの教説と真向から対立しているように見える。即ち法則と原因との区別、科学のオントロジクな性格、科学は諸現象の有益なる説明以上のものたること、これ等の問題が論ぜられる。

「生存の説明」は科学に依つて「時間内に於ける同一化」の手續を通じて試みられ、「存在の説明」は「時間外に於ける同一」に依つて試みられる。現象を説明するということは之を否定することになるのであるが、世界は又非合理的なるものを含まざるを得ず、これ等の要素は演繹的努力に抵抗し、理性の進行を阻むものである。空間内に於ける諸客体の存在とこの空間自身の限定、運動学から機械学への移行、物質とエネルギーとの非連続性、物理学と化学とを共に支配するカルノーの原理、生物学に於いては生命と意識、心理学に於いては感覚と意志、すべてこれ等のものは矛盾するところの非合理的なるものである。かくして「宇宙と理性との間の調和」なるものは常に部分的にしか実現され得ないものであり、理性の進行は結局「妥協」に到達するの外はない。

後半の批判的部分に於いて著者はメールソンの先行者に就いて述べ、ヘーゲル、ハミルトン、近くはリール、ギンデルバントの名を挙げ、更にこれに加えてメールソンに近い見解の所有者たるオランダの哲学者ハイマンを取り上げているが、著者の見に依るとこれ等の先行者達は何れもつきつめて行つた場合に到達する帰結が余りにもエトランジュとなることを恐れて中途に止つてゐるものである。同一化的因果性は人間の知

識の凡ゆる領域に行われるものであるというメールソンの確信は正しいとして、著者はミンコフスキーの精神病理学上の研究を拉し来って論じている。彼のメールソン評価の結論は一、メールソンの見解の中には広い意味の実証主義に対立するものは何も認められぬ。二、実証主義の慎重さを知るものにとつてはこのような科学又理性に関する見方は形而上学への道を開くものとしか信ぜられない。そして最後にメールソンを呼んで「将来一切の形而上学への新しきプロレゴメナの優れたる著者」となしている。

Archives de Philosophie, volume VII, cahier III: La philosophie de M. Meyerson, Étude critique par M. Gillet.

この雑誌はその第八卷第三冊をメールソン研究に献げており、マルセル・ジレがこれを担当している。全体はその大部分をなすメールソンの理論の紹介と二つの批判的ノート及び結論とから成っている。

メールソンは諸科学の歴史的発展の跡を尋ねつつ人間精神の合理的基礎の探究に志して来たのであるが、「彼は様々の学派の大主張を検討し、分析的方法に依つて先行者を発見しようとした。」又所謂 *déduction globale* に於ける理性の歩みを明らかにせんとし科学理論の生成の姿を掴もうと努めて来た。処でこうした努力の結果は、ジレに依れば次の三つのテーゼに帰着する。一、生的運動に於ける人間精神は多様性の同一化及び時間の否定に依る同一性の追求に赴かざるを得ない。二、人間精神はその凡ゆる進展を通じてオントロジクな絶対者の存在を示すものである。三、人間精神は実在的なものと非合理的なものととの接触到遭遇せざるを得ないのであるが、これこそは単に事実上だけでなく権利上も人間精神の克服するを得ぬ障碍物なのである。——ジレはメールソンが実証主義的科学観を排斥し、原因の観念を再建し、古代及び

近代の科学的理論の中に自己の主張を証拠立てるものを発見し、同一化の方式を哲学の中に導入している次第を叙している。

批判的ノートに於いてジレはメールソンの業績に多くの讃辞を記し乍ら、彼の科学理論はカント以後の先行者達の間に発見することの出来ぬ真に新しきものを含むとなし、conventionalisme や symbolisme scientifique(Poincaré, Mach, Duhem, Mochi) に対してメールソンの立場の正しさを擁護している。著者は奇蹟や動物の知性や目的性に関するメールソンの見解に若干の疑惑を持つてゐるようであるが、このことは近時の批判家たちに対して彼の根本的觀念、就中非合理的なるものの觀念を弁護することを妨げるものではなかつた。彼は最後にメールソンの所謂同一化とスコラ的なアナロジーとを結びつけようとする。即ち彼は「メールソン氏の哲學的原理とカトリク哲學との比較」に依つて「カトリク哲學の偉大なるテーゼが抑々如何にしてこの著者のテーゼの中に加わり得るか」を明らかにしようとする。この問題こそ実はマルセル・ジレの議論の出発点をなすものと考えられるのであるが、この点に関する彼の結論はこうである。「人間の精神は真理を追求しつゝ常に必然的存在という永遠の問題に立ち帰つて行くのであり、思惟の真面目な努力はすべて無限の神秘に対して些かなりとも光を投ずるものである。」

Sée, H., Science et philosophie d'après de la doctrine de M. Émile Meyerson, Paris 1932, 203 p.

アンリ・セー【Henri Sée, 1864-1936】の著書は大部分一九三〇年以前に書かれたものであるが、メールソンの *Cheminement de la pensée* の発行を待つてゐたために世に出るのが遅れたのである。この書が公にされたことは、従来考へてゐたメールソン解釈を更に完全ならしめ且つセーはこれに依つて確信を与へられた由で

ある。

科学と哲学との関係をめぐる問題は現代の思惟に今後益々強制される所のテーマの一つであるが、その研究の困難は殆んどそれを不可能とさえ見えしめているのである。そこでセーはメールソンの哲学を吟味しているのであるが、短い而も充実した諸章はメールソンの思想の全体に対してよくこれを明らかならしめるに役立っている。

セーはメールソンの思想を実証主義、実用主義、ベルグソン主義の如き自然哲学と対立させて論じているが、この最後の点即ちメールソンとベルグソンとを極端に対立させて、両者の間に横たわる差異のみを見てそこに存在する密接な親近関係を看過しているのは若干危惧の念を懷かせる*。

科学にしても哲学にしても実践にのみ向っているものでないこと、又両者が歴史を通じて永い間極めて緊密に結びついておつたこと、而も科学の方が現象により近く立っているということに依つて両者は区別せられることは確かである。併し共に理性の一産物であり、かかる限りに於いて同一であるということも亦確かである。その根本的傾向は外的實在の探究と同一性の追求とであるが、それは常に妥協に終らざるを得ず、解決は常に一時的たるを免れない。仮設から仮設へと進んで行く発明の生成は理性の苦難な進行を、妥協への闘争の道を示すものでなければならぬ。

人々の知る如くセーは凡ゆる事物の哲学的側面に多く心を惹かれてはいるものの決して本来の哲学者ではなくして歴史家であり、経済史的又社会史的博識を以つて高く評価されている人である。そこで彼は当然歴史学と自然科学との根本的差異に論及して、前者に於いては「合法性」が殆んど何の役割も果しておらぬこ

とを指摘する。「歴史的事実は極めて複雑であり、逆睹し難い各種の偶然に従うことが極めて多い。歴史学は予見することは殆んど不可能であり、況んや予言の如きは到底不可能である。」併し乍ら歴史学と雖も他の一切の科学と同じく「説明」を求めてやまない。そして説明はやはり「同一性に依る説明」であるの外はない。かくして人々は或る革命を説明するに当つてはこの革命の中に真に結合しているものが先行の進化と一致することを指示するのである。こうした種類の説明は余り完全なものではなく、他の諸科学に見出される説明とは全く異なるものである。而もセーは飽く迄もメールソンの教説の価値を疑うことなく、之に依拠して自説を定立しようとするのである。

* メールソンとベルグソンとを対立させようとするセーと丁度正反対な意見を提出しているものに Dujovne, L. 【León --, 1898-1984】 , *La Filosofía y las teorías científicas, la razón y la irracional*, 【*La filosofía y las teorías científicas. La razón y lo irracional*】 Buenos-Aires 1930, VIII+284 p. がある。著者は「ブエノスアイレス哲学研究所」の所長で、本書は『哲学叢書』の第一冊として公刊されたもの。科学を哲学との関係に於いて、就中メールソン哲学との関係に於いて見ようとするのが著者の意図である。最初の数章に於いて「科学的認識の理論に於ける相対主義と実用主義」とを取扱い、コント、マッハ、デュアン、ビヤスン、オストワルト、ファイヒンゲル、ジェイムズの説を述べて「以下に於いてメールソンの教説の獨創性を大いに強調するを許す共通の基礎」をそこに見出している。最後の章「ベルグソン哲学と科学的認識の理論」に於いて「メールソンを介してコントからベルグソンへ」の道を示している。即ち著者に依れば「メールソン氏の諸労作はベルグソン氏の哲学の『プロレゴメナ』をなす」ものであり、ベルグソンの形而上学はメールソンの認識論の自然的補足をなすものである。

Abbagnano, N. [Nicola -, 1901-90]. La filosofia di E. Meyerson e la Logica dell'Identità [dell'Identità]. Napoli 1920. 43 p.

この書は極めて貧弱な小冊子ではあるが Cheminement 以前のメールソンの思想を甚だ手際よく批判的に開陳している。(尚アバニャーノは Logos 1932. I 誌上に Cheminement に就いて注目すべき紹介文を載せている。【この号の目次にはない】) メールソンの伝記的事実に触れた後、彼の「認識論的テーゼ」として、合理的なるものは同一的なものに外ならぬ、理性はパルメニデスの意味に於ける同一性でなくては満足せぬ、理性はその凡ゆる歩みを通じて同一性を求めてやまぬ、否それ以外の何ものをも求めはしない、云々と記している。

先ず科学も勿論一つの形而上学を含むが、それは *vivere est philosophari* という自発的な形而上学、即ち客体が意識から独立に存在するとなす信念とは全く別のものである所以を説明し、実証主義が厳密性と行動の必要とからして科学を以って法則を求めるのみとすることを誤謬と見、科学は原因を尋ねるものと規定し、前件と後件との間の同一性の定立へと進むものとし、*causa aequat effectum* の原理を立てている。著者は次にメールソンと共に相対性原理、情性の原理、物質及びエネルギー恆存の原則、物質の同一性に関する見解を叙して、科学的理論の発展に於ける同一化的傾向の役割を指摘する。カルノーの原理は従来哲学者のみならず科学者の世界にも完全に受け容れられ得なかったものであるが、これは正に反対に吾々人間の知性の拘束に対する自然の抵抗を意味するものでなければならぬ。

メールソンの所謂合理的説明は多様な所与を同一的なものに還元することを意味するに外ならぬのであるが、論理学に於いても数学に於いてもこの同一化即ち同一性への進行は思惟の進歩を形造るものである。

吾々はメールソンの思想に就いて歴史的先行者を発見するに難くない。ヒュームは外的事物の存在の信念を吾々の感覚或は勘くともこれを惹起するものの——時間を越えての——同一性への傾向から演繹しており、又近くはブートルー、ミロー、スタンリ・ジェズンズが同じ様なことを考えているようである。又モッソに依れば論理の道は無差別の同一性から明確なる区別を有する多様性へと進むというのであるが、アバニヤーノは一般的方式としてはモッソの意見はメールソンのそれに代置され得ぬと見做しており、シラー及びアリオッタに於ける同一性の実用主義的解釈もメールソンのテーゼを無力ならしめることは不可能であるとしている。その他アバニヤーノは全くメールソンの思想を自己の思想としてその擁護のために力を尽しているように見受けられる。

海外哲学思潮 1934.3

一、ライゼガング『レッシングの世界観』。二、ガイスマール『キエルケゴール』。三、カッシレル『ケンブリヂのプラトン派』。

一、ライゼガング『レッシングの世界観』

一九二九年はレッシングの生誕二〇〇年を祝うべき年であつた。ドイツ大統領はこれを記念すべき論文を募り、これに賞金を懸けた。そしてイエーナのハンス・ライゼガング【Hans Leisegang, 1890-1951】が『レッシングの世界観』(Leisegang, H., *Lessings Weltanschauung*, Leipzig 1931, XI+205) に依つて受賞者となることが出来た。

従来哲学者達はこの偉大なる啓蒙思想家に就いて、彼は抑々独自の完結した世界観の所有者と見らるべきであろうか、それともブルーノー、スピノーザ、ライプニツの如き人々の単なる追隨者たるにとどまるのであろうか、又彼は体系家であるよりも寧ろ論争をこととする人間であつたのであろうか、というような事柄を根本問題として論じ合つており、而も今日に至るまで決定的な意見が出来ていないのである。その標題からも祭せられる通り、ライゼガングの新著も亦この点に關係している。この問題に関する彼の結論は、要するにレッシングの世界観は全く独特の意味形象を示しているということに存する。この問題に満足な答解を与え得る人は先ず宗教史及び哲学史に対する豊富な実質的知識、近代に於ける精神科学的諸方法の把握、優

れたる了解能力などを持つておることが要求される。ライゼガングは恰もこうした諸能力に於いて欠けるところがないようである。

著者はレッシングの諸著作を綿密に研究して彼の一般的又世界観的なものの要素を発見しようと努めている。第一にレッシングがその中に育まれ、又これを研究し且つ論議したところの宗教的、世界観的諸問題が如何なるものであつたかということが究明される。プロテスタンティズム、唯物論的、觀念論的、神秘的、世界観。次に豊富なる資料を駆使しつつ彼の形而上学的根本觀念が明らかにされる。ライゼガングはレッシングの "Christentum der Vernunft" に現れた思想が彼の生涯を通じて渝ることなく保持されて、その凡ゆる発展の中にあつて而も彼の思想に一定の特徴を附与している旨を指摘する。彼の世界観なるものは当時の哲学又宗教上の如何なるものにも属せしめることは不可能である。即ちレッシングは世界を一個の生ける有機体として捕え、神をこの完成に向つて進んでやむことなき有機体の内的生命として考えることに依つて正統派的キリスト教の信仰及び啓蒙的觀念論を斥けるのである。そればかりではない。彼は更にその神の概念の中に思惟のみでなく意志及び創造をも取り入れることに依り、ただに靈魂の転生のみでなく宇宙の転生をも信ずることに依つて、スピノーザとの間の深い溝渠を造らざるを得ない。かくしてライゼガングは重大な帰結を語る。レッシングの世界観は一つの神秘的なる世界観であつて、彼の哲学体系は同時に宗教であり、而もこの体系たるや純粹なる神秘主義者の意味に於ける思弁的体系をなすものであり、その思惟形式は思惟と存在、主観と客観、神と世界との同一性に於いて自己を示すものである。ライゼガングに依れば、レッシングは世界観的諸問題に調和主義的解決を与えるところの神秘的伝統の流れに立つものであるとされねばなら

ぬ。著者はレッシングとヘーゲルとの間に極めて多くの類似点を見ようとするのであるが、両者は共に理性に対して、凡ゆる問題を解決する能力を、歴史の有限性とロゴスの無限性とのアンティノミーを克服する能力を与えようとする。世界理性としての神は宇宙を支配し、歴史的発展の過程に於いて多くの誤謬を通じて自己を完成しつつ真理に到達する。常に新しく始まる循環の中にあつて人間は神の共働者となる。ここから又レッシングの形而上学は、道徳は漸次完成に近づくとなすところの彼の倫理学を生み出さざるを得ないのであるが、この点に於いても神秘主義、就中ギリシャの神秘的思想家の倫理観との内的結合が理解される。即ち道徳的人間は自然の発展に依つて生れるものであつて、意志と道徳とは精神的諸力と共に成長するものであるから各人は夫々の個別的完全性に則つてのみ行為することが出来る。人間は何等の選択の余裕も与えられないことなく長い成長過程に於いて彼に内在する理性法則、従つて又神及び世界発展の意味に於いて自己の行為を完成へと近づけるのであり、このことは摂理に依つて命ぜられるところである。

ライゼガングはレッシングを一つの意味中心から把握することが出来たのである。"Christentum der Vernunft", "Die Erziehung des Menschengeschlecht", "Die Gespräche über Spinoza", "Nathan" の如きは就中新しい光の下に於いて照し出されたと考えられる。ライゼガングは従来のレッシング研究に対して確かに一つの進歩を示したに相違ない。併し果してレッシングは神秘的思想家の中に編入されて了つてよいであらうか。吾々は尚本誌前号の高沖陽造「レッシングの美学及び戯曲論の社会歴史的意義」の如きに依つてこの啓蒙思想家が他の新しい光の下に統一的に把握されようとしていることを、そして他の方向に於ける一つの進歩が行われようとしていることを知っている。

二、ガイスマール『キエルケゴール』

市民的文化の危機と結びついた危機神学の流行はキリスト教的伝統を欠いた日本人の人人にさえもキエルケゴールを語る様にさせた。今日ではこの名は日本人にとつてもそう珍しいものではないが、その思想を伝えた恰好な書物のない折柄、少し古くはあるがガイスマール【Eduard Osvald Geismar, 1871-1939】の『キエルケゴール』を紹介しておくことも無駄ではあるまい。Geismar, E., Søren Kierkegaard, seine Lebensentwicklung und seine Wirksamkeit als Schriftsteller, Göttingen 1929, VI+672.

著者はコペンハーゲン大学の教授。彼はこの特異なる人物の生涯、父親の影響を述べ、詩人又思想家としてのキエルケゴールの特性、公的キリスト教に対する彼の攻撃、悲劇的、厭世的、弁証法的な生の哲学に就いて語っている。叙述は全体に互つて温い愛と優れた理解と而も鋭い批判とを以つて行われている。そればかりではない。ガイスマールはキエルケゴールの中に病理的なものを発見することすら敢えてしているのである。だが「変だというだけでキエルケゴールのような人になれるものではない」と記す用意も亦彼の持ち合わせているところである。抑々キエルケゴールは如何なる側面からすれば最もよく理解出来るのであろうか。それは疑いもなくキリスト教に対する彼の英雄的な闘争からであり、且つキリスト教と彼との関係に対する同じく英雄的な自己批判からである。キリスト教とは実際のところ何であるか、キリスト教の最高の公的代表者と雖も自己をキリスト者なりと名づける内的な権利を持つているであろうか、こうした問いを果敢に追及して行つたキエルケゴールはついに合理主義的又道德主義的、美的又人本主義的に基礎づけられたキ

リスト教に対してこの上なく激しい批判者たらねばならなかったのである。アウグスティヌスはキリスト教をして主知主義的精神化を蒙らしめるの罪を負わねばならないのであるが、ヘーゲルも亦キリスト教的絶対的思想を、世界及び歴史と調和する人本主義的宗教性にまで引き下げることに依つてその鋭さを奪うの罪を犯して了つた。彼の生涯を貫く闘争の主要部分は大にヘーゲルの文化又歴史の弁護に向けられていたのである。

ヘーゲルが看過した点はキリスト教の悲劇的な矛盾の本質である。キエルケゴールに於いては何等段階的な発展はない。歴史の流れを通じて聖なるもの、永遠なるものに漸次に近づいて行くということもない。それ故に、キリスト教も亦把握され得るというヘーゲルの主張は彼の最も敵視するところである。彼はキリスト教の把握不可能を説くだけではなく、歴史自体も決して把握されないと考える。かくて当然彼は神と人間との絶対な対立の思想——これこそヘーゲルの蔑視したものであるが——に辿りつかざるを得ない。そのヘーゲルとの差異又対立に於けるキエルケゴールは著者ガイスマールに依つて極めて詳細に説かれている。併しヘーゲル主義及びキリスト教の歴史的発展の中に於いてキエルケゴールは如何なる地位を占めるものであろうか。

由来人間と神との間の本質的対立なる思想はかの人間の罪なるものに関する観念の中にはつきりと示されており、且つキリスト教はこの点からして最もよく理解出来るのであるが、一体罪とは何であるか。又如何なる感情が人間の中にこの罪の観念を生ぜしめたのであるかと言へば、それは先ず恐怖であり、戦慄でなければならぬ。キリスト教に対して真の理解を持たんがためには、即ち宗教哲学的反省や安易な説話にはな

しに、却つて事実そのものに基づく關係をキリスト教に対して持たんがためには、キエルケゴールの恐怖、戦慄という宗教的根本感情まで遡らねば駄目である。彼が人間の魂を分析する際のその偉大さ又その真理は通常の心理学の到底及びもつかぬところであり、この点に於いて最近の実存的深部心理学又フロイト的精神分析はキエルケゴールの中に先駆者を認めねばならぬであろう。第一に彼の分析は当時及びその後も暫くの間支配的又公許的であつた聯想心理学を遙かに越えるものであつた。彼は吾々の内部の最も深いところに向つて直接に洞察を試みる。聯想心理学の眼を奪うところの半法則的諸關係の如きは彼にとつて問題となることなく、吾々の内部に動く暗いもの、神秘的なもの、悪魔的なもの、非合理的なものが彼に依つて直視される。ドイツ・ロマンティクの偉大なる心理学者達に依れば、キエルケゴールは一九世紀後半の機械的心理学との対立に於いて吾々の内部の不気味さを発見した最初の人であると言われる。彼はニーチェ、デイルタイ、フロイト、ユング、クラークス、プリンツホルンの先駆者として数えらるべき資格を持つてゐる。

だが第二に彼は又精神現象に対して公許的心理学者と異なる關係を持つことに依つて彼等から區別される。人々は彼を「実存的心理学の代表者」と呼ぶ。それは勿論彼が精神現象の外に立つことなく、又傍に立つことなく、却つて自ら取扱わるべき現象の中に立つて、その現象から出發して、即ち自己自ら出發してそれを把握しようとする彼の態度を指すのでなければならぬ。それ故にキエルケゴールにあつては反省というような冷靜な立場から畏敬、恐怖、又敬虔なる人が神に近づく時に感じる驚異その他の宗教的体験が考えられるのではない。蓋しこのような反省的立場は彼にとつては苟くも宗教の精神的側面が問題となる限りに於いては全く不十分なもの、否、正に虚偽なるものであるからに外ならない。宗教の独特な存在的価値を把握する

には必ず人間の側に於いてもこれに対応するところの把握方法が伴うのでなければならぬ。彼にとつて宗教の心理学的基礎づけは正に望みなき逸れた道である。彼を目して「宗教心理学者」と名づけるものは彼の心理学に於けるこうした存在論的特徴を看過するものであると評さるべきである。そしてまた同時にこの存在論的乃至絶対的契機が形式論理的な証明可能性の彼岸に立つものであることもキエルケゴールにとつても明白な事柄であつた。ここにブレンターノが明らかにし、且つ現代の現象学に於いては衆知のものとなつてゐる事態承認の作用が示唆されてゐると思われるのであるが、著者ガイスマールはこの点を説いて次のように記している。「吾々の一切の精神原理がその最高の總括的統一を神の中に持つということはキエルケゴールにとつて非常に早くから明らかになつておつた。吾々は善、真、美を追求する時、神の力の下にゐるのである。一面このことから結果することは即ち神は一切の確實性の根源をなし、若しも神が存在しないならば一切は混沌に帰するということである。併し他面、凡ゆる証明は神を、即ち証明の基礎たる根本原理の中にこれを前提するが故に神は証明せられ得ないということも結果する。」

この「実存的思惟」こそはヤスベルス及びハイデッゲルの如き実存哲学の成立と完成とに強い影響を及ぼしたものであるが、これは又同時にキエルケゴールをヘーゲルから離れさせた第二の根拠でもあると言えよう。ヘーゲルの文化弁護論としての文化形而上学に与し得なかつた彼は又觀念論一般に賛することが出来なかつた。何故なら彼に於いてそれは主観主義として非難され罵られてゐるからである。觀念論の歴史には常に主観主義がつきまとつてゐることは事実である。今日ゴッガルテン等の危機神学の一派に見られる態度はこのキエルケゴールの方針を継承するものである。併し觀念論の本質に対する彼の謬つた見解は一九世紀を

通じて觀念論がこれに陥り且つ現在その性格を最も顯著に示しておるところの危機に拍車をかけるものであり、キエルケゴールの誤解は又一つの歴史的役割を果たしたのである。

ガイスマールはキエルケゴールの神学、心理学、哲学に於いてなした業績を細密に叙述すると共に併せて人間、闘士としての彼の運命を語り、彼の暗き半面としての人間的な余りに人間的な点を指摘している。この書はデンマルクの特異なる思想家に就いて知ろうとする人にとって恐らくは最も優れた書物の一つであるに相違あるまい。

三、カッセル『ケンブリヂのプラトン派』

人々がその非歴史性を非難するマールブルク学派のカッセルから多くの歴史的研究を提供されることは興味深いことである。嘗って本欄に彼の『啓蒙時代の哲学』(Die Philosophie der Aufklärung, Tübingen 1932)を紹介しておいたが、ここにその概略を伝えようとするものもまたイギリスの形態に於ける啓蒙哲学に関係する。Cassirer, E., Die Platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge, Leipzig 1932, VIII+143.

ケンブリヂ学派が従来の哲学史家から甚だしく軽く取扱われていたことは何人も知るところであるが、その原因はこの学派が哲学史上重要な役割を果たしていないという認識の中に見出される。カッセルも亦ケンブリヂ学派の特殊な地位、即ち宛ら局外者の如く当時の哲学界及び諸科学の発展に対して殆んど直接的な関係を持つておらぬ様な地位を認めている。「ガリレイ及びケプレルが基礎づけたような自然認識の近代的形態に対してケンブリヂ学派は何の関係もなく又何等深い理解もなしに対立している。彼等は倫理的又宗教的

理由からして熱心にこれと闘ったところの『機械的』自然觀の足場と先驅者とをそこに見ただけである。デカルトに依つて示されていた新しき哲学方針もケンブリヂ学派全体にとつて見知らぬものであつた。」併しこの派の人々は更に又當時のイギリスの經驗論に対しても、ピュリタニズムの宗教運動に対しても全く否定的な態度をとつておつたということが注意さるべきである。この学派が代表しておつた一つの思惟類型は時代の諸問題に關して殆ど何の能力もなく、却つて諸問題に押されて了わねばならなかつたようなものであつた。カッセルはこの思惟類型を描き出すためにイギリスの當時の二大潮流としてこの学派に対立しておつたものの敘述を遂行したのである。

エロスの飛躍を裡に藏して汎神論的な自然信仰に貫かれているケンブリヂ学派が經驗論者の無味乾燥な合理主義やアウグステイヌス及びカルギンの思想を織り交ぜたピュリタンの宗教性に冷淡な態度をとらざるを得なかつたのは頷けることである。この人々は元來フローレンツのアカデミーのプラトン派並びに新プラトン派に忠實を以つて追隨するものであり、フィチノやピコはその師であつた。就中フィチノの新プラトン主義的な“*Theologia Platonica*”の如き、又彼をして有名ならしめたプラトンの『シュンポジオン』の翻譯の如きはケンブリヂの人々の上に極めて強大な影響を与えたのであるが、フローレンツの哲學者とイギリスの哲學者との間に立つて仲介者たるの役を果たしたのは暫くイギリスにとどまつていたことのあるエラスムスであつた。イタリヤ・ルネサンスと近代精神生活との間の結びつきがこのような点に見出されることは注意さるべきである。

けれども古代学芸の伝統を保存するところにのみケンブリヂ学派の功績があつたと言ふべきであらうか。

カッシレルがこの学派を完結するものと見たシャフツペリー伯の宗教哲学、倫理学、自然哲学、美学がドイツ文化の精神的指導者たるヘルデル、ゴンケルマン、ゲーテ、シルレルに与えた深刻な影響を顧みる時、彼等が近代精神の発展の上に残した足跡が決して小さくなかったことを知り得るのではないであらうか。彼等の思惟類型は成る程その時代の特殊性の故に経験論又ピュリタニズムの勢力の下に立たねばならなかったのではあるが、併しそれは却つてこの二者よりも近代的な、生き生きした特徴を示していると考えられる。

「実際、ケンブリヂ学派の全哲学的問題は吾々にとつては古臭くなっている。併し生命を持つものとして保存され且つその後の数世紀を貫いて動力として働いたものこそは、その中から彼等が生れて来たところの精神的プロブレマティクである。」この人々も亦一般的な形而上学的世界感情の一個の代表者としてその論理学、自然哲学、国家学を語ったのではないであらうか。ケンブリヂ学派の本来の弱点は実にその自然哲学にあった。即ちそれは数学的物理学に依つて王冠を奪われ、克服されたところのルネサンス的な生氣説に基づくものであったからである。だがこのような自然哲学と雖も数学的物理学と同じ妥当性を与えらるべきである。ここにこそそれがドイツの哲学者、詩人に及ぼした影響が理解されるのではないであらうか。

ケンブリヂ・プレートニストに対するカッシレルの解釈の正しいか否かはさて措くとしても、確かに従来一般の哲学史家の余り顧みなかつたこの一派の運動は、トリーとホイグとの闘争の宗教的形態としてのアングリカン及びピュリタンの闘争との結合に於いて、その中間派として現れたものであり、近代精神史の発展の跡を辿るものにとつて大いに重要視さるべきものを含んでいると考えられる。

海外哲学思潮 1934.4

一、プロシエ『英雄神話と原始人心理』。二、クレッソン『道德問題と哲学者』。三、グイエ『コント伝』。

一 プロシエ 『英雄神話と原始人心理』

原始人の思惟は吾々のような文明人の思惟とは全く異つた構造を持つており、両者の間に横たわる差異は程度上のものでなく寧ろ本質的なものである。それ故原始人の心理は吾々の精神生活から類推して行つては決して眞の姿がわからない。それは *prétorique* なのである。原始人の心理はそのものとして理解されねばならぬ。これはレギ・ブリュールが *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures* 以来最近の著書に到るまで一貫して渝らない根本思想である。人間の知識なり認識なりをその社会的被規定性に於いて見て行くという知識社会学又認識社会学がレギ・ブリュールの一派に依つて相当興味ある業績を生み出していることは誰でも認めねばなるまい。ここに紹介しようとするアンリ・プロシエ【生没不詳】の『英雄神話と原始人心理』(Brocher, H., *Le mythe du héros et la mentalité primitive*, Paris 1932, 126 p.) も亦古代の英雄伝説の構成を原始人に独有な思惟様式に基づくものとして説明しようと志すものであり、レギ・ブリュール的方法の適用であると見られる。

プロシエに従えば、人々が直ちに気づくことであろうように、古代の英雄神話は全く種類の違う二つの現象形態を持つている。その一つは、一度はヘラ女神の奸計のためにエウリュステウスに従属せねばならなかつ

たが、色々な冒険の末ついいは天上界に登つて不死となつたヘラクレスの如きに依つて代表されている明るい勝利者としての英雄であり、その二は、父のライオスを殺し、母のイオカステと結婚せねばならなかつたオイディプスが示している様な暗い不幸な英雄である。プロシエの意見ではこの二つの形態は統一的な複雑な原始形態から分れて来たものであつて、この原始形態は勝利と不幸とを共に現している英雄、例えばテセウスの如きに依つて立証されると考えられている。尤も英雄の非行は決して父を殺すという事だけに限られるのではなく、ペレリフォン【Persephon】の場合のようにすべての親族を脅かすものもあるのである。だが右の原始形態なるものの成立は如何にして説明されるであらうか。英雄が神話的なものであることは明らかであるが、神話に於いては並外れた事件の経過が人々に与えるところの驚きが重要な意義を持つてゐるのである。併し盲目的な宿命に導かれるままに近親を殺害し又パリスのように祖国に仇をなす英雄の悲劇的運命は如何に解さるべきであらうか。先づ第一に原始人には報復とか応報とかいう道德的觀念が全く欠けており、そこには善と惡との彼岸に立つ觀念だけが支配しているということは、例えば兄弟を殺したロムルス神話がこれを語っている。ロムルスはこうした非行にも拘らずローマ建設の功に依つて英雄とされておるのである。原始人の心理を理解しようとして吾々の世界に適用している報復又応報の觀念を持ち出すことは危険である。プロシエはその代りに相殺乃至填補の原理を見出す。すべての善きもの、又すべての幸福は苦しみと悩みに依つてのみ獲得されるということは日常的経験の教えるところであるが、これが経験を離れて神秘的方式にまで高められ、そして原始人の思惟を支配していたのである。強者はその超自然的な力を或る弱点に依つて相殺される。アキレスの踵はその例である。第二に原始人の社会集団に於いてはその成員間の

関係は極めて密接であり、一成員は他の成員と時に実体的同一性に於いてある場合がある。それ故同一の社会集団に於ける英雄甲は不幸なる乙に依つて代理されるという関係が成り立つ。プロシエに依れば、英雄神話の理解は右の相殺と代理との二つの原理に依つて完全となることが出来る由である。

これがプロシエの著書の荒筋であるが、英雄神話の問題は果してこう簡単に言いきつて了えるか如何かと考えたくなる。何れ専門家は多くの資料に依拠してこれを検討するであろう。併し著者が以上に紹介された英雄神話の説明を以つて近代に於ける天才の觀念にまで近づいて行こうとするに到つては吾々と雖も疑懼の感なきを得ない。

二 クレツソン『道德問題と哲学者』

アンドレ・クレツソンといえ、吾々にとつて非常に羨ましく感ぜられるあのアルマン・コラン叢書として *Les systèmes philosophiques* 及び *Les courants de la pensée philosophique française* を公にした人である。クレツソンがこの叢書に昨年新しく加えたものが『道德問題と哲学者』(Cresson, A., *Le problème moral et les philosophes*, Paris 1933, 202 p.) である。表題が示しておる様にその内容は旧著と多くの共通点を持つている。卑俗に墮することなしに通俗化することをモットーとしてゐるこの叢書のこと故、極めて簡単ではあるが同時に又一定の嚴密性を保持しておることは勿論である。

本書は三部に分れる。先ず古代の道德であるが、それは如何に様々な形態の下に現れておるにせずべてストイシアンに依つて表現された *seque naturam* の原理を基礎に含むものであり、宗教からの独立性を持つ

ているものである。次にユダヤ教的又キリスト教的道德であるが、それはモーセ的な正義の法にせよ、またキリスト教的な愛の法にせよ、兎に角神に依つて啓示された法に基づくものであつて、これはかの中世に於ける合理的又組織の構成を成立せしめたものであるが、中世の教父及び哲学者はプラトニスム、ストイシスムを利用しつつキリスト教的諸觀念をこの中に閉ぢ込めたのである。然るに一七・八世紀に到つては聖書解釈、合理的神学の批判、ホッブスに現れた道德規則の社会的起源に関する觀念の如きが行われるに到り、終にはかのカススイステイク【Kasulistik】が宗教的道德は適用し得ぬことを示したのであるが、これ等一切の事柄こそはユダヤ教的キリスト教的組織の崩壊を齎したものであると考えられる。かくしてここに自主的道德が生れる。すべての道德的規則の共通の根源を或は利害その他に求め、或はカント又コントの如く利害の彼岸に求めるところの人々、更に又道德的規則の合理的根拠を探ることを断念してショーペンハウエルのようにそれを形而上学的根源に帰せしめることに依つて説明を行わんとし、又レギ・ブリュールのように社会状態に依る被規定性に基づいて説明を企てるなどという傾向をも生み出すに到つた。こうした傾向に就いてクレッソンは言う。『道德的感情の起源を知ることには確かに重要である。併しこの起源を知るといふことは吾々が必要としている道德的規則を吾々に与えるに足るものであろうか。すべての異教的理論は個人が時に憂わしげに『自分の行為を規制するには如何したらよいのか』、又『今日では如何なる決定をとるべきであるか』という疑問を抱くことを妨げることが出来るであらうか。』アンドレ・クレッソンは、道德を基礎づけることなく単に道德規則編纂を企てた諸体系の吟味の後に結論して言っている。「哲學的反省は行為の一般的方向を弁明するに足るものである。そして哲學は個々の場合の特殊な解決を各人のイニシアティヴに委せるべきである。」

三 グイエ『コント伝』

コントの祖国フランスは毎年幾つかの新しいコント文献を生み出して行く。去年出たものの中にグイエの『コント伝』の第一巻がある。(Gouhier, H. 【Henri -, 1898-1994】, *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation an [du] positivisme : I. Sous le signe de la liberté*, Paris 1933, 315 p.)

アンリ・グイエが第一巻で取扱うのはコントがセン・シモンと逢うまで、即ち一八一七年八月までであるから、幼年時代、コレジュ・ド・モンペリエ時代、エコール・ポリテクニク時代が含まれる訳である。著者がこの時代のコントを描き出すために利用している資料は *Revue occidentale* の編輯者その他の実証主義者に依って細心に集められた多数の記録、モンペリエの歴史に関する諸文書、エコール・ポリテクニクの記録の如きものであるが、尚彼コントが終生感謝の意を表して渝らなかつたモンペリエの数学教師ダニエル・アンコントルに就いても調査を進めている。エコール・ポリテクニク時代のコントのノート、彼を教えた教授連の著書を調べてこの人々がコントに如何なる方針を指示したかを明らかにしている。これ等の資料を駆使する際に見られるグイエの方法は極めて精確であり、叙述も亦強く人の心を捕えるものがある。コントの両親、妹、家庭との関係、生徒としてのコントなどに関する記述は頗る詳細である。

併しながらコントの生涯を見るに当って最も興味のある点は恐らく彼の思想の発展史でなければならぬ。だが彼の精神的発展を論ずる場合にはコントはセン・シモンの弟子であると言われ、彼はこの師の説を剽窃したに外ならぬと語られるのが常である。勿論、コントとこの空想的社会主義者との間に多くの同一なもの

又類似したものが発見されるのは事実である。だがそれだからと言って、右のように結論されねばならぬのであろうか。ところでこの点に関するグイエの研究は従来の見解に対して稍々新しいものを示していると思われる。彼が序論の中に記しているところに依れば、「実証主義の主要観念をセン・シモンの著作の中に見出そうと努めることは、特にエネルギーの交渉に外ならぬものを書物上の比較の中に発見しようとするものである。又この方法は忽ちにして重大な帰結、即ちセン・シモンを読めば科学的政治学の夢及び一切の実証的知識を組織する哲学の夢を認めることは容易である、という帰結に到達するであろう。併し本書を進めて行くに当つて吾々は右の二つのテーマがセン・シモンに始まると言われていることに就いてはつきりさせておいた。コントは当時としては全く陳腐なものであつたこの希望を借りるためにパトロンを待つような必要は毫もなかったのである。」

吾々はグイエがこの主張を如何に論証するかを見ねばならぬ。それには『*Pressentiment de l'esprit positif*』と題される第四章を読めばよい。コントは学校ではラクロワやカルノの如き数学者の著書に親しんでおつた。然るにこの人々は科学の原理の研究を要求した人々であり、当時の青年達がその為に精力を浪費しておつた空虚な精密性を斥けた人々である。観察し得べき諸現象が還元されるところの少数の法則を求めることに依り哲学を建設せねばならぬ、と要求したのは、ジャン・バプティスト・ビオであつた。これが当時の学者を貫く野心であり、希望であつたことは、コントの学友たるラメやデュアメルの子孫が、その一生を諸科学の一般的方法の探究に委ねて悔ゆるところがなかつたことから知られる。併しながら実証科学に育てられた若き人々が他方又政治的改革に多くの関心を寄せておつたことも注意されねばならぬ。彼等の多くはセ

ン・シモンの徒となり、チュルゴーやコンドルセーに於いてそうであつたように公算論と結びついた科学的政治学の觀念が滲刺たる力を以つて彼等の心を掴んだのである。学窓のコントはフランス及びアメリカの革命に関する書物を読んでおつたことには同学の証人がいる。グイエは更にエコール・ポリテクニクの文法及び文学の教授であつたアンドリューに就いて報告している。アンドリューはコントが形而上学的段階と呼んだ時代を最もよく代表するものであるが、彼は青年コントの政治的及び哲学的觀念を守り培つた人であり、デカルトを斥けてロックの経験論を奉じた人であつた。論理学は彼に依れば実験的でなければならなかつた。コントはこの教授からブルテールとルソーとを教えられた。コントは一八一六年に書かれた『*Ma Réflexions*』(これは一八八二年六月一日の *Critique philosophique* に發表された)の中で「実証主義の根本的肯定及び彼の歴史哲学の方針を決定すべき印象」を語っているが、特に彼がルイ一八世を繞る人々がアンシアン・レジームの回復に努めていることに対して抗議しているのは注目すべきである。一八一七年のコントはモンジュやラグランジュに読み耽つている。この人々の名は『実証哲学講義』に於いて讃辭を以つて記されておるのであり、而も当時のコントは又政治の領域に於ける自然法則及び進歩の法則を発見したものとしてモンテスキューやコンドルセーを讃美しておつたのである。以上の事柄はコントの思想の發展の道を開いたものが決してセン・シモンではなかつたことを遺憾なく証擧立てていはいはしないであらうか。セン・シモンに逢う以前のコントは既に諸科学の哲学及び政治哲学の粗描を獲得しておつたのである。コントを以つてセン・シモンの剽窃者であるとする従來の見解に対立してアンリ・グイエは右の如き見解を述べている。

海外哲学思潮 1934.6

- 一、ライヒ『ファシズムの大衆心理学』 二、リチャード・フッカー文獻 三、
 バタフィールド『ホイグ党の歴史解釈』 四、ベルンハルト『歴史の意味』

一 ライヒ『ファシズムの大衆心理学』

歴史を唯物論的に見る人々にとって経済的發展及び現下の経済事情を審にすることが大切であるのは言うまでもないことであろうが、それにしても物質的基礎の政治的又動的諸過程への転化即ち心理的諸契機を余りにも軽く取扱っていると言われないであろうか。諸々の觀念構成が時代的制約を蒙っているということだけが指摘されてそれが一定の時代に対して持っている強力な作用を明らかにすることが等閑に附されていることは果して正常な状態であるだろうか。ギルヘルム・ライヒ【Wilhelm Reich, 1897-1957】の『ファシズムの大衆心理学』Reich, W., *Massenpsychologie des Faschismus*, Verlag für Sexualpolitik 1933, Kopenhagen-Prag-Zürich【平田武靖訳『ファシズムの大衆心理』】は右のような関係の下に於いて一応注目すべき書物であると考えられる。此書は先ずマルクス主義的心理学の試みとでも言うべきものであつて、精神分析学を大いに利用している。国民社会主義者のミュステイクが科学的的社会主義に対して勝利を得たという事実がライヒの出発点を形造るのである。国民社会主義は小市民層の運動としてこの人々の思维様式から始まつておるが、由来多くの人民層の中には経済上彼等がプロレタリア的構造を持つておりながら而もそこには小市民的心理構造が見出され

るのであつて、こうした態度は階級意識あるプロレタリアにも亦影響を及ぼさずにはないのである。経済的地位とイデオロギー的事情とのかかる開きが見通されてはならない。国民社会主義的プロパガンダの成功という事柄は即ち失望せる労働者階級がファシズムのイデオロギーを受容する用意を持っていることを示すものでなくてはならぬ。かくて若し行動及び思维が経済事情に対してかくも矛盾するならば、そしてそれが正に非合理的であるならば社会経済的研究だけで事を済ますのは甚しく危険でなければならぬ。マルクス主義の大衆心理学の問題提起の意義はここに認められる筈であらう。

革命的感情の発展は伝統の力に依つて阻まれる。併し伝統とは何か。伝統は如何にしてこのような力を獲得したのであるか。ライヒは階級意識の発展は自明なこととして深く立ち入らず、却つてこの発展の障礙に就いて語っている。この問題に関して彼の手掛りとなるものは性衝動の抑圧が持つ社会的機能である。これは生産手段の私有及び階級の形成と共に始めて生じたものであるが、児童の自然的性衝動の道德的抑圧こそは憂わしげな、いじけた、従順な市民への発展の母胎である。「性衝動の抑圧は経済的に圧迫されている人々を構造的に変化せしめて彼が自己の物質的利益に反して行動し、情感し且つ思维するようにする。」小国家として家族は支配的イデオロギーを生産し、後には成人もこれを脱することが出来ぬようになって了う。ところで国民社会主義的イデオロギーはこの家族イデオロギーを継承するものであり、非合理的方途を通じてその作用を営み、性衝動の抑圧を以つてその最も重要な補助者となすものである。国民社会主義的プロパガンダ、「文化ポリシェイズム」への闘争、血液の悪化への反対、道德を破壊するマルクス主義への宣戦、こうしたものの本質的諸要因はその作用をば性衝動を否定するような教育の成功から引き出していると言わ

れねばならぬ。この故に性政策は革命的文化政策の中心的要素をなすものである。著者ライヒは血液の純粋とか、指導者の原理とかいうようなドイツ・ファシズムの使用する根本概念を相当詳細に検討し、宗教の無意識的基礎の批判に多くの頁を割いているが、彼の意見に依れば教会とは資本の国際的又性政策的機関であると言われる。反動的影響の克服に必要な性衝動肯定の雰囲気というものは労働者階級の強力な、国際的な、性政策的組織を俟って始めて生み出されることが出来るものである。

宗教的問題に就いてライヒの持っている見解は稍々一面的の貶を免れ得ぬのではないであろうか。例えばカトリクの信仰に篤き人々がナチスに反対しておることは如何に解さるべきであろうか。又ファシズムのプロパガンダに依つて与えられているサディズム的要素の解放とも呼ばるべき点が、更に注意される必要があるのではないか。色々と注文は多いことであろうが、兎に角往々行われるようにイデオロギー的諸要因をきまり文句で片づけることをせずに、問題を正面から取り上げていることは高く買わねばならぬであろう。

二 リチャード・フッカー文獻

ゴットフリート・ミハエリス【Gottfried Michaels, 生没不詳】の『政治的思想家としてのリチャード・フッカー』(Michaëlis, G., Richard Hooker als politischer Denker, Ein Beitrag zur Geschichte der naturrechtlichen Staatstheorien in England im 16. und 17. Jahrhundert, (Historische Studien, Heft 225.) Berlin, E. Ebering, 167 S. 6,60 RM.) が出版されたのは昨年のものであるが、この本が最初から不幸な運命の下にあつたということは丁度一昨年同じテーマを中心とする優れた著書がイタリア人アレッサンドロ・パッセルン・デントレーズ【Alessandro

Passerin D'Entrèves, 1902-85】の手に依つて公にされてゐたからである。d'Entrèves, A. P., Riccardo Hooker, Contributo alla teoria e alla storia del diritto naturale, Memorie dell'Istituto Giuridico, R. Università Torino, Serie II, Memoria XXII, Torino 1932. 後者がトリノ大学の教授であり、既に聖トマス及び近世初期イギリスの法律論及び国家論に關して十分な研究を行つておる人であるに反し、前者の著書がドクトル論文である事を思い合わせるならば、両者を比較するということは余り当を得ておらぬかも知れない。而もこのイタリア人は久しくオクスフォードに滞在して多くの資料に實際に當ることが出来たのに引きかへ、このドイツ人はドイツで出版された欠陥だらけの文献に頼つてゐるのみであるという事情もこれに加わる。とは言えフッカーをドイツ人に知らしめるという点に於いてミハエリスの著書には大きな意義が認められねばならぬのであるが、元来フッカーはアングリカン教会の熱烈な擁護者であり、エリザベス王朝の最も美しい散文の筆者であるが、イギリス以外の地では余り知られておらず、ドイツでも極めて少数の人が而も政治的思想家としてよりも神学者としての彼を知つてゐるに過ぎない（尤もランケは嘗つて政治的思想家としてのフッカーに就いて語つたことがあるが）。ギールケすらも唯間接に——ランケを通して——彼のことを知つておつたのである。だがフッカーはイギリス以外に於いてももつとよく認識さるべき人である。一見彼はイギリスの教会及び制度の島嶼的關係と余りにも緊密に結びついておるよう見え、イギリス人ならぬ人々に向つて語るのは不適当なように思われるのではあるが、実は彼は當時の教會的並に國家的秩序の崩壞に關して超國民的意味を持つ諸問題を「普遍妥当的な」様式に於いて論じたのである。彼はその時代及び故國の激越な爭論を超えて高い思弁の領域に上り法の本質、國家の本質、個人の服従の根柢と範圍とに關する基礎的諸問題を究明し、法律哲

学と国家哲学との体系を建設したのである。

さてミハエリスはその著書を二部に分つ。先ず彼は「フッカーの政治理論とその範囲」を論じ、つぎに「一七世紀イギリスの政治理論の発展に對するフッカーの影響」を述べている。前半に於いては、その諸々の段階を通じて全宇宙を調和的秩序に於いて貫くとされる法則の理論が稍々詳細に展開されているのであるが、そこで著者が導き出している二つの結論は、一、偉大なるスコラ学者達、就中聖トマス其自然法の見解がフッカーに大きな影響を与えていること、二、フッカーはイギリスに於いては始めて国家の歴史的又法律的根拠としての社会契約説を唱えた人であり、従つてイギリスの国家論に一つの新しい地盤を提供した人であること。だがこの見解は決して新しいものでなく且つ幾度か反駁されて来たものであり、近くはアレン及び前記のデントレーズスが有力な理由の下に否定しているところであつて全く遼東の白豕の非難に値するように見える。後半は更に不完全なものであるが、この不完全さは主としてこの問題に關するドイツの文献が非常に欠陥多いものであることに起因するらしく思われる。それにしてもミハエリスの方法は余りにも「文献学的」であつて、一七世紀イギリスの諸文献からの片言双句を引用することに依つてフッカーの影響の跡を尋ねようとしていることは吾々をして慊焉の感を深からしめるものである。

三 バタフィールド『ホイグ党の歴史解釈』

ケンブリヂの講師バタフィールド【Herbert Butterfield, 1901-79】はイギリス歴史家に於ける諸傾向、即ちプロテスタント及びホイグ党を支持し、革命を讃美し、歴史的進歩の原理を重要視する諸傾向を明らかにするた

めに、そしてこれの批判を通じて自己の歴史観を述べるために『ホイグ党の歴史解釈』を著した。Butterfield, H., *The Whig Interpretation of History*, London, G. Bell & Sons 1931, 132 p. 4 sh. 元来この研究は歴史の哲学ではなしに寧ろ歴史家の心理学への一つの寄与である。若し歴史家が裁判官のように過去を見下そうと欲するならば彼は神の如きものでなければならぬであらうし、又様々な差異の基礎に横たわる統一を見出すところの調停者として自己を見ねばならぬであらう。歴史家は相互に抗争する諸党派を彼等自らよりもよく理解せねばならない。さてホイグ党の歴史家に於いて最も根本的な意義を持つ誤謬はと問うならばそれは彼等が過去を現代との関係に於いて研究しその結果実際は全く異つた概念の世界にあるものを以つて或は「根源」となし或は「予想」となすに到つておることの中に存する。彼等はその間に介在する一切の時代を一挙に飛び越えて直接的に結びつけようとする。「歴史の一般的行程」が問題となる場合に特に歴史が著しく単純化されるのは全くこのためである。だが併し眞の歴史的理解は人々が過去を他の世紀の眼を以つて見ようと努める時のみに到達されるものであつて、この場合歴史家は常に過去に於いて犯された罪を許さねばならぬ。と言うのは実にその罪が何故に犯されたかということとを彼等が発見するという簡単な事実に依つて然るのである。過去の全体より少し何ものも錯雑せる現代の全体を齎すことは出来ない。歴史家がなし得べき一切のことは即ち諸事件の移り行きを時代を追つて若干の蓋然性を以つて指示するところにあると言ふべきであらう。「凡ての歴史理論中最大のものはと言へば、恐らく人間の変遷の錯雑性の挙示と人間の或る行動乃至決意の窮極的帰結が逆賄し難き性格を持つということであらう。」如何にして過去が現代に転化して来たかということに対して歴史家が与え得る唯一の説明は根本的にはつまり一切の物語を残りなく繰りひろげ、その細い部

分に就いて語ることに依つて錯雑性を暴露する点にあるのであるが、如何にこの錯雑性を駢足で走り抜けたかというところにこそホイグ党歴史家の不幸が胚胎するものと見るべきであらう。過去を「概観」するの危険は、正に歴史の研究に依つて得られたというよりも却つて吾々が吾々の知識に与えた特殊な「組織」の結果に外ならぬような教説を歴史の中に忍び込ませるところにある。

道徳的評価の侵入は何処までも排斥さるべきであつて、歴史の価値は過去の具体的な生活が再び獲得したところの豊かさにあるのでなければならぬ。泉の底に何か絶対的なものがあるかのように、又時代と状況とから独立な真理というものがあるかのように、人間的又個人的諸要因や偶然的或は瞬間的又地方的事物を蒸発させても後に残るといふ何等の本質も歴史は持つていない。プロテスタンティズムの本質はあるであらうが、宗教改革の本質なるものはない。一切の歴史の代りに与えらるべき何ものもありはしない。だから歴史家は具体的なるもの、特殊的なるもの、個人的なるものを積み重ね、これに依つて転変してやまざる歴史の流転を明らかにするのである。偶然的なるものとは別に本質的なものを捕え得る如く思い做す程非歴史的な遣り方はない。歴史家は單純にして絶対的な判断を避け、吾々の一切の判断は時間と場所とに制約されておることを示すことに依つて正に歴史家なのである。——ルテルの事業の結果が彼の意図及び態度を弁明したとかその後の宗教上の自由を以つて彼に帰するといふようなことは出来ない。ルテル及びカルギンがそのために努力したのは統制の厳格さに対してではなくて、法王の放縱に対してである。若しもルテルが戦闘的な宗教に再び生命を与えることをしなかつたならばその方が思想の自由にとっては有利であつたに違ひな

い。ルテルとカルギンと法王とに共通な観念、即ち社会と政府とは一定の宗教の上に基礎づけられねばならぬ、凡べて思惟は宗教の支配を受けねばならぬという観念の中に悲劇の真の出発点が含まれている。寛容は宗教的無関心の出現に依つて世俗的理想として生れて来たものであり、これは宗教に対する社会の権利の発展の結果であるに外ならぬ。寛容とは宗教を政治に従属せしめることに依つて宗教改革の悲劇を克服せんとする試みである。だがホイグ党の歴史家にはこうした事態は判らない。問題のこのような転移は知る由もない。宗教的自由はプロテスタンティズムの中から直接に生れて来たと彼等は考えているのである。

四 ベルンハルト『歴史の意味』

ハインリヒ・フィンケその他の編輯に成る『指導的諸民族の歴史』Geschichte der führenden Völker, herausgegeben von Heinrich Finke, Hermann Junker, Gustav Schürer, Freiburg, Herder. は第一巻を一九三一年に世に送つたが、その序論をなすものとしてヨーゼフ・ベルンハルト【Josef Bernhart, 1881-1969】『歴史の意味』Bernhart, J., Sinn der Geschichte, Bd. I, SS. 1-143 (Preis des ganzen Bandes : 10 RM.) がその巻頭を飾っている。ベルンハルトは既に中世のミュステイクの研究で知られている人である。編輯者の序言に依ればここに問題となつてゐる一文は「全体に対する歴史哲学的な鍵」である。ところでベルンハルトの文章が目指すところは、歴史哲学の全領域に於ける諸問題とこれへの解答とを細大洩らさず歴史的に観察するところにあるのではなくて、カトリック的精神に立脚する告白の書であるのがその本領である。概観がその窮極の目標でないという事柄は、人々に対して歴史の意味に関する問題の答が与えられねばならぬという期待を抱かしめるところの

タイトルが物語っていないであろうか。事実この答は最後に明白且つ完全な形態に於いて提供されている。それ故にこの一文を本当に理解するためには二回目には逆に読まねばならぬであろう。全体は一二章に分れている。「聖書の歴史的意味」及び「聖書に依る啓示に従つて歴史の意味を論ず」の一〇章及び一一章が特に重要である。

歴史の意味は「神的にして永遠なる要因と人間的にして時間的な要因との協力乃至和解に於ける神の国の發展」(一一九頁)である。意味問題は時間的歴史経過を超越し、従つてその答解は信仰の領域にのみ見出されることが出来る。かくして意味解釈は意識的に神中心のとなり、その実質的規定はこれを聖書の中に与えられている神の啓示から得ねばならぬ。歴史哲学は歴史神学となる。人間認識の領域に内在的な意味解釈の凡ゆる試みは最初から斥けられている。例えばテオディセの問題の如きは人間中心的精神態度にあつてのみ可能なものであり、人間の認識能力を過大評価せるものである。「最も暗く、最も頑迷で、且つ最も不愉快なものはテオディセという漂石である。」(二四一頁)。意味問題に對するこうした答解を知るものはベルンハルトのこの論文の構成をよく了解することが出来る。それは「歴史認識の断片的性格」や「意味問題の困難」を指摘する。がそれは問題の深化又展開に役立つものであるよりも、本質上護教的規定を露呈するものである。何故かならば神から離れた離れた哲学は如何に出直しても断じて十分な答解に辿りつくことは出来ず又一系列の哲学的努力を概観することも閑聯なきバラバラな混乱の姿を呈示するに過ぎぬと彼が言つておるからである。「こう振り返つて見ると、抑々思惟のみが吾々の意味問題を決定する使命を有するものであるか否かの疑惑が起る。答解の混沌は自己及び自己の仕事の意味を決定的に認識しようという人間の狼狽

した行為の中に根を持っているのである」(三三三頁)。更にまた著者は歴史的又心理学的な多くの例を挙げて「超歴史への動向」を語っており、現代を歴史の意味解釈の規準に従わせて観察している。体系的哲学者はこうしたカトリクの歴史哲学に敬意を表することが出来るであろうし、歴史家は護教的方式のための事実の歪曲を嘆くであろう。併しそれは何よりも現代の精神史の解明のよき資料として見らるべきである。

海外哲学思潮 1934.7

一、ギルヘルム・フォン・フンボルト 二、シスモンディ 三、ルナン

一ギルヘルム・フォン・フンボルト

一昨年フランスでギルヘルム・フォン・フンボルトの伝記が公にされた。筆者はロベール・ルルー【Robert Leroux, 1885-1961】。二十七歳迄のフンボルトを記したものである。Leroux, R., Guillaume de Humboldt: La formation de sa pensée jusqu'en 1794, 463 p. Paris, Les Belles-Lettres. 一七九四年までといえば丁度彼がゲーテやシルレルと一緒にイエーナで生活しておった時代までであり、彼はその後数年間道徳又哲学の研究に携り他日政治家又言語学者としてその驥足を伸ばすべき素地を作っていたのであった。彼が生れた一七六七年からこの一七九四年にかけての全ヨーロッパは恰もフランス革命を中に挟んで未曾有の深刻な危機の中に立つておったのである。読者はルルーのこの書に於いてもフンボルトの魂を育んだ偉大なる転換の時代の空気をはつきりと感ずることが出来る。ところでルルーはフンボルトに対して純粹にブルフ的な哲学を吹き込んだエンゲルの講義、ロックの自由論を教えたクラインの自然法の講義、自由貿易論を説いたドームの経済学の講義、若いフンボルトに多大の影響を与えた之等の色々の講義を一々丹念に調査することを忘れぬ用意を持つてゐる。併し二十歳後のフンボルトはブルフの哲学が余りに現実的なもの及び具体的なものを可能的なもの及び抽象的なもののために犠牲に供していることに慄然と感ずる所であるが、又他方それにも拘ら

ずカントの道徳的信仰を通じて現実的なものに迫ることやヤコービのように感情を通じて現実的なものに迫ることは彼のところとはならなかった。蓋し信仰と感情とは共に立証の根拠たり得ぬものであるからである。だが漸次彼は理性に対して自発性の意義を重要視するようになり、この意味に於いてゾルネルの反動的な宗教令の批判を遂行し、宗教なき道徳の存立を認め、強制されることなく自発的な限りに於ける宗教のよき作用を肯定したのであり、又この精神に於いて一七九一—九二年の *Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der Wirkbarkeit des Staates zu bestimmen* に到る諸論文は書かれたのである。

人類の力の増大の要素をなすものは精神の内的又自発的な力であるが、国家はこれを全く放任すべきものである、とフンボルトは考える。けれども彼は啓蒙時代の人々の如く必然的な進歩というようなものを信ずることなく、精神は継次的諸相を通じて自己を展開するが、この諸相は決して相補う底のものではないという意見を持つているので、ヘルデルの考えているような意味での持続性に対しては全く敵意を抱いていると思われる。彼はフランス革命を批判に附する。その批判はこの革命が自発的な力に向つて理性を押しつけるという点を回つて行われるのである。永続的な政治制度は反省の結果として生れるものではないというのが彼の所見である。国家の果すべき任務は個人の教養を可能ならしめるところにある。このような自由主義と非合理主義との密接に結びついている精神状態に於いて彼は言語学の研究へ進んで行つたのである。彼はギリシャ文化の中にこそ今まで到達し得なかつた全体の理想が潜んでゐるのではないかと考え始めるようになった。ロベール・ルルーの伝記はフンボルトがゲーテ及びシルレルと逢うところで終つてゐる。

二 シスモンディ

シモンド・ド・シスモンディの名は前世紀の中葉には多くの人々の心に深く刻みつけられていたが、今世紀に入ってからには経済学史に興味を持つ人を除いては殆んど忘れられていと言つてよい。この忘れられたシスモンディの経済学者又社会理論家としての姿を僅かな紙幅の中に示そうとしたのがエリ・アレゾ【Élie Halévy, 1870-1937】である。Halévy, E., *Sismondi, Collection des Réformateurs sociaux*, dirigée par C. Bouglé, 148 p. Paris, Alcan, 1933.

シスモンディの「経済学新原理」*Nouveaux Principes d'économie politique*, 1819 が出版されてから百年以上になる。今日世界を震撼する経済恐慌の中に立つて吾々は彼がブレーキを失つたアンデュストリアリズム、機械の無限の進歩、必然的な生産過剰、市場の行きづまり、こうした諸の現象の齎す不幸に就いて語っているのを興味深く聴くことが出来る。だが問題が単に技術の進歩という点に係っているのではないということに注意するだけの余裕をシスモンディは持つている。「私の非難が向うのは機械でもなければ、発明でもなく、又文明でもない。それは近代社会組織である。即ち労働する人間から腕以外の一切の財産を奪い、而も彼等が必然的にその犠牲となるところの競争、損害へと赴かざるを得ぬ氣狂じみた競争に対して何等の保障をも与えぬような社会組織これである。今日、悪いのは発見ではない。悪いのは人間が発見の成果を分配するに不正なることである。」

以上の如くしてシスモンディは社会主義の戸口まで来たのである。併し細心にして綿密な觀察者を社会改革家から區別する溝は容易に越えることの出来ぬものである。彼は傷口を指で触れる。けれどもこれを焼灼

することは彼の敢えてせぬところである。彼は断念する。「労働の利潤を利潤の生産に協力した人々の間に分配するということは悪いことだと思う。だが経験が吾々に知らしめたのとは全く異なる所有状態を認めるということは人力を超えていることと考えられる。」

シスモンディが死んで六年後「マニフェスト」が大衆に向つて叫んだ。アレギが語るところに従えば、シスモンディズムはこれが基礎として役立つことが出来たと言える。何れにしても今日悲劇的な重圧を持つて吾々に迫りつつある問題を初めて方式づけたのはジャン・バプティスト・セーではなくして実にこのシモン・ド・ド・シスモンディである、とアレギは言っている。

三 ルナン

ここに紹介しようとするルナン伝はジャン・ポミエ【Jean Pommier, 1893-1973】の著で、一八四三年から翌年にかけてルナンがセン・シュルピスで過した日を中心として叙しているものである。Pommier, J., Jeunesse cléricale d'Ernest Renan: Saint-Sulpice, 700 p. Paris, Les Belles-Lettres, 1933. の書は同じ著者の Ernest Renan, Travaux de jeunesse (1843-44), Paris, Les Belles-Lettres, 1931 と併せ読まるべきものである。併し又この著者にはイシに於けるルナンに就いて別に研究があるのであるが、これは未だ発表されていない。

さて最初の著書の首めに「吾々の目的はこの極めて緊張した又秘められた生活を日を追い週を追つて跡づけるということにある」と記されている。ポミエは尊敬すべき良心と驚嘆すべき厳密さとを以つて、ルナンがこの頃書いた書翰及びエッセー、彼が聴いた講義及びその大部分の撮要を含むノートの如きを調べているが、

つまり問題は學校時代のこうした凡べてのものの中からルナン固有の思想、趣味その他を引き出すことにあるのである。この頃の彼は既にスコラ神學に背を向け始めておつた。説教又カテシズムに対しては殆んど興味を持つていなかった。キリスト教の歴史就中ヘブライ語學に関する彼の注意が高まりつつあつたのもこの時期であつて、彼はその將來を教授の職の中に見出しておつた。宗教的信仰に於ける危機なるものの痕跡は見出されない。彼の内的生活は常に完全なる統一を保つておつたと考えられる。

ボミエの七〇〇頁の本の骨子をなすものは大体以上の如くであるが、哲學史という観点から見ても有益なのは第一部第六章 (Connaissances et idées philosophiques) であらう。ルナンはロスミーニの弟子たるカヴールの Fragments Philosophiques を通して後に彼の *Avenir de la science*, 1890 に於いて展開される一種の歴史哲學に如何にして到達したか。彼は又如何にしてカントの範疇及び道德的信念を知つたか。彼は如何にしてジェフロワにその心を惹かれたか。こうした幾つかの問に対する答はこの章が与えるであらう。彼は特に進歩の人間の諸條件及び自然並びに魂の運命に関する形而上學的諸問題に就いて反省した。彼の道德的觀念は既に「潜在的な自然主義」を示しており、恩寵に対しては何等の場所をも認容しておらない。ボミエの記す所に依れば、彼は特にキリスト教への執着の弱さをしみじみと感じておつたように見える。——尚他の箇所では吾々は当時ルナンが教會史に関する講義に向つて下している極めて自由な批判を知ることが出来る。一切の理論及び先入見に対して彼は警戒する。「研究者たるものは事實の前に跪かねばならぬ。事實に腕をさしのべて、汝の欲するところへ余を導け、と言わねばならぬ。」——更に他の箇所ではル・イールの弟子としてのルナンが如何にその力を傾注してヘブライ研究に向つておるかが語られている。これは後のルナンを知るもの

知ろうとするものにとつて特に重要な部分でなければならぬ。

さきに挙げた一九三一年のルナン伝には彼の説教の原稿、その他初期の神学上又言語学上のエッセー、カヴールに関する論文その他が編纂されている。参看さるべきものであらう。

海外哲学思潮 1934.9

- 一、クスビニアン書翰。 二、エラスムス著作選集。 三、エラスムス全集補遺。
四、ロレーヌの僧正とトリエント会議。

一 クスビニアン書翰

一九一七年のルテル記念祭に因んでプロイセンの文部省が設置した「宗教改革反宗教改革史研究委員会」Kommission zur Erforschung der Geschichte der Reformation und Gegenreformation はドイツ人文主義者達が宗教又教会に就いて書いた著作の新版発行を以ってその重要な仕事としてしているのであるが、これと共に人文主義者の書翰の刊行が企てられているのは主として教会史の権威ハンス・フォン・シューベルトの努力に負うものである。この書翰の出版に依つて吾々は当時宗教又教会の問題に関して鬱勃たるものを内に蔵しておりながら出版物を通しての活動に従うことが出来なかつたところの人文主義者達に就いて貴重なる知識を与えられることとなつたのである。書翰集の第一巻をなすものはコンラート・ポイティンゲルのものであつて、編者はケーニヒ、一九二三年発行である。Briefwechsel Konrad Peutingers, herausgegeben von E. König. 第二巻は今茲に紹介しようとするもので、ハンス・アंकウィツ・フォン・クレーホーエン【Hans Ankewitz-Kleehoven, 1883-1962、底本では Ankewitz】の編纂に係る「ヨーハン・クスビニアン書翰」である。Johann Cuspinians Briefwechsel, gesammelt, herausgegeben und erläutert von Hans Ankewitz von Kleehoven, München, C.

H. Beck, 1933, 239 S. 15M (Veröffentlichungen der Kommission zur Erforschung der Geschichte der Reformation und Gegenreformation Abteilung: Humanistenbriefe, 2, Band.) 尚第三卷としてライケ編纂のギリバルト・ピルクハイメル書翰が出版される筈である。Briefwechsel Willibald Pirckheimers, herausgegeben von E. Reiche.

クスピニアン【1473-1529】はシュヴァインフルト・アム・マインに生れ、間もなくギーンに移つて茲に住んだ。一八歳の時マキシミリアン一世から月桂冠を授けられ、弁論術、医学の教授として、言語学者として、歴史研究者として、大学管理者として、宮中顧問官として、外交官としてその華かな生涯を送つた人であるが、特に彼がコンラート・ツエルテスと共にギーンに於ける人文主義の発展のために尽した努力は永久に忘れられてはならぬものの一つである。彼の活動期はギーン大学の最盛期、恰もツエルテスが Germania illustrata 大計画を抱いており、又マキシミリアン一世が王朝的又系譜学的興味に惹かれてシュタビウス、マンリウス、ズントハイムの如き学者を含む協働者達を鞭撻しつつあつた、ドイツ歴史学のために最も祝福さるべき時期と一致する。

クスピニアンの著作は歴史的研究が大部分をなしている。彼は古代の歴史家及びコスモグラーフのものを編纂注釈し、ディオドロス・シクルス、ゾナラスを発見し、オットー・フォン・フライジンクやマティアス・フォン・ノイエンブルクのことを初めて編纂しただけでなく、ローマ史及び中世ドイツ史に関する久しきに亙る研究の成果を収めた三つの大著述を残しているのである。De Romanorum Consulibus, De Caesaribus et imperatoribus Romanis, Austria. 何れも彼の歿後出版されたのであるが、バーベネルク伯時代からマキシミリアン一世の死に至るオーストリア史を取扱っている Austria は勝れたる歴史的批判と地方的記述に於い

て地勢的なものを細密に論じたことに依つて卓越して——尤も附録の地図は失われているが——おり、彼の *Diarium* 及び「日記」と共に今日も尚史料として独自の価値を持つていると考えられる。又その量に於いて遙にこれを抜いている帝王史 (*Caesares*) は当時のイタリヤ人文主義者から独立に行われたものであるにも拘らず注目すべき業績として記憶さるべきものである。

以上にその名を挙げ又挙げなかつた多くの著作は寧ろ文献学者に興味のあるものであるが、アंकギツツの編になる書翰はこれ等のものに対して新しい光を投げる事が出来る。クスピニアン家の人々は書翰の保存に余り注意していなかつたので、今日に伝わっているものは全体のうち極めて僅少な断片に過ぎないのであるが、総計六七、中には非常に長文なものもあつて、これ等は一九〇九年に「日記」の原本を発見し、クスピニアンの手蹟に対して並ぶものなき造詣を持ち多くの努力を惜しまぬところのアंकギツツを俟つて初めて吾々の前に提出され得べきものであつたのである。附録の外交上の訓令五篇はマキシミリアン一世、カル五世、フェルディナント大公の下に於けるクスピニアンの政治的活動、ハンガリヤ派遣、一五一五年七月一七日のギーン会議のための準備活動（これに就いては *Diarium* にも記述がある）、ハンガリヤとトルコとの平和条約に対するオーストリヤの干渉、カル五世の皇帝選挙に関するポーランド王ジギスムント及びハンガリヤのルートギヒとの交渉の如きに就いてよき研究資料を提供するものである。各篇に附せられた詳細な注釈はアंकギツツにして初めてなし得るところであつて、就中政治的内容を盛つた部分に就いては欠くべからざるものである。尚ギリバルト・ピルクハイメル、ヨーハン・ロイヒリン、ヨーハン・エック、マルチン・ルテル、その他吾々にとつて親しみ深い名前はこの一卷を読むものが到るところに出逢うのであつて、宗教

改革時代を研究するものにとって一読を要求するのも亦理由なしとせぬであろう。

二 エラスムス著作選集

前述の「宗教改革反宗教改革史研究委員会」の手でロッテルダムのエラスムスの著作選集が公にされたのは昨年のものである。Desiderius Erasmus Roterodamus, *Ausgewählte Werke*, in *Gemeinschaft mit Annemarie Holborn herausgegeben von Hajo Holborn*, München. C. H. Beck, 1933. XIX+329 S. 16 M. (Veröffentlichungen der Kommission zur Erforschung der Geschichte der Reformation und Gegenreformation.) 若し書物が世に出る時に依つてその運命の幸と不幸とが決定されるとするならば、この書は極めて幸福な星の下に生れて来たのでなければならぬ。蓋しフィチンガの立派なエラスムス研究出でて人々が未だその強い影響の下にあり、又ブアイフェル【Pfeifer, Rudolf, 1889-1979】の注目すべき著作 *Humanitas Erasmi*, Leipzig, Teubner, 1931 が世に問われて間もない今日、而も *Opus Epistolarum* の完成を眼前に控えている時、この偉大なる宗教改革者に対する人々の関心がこの上なく強められているという状況の下にそれは出版されたのであるからである。

今までに屢々印刷されたもの、例えば *Encomion Moriae* とか *Colloquia* の中でもその芸術的性質の故に或は解し易いために広く世の中に知れ亙っており直接に読者に向つて語っておるもの、フォン・ヴルテルに依つて既に信頼すべき版が出ていて（一九一〇年）、ルテルとの決裂を分明ならしめる上で大切な *De libero arbitrio* の如きは本選集には収録されておらない。その代りキリスト教再興のための彼の苦闘 *Philosophia Christi* 又 *Philosophia caelestis* に関する彼の見解を伝えて遺憾なき諸論文が収められている。一五〇三年に

初めて印刷された *Enchiridion militis christiani*, 一五一八年の *Epistola ad Paulum Volzium*, 新約聖書への手引のための書翰 (*Paraclesis, Methodus, Apologia*) 及び *Ratio perveniendi ad veram theologiam* の如きがそれである。テキストを従来の諸版及びクレリクス版全集と対照し、その間の異同を一々記入するなどの注意に欠けることなく払われており、引用句の出典も詳細に記されている。

三 エラスムス全集補遺

前にエラスムス著作選集に就いて述べたが、同じ年にオランダでエラスムスの短論文が集められて公にされた。編者はファークグスンである。Erasmii Opuscula, a supplement to the Opera Omnia, edited with introduction and notes by Wallace K. Ferguson, The Hague, Martinus Nijhoff, 1933, 373 S. 10fl. 一七〇三——〇六年にライデンでジャク・レクレルク【正しくは Jean Le Clerc であろう】の手に依って出版された Opera Omnia Erasmi の補遺であるが、今まで全く知られなかったもの、匿名のもの、人の知らぬ様な土地で発行されたものが丹念に集められている。その中での庄巻が *Julius exclusus* であることは恐らく異論のないところであろうが、併し従来その著者がエラスムスであるということは執拗に否定されて来たものである。今日ではこれをエラスムスに帰する見解は十分な根拠を獲得している様に見える。アンリ・オーゼの如きは尚頑固にこれの否定を続けている (*Revue de Littérature comparée*, VII, 1927) が、それにしてもファークグスンの細心な注意の下に成った本篇に就いてその見事な皮肉を読み得ることは吾々にとって大きな喜びでなければならぬであろう。(編纂者はその序文に於いて右の問題に触れている。)

その他の諸篇は様々の時代にもなされた多くの詩を除けば、殆んど凡べて一五一三——二〇年に書かれたものであつて、丁度エラスムスが教会内部の改造の為に立ち上つた時代のものであり、当時の彼の氣魄をよく示していると思われる。Hieronymi Sridonensis vita. は聖アウグスティヌス及びルテルとは反對にエラスムスの精神的パトロンと呼ばれるべき教父聖ヒエロニムスの生涯を叙したもので、エラスムスが編んだヒエロニムス著作集の序論をなすものである。Chomadi Nastadiensis dialogus bilinguium ac trilinguium は彼がその Collegium trilingue Busidiani のためにルーヴン大学と戦つた闘争の中から生れたものであつて、一五一九年の春に書かれている。これと結びついて読まるべきものとしては Apologia qua respondet duabus invectivis Eduardi Lei がある。以上は主として哲学的人文主義的なものであるが、神学的又宗教的のものとして Acta Academiae Lovaniensis contra Lutherum が収められており、賢王フリードリヒのために草された Axiomata Erasmi pro causa Martini Lutheri. 最後に Consilium cuiusdam animo cupientis esse consultum et Romani pontificis dignitati et christianae religionis tranquillitati が採録されている。右の三篇はブルムスの宗教會議の前年に於ける彼の宗教上の態度を知る上に最も大切なものであらう。

四 ロレーヌの僧正とトリエント會議

ルートギヒ・パストールはロレーヌの僧正シャルルの複雑な人物をよく研究することの必要を説いたことがある。オートラム・エエネット【Henry Outram Evemet, 1901-64】は当時のフランス史を論じた時にこの解し難き人物に関する叙述を与えた。ところで同じ著者が一五六一年のボワシ會議に関する研究に続い

て、一五六二年四月のトリエントの會議に就いての研究を發表したのである。Evenet, H. O., *The Cardinal of Lorraine and the Council of Trent. A Study in the Counter-Reformation*, Cambridge, University-Press, 1930, XVII+566 p. 25 sh. 様々の資料、國際的文獻、多くの特殊研究をよく渉獵参照してその解釈に於いても事實資料に於いてもよく先行者を凌駕している。會議進行中のフランスの情勢、決議に對するフランス側の態度、會議に際して僧正が果たした個人的役割など欠けるところなく記述されている。

僧正の人格の分裂、そのフランス社会への影響、プロテスタントの参加に依るキリスト教的統一再建のための一般會議の努力、國民會議の権能及びカトリシムとプロテスタンティスムとの間の教理上の接近に基づく宗教的國民的協定、フランスの寛容政策、これ等は仮令それにエラスムスの精神と改革者の精神とが混じておるにしても凡べて純粹政治的見地からのみ理解するべきであるが、エズネットの著書を手にして明らかにすることはその際僧正シャルルがイニシアティヴを握つていて、唯寛容政策に就いてのみそうでないことである。彼の仲間及び相手役、即ちミシエル・ド・ロピタール、僧正フェララその他の指導的人物に就いても多くの新しい光が投じられている。反宗教改革運動の歴史を知ろうとするものにとつては参照が要求せられるであらう。

海外哲学思潮 1935.1

一、誤謬の問題 一二、シルレル文献二種 三、ホップス文献

一、誤謬の問題

哲学上、価値といえど真・善・美等のことでありいつも積極的価値が問題になっている。偽・悪・醜等の消極的価値は価値の反面に常に予想されている筈であるが、何か意義の乏しい否定態、いわば陰影の如きものとして取扱われるに過ぎない。そのうち、悪の問題だけは神義論の題目として従来、形而上学の重要な部門を占めていた。理論上の偽、一般に過誤、誤謬というような問題も悪の問題の一部、その枝葉と看做されがちであった。しかし問題の性質からいえば過誤、誤謬の方が一般的であるばかりでなく、それ以上に現代的意義をもっていると思われる。弁証法の再認識、それと実践との関連というようなことが先程から特に注目されるようになって、偶然の法則としての統計的認識などが再び論理学、形而上学の研究圏内に呼び返えられるに到った。この際、誤謬の問題はどうしても看過し得ないものとなってくる。それは従来論理学教科書が採録する過誤の諸形態の列挙とは自らその意義を異にし来るべきである、誤謬はまた人間心理と深い関連にある。しかしそれはただ従来からの錯誤の心理学というようなもので尽さるべきではなからう。いわば哲学的人間学の一項として扱われるのが当然であらう。誤謬の問題はざっと右のような重要さを現代の哲学に対してもっている。それなら先ず過去の学者がこれを如何に取扱ったかを回顧し概観することは必要で

ある。かかる目的への手懸りを与えるのが左記の書物である。

Leo W. Keeler [— William —, 1890-1937], *The Problem of Error from Plato to Kant, A historical and critical study*. Rome 1934.

著者については審かでないが、グレゴリア大学の哲学史教授という肩書がついている。序文その他から察していわゆるネオ・スコラ派に属する或いはそれに近い人であるらしい。著者は主として認識論的立場から論述を進めている。彼が数年前、大学で認識論を講じその際判断の本性に關して困難に逢着しその副産物として本書ができたのだという。著者によれば吾々の認識は四つの条件の下に成立している、一は認識する主観とその作用から全く離れた實在する事物、二は有限的な悟性能力であり感覚によつて供せられる材料を通じて部分的に世界を知り得る能力、三は判断を介しての知識であり、それは實位が主位に属することを理解する心意的綜合ばかりでなく、肯定しまたは否定する同意 *assent* という独立の作用を含んでいる、四は肯定されまたは否定されるものが明瞭に理解されない場合における同意に対する自由意志の影響、これである。その内著者は判断の解釈に於いて、また誤謬論に於いて「同意」という要素が特に重要であり中心たるべきことを強調している。本書はソフィスト及びプラトール、アリストテレスから始まつて、アリストテレス以後の諸派、聖アウグスチヌス、聖トマス、スコトウスと後期スコラティクス、を経てデカルト、スピノザ、英国思想家、カントと十章に分れてゐる。著者はこの問題の流れが決して解決を目指していないことを認め嘆じてゐる。その中に判断を結合と分離、要するに關係の知覚とみるアリストテレスの見解と、自由なる信念に注意を集中するアウグスチヌスの見解との二条の伝統が目立つ。著者は就中トマスの思想が右の四つの条

件を適宜に配合していると考え、特に彼の誤謬論の叙述に力を注いでいる。その辺に著者の傾向の特質をみることができよう。

二 シルレル文献二種

一

一方に於いて「個人を時代精神の単なる伝声器に転化してうシルレル的方法」が批判されそれに対立してシェークスピア的又バルザック的方法が高く評価されておると共に、他方社会と個人との間に横たわる問題を仮令ドイツ的特殊性の下に於いてであるにせよ兎に角一八世紀風に即ち個人に重点を置きつつ解決しようとしたシルレルが現在ナチス文化政策に依つて非難せられているということは実に現代に於けるシルレルにとつて二重の不幸を意味するものでなければならぬ。一八五九年のシルレル生誕百年祭の当日ヤーコブ・グリムは全ドイツに響き互る「鐘の歌」に就いて語らざるを得なかつたのであるが、来るべき一九五九年一月一〇日は如何なる意味に於いて祝われるであろうかは軽々に逆睹し得ぬところであるにしても、現在の難局に立つドイツ本国が愛国詩人シルレルに与えている待遇は恐らく注目すべきものたるを失わないであらう。でここではこのことを明らかにすることに若干の寄与をなすべく最近のシルレル研究の一二に就いて報告することにしよう。【生没不詳】

Wilhelm Iffert 【生没不詳】，Der Junge Schiller im Weltanschauungskampf seiner Zeit, Weissenhaus, Halle(Saale)-Berlin 1933, 135 S. この書物は一九二六年に Der junge Scheller und das geistige Ringen seiner Zeit. なる標題の下

に公にされたものの第二版であるが、初版が予想以上に歓迎されたため余り内容に改変を加えずに再刷に附したものであると、著者は他の多くの人々と共に根本に於いては勿論世界観の危機に外ならぬところの現下の恐るべき危機に当ってシルレルが益々大なる意義を獲得するものとの確信を抱くが故にこの事物が持つ現代への強い関聯を標題に依つても亦表現しようと決意したのである」(序文)。

さてシルレルに一七八一年に若き日にものされた詩の大部分を集め友人達のものと一緒にして *Anthologie auf das Jahr 1782.* を編んだ。これがシュートイトリン及びその一派を中心とする人々に対する競争から生れたものであることは普く知られているところであるが、イフェルトの書が若きシルレルの思想を語るに際してその基本的材料とするものはこの「アントロギー」であつて他の作品は単に補遺としてのみ取り上げられるのである。勿論この場合シルレルのものである旨が明白であるような詩のみが取り出されることは言うまでもない。本書は三部及び附録に分れる。第一部は *Die Ideenwelt der Anthologie=Gedichte*(S. 1-21). 第二部は *Die geistigen Strömungen des 18. Jahrhunderts in ihrer Wirkung auf den jungen Schiller*(S. 22-116). 第三部は *Schillers geschichtliche Bedeutung*(S. 117-124). 附録 (S. 125-132). 尚外に三六頁に互る注が別刷として添附されている。

第一部は「アントロギー」に収められているシルレルの詩の精神的内容を論ずるものであつて、(一)「愛の哲学」、(二)「死の哲学」、(三)「ピエティスムスの見解」の三項に分けて記されているが、本書の中心を形造るものは総頁の大部分を費しているところの第二部即ち「一八世紀の精神的諸潮流を論じてその若きシルレルに及ぼせる影響に及ぶ」という部分である。吾々も亦この部分に重きを置きつつ紹介しようと思

う。——第二部の(二)は「ヴュルテンベルクのピエティスムス」と題される。本来の啓蒙思想が悟性の権利と力のために叫ぶ時ピエティスムスはフランスのジャンセニスムと同じく直接的なる感情の権利と力のために語っているのであるが、このものは又啓蒙思想と同じくカトリクに対立してキリスト、神、全宇宙との直接交渉を説いたのである。ところでこのピエティスムスはプロイセンに於いては主として貴族の間にその力を持つておつたのであるが、それに反しヴュルテンベルクにあつては市民及び農民の間にその根を張つておつたのである。シルレルの母は既にこの傾向を持ち、カール・オイゲン公に阻まれてその志貫徹することは出来なかつたが、彼が一時牧師として身を立てようと欲したことも亦この母を通してのピエティスムスの影響に依るものであり、こうした思想は一三歳の時の彼の最初の詩の中にも窺われるところである。當時活躍しておつたゲレルト、ウーツ、クロプシュトック、就中最後のものがシルレルに及ぼした影響は最も大きいと言わねばならぬのであつて、この人々は皆例外なしに哲学、宗教、文学の結合を以つて特徴づけられるような思想の持主なのであつた。併し間もなく彼が士官学校に入学してそこを支配する儀式一点張りのキリスト教の下に生活せねばならなくなつた時、かかる環境は幼時から彼の内部に培われておつた宗教心の成長を却つて阻害し、彼をして母及びクロプシュトックの思想から離れようとするに到らしめたのであつた。かくて「アントロギー」を支配するものは宗教への疑いと信仰との奇妙なる結合、即ち一方に於いては宗教及び教会への鋭き批判と他方に於いては神と靈魂の不滅とに対する確固たる信念及び宗教の価値に関する意識との結合である。——(2)「ライブニツとドイツ啓蒙思想」。シルレルが士官学校生活が彼の驥足を伸ばさしめず徒らに圧迫と干渉とを加えた旨を非難していることは衆知の事実であるが、實際のところカール・

オイゲンは典型的な啓蒙君主であつて、授業の如きも哲学の講義がその中心をなし、これを通じて当時の啓蒙思想が相当自由に流れ込み、寧ろその頃としてはこの学校はそこに充ちている自由の氣の故に大いに羨まれ又讃えられておつたのである。就中教師アーベルは折衷的哲學者として盛に啓蒙思潮を生徒に伝え、これに依つて生徒の声望を一身に集めており、シルレルも亦これに私淑する一人であつたことは勿論である。ライプニツもブルフも彼は直接には読まず、読んだものは精々流行のメンデルスゾーン、ブルツェル、ガルエなどの通俗哲学位のものらしく、これを介してライプニツ及びブルフを知つておつたものようであるが、間接的にしても調和とオプティミスムとに貫かれるこのドイツ啓蒙哲学が彼に及ぼした深い影響は「アントロギー」の隨所に看取されるところである。——(3)「イギリス道德哲学」。當時のドイツに対して力のあつたイギリス哲學者としては先ずシャフツベリが挙げられるが、それはポープ、リチャードソンの如き文学の形態をとつてドイツを訪れ、ハレル、ウーツ、クライストなどはこのシャフツベリの精神を身に体していた人々であり、シルレルがクロプシュトックを離れてから漸次近づいて行つたギーラントは愛を基調とするシャフツベリ倫理學の信奉者であつた。愛の觀念はシルレルの童に青年時代のみでなく更にその後の精神生活に於いても最奥の基礎を形成するものであるが、これは実に彼がシャフツベリから得たところのものである。そして當の哲學者以上にこれを深刻に把握したところのものであつた。シルレルにとつて一切の完成が愛の中に行われ、そしてこれこそが最高の世界法則であり、その俚世界の本質をなすのであつたことは

Liebe, Liebe leitet nur

Zu dem Vater der Natur,

Liebe nur die Geister--.

の言葉から察せられる。シャフツペリと共にここで重要視さるべきはアダム・ファアグスンである。ファアグスンの著作は特に士官学校生徒の愛読書であり、カール・オイゲン公自らもこれに傾倒しておったのである。ファアグスンはその著書に於いて人類の歴史を個人の歴史に先行せしめ、人間の願望、行為、権利、義務の如きを個人と社会生活との関係から導き出しているが、こうした方針はシルレルが社会的事物に就いて語る時常に採用するところのものであり、彼の二つの卒業論文にはファアグスンからの引用句が見え、就中その独訳者ガルエが附した注は殆んど暗記しておった程である。――(下)「経験論と唯物論」。著者イフェルトに従えば人間は現世の生活に絶望しペシミステイシユになると唯物論に奔り又感覺論に赴くのが普通である由である。この見解の価値は余り保証出来そうもないが兎に角彼はこれを基礎としてシルレルと唯物論との関係を明らかにしようと努めているのである。ところで絶望的であるという資格はシルレルが十分に持っているところである。祈祷、食事、散歩その他一切の日常の行動が命令に従って行われるという調子の士官学校の窮屈な生活への呪、而も学校を卒業したと思うと又カール・オイゲンの命令で自己の意志に反して軍医とならねばならなかったこと、宮廷の腐敗しきった様子に対する憤慨、尊敬しておったシューベルトの入獄、友人シャルフェンシュタインとの絶交、アウグスト・フォン・ホーゼンの死、山積した悲観材料に加えてシルレルが医者として生理学の知識を持つておるため精神が肉体に依つて規定されるという知見に対して甚だ親しい関係を持たざるを得ず、且つ当時彼自身は読まなかつたようであるが四辺の空気にはフランス唯物論の影響が充満しておったのであるから普通の例で行けばシルレルが唯物論者になることは殆んど確

実な筈である。だが結局シルレルは唯物論の陣営に身を投ずることなくして済んだのである。かのカール・フォン・モールの中に現実に打ちひしがれたシルレルの姿を見ることが出来る。その絶望は併し根本に於いては Wollen と Können との間の矛盾に由来するものである。唯物論者とならずに済んだシルレルは今現実の生活に絶望して何処へ行くのであろうか。

Aber in den heitem Regionen,

Wo die reinen Formen wohnen,

Rauscht des Jammers trüber Sturm niche mehr.

Hier dart Schmerz die Seele nicht durchschneiden,

Keine Träne fließt hier mehr dem Leiden,

Nur des Geistes tapfter Gegenwehr.

この詩が語っておるように経験又現実のペシミスムスから逃れたシルレルは観念のオプティミスムスにその身を委せたのである。——(G)「ルソーの歴史哲学」。悟性の万能に対して心情の権利を要求するルソーはフランスにあつては政治理論上重大な役割を果たしたが、ラインを渡つては寧ろ文学上かのシュトゥルム・ウント・ドランクの運動に強い刺戟を与えたのである。ヤコービがギーラントの『Teutscher Merkur』に寄せたルソーに関する論文に依つてシルレルはルソーを知つたらしくルソー自身の著書は読まなかつたようであるが、彼を取り囲むドイツ精神界のルソー熱はさなくとも彼との間に人間的に多くの共通点を有するシルレルに深い影響を与えずには措かなかつたのである。シルレルがカントを超え又背いたと言われる事情の如きもルソー

に於ける心情の権利の主張との関聯に於いて考えられ得ぬであらうか。

以上が第二部の概略であるが、「シルレルの歴史的意義」を論ずる第三部は、(一)「時代の子から時代の指導者へ」、(二)「一八世紀の哲学、宗教、文学」に分れ、附録は(一)「若きシルレルに関する研究の現状」、(二)「方法に就いて」、(三)『アントロギー』の歴史的価値」に分れているが、取り立てて紹介する程のものではない。吾々は本書を讀過し來つて抑々これが前世紀以來就中一九〇五年を中心として盛に行われたシルレル研究に対して何等かの新しいものを附け加えているか否かを疑わざるを得ない。別冊の詳細な注は成程著者が従来のシルレル研究文献を広く渉獵しておることを告げ知らせてはいるものの、一般に研究の水準を一步でも高めるために寄与し得ているかという点に到つては肯定を以つて答えるに躊躇せざるを得ないのである。だが序文に記されているような現下の危機に於けるシルレルの重要性に就いて別にはつきりしたことが語られていないのは遺憾である。この欠を補つて余りあるのは恐らく次に紹介する小冊子であるに相違ない。

二

“Lebe mit deinem Jahrhundert, aber sei nicht sein Geschöpf; leiste deinen Zeitgenossen, aber, was sie bedürfen, nicht, was sie loben.”の一句は多くの人々が記憶するシルレルの言葉の一つに属する。(Briefe über die ästhetische Erziehung des Menschen, IX) この言葉は苦い良薬を世の人にすすめる場合に好んで用いられるものであつて、現にリットが精神諸科学は学としての体面を傷けることなしに如何にしてナチスに奉仕することが出来るかという難問を解決するために書いた書物 (Theodor Litt, Die Stellung der Geisteswissenschaften im

nationalsozialistischen Staate, Leipzig 1933, 24 S.) に於いての言葉は幾度か利用されているのである。さて時代と共に生きることを使命とし且つ政治詩人又愛国詩人として死後種々の機会に引き合いに出されて来たシルレルが今日のような転換期に際して仮令その思想が若干個人主義的であるにしても、又就中その初期に於いて所謂革命的であり過ぎたにしても、これを地下から呼び出すことなしに放置しておくという法はない。「現下の恐るべき危機に当つてシルレルが益々大なる意義を獲得するものとの確信」を抱くのはひとりイフェルトのみではないであろう。オットー・ホイシエレ【1900-96】の「シルレルを論じて現代青年に与へ」という小冊子は全くこの点でイフェルトの残した仕事を担当したものであったのである。Otto Heuschele, Schiller und die Jugend dieser Zeit, W. Kohlhammer, Stuttgart 1933, 39 S.

この本が青年に宛てて書かれたものであることは明らかであるが、宛てられたものは決して一切の青年ではないのである。著者の語るところに依れば現代青年は先ず二群に大別される。一に精神を憎むものであつて進歩の理念に盲従し且つ空想的イデオロギーに基づく権力の独裁を確信するものである。他はこれに反して創造的精神を一切の生活の根源と考え、現下の危機から血路を見出すことを熱情的に求めるものであるが、この場合この人々は刻下の危機を以つて何よりも精神又魂に危機であると信ずるのである。この二群の青年なるものが如何なるものを指しているかを読者は容易に納得するであろうが、著者にとつては勿論第一群の青年などは問題でなく、唯第二群の青年だけが大切なものではある。併しさればと言つて第二群の青年全部がこの書物の読者たるべきではないのである。この種の青年は社会の凡ゆる場面に散在している。併しその中には孤独な個人として生活しておつて非常に臆病なため青年の集合などにも顔を出さず、信念に基づいて結

び合わされている一大共同社会の理念というものだけは堅く把持していて、呼びかけられさえすれば立ち上るといふ風な青年が多くいることを忘れてはならぬ。著者が今シルレルに就いて話しかけようとしているのは正にこの部類の青年である。由来高貴なる青年の特徴は指導を求め、常に偉大なるものを尊敬する心構を持ち、これに従属して仕えんことを願ひ、万人平等という如き墮落しきつた危険の上ない妄想を免れ、身分又階級という古来の法則を守り、一意専心共同体に奉仕せんとするところに見出される。何よりも慎しむべきは過去の偉大なるものを自然主義的又精神分析的に輕蔑することである。そして若しこの偉大なる人物を文学史上に求めれば先ずシルレルに指を屈さねばならぬ。今日の時代が欲している文学者は最早單なる文士ではない。「この新しき青年が文学上求めているものは正に彼等を彼等以上に高めるところ偉大なるものこれである。青年が詩人の中に求めるのは信頼するに足る指導者である。」かくして今日まで汚されて来た偉人としてのシルレルの姿を一切の汚濁から解放して真に吾々の指導者たるの地位につけることが重大な仕事となる。

偉大なるものとしてのシルレルを語るに當つて第一にシルレルの価値を低く見ようとする従来の試みと戦うことが要求される。この試みの重要な拠りどころは彼の事業を恣意的に切斷してその断片を取り上げるといふ方針にある。例えばその一著作を拉し來つてその欠陥を論ずることに依り詩人シルレルの功過を云々するのを定石とし、甚だしきに到つては彼から詩人としての資格をすら奪わんとするものさえあるのである。併しシルレルの偉大を明らかにしこれへ随順又奉仕することを念とする吾々にとつてはシルレルを全体として握むことが肝要である。彼が意志の力を以つて民族と共に又民族のために戦つて倦むことを知らなかつた

全生涯及び全事業を渾然たる一体として把握することが大切である。カントを通じて転身した彼は自己の人間としての完成を願ひ、この道に沿つて努力と精進とを続けこれに依つて又同時に民族のために奮闘したのであるが、この人間への道、人間の最高の高貴への道、人間の品位への道、それこそは恰もドイツ民族そのものの道である。シルレルが目指して進んだ目標はドイツ民族が世界人類の間にあつて果すべく課せられた使命、一つの実に精神的なる使命である。そして現代こそがこの使命を果すべき時代なのである。「人間の美的教育に関する書翰」に於いてシルレルはドイツ人に正道と邪道とを區別して示すことに依つてドイツ民族の偉大なる教師として立ち現れ、そして更にドイツ民族を審きの庭に引き出して常に最高のドイツ人が果さねばならぬところの苦悩多き役目を引き受けているのである。併しながらシルレルの示す道は如何なる民族も齊しく歩み得るようなものではなくして、ドイツ民族がそしてこの民族のみが歩み得べき道である。かくて吾々はシルレルの生涯と事業とを統一として即ちミュトスとして把握し、彼と結合することゲーテの如くせねばならぬ。

最後にホイシエレが青年に向つて特に推賞する作品は前記の書翰の外に "Über Anmut und Würde", "Über naive und sentimentale Dichtung" であつて、詩や戯曲ばかりに力を入れて読むことは嘗つて人々が陥つたところの混乱を再び招くに外ならぬ。寧ろ哲学上の論文を読むことが詩や戯曲を正しく理解するための条件である。

以上の紹介は恐らく読者が本書の標題を見て直ちに予想した通りに運んだかも知れない。著者のシルレル觀の委細に就いて一々批評を加えるというようなことは今の仕事ではないから差し控えるが、それにしても

現代ドイツの公許的シルレル觀がかかるものであるという事は当然の理と考えられることであり、又特に著作の読み方に関する注意の如きはよく現代的特点を發揮しているものとして注目さるべきである。著者自身も認めるであろうように上述の見解はひとりドイツ民族のみにそして就中精神を愛するドイツ人のみに通用するものであつて、日本の読者の如きは全然別個の知見を確立すべき正当の権利を要求し得る筈である。だがさきのイフェルトと言ひ今又このホイシエレと言ひ、ナチスの国には結局余り學問が進歩していないことを証拠立ててはいないであらうか。

三 ホッブス文獻

最近の社会的及び精神的狀況が興味ある問題の一つとしてホッブス研究を前面に押し出しているという事実は恐らくこの思想家に負わされている独特な運命と結びついているに相違ない。破は一面に於いては恰も現代社会が二重の意味に於いて批判に附している所の市民的人間としての個人の原理に基づいて社会理論を構成した最初の人であると共に、彼は他面に於いてその時代の性格の故に謂わば前者と矛盾するかに見える一つの全体主義的なるものを以つてその体系を蔽つており而もこの点は社会的全体の中に或る意味のリヴィアサンを見出そうとする現下の動向と無関係ではあり得ないからである。吾々は本誌第一三二号【1933.5】の本欄に於いてもホッブスに関する二三の文獻、即ち1) Bernard Landry, Hobbes, 1 vol. de la collection > Grands Philosophes <, Paris 1930, 278 p. ---2) Frithiof Brandt, Thomas Hobbes' Mechanical Conception of Nature, Levin & Munksgaard, Copenhagen, Librairie Hachette, London 1928, 396 p. ---3) Adolfo Levi, La Filosofia di Tommaso

Hobbes, Società Ed. Dante Alighieri, 1929, 423 p. に就いて極めて簡単ながら紹介を施しておいたが、勿論ホッブス文献の続出ということはその俾研究水準の向上を意味するものではないにしても、今日に到るまで『リヴァサン』の抄訳的介绍などがホッブス研究として通用している日本にとってはこれ等のものの一二に就いて内容の概観を与えることも決して意味なきことではない筈である。

ハインリヒ・シュライハーゲの『トーマス・ホッブスの社会理論』(Schreihage, H. 【生没不詳】、Thomas Hobbes' Sozialtheorie, Abhandlungen des Instituts für Politik, ausländisches öffentliches Recht und Völkerrecht an der Universität Leipzig, herausgegeben von Richard Schmidt und Hermann Jahreiss, Universitätsverlag von Robert Noske in Leipzig 1933, VIII+53.) は甚しく貧弱な小冊子である。著者は型の如く Elements of Law, De Cive, Leviathan の三者を基礎とし、ホッブスに於ける「根本的に新たなものにして且つ本質的に革命的なるもの」をその極端な個人主義の中に求め、先ずこの全体に対する個人の先行の原理をはつきりと浮き出させるために中世的社会理論特に聖トーマスの教説を紹介し、中世末期以来の唯名論の発展及びルネサンス以降の自然科学の進歩との関聯に於いてホッブスの歴史的地位を規定しているが、著者が序論の末尾に記すところに依れば「最近の社会理論の中に於いて益々強く自己を貫徹しつつある認識、即ち凡べて社会的秩序はこれを現実的な存在として又具体的なる秩序という実在として掴む時に始めてその最奥の本質に於いて把握出来るという認識はホッブスの教説をも新しい光の中に現れしめている。この意味に於いてホッブスの社会理論の分析を試みる事が本質上以下の詳論の課題をなすであろう。」全体の目次を示すと第一章序論、第二章社会哲学、第三章国家形成の理論、第四章代表、第五章主権、第六章法律論となるが、これからも察せられる通りホッ

ブスの社会理論を余り大した落度なしに紹介している代りこの点を除けば取り立てて言う程の特徴もないようである。けれどもホッブスの社会理論の結構を窺うためには便利な書物として推薦されるだけの資格は十分に持っている。

次に紹介しようとするユーリウス・リップス【Julius Ernst Lips, 1895-1950】の『イギリス大革命の諸政党に対するトーマス・ホッブスの態度』(Lips, J., Die Stellung des Thomas Hobbes zu den politische Parteien der grossen englischen Revolution, mit erstmaliger Übersetzung des Behemoth oder das Lange Parlament, mit einer Einführung von Ferdinand Tönnies, Leipzig, Erst Wiegandt, 1927, 288 S.)は少し古いものであるが余り利用されていないように思われるので又若干注目すべき書物であると信ぜられるが故に敢えてここに紹介する訳である。本書は三つの部分から成り立っている。即ち第一はテーニエスの序文(S. 1-8)、第二はリップスの本文(S. 9-100)、第三はリップスの手に成る『ビヘモス』の独訳(S. 101-288)である。

テーニエスがホッブス研究の権威として揺ぎなき地位を占めておることと彼の『トーマス・ホッ布斯』(Tönnies, F., Thomas Hobbes, Leben und Lehre, Frommanns Klassiker, 3. vermehrte auf., Stuttgart Fr. Frommanns Verlag, 1925, XXVII+316)がこの方面に於ける指導的な文献であることは何人も疑わぬところであろう。本書がテーニエスの指導の下に又その校閲を経て上梓されたものであることは著者序文に依つて知られる。テーニエスはその序文でホッブスを回る社会情勢を描き出しそして「然らばこの哲学者はかの闘争と党派とに対して如何なる態度を取っておるか。これこそは本書が私のモノグラフィーその他に於いて論じたよりももっと突込んで答えるべく自己の前に据えたところの問題である」と言っている。

「若し空間に於けるのと同様に時間にも高さ及び低さというものがあると仮定するならば時間の最高頂は一六四〇年から一六六〇年の間にあると心から信じています」という言葉で『ビヘモス』は始っているが、丁度エリザベス女王の艦隊がイスパニヤの無敵艦隊を撃破することに依つて大英帝国の将来を明るい光の下に予想せしめた一五八八年に生れそしてチャールズ二世の王政復古を迎えて一六七九年に死んだホッブスは、仮令右の所謂最高頂の時期の半分をパリに過しはしたものの或る制限を忘れなければ世界的意義を持つイギリスの変革を直接に経験した一人であると言えるであろう。ところでこの変革と闘争とに當つてホッブスが何れの側に立つておつたかという問題は従来一般には甚しく明瞭に即ち彼を国王の味方として規定することに依つて答えられるのが常であつた。併し著者リプスの意見ではこれは多くの偉大なる古人に何時も結びついているところの一つの伝説であるというらしい。そこでこの伝説を疑うことが今事新しく「ホッブスの態度」を論ずることの動機でなければならぬ。何人も知つてするように一六八八年の革命に到るイギリスの歴史の如何なる一頁を取つて見ても必ず現れているところの国家と教会との間の闘争に就いてその大體を知ることとはホッブスの業績を理解するためにも必須なる条件であるが、この問題が更に政府と議會との対立と結びついて複雑さを増しつつあつた時にホッブスは或はガリレイと交つてその数学的精神を摂取しつつ他日の哲学体系樹立の基礎を固め、又他方恐らくリシュリユーと交際して具体的政策に関する思索を練りつつあつたのであるが、著者はこの間の事情を叙述した後に「ホッブスの数学的構成的國家論の概要」(第二章)を論じている辺りはさきのシュライハーゲの縮刷版である。ところで俗見は Elements of Law 及び De Cive に於けるホッブスを目して一も二もなく王党と断じ去るのであるが、彼が動亂の最初に當つてパリへ

逃げたのは彼を最も敵視しておつた長老派の権力が確立された如く見えたからであり、又彼がこれ等の書を貴族に献げているからとは言え恩を蒙つた人に対してこうした態度に出ることは毫も怪しむに足らぬ事柄であると言ふべきであると共に、彼がクロムエル派の雑誌に論策を寄せている如き事実も亦看過すべきではなからう。又ホッブスとさえ言えば王制の讃美者のようにきめるのが普通であるし又確かに民主制と貴族制と王制との三者の中で最後のものを最良の政治形態として語っている事は事実ではあるが、それにも拘らずこれは余り絶對的に解されてはならない。例えば彼は「各国家の福祉はそれが貴族制であるか民主制であるかに依存するのではなく単に国民の服従と一致とに依存するに過ぎぬ」と言つてもいるのであり、現に長老派議會に対してはクロムエルと同一の意見さえ抱いてるのであつて簡単にホッブスの地位を決定することは慎しまねばならぬ。若し更に彼の書翰に基づいて言えば彼は一六四七年には既にチャールズ一世に対して冷淡と言ふよりも寧ろ敵意を含む様な態度を示していたことが判明するし又王党一味に対して何等の同情をも見せていないことが看取されるのである。一六四七年から翌年にかけて政治的變動の中にあつて長老派が国家の基礎を宗教の中に見出して尚自派の宗教に固執している時これと戦つたクロムエルの宗教観は多くのホッブスの意なるものを含んでおるし、又クロムエルの勝利を招いた独特の軍隊組織及びその他の政策も亦ホッブスの意見と同じものを持つてるのであつて、例えばクロムエルの軍隊の精神は国内平和の維持の重要性に関するホッブスの根本思想と結合するものであると言えよう。彼が当時既にクロムエルを将来のイギリスの支配者として考えておつたということには証拠がある。約一〇年間をバリーに送つたホッブスはかくて一六五一年の終りにイギリスへ歸つたが、帰国後の彼は全く革命政府の味方として振舞ひ、『リヴイ

アサン』に於いて国家への服従を説いておることは正に王党派に向つてのことであつた。又彼のカトリク排撃はクロムエルのそれと全く一致しておつた。唯宗教に關して彼とクロムエルとを区別するものは前者に於いて結局個人が国家構成の單なる素材の位置にまで引き下げられておるのに反し後者にあつては個人は飽くまで決定的要素として考慮されておる点に存すると思われる。著者リプスは尚イギリス版『リヴィアサン』と王政復古後のラテン版『レギアタン』との比較を行つてゐるが、要するにホッブスは決して国王の單なる味方ではなく唯自己の學說への忠実を守りながら即ち常に時の政府への服従を人民に對して要求するところの自己の理論に従いつつこの偉大なる転換の時期を生活しておつたに過ぎないと言ふべきである。——以上のリプスの研究がホッブスの中に純然たる国王の味方を見ようとする俗見に對して完全なる武装解除を行ひ得たか否かは稍々疑問の存するところであるが、仮に一步を譲つてこれを行ひ得たとしても依然としてホッブスが絶対主義者であつたことは否むことが出来ないであらう。若しも絶対主義そのものに固有な二重的性格と更にホッブスにあつては最も新しい理論的武器が古きもののために使用されてゐること——との点にホッブス研究への興味が横たわるのであるが——を考慮に入れるならば、かのリプスに依つて行われたクロムエルとの比較の如きは余り重要な意味を持つことが出来ない筈である。

さてリプスの書物の第三の部分をなすものは『ビヘモス』の独訳である。リヴィアサンが国家としての怪物であるならばビヘモスは正に革命としての怪物でなければならぬ。八〇歳の老人が書いたこの『ビヘモス』はテーニエスに従えば「近世史の最初の合理主義的觀察を含むもの」(Tönnies, Thomas Hobbes, S. 61.)と評せられるものであるが、元來この原本が現在与えられてゐる形態に於いて公にされたのは一八八九年のこと

であり、しかも校訂者は外ならぬテーニエスなのである。(Behemoth or the Long Parliament, by Th. H. Edited for the first time from the original MS. by Ferdinand Tönnies P. D. London 1889.) そしてリップスの手に依る独訳も勿論独訳として最初のものである。テーニエスは特にこれが歴史家に依って利用されることを期待しているようであるが、一般に社会理論又政治思想に関してホッブスの時代を研究しようとするものにとつて重大な寄与であることは改めて言うまでもない。リップスの著書は彼自身の研究が仮に多くの意味を持つものではないとしても、それへの補遺として訳出されたこの最後の部分のみに依っても重要視されねばならぬものに属するであろう。

海外哲学思潮 1935.2

デュルケイム『社会分業論』の英訳

デュルケイムの『社会分業論』の英訳が日本へ来たのは昨年の夏頃のことである。訳者はジョージ・シンプソン。言うまでもなく最初の英訳である。Emile Durkheim, *On the Division of Labor in Society*, being a translation of his *De la division du travail social with an estimate of his work*, translated by George Simpson, New York, Macmillan, 1933, XLIV+439.

翻訳の台本としてシンプソンが使用したものは初版（一八九三年）と第五版（一九二六年）とであつて、第一版のための序論中デュルケイム自身が第二版（一九〇二年）以後の諸版に於いて省略した部分がこの訳書にあつては附録として巻末に収められていることはその一つの特徴をなすものである。職業集団に就いて書かれた第二版序文が訳載されておることは勿論であるが、最後に附せられている人名索引も読者を益すること決して尠くないであろう。今更この書に示されているデュルケイムの思想を紹介する必要もないであろうし又翻訳が厳密に行われているか否かを原文と対照して論ずることもここでなすべき仕事ではないようである。寧ろ吾々はシンプソンが本文に入るに先立つて書いているところのデュルケイムの著作への評価（XXV-XLIV）を中心としてこのフランスの社会学者に対する彼の態度を明らかにして見ようと思う。蓋しそれはデュルケイムへの評価を主題とする一つの独立の論文とも見られるからに外ならない。併しそれに立

ち入る前に吾々は二三の注意をしておかねばならぬ。

(一) 普く知られているようにこの書物は二種の邦訳を持っているが、その一つは完訳ではあるが余り厳密な翻訳書とは言えないようであるし、他は甚だ良心的であるかも知れないが一部分しか公にされていないという事情にあるためフランス語に通曉するものが極めて少い日本人にとっては今度の英訳の出版は特に歓迎されるべきものであらう。従来語られること多く而も読まれることの少い書物に属しておったこの本も今後は徒らに神聖視されることなく、その取るべきところが捨つべきところと共にはっきりと人々の前に区別されて現れることが出来るであらうから。【井伊玄太郎訳『社会分業論』と田辺寿利訳『社会的分業論』——(二)と】ところでデュルケイム社会学はそれが他の諸流派と異つて著しく長い寿命を持つており且つ現代のフランスに大きな勢力を有しているということに注目すべきである。併しそれは強ちその含むところの理論的能力に基づくものと見らるべきではなくて寧ろ公許的社会理論として教育の領域に占めるところの重要な地位に由来するものである。「今吾々に依つて確立された諸規準は服従精神の中に凡ゆる共同生活の本質的条件を見る社会学の完成を可能ならしめ且つこの服従精神を理性と真理との上に基礎づけるものである」と言い又「人間は社会有機体の内部に於いて一つの機能を果すべく運命づけられている」と語るデュルケイムの社会学が官辺から好遇されなかったら不思議である。——(三) 吾々にとつて最も大切なことはこのような性格でデュルケイム社会学が様々の形態に於いてではあるが兎に角他の傾向又学派に比べれば相当強く日本社会学の中に根を張っているということであつて、このことはさきに指摘された如き特質が日本の国柄にびつたりと合っているからに外ならない。——(四) 併し最後にこうした特質は現代の如き社会事情の下にあつては

甚だ恵まれた地位にあることは当然であり、それ故にデュルケイムの精神は他の多くの社会学説の中にも漸次滲透しつつあることが指摘さるべきである。この意味でデュルケイム社会学は一つの模範的なものを提出しているのである。

さてシンプソンは「殆んど四分の一世紀に亘つてフランス社会思想界を統御し而もその影響は今日なお減退するというよりも寧ろ増大しつつある人の最初の大著述」（訳者序文）と『社会分業論』を呼んでいるが、これはよく見られるようなデュルケイムへの盲目的信仰に発する言葉ではなく、彼への「評価」の中では多くの批判が惜しみなく与えられているのである。シンプソンは先ず社会学の根本問題を社会と個人との関係の中に見出し、この点に関してデュルケイムの集団表象理論を取り上げてこの理論が決して右の根本問題を解決することを得ないものであることを論定している。しかし、シンプソンが最も興味を以って検討しているのはデュルケイムが社会的事実を与えたところの定義に関係する。社会的事実をそれが個人にとつて外部にあり且つ彼に対して拘束を与えるところの点からして一方有機的事実から区別すると共に他方心理的事実から区別するところの有名な定義は、彼に依ると実証主義的認識論の二つの側面即ち形而上学及び理論への不信ということと凡べての価値を社会研究から追放することとに結びついているものである。差当り第一の側面に就いて言えば結局彼は「事実によくの型があるのに応じて科学にも多くの型がある如く研究対象に多くの型があるのに応じて客観性にも多くの型のあること」を看過しているものであつて、社会的事実を個人の外部にあり且つ拘束を与えるものとなすことは社会学の当面する問題に肩すかしを食らわせておるに外ならぬ。デュルケイムの言う客観性なるものは事実の真にあるところを歪曲することに基づくという意味に於

いて人為的なものを出でないのである。マクス・エーベルは社会科学に於ける客観性を自然科学に於ける客観性から区別しつつ規定しているが、彼は社会科学としての社会学の対象が自然現象とは根本から異っていることを無視してこれを自然科学並みに実証的たらしめようとするとところに由々しき誤謬を犯している。「デュルケイムが社会を以って個人にとつて外部的なそしてその外にあるものとするものが出来たのは社会的事実の観察に依つてではなしに本来これに適合せぬ方法を事実押しつけようとする試みに依るものである。」個人なくしては何等の社会的事実もあり得ないのであるから社会的事実の外在性なるものはそれが実際に外部にあるから主張されているのでなく、マクアイブーの言葉を借りて言えば現象の inner order を研究する科学を考えることが出来なかつたからに由来するものである。「吾々は如何なる犠牲を払つても、事実そのものを犠牲に供しても社会に関する実証的科學を持たねばならぬというのがデュルケイムの要求なのである。」——第二に彼はこうした方針に立脚して価値の問題を論じている。例えば道德的規範はその外部的な象徴を通してのみ研究さるべきであるというのが彼の確信であるが、それにも拘らず彼自身が科学から価値觀念を排除することに成功しておらぬことは政治家の任務をば社会を均衡と道德的健康の状態との中に置くことに見ておるところから察せられないであろうか。慎しみ深いシンプソンは道德的健康の如き觀念がかの社会有機体説との聯関を保持しつつデュルケイム社会学の公許性と保守性とのよき表現をなしていることを指示していないし、又外在性と拘束性とは実は固有の法則を持ちつつも而も無政府的なるものとして諸個人の上に蔽いかぶさつて来るところの資本主義社会の聖化にその根源を持つておることを吾々に告げよう。としない。

けれども彼が「評価」の最後の部分でデュルケイムと社会主義との関係を論じているところは吾々の興味を惹くものを含んでいる。近代社会に於いて個人意識の進歩と共に連帯性の進歩が行われる所以を分業の発展に基づく社会連帯そのものの転化の中に認めつつ分業こそ近代社会にその統一性を附与するものとして道徳的意義を担うものであると語ったデュルケイムが、その将来に就いて明るいオプティミズムを抱懷しておることは衆知の事実であろう。併し『社会分業論』公刊の四〇年後の今日現代社会に於ける分業の形態は寧ろ彼の予期しなかつた異常性を露呈しつつあるではないか。彼は分業の道徳的価値を説くに急であつて資本主義社会の経済的基礎の研究を忽諸に附しはしなかつたであろうか。彼は統制ということを考へてはいた。併しモースの言うように彼は社会主義なるものに対してその暴力的性格の故に、そのプロレタリア階級的性格の故に、その政治的性格の故に深い嫌惡の情を持つており、「彼は全社会の利益のための変化は欲したが、仮令その部分が如何に多数且つ強力であろうとも社会の部分の利益のための変化はこれを欲しなかつた」のである以上その所謂統制の限界は言うまでもなく明白である。デュルケイムが現代社会に関して持っている觀念はアダム・スミスが「見えざる手」に導かれていてと考えたかのそれに固有な矛盾を知らぬ予定調和の貫く市民的社会に外ならずその独占主義的性質は彼の全く知らぬところである。スミスがこれを知らないのは致方ないが、デュルケイムが知らぬということは如何であろうか。デュルケイムの甘い信念はスミスの時代にのみ許される。深刻な矛盾を眼前に見ながら平然と分業が社会を統一し且つ個人に独自の価値を与えると言ふことは如何であろうか。彼の語る如く問題は組織から由来する機能の如何にあるのではなく却つて組織そのものの如何にあるのである。彼は利潤のための生産と效用のための生産との妥協の中に救済を求

めるようであるが、これの可能性を信ずるものが果して幾人いるであろうか。「資本主義に内在する要素たる過剰生産及び財政上の胡麻化し」が不景気と恐慌との根源であるとシンプスは考える。かかる異常を廃止するには産業が国有となり且つ国民に奉仕するものとならねばならぬ。「資本主義と社会主義との間には何等の妥協も存在し得ない。」そして最後にシンプスは「一つの新しい世界を確かにデュルケイムは見た。併しこれに到達するための諸手段は尚今後展開されねばならぬ」と記している。

分業の問題が元来社会学の最も愛好するテーマである——その最も古く且つ新しい形態はかのトーマス風の職分思想であるが——所以は、シンプスの評価に依つて一の側面から照し出されているように見える。この訳書に依つてデュルケイムが広く日本人々に読まれ且つ新しい批判に附されることを吾々は深く期待するものである。蓋しそれは一般に現代特に日本の思想界への検討に手がかりを与えるものであるからに外ならない。

海外哲学思潮 1935.3

一、「社会的判断論」二、ベルジャーイエフの「ドストイェーフスキー」三、アランの「神々」。

一 『社会的判断論』

昨年末に『社会的判断論』(Social Judgment, Allen and Unwin, 1934, 175 p.)を公にしたグレアム・ワーズ【Graham Wallas, 1858-1932】は一八五八年生れのイギリスの古い政治学者又社会学者である。八一年にオクスフォードを卒業、フェービアン協会でバーナード・ショーやシドニー・エップと一緒に活躍し、その後ロンドン大学に教鞭をとつてゐた。既に出世作 *Human Nature in Politics*, 1908 や *The Great Society*---A Psychological Analysis, 1914 に依つて知られているようにタルド、ル・ボン、マクドゥーガルその他と共に心理学的社会理論を唱えるものであるが、彼は特に政治の問題を表門から入つて明らかにするのではなく寧ろ裏門から忍び込んでその秘密を握ろうとするものであつて、言葉を換えて言えば政治の諸問題が理性的な考慮よりも却つて根本的には習性又本能、暗示又模倣の如きものを基礎として成立しているという点を強調するものである。

新著はその量から見ても又質から言つても旧著に匹敵するものではないが、自己を圍繞する社会的現實に對して鋭敏な感覚と周到な用意とを以つて臨んでいる態度は宜くイギリス人の教師としての彼の面目を語るものでなければならぬ。そこで彼が問題としてゐるのは社会的行動を決定するところの判断である。それは

第一に歴史的展開に於いて検討されるであろうし、第二に制度の中に表現されているものとして論ぜられるであろうが、ここで研究されているのは前者に限られる。さて現代の實際生活に於いて社会的判断が文明を政治的混乱や経済的窮迫や近づきつつある戦争の恐怖などから保護するという機能を果すことが出来なくなっていることは何人も疑い得ぬ事実であるが、その原因を求めるならば差し当り（一）著しく専門化した膨大な科学的知識を整頓することがよく行われていない点及び（二）これ等の知識を生産する人々が自分達の事業の社会的帰結を顧慮することを拒否している点に見出されねばなるまい。こうした二つの原因に依つて知識と判断との間に深く且つ広い溝が掘られることになるという考えは考へる。

然らば過去に於いてこの溝は如何に塞がれていたものであろうか。著者の意見ではそれは正に天才の努力に依つてであつた。プラトン、アタイナーヌ【Aquinas か？】、ベンサムの如き思想家はその時代の知識に於ける本質的なものを採り出し、それが到達すべき帰結を明らかにすることを忘れなかつたのみでなく、更に専門家又政治家に対してこの線に沿つてその歩を進めるようにと目印をつけておくだけの能力を持ち合わせておつたのである。こうして知識を人間生活の現実的要求に応ぜしめる技術又型が生れて来た訳である。著者が西ヨーロッパの世界に知られている根本的な型として挙げるものを見ることにしよう。第一の型はギリシャ的なものであつて、それは今日尚少からぬ意味を持つてはいるが、ギリシャの世界及びそれ以上に安定したローマ的世界の社会的要求を十分に満足せしめ得なかつたことは認めねばならぬ。ギリシャ的な型が乗り上げた暗礁は自由意志と決定論との古い困難である。ギリシャ人の考へでは善き市民は自己内部の或る衝動を強めると共に他の衝動を抑圧せねばならないとされており、同時に彼は自己を以つて叡智界に住むもの

と考えねばならぬとされている。茲に生ずる矛盾から逃れようとしてギリシャ人達は或は宿命的なキエティスムに陥り、或は催眠的な、ミスティシスムに墮さねばならぬ。併し尠くともギリシャ思想はそこに含まれている心理学的な問題即ち理性と感情との判断に於ける調和という吾々の時代になつてその解決し難きことが明瞭に示されたところの問題をよく指示しているものと見られよう。中世キリスト教の代表する型に対してフーレズは余り同情を持っていない。隣人を愛するということは唯命令に従うという決心をしただけでは不可能である。初期キリスト教の誤謬は結論の受容に急であつて、この結論に到るための手段を強調することを等閑視した点にあるが、この結論の光の中に生き且つ死んだトマス・モアはその教理の論理を単に考えただけでなく更に深く感じたものであつて、感情と理性とは相寄つてシェリーが「吾々の知ることを想像する創造的能力」と呼んだものをなすべきである。次にミルの生れた時代は科学が機械論的宇宙觀に——而もギリシャ以来見られなかつた權威を以つて——包まれ始めた時であつたが、その上この見解は倫理にまで適用されようとしていたのであつて、個人にとつては快苦の計算のみがあり、社会にとつては最大幸福の原理のみがあつたのである。そこでこれを了解した精神は論理上それ自身幸福たらねばならぬ筈であつたが、感情にはそれ自身のことを考えることは出来ないというミルの發見、又自分がその感情を持つていたらそれは自分を幸福にしたであらうということを知つてもそれは決してこの感情を自分に与えはしないというミルの發見は如何であらうか。彼は理性と感情との調和を計り、ワーズワースの詩がこれを助けてくれることを知つた。又カーライルはこの調和の確立に失敗して、機械化された宇宙の重圧に抗しつつ人格を主張したのであるが、若し行動に就いて書く代りに行動していたら成功したであらうとフーレズは言つてゐる。今やイギリ

スは富という点では驚くべき速度を以って発展しつつあるが、それが道德心を衝撃するが如き条件のもとに行われていることを思うならば抑々社会的判断はこの間にあつて如何に処すべきであろうか。経済学者達は感情の上では新しい産業主義に触れられておらぬ大学から世の中へ出て来て、物理学の法則と同じ妥当性を要求するような法令を発している。多くの工場はこれを受け容れ、時代の生む弊害を丁度將軍が勝利にとつて偶然なる死傷を取扱うのと同様な態度で見ている。

エコノミストには二つの種類がある。第一はリアリスト乃至行政家であり第二はアナリスト乃至教師である。ヲーレズは前者には割合に多くの同情を寄せている。彼は経済上の傾向というものは吾々がこれを研究するということに依つて変化するというジョサイア・スタンプの見解に賛成している。すべて経済的事実の中には人間的要素が入っているから吾々がその統制に就いて考えるや否やそれは統制され得ぬものたることをやめざるを得ない。後者に対する著者の態度は嚴格である。教師には書類に就いて冗長な説明を加えることに依つて学生を訓練することを要求するだけでは十分ではない。学生はその手段を駆使すべき目的を求めるものであり、若しそれが経済学の中に見出されぬ場合には何処か他の場所にこれを探ねるのである。著者のこうした方向は必然的に物理学的測定に依つて知ることの出来ぬ事実また傾向に対して實在性を拒否する「実験室の偶像」を排斥せしめると同時に數量的に評定し得ぬもののみに価値を与えようとする「説教壇の偶像」をも排斥せしめねばならぬ。

教会と実験室との外に於いてのみ理性と感情との調和は実現せられるであろう。大切なのは意識と意志とが宇宙に於ける眞の因子であり、すべての出来事に深い關聯を持つていふ信念である。行動に於いて

そしてここに於いてのみ理性と感情とは調和することが出来る。

二 ベルジャーイエフの『ドストイェーフスキー』

全集が流行を作り出すのではなく、却つて流行がその最高頂に達した時に全集を生み出すのが常であるため、従つて全集が刊行されている間に流行は次の新しいものに移つてしまうものであるが、最近の日本に於けるドストイェーフスキー研究も亦例外をなすものではないようである。ここに紹介しようとするのはベルジャーイエフ【Nikolai Berdyayev, 1874-1948】の『ドストイェーフスキー論』の英訳である。Berdyaev, N., *Dostoevsky, an Interpretation*, translated by Donald Attwater, Sheed and Ward, 227 p.

著者はドストイェーフスキーが自分の精神生活にとつて極めて決定的な役割を果している旨を最初に告白しているが、凡そ単に語義的な解釈が無意味なこうした作家を論ずるに当つて若し最も適任な人がおるとしたらベルジャーイエフの加きは確かにその一人であるに相違ない。著者に従えばドストイェーフスキーの思想の核心を形作るものは人間の自由に関係する。人間の自由という問題は彼の活動の最初からその後の作品を通じて常に滲るところなく提起され且つ論ぜられているように見える。「人間の仕事はすべて自分が一個の人間であつて決して歯車ではないということを立証するところにある」……「二に二を加えると四になるということは生活の一部分ではなくて死の始まりである」(『地下生活者の手記』)。彼の小説の主人公は何時も人間というものが結局必然の強制から自由であると、即ち人間の行動はすべて予知し得ざるものであつて、凡ゆる法則の支配から脱しているものであるということを自ら納得するための努力のうちにその一生を

終えている。彼等は英雄的な徳則廃止説の権化として現れている。そして彼等の努力と追求との結果は死である。キリーロフの場合には肉体的な死であり、スタフローギンの場合には精神的な死である。

併しベルジャーイエフの指摘している通りドストイェーフスキーにとつて自由とは自己肯定ではなくして寧ろ反対に自己服従でなければならぬ。だが何に對して服従するのであるうか。著者は神と答える。けれどもここに神と言われるものは如何に解すべきであろうか。ドストイェーフスキーがこの問題の解決をキリストの人格の中に求めておることに疑われないにしてもそのことから直ちに何か神学的又護教的なものを導き出すことは正当であろうか。ところがベルジャーイエフはドストイェーフスキーに於ける異教的性格を把握することなく、イブーン・カラマーゾフの如き無神論者の口から力強いキリストの弁護を聞くことに驚かねばならなかった。『大審問官の物語』がキリストの弁護であることは確實であるが、それは純粹に人間的なキリスト即ち「奇蹟と神秘と權威と」も何処までも拒けるキリスト、換言すれば人間の自由を真に體現しているものとしてのキリストに就いてのことではなければならぬであろう。それ故著者のようにローマ・カトリク教会に對する彼の態度に遺憾の意を表しても余り意味はないのであつて、彼はローマ・カトリク教会を非難しているというよりも奇蹟と神秘と權威とに立脚する一切の教会を非難しているのである。キリストが大審問官に依る攻撃を黙つて傾聴した後に彼に接吻していることは恐らく又著者をして一驚を喫せしめねばやまぬであろう。大切なことはドストイェーフスキーがこのことに依つて自由と權威との相互的矛盾にも拘らずこの二つの原理の歴史的必然性を承認しているということではなければならぬ。そしてそれが正に所謂無神論者たるイブーンの發明に係るものであるということとは決して謎として怪しまるべきではなく、彼が生命へ

の生物学的衝動とキリストに対する精神的な態度とを同時に深く意識するものとして単なる無神論者でないことを理解するならば容易く把握されるところである。だが問題を解決するものが究極に於いてキリストに求められること、「若しも真理が神を追放するならば神と共に真理の外に立つ」という道がドストイェーフスキーにとって根源的な意義を担うことはベルジャーイエフの正しく指示する通りである。

ロシアの偉大なる思想家としてのドストイェーフスキーはロシア思想の根本的欠陥即ち文化的伝統の欠如というものを最もよく体现していると著者は考える。チェーホフはロシア人の真にして且つ緊急なる義務を自己の中から奴隷根性を追い出して一個の個人となることに見出しているし、レオンチェフはロシア人は聖者には成れるが、立派な同志には成れないと語っている。ロシア精神のかかる欠陥——それをドストイェーフスキーは明白に示している——と結びついていくかの極端性こそは現代のロシアがその社会的政治的制度の中に遺憾なく表現しているものに外ならないと著者は考えている。ドストイェーフスキーはかくして現代ロシアの予言者であると見られる。

三 アランの『神々』

アラン・シャルティエ【Émile-Auguste Chartier, 1868-1951】の思想及びその地位に関しては二三の邦訳と紹介の文章とが既に語るべきことを語っているように見える。昨年暮に『神々』が公にされた。

Alain, Les dieux, Paris, N. R. F. 1934.

さて物質の存在することは確実であり又これを十分に把握することは不可能であるにしてもこれに就いて

問を發せずにはおられない。ところで人間の文化生活を構成する物質の諸形態はすべて人間及びその偉大な天才に、その仕事又働きに依存するものである。けれどもそれが如何に大なる意義を持つにせよ、それですべてが尽きる訳ではない。その發展の或る箇所であるものが消え去ること——花咲ける薔薇からその香が失われるように——を忘れてはならぬ。それが最も有用なもの即ち精神なのである。人間精神に属する様々な形態は夫々その価値を異にするものではあるが、何れも無視されてよいものではない。若し人々がアランの中に信仰なき人の姿を認めておつたならば、即ちプラトンがその共和国から詩人を追放したように一切の神秘、奇蹟、偶然、僥倖、不死の予知を魔術師としてその樂園から追放する人を見出してゐたとしたならばこの新著の章名に「三位一体」、「懺悔」、「クリスマス」のごときを読んで驚かざるを得ぬであろう。併し章の名と内容との結びつきの緩かなことは恰もモンテーニュの『エッセー』に於けると同様である。だが抑々宗教を讀めるためには之を信ずることが必要であらうか。ホメロスその人の存在を疑うものは『オデュッセイア』に読み耽る権利を持たぬのであらうか。

すべて宗教の根源は甚だしくつまらぬ事実の中に存在する。吾々の幼児の頃の幽かな殆んど無意識的な記憶の中に。吾々はミルクと蜜と善く且つ強大な力とに包まれた樂園を知っていないか。神はかよい吾々の存在を御意のままに導き給うた。ドイツの或る生理学者は生來のメラニコリの源を探ねてこれを難産の無意識的な記憶の中に発見しているが、そこまで行かずとも幼児がその出生当時の深刻な印象を受けてそこに与えられた方向へと導かれて行くということは信じてよいのではないか。アランはかかる事柄の中に人間の宗教性を認めようとする。かくして宗教は吾々の成長又發展に於ける原始的又本源的又基礎的な事実である。

哲学者はこのことを考慮に入れる必要がないであろうか。

これは恰もキリスト教より遙か低級な当時の宗教に対してソクラテスがとった態度である。この思想家にとって神々に与えられた様々な名及び人格は結局のところ真に人類を導く力を伴うものに過ぎないのであった。だがアランは如何に宗教を讃えようとも彼は決してこれを崇拜するものではない。彼はトラディシオナリストと呼ばれているが、真の信仰は今後に期待さるべきものであることを確信しているのである。スピノザが眼鏡の玉を磨き乍ら思索を凝らしたように働くものが考えそして考えるものが働くような幸福な時代の到来をアランは信じている。今にコミュニストとしてのアランを語り得る日を持つことがないと言えるであろうか。

海外哲学思潮 1935.5

一、バルザック書翰 二、一生物学者の哲学 三、演劇論 四、キリスト教神学

一 バルザック書翰

或る学説なり人物なりが日本に於いて出逢う運命は何時も流行か無視かの何れかであるように見える。そして先月号の本欄でドストイェーフスキーに就いて記された言葉はその俚バルザックに関しても当てはまるようである。バルザックは今流行から無視への道を急速に辿つていると言えないであろうか。併しバルザック研究の水準は寧ろこうした傾向から独立に高められるのでなければならぬ筈である。次に彼の書翰集を紹介するのは全く今後少数の人々に期待さるべき研究の発展への刺激としてであるに外ならない。

その一は既にバルザックの未発表原稿に就いて注目すべき寄与をなしているアメリカ人ヨルター・スコット・ハスティンズ教授の校訂になるバルザックの家族に宛てた書翰である。Honore de Balzac: Letters to His Family(1809-1850), edited by Walter Scott Hastings, Princeton University Press, London: Milford. これには厳密且つ親切な注が附せられていて、この注だけが英語で書かれている。収録されている書簡の中の七一通は従来全く印刷公表されなかったものであり、編者はこれを有名な Lovenjoul Collection de Chantilly 所蔵の原文から写したのである。この点に於いてハスティンズ教授の仕事が持つ重要性は最早明らかなであるが、更にそれ以外の一〇〇通に余る書翰は最初カルマン・レギのバルザック全集の中に発表されているものではあ

るが、選択その他に於いて極めて粗雑であり又妥当を欠いていたため正確なテキストとしては今初めて公刊されたとも出来るのである。例えばシュルキル夫人に宛ててバルザックが《Laure, Laure, mes deux seuls et immenses desirs, te célèbre et être aimé, seront-ils jamais satisfaits ?》と書いたとされていることは有名であるが、ハステイングズ教授の調査に依ればそうではなくて、バルザックが本当に書いたのは《Je n'ai que deux passions: l'amour et la gloire, et rien n'est encore satisfait, et rien ne le sera jamais !》というのである。

正直のところバルザックの手紙は一般にそう面白いものではなく、普通の読者は彼が金を求めるため又これを費すために努力している姿のみをそこに見出してやがて飽きて了うに相違ない。尤も彼がまだ若くてその激しい活動が始められぬ以前のものの例えばその姉妹に与えているものの如きは例外であるが、その母に宛てているものなどは今日なら手紙を書かずとも十分に用を足せるような雑事で充されている。

その二は前記の Lovenjoul Collection de Chantilly の管理人として知られる優れたバルザック研究者マルセル・ブートロンの編纂に係るバルザックとジュールマ・カロー夫人との間に取り交された書翰である。Honoré de Balzac: Correspondance inédite avec Madame Zulma Carraud (1829-1850), éd. par Marcel Bouteron, Paris, Armand Colin. これは凡べて未発表のバルザックの手紙及びカロー夫人の返信を含むものであつて、その時期は恰も彼が文学上の生涯を通じて最も精力的な活動をしており、出版者や新聞や訴訟事件や負債などがその一日の時間の殆んど凡べてを奪おうとしていた時代に当る。そのためカロー夫人宛ての彼の手紙は兎角杜絶え勝ちであつた。大きな作品が一つ完成した時に彼は夫人に向つて何故私がこんなに décousument に書くかが判るでしょうと言っている。当時のバルザックは全く文字通り un galicien de plume et d'encre であり、

流石の彼も《*Je ne vis plus, je m'use horriblement*》と書かざるを得なかったのである。彼がカロー夫人の家（始めはサン・シール、次にアングレーム、最後にドメヌ・ド・フラベル）に隠れてこの優れた婦人の好意の下に暫しの休息を得ていたこと、それにも拘らず一日の仕事が済んでから彼を襲い悩ます空虚な気持を癒すことが不可能であつたことは人に知られているが、それにしても彼女が世の常の婦人の如く大バルザックとの関係の中に単なる虚栄心の満足を見出さず忍耐深き同情を以つて彼の苛立つた神経を緩和することに努めつつ彼の上に大きな影響を印している事情は、この往復書翰が遺憾なく告げているところであると言わねばならぬ。

二 一生物学者の哲学

自然科学者が哲学に就いて論議するということは日本ではかなり珍しいことになっているが、外国ではそう稀な事柄ではない。ジョン・バードン・サンダースン・ハルデー【1892-1964】の『『一生物学者の哲学』はその一つの例である。J. B.S. Haldane, *The Philosophy of a Biologist*, Oxford: Clarendon, London: Milford. 彼は有名なリチャード・バードン・ハルデー子爵を伯父とし、生物学者として著名なジョン・スコット・ハルデー教授を父として一八九二年一月五日に生れ、父と同じく生物学者として仕立てられた。一九二二年から三二年までケンブリヂの生化学講師、一九三〇年から三二年までローヤル・インスティテューションの生理学教授、現に F. R. S. であり、Genetical Society の会長であり、一九三三年以来ロンドン大学の教授である。著書としては *Daedalus*, 1924. *Calimicus*, 1925. *Possible Worlds*, 1927. *Science and Ethics*, 1928. *The Cause*

of Evolution, 1933. 尚彼がジュリアン・ハクスリと共に所謂新生氣説を奉ずる学派を率いるものとして生物学界に注目されておることを附け加えておく必要がある。

ここに紹介しようとする書物は小冊子ではあるが、著者が多くの実験的研究や先人の業績の討究の中から自ら抽き出して来た哲学的見解の綱要を含むものと見られる。彼にとつては宇宙は人格の世界として又神の顕現として存するのであり、世界は a vale of soul-making として現れる。彼はこうした見解をヘーゲルの伝統に立つグリーン及びブラドレーに負うている旨を承認している。従つて彼が凡べて特殊科学は實在の個々の側面を明らかにするものであるが数学的解釈は最も多くのものをネグレクトするに反し心理学的解釈は最も少しのものをネグレクトすると語り、数学的及び物理学的解釈の価値はそれが研究の細部に就いては心理学的解釈よりも屢々適用され得るという点にあるに過ぎぬとなしておることは素より当然でなければならぬ。

近世に於ける哲学の必要は何処にあつたか。ハルデーンに依ればそれに物理学的諸科学の結論と従来神学から与えられて来た精神的なるものに関する結論との間の対立又闘争を整理するところにその任務があつたのである。著者はデカルト、ロック、バークリ、ヒューム、ライプニッツがこの問題の解決のために企てた試みを概観し、そしてカントの遂行した綜合に就いてその功罪を尋ね、カントの事業の多くのものは科学の最近の進歩のためにその価値を喪失しているとなし、プランク又アインシュタインの研究の結果として物理学的科学の基本概念が最早独立のものと見られ得ぬ事情に置かれてゐる次第を述べてゐる。カントの学問論の最大の欠陥とも目すべきものは彼が生物学に対して物理学的科学の一部門として以外に何等の地位をも認め

ていないという点にある。ハルデーンは生氣説を一瞥し且つ何故にそれが捨て去られねばならなかったかを説いてはいるが、有機体の生命がその環境をも含むところの客観的な活動的統一として把握されねばならぬということ、その生命が単に有機体自身の諸部分の間の相互関係の中にだけでなく更に有機体とその環境との間の相互関係の中に自己を示すものであるということに到つては、堅く主張して動かざるところである。こうした態度が生物学を物理学的科学から引き離して了わねばならぬのは明らかである。生物学的解釈は物理学的解釈よりも根本的に経験と結びつくものでなければならぬとハルデーンは考える。だが人間は単に生きるものに止まらず又動機に基づいて行動するものでなければならぬ。そしてそこにこそ人格の表現が見出されるのである。このようにして吾々の経験の世界というのは心理学的な又精神的な世界即ち人格の世界となるのであつて、この世界の構造からすれば人格は決して孤立したアトムとして論ぜられてはならぬことが必然的に要求され、個々の人格の中には却つて一切を包括する偉大なる人格が自己を示しているのだからならぬ。吾々の経験の實在は正にこの一切を包括する人格の中に要約されているのであり、この人格を神として承認するところに宗教の境が存すると考えられる。

三 演劇論

一七八九年の変革を前にしたフランスに於いてブルテールが「悲劇及び喜劇こそ道徳と理智と礼節とを教えるもの」となし、コルネイユを以つて魂の学校の建設者と考え、モリエールの中に市民生活のための学校を設立したものを見出していること、アンシクロペディストがデイドローを先頭として演劇の社会的又政治

的重要性を説き、教会に代えるに劇場を以つてすることを力説したこと、及びドイツ的特殊性に於いてではあつたにしてもシルレルがかの *Schaubühne als eine moralische Anstalt betrachtet*, 1784. その他に於いて大体同様の見解を提出しておることは恐らく社会の偉大なる転換と結びついた演劇論の古典的表現でなければならぬであろう。そして現代も亦かかる意味に於いて演劇が論ぜらるべき時代の一つである。さてここにその要旨紹介しようとする演劇と転換期文明との關係を論じた書物は勿論そのような氣魄を以つて書かれたものでもなく又真に新しい道を演劇のために示しているとも言えないようではあるが、デイドローその他の人々がその建設に努めたところの社会の新しい転換と結びついて若干の興味を感じしめると共に、それがロシヤ人の劇作家又演出家として有名なコミサルジェーフスキー【1882-1954】に依つて書かれたものであることからして今簡単に触れておきたいと思う。Theodore Komisarjevsky, *The Theatre and a Changing Civilization*, Twentieth Century Library, John Lane, 1935. 彼は一八八二年ゼニスに生れ、革命前モスクワの帝国劇場及び国立劇場を率いて名声を博し、イギリスに渡つてからチェーホフやゴーゴリのものの演出、又近くは一九三二年 *Memorial Theatre*(Stratford-on-Avon) に於ける「ゼニスの商人」に依つて好評を得ていることは広く知られているところである。著書としては一九二九年に *Myself and Theatre* がある。

演劇の歴史は決して戯曲の歴史ではないとコミサルジェーフスキーは言う。演劇は所作と舞踊と歌との中に於いて掴まれる必要がある。それは本質的には俳優と舞台監督との芸術であつて作家の芸術ではないといふ彼の言葉はその立場を示すものとして注目すべきであろう。この書物の中に展開されているヨーロッパ演劇史に対する彼の批評的觀察を貫く所謂 *scenic* な方針はこの見地から来ているものでなければならぬ。だ

が第二に演劇が人類の文化的又道德的進歩に於ける重要な因子として存在し且つ民衆の社会的政治的宗教的生活と極めて緊密に結合しているという彼の見地からして、演劇に対するやまきの scenic な方針を補うものとして sociological な方針が導き出されるのである。

コミサルジェーフスキーは政治上一定の主義を持つているようには見えぬが、「ファシズムでもコンミュニズムでもナチズムでも教養と訓練とを積んだ人間の新生活への道を開くのを助ける強い力としては歓迎する」と言い、「ムツソリーニ、レーニン、スターリン及びヒトラーの政治教説は所謂民主的制度の下に於いては完全に欠けていた凡べてのもの即ち真の理想主義的基礎、要求の明確性並びに目的の確定性を有する点では現在唯一のものである」としているところからすれば彼の反民主主義的方向は恐らく疑い得ぬところであろう。さて彼に従えば今日演劇に関して何にも増して切実に要求されることは進歩せる権威の確立である。本書を通じて彼が強調しているのは第一に従来演劇に於ける新しき芸術的表現への衝動は凡べて先ず舞台監督から来ているということ、第二に現代の諸条件の下では演劇の商業化が芸術的指導を完全に破壊しているということであつて、この二点を立証するために彼は多くの努力を払っている。著者は単に演劇が他の全文化形態と同じくより高い社会体制の中にその新しき生命を展開させて行くことが出来るというだけでなく、凡べての文化的事業が国家的指導の下に立つべきであることを要求するのである。

著者の反民主主義的演劇論は大体理解されるが、政治的権威と演劇の芸術的権威とがそう簡単に結びつき得るものであるうか。商業化に依つて傷つけられた演劇は国家統制に依つて完全に癒されるであろうか。スターリンもムツソリーニもヒトラーも凡べて同一の資格を以つて芸術又広く文化を愛護し又発展せしめるも

のであり得るであろうか。

四 キリスト教神学

アンセルムもドゥンス・スコートゥスもフッカーもバトラーもニューマンも皆イギリス人であったが、彼等が吾々に残し与えているものは殆んど凡べて神学上の部分的な問題に関するものか或は論争を機会として生れたものかであつて、聖トーマスの *Summa Theologica* やカルギンの *Institutio Christianae Religionis* を引合いに出さぬまでもキリスト教神学に関する一応整備した書物は殆んどこの国の人に依つて書かれていなかったようである。こういう事情からすれば今度出たアーサー・ケイリー・ヘドラム【1862-1947】の『キリスト教神学』は稍々注目すべきものであらう。Arthur Cayley Headlam, *Christian Theology*, 1935, Oxford, Clarendon Press, London: Milford. 著者は一八六二年生れで、一九〇三年から一二年までロンドンのキングス・コリヂの総長、一九一八年から一三年までオクスフォードの神学の regius professor であり、一九〇一年から一二年まで二〇年間 *The Church Quarterly Review* の編輯者であつた。著書として *The Miracles of the New Testament*, 1914. *The Church of England*, 1924 *What it means to be a Christian*, 1933. がある。

宗教は人生を知識と行動との両側面から一個の全体として解釈するところに成り立つものと考えるのがヘドラムの根本的立場である。彼は宗教の比較的研究を通して歴史的現象としての宗教が第一に普遍的であること、第二に重要であること、第三に自律的であること、第四に人類の外に存する或る精神的な力への依存を含むものであることを論定する。併し宗教の比較的研究が宗教的要求の真理に関する判断を形成するのに

余り役立たぬことは明らかであり、この点に関しては宗教哲学が呼び出されて来るのであるが、著者は論証に訴えて神への信仰を明らかにしようとする諸教説を採用することを避け、却つて吾々人間の道德的本能の内部に有神論的信仰の最も強力な根源を見出そうと努めるのである。自然宗教から聖書又教会の問題に移る。ここで注意さるべきことは第一に著者がニカイア信条 *Symbolum Nicaenum* を甚しく重要視しこの信条の上にこそ統一された教会が建設さるべきであるとなしていること、及び權威を以つて宗教的経験の全体を代表するものとなしていることであろう。更にキリスト教的な神、イエス・キリスト、聖靈及び三位一体に就いて論じ、旧約に於ける神の啓示、信仰に関する哲學的論議に關説し、アンセルムに始まる神の本体論的証明の可能を或る意味に於いては認めながらもカントに従つて「道德的証明」を採用しているようである。その他博識を利用して物理学者の原子に関する見解の変転恆な者を非難したり、新プラトン主義に批判を加えたりなどしている。続いてキリスト論、聖靈論、三位一体論に就いて語られている。

キリスト教神学に就いて一般的知識を得ようとするものにとつては、ロンドン又オクスフォードに於ける教授としての理論的経験と説教壇に於ける監督としての実践的経験とを併せ有するヘドラムのこの書は適当なものたるを失わぬに相違ない。

海外哲学思潮 1935.6

- 一 書翰集二つ（メルセンヌ、ボーズンキット）
- 二、社会学文献二種（ロベルティ、スベンサー）

一 書翰集二つ（メルセンヌ、ボーズンキット）

最近哲学者の書翰集が二つ出版された。メルセンヌのその一つである。一七世紀のフランス哲学に就いて何事かを調べようとするものにとつては、デカルトの友人として彼と同時代の学者達との意見の交換の仲介者たる役割を果たしたこのフランチェスコ団の僧侶、マラン・メルセンヌの名は極めて親しいものでなければならぬ。科学思想史特にギリシヤに於ける科学と哲学との関聯に就いて深い造詣を有し且つシャルル・アダムと共にデカルト全集の編纂に携わったポール・タンヌリは、メルセンヌが一七世紀前半の偉大なる精神に宛てて哲学、数学、自然諸科学、音楽の如き諸領域に互つて数多く残した書翰の集成と整理とを企てておつた。然るに一九〇四年のタンヌリの死はこの計画を未完成の俛に放棄せしめねばならなかった。けれどもタンヌリ夫人は夫君の志を継いでこの或る意味では退屈な仕事を続行し、メルセンヌの著作の編纂者として知られるコルネリス・ド・ワールの協力とルネ・パンタールの参加とを得て、終に一昨年その第一巻を上梓する運びとなつたのである。Correspondance du P. Mersenne, religieux minime, publiée par Mme Paul Tannery, éditée et annotée Par Cornelis de Waard avec la collaboration de René Pintard, I, 1617-1627, Paris, Gabiel Beauchesne et ses

his, LX-666 p. 10 planches. 博識を以つて鳴るこの協力者を得、綿密な注を附せられることに依り恐らくこの書翰集はポール・タンヌリ自身の手に依つて完成された場合に比しても決して劣ることのないものと考えられよう。

ポール・タンヌリは最初この書翰を地方別に従つて地理的に順序づけ整理しようとしておつたらしいが、この方針が遭遇する諸の困難に気づいた編集者達はこれを捨てて、新しく年代順に依る整理を企て、これを通して伝記的事柄の解明という一つの利益を得ることが出来た。第一巻は一六一七年から一六二七年に及ぶもの、従つて二九歳から三九歳までののである。巻頭にポール・タンヌリ夫人の序言が載せられ、次にド・ワールの序文とメルセンヌ伝とが記されている。この伝記はさまで詳細なものではないが、よくこの思想家の梯を伝えて、彼が同時代の人々から得ていた信頼に就いて語っている。勿論ここで書翰の内容を紹介することは不可能であるが、実質上の脈絡を意図して記されたものではないにしても、全体を通じてメルセンヌ自身の思想の発展の跡を辿ることが出来ると共に、否それ以上に、多くの書翰が語っている問題が殆どん百般の学芸に関するものであるために当時の思想界の状況及びそこに活躍する人々の姿を明瞭に看取することが出来るという点に於いて研究者が本書翰集から蒙る利益は蓋し尠くないであろうと思われる。

今一つはバーナード・ボーズンキット【1848-1923】のものである。ボーズンキットは一八四八年に生れ、七一年から八一年までオクスフォードの講師、一九〇三年に聖アンドリュースの教授、一一年から一二年までアリストテレス協会の会長であり、ギフォードの教授であつた。ここに紹介しようとする書翰集はジョン・

ヘンリ・ミューアヘッドの編纂に係り、一八七六年即ちオクスフォード講師時代から彼の死即ち一九二三年に到る間に彼がその友人に宛てて書いた手紙と友人からの若干の返信とを含むものである。Bernard Bosanquet and His Friends, Letters, Illustrating the Sources and the Development of his Philosophical Opinions, edited by J. H. Muirhead, Allen and Unwin.

ヘレン・ボーズンキット夫人は彼の死の翌年短い伝記を書いているが、この書翰集は彼の性格と活動と思想とに就いて詳細な報告を与えるであろう。彼がイギリスに於ける一個の偉大なる哲学者であつたことは何人も認めるところであろうが、彼が単なる哲学教師にとどまることなく更にその時代の凡ゆる問題に関心と研究とを献げ、自己の専門を離れて宗教、国家、道德に就いて論じ、その上社会事業に関係して、救貧事業、大学拡張の運動に参加している姿はこの書翰集から窺われるところである。ブラッドレ、グリーン、ネットルシップの影響の下に於ける彼の哲学思想の形成、而も形成された自己の体系を守りつつ批判者と戦う彼の執拗と頑強、個性と価値とに関するギフォードの講義に序して、「哲学の本質的な仕事は既に完成している。今後に残されているものは哲学上の真理の発見ではなくて、寧ろその応用のみである」と言いながら、他面不斷に訪れ来る新しき思想を謙讓を以って迎えつつ、「私は一個の学生として若い人達の見方を学びたいという気持が強くなる」と言う彼の態度もよく示されている。尚書翰集の最後の部分はボーズンキットがアレキサンダーの新實在論やプリングル・パティソンの人格主義的觀念論やまたイタリヤのクローチエ及びジェンティーレの如きとの意見の交換を含み、最近の哲学思想界分布図として興味を惹くことが大きい。

二 社会学文献二種（ロベルティ、スペンサー）

コントの実証主義の熱心な祖述者として知られるロベルティは一八四三年にロシアに生れ、ハイデルベルクその他のドイツ諸大学に学び、フランスに於いてその学問的活動をなし、晩年ロシアに帰ってからは著書及び論文を通じて実証主義に基づく社会主義 *le socialisme positif* の鼓吹に努め、一九一五年政治的軋轢の犠牲として斃れた。フランス実証主義の発展を跡づけるものにとつてロベルティが無視し得ぬ存在であることは改めて説くまでもないことであるが、彼の最も顕著な意義は寧ろロシア社会学の建設者たるところに認められるであろう。昨年ルネ・エリエ【1896:不詳】が『ロベルティ』【“Roberty”】を公にしたのは、右の二つの側面からこのロシアの社会学者を顧みようという意図の下に於いてであった。Verrier, R., *Le positivisme russe et la fondation de la sociologie, avec deux dessins à la plume de Jean Lebedev et Samson Flexor, quatre clichés de Paul Adam, un autographe, Paris, Alcan, 1934, 233 p.* ドイツ風に正面から取組んだ本格的研究というよりも断片的にその生立ちの順を追つて思想発展の径路を辿っている点に特色があり、一個人の思想をその背後の生活を通じて解剖しようとするものには示唆多き態度とも見られよう。エリエはこれに配するに数葉の写真をもつてしているが、手紙の筆跡とかブリュッセル時代（三五歳）の闘志溢れる容貌とか晩年祖国に帰つてからのブレンティノウカの静かな邸宅とかこの書齋を訪れた長年の友ポール・アダムと共に撮つたものとか *La sociologie de l'action, 1908* 【Eugène de Roberty: *Sociologie de l'action*】を世に問うた頃の漸く老境に安じた姿など彼の面影を彷彿せしむるものがある。更に巻末にはロベルティの主要著作及び論文を蒐集網羅しているのみでなく、その上凡そ彼の思想生活の発展過程に対して何程かの意味で影響を与えた人々並びに著作を丹念に

調べ上げて記載してある。

その血統にスペイン人の血を混え、タタールの糸を引き、生れながらのコスモポリタンであったロベルティには「ヨーロッパの血」が流れていたのである。ここにエリエは後年「ヨーロッパの魂」を持たねばならなかったロベルティの運命を見るのである。彼は故国の中学に学ぶ頃、始めてコントの『実証哲学講義』の第二版に接し、その後リトレを知るに及んでフランス実証主義の洗礼を受けることとなり、ドイツに渡ってからは経済学の研究に手を染めながらも既に「実証的社会主義」の傾向をはつきりと示して、唯物論の陣営に抗争した。フランスに移るに及んで所謂『Hypothèse bio-sociale』の立場を明らかにし来り、これに依つてコントを越え、やがて *Nouveau programme de sociologie* La, 1904 に到つて独自の体系の完成を見ることが。主著 *La Sociologie* 1882 [*Sociologie: essai de philosophie sociologique*] の成立前後を叙するエリエの筆致を見よう。この著作に於いて始めて所謂「超実証主義」が宣言されたのであつて、この書は「記述的方法」、「社会の博物学」の強調から更に一步を進めて社会倫理学の建設まで押しつめようとする試みであつたと言えよう。ランゲその他の新カント派の影響も見え、ペーテルスブルクで出版されたのは一八八〇年となつてゐるが、エリエは恐らく七九年の秋だろうと言う（七九頁）。ロシアでは余り好意を以つて迎えられはしなかつたように見える。幾つかの批評は出ているが、その代表的なものはラヴロフのものであらう。革命の指導者としてのラヴロフは著者の未熟、僭越、実践的態度の欠如を指摘し、尚ロベルティが個人有機体と社会有機体との差異に論及していないことを非難する。他の著作よりも面白いには違ひないが、『Hypothèse bio-sociale』は決して著者の自ら誇るように新説ではなくジョージ・ヘンリ・ルイスの见解を發展させたものでしかない

と罵倒している。ロベルティ自身はこの批評を以つて何等根拠のない不吉なものとしておるが、ヱリエは大体これに依つて当時のロシヤ思想界に於けるロベルティの世評の香しからざる一つの証去であると見てゐる（八一頁）フランスでは八一年に初版が出て、相次いで三版を重ねた。例のヘッカーの言葉を借りて言えば、「この書物はネヴ河岸に於けるよりもセーヌの岸に於ける方が遙かに好意を以つて迎えられた」のである。グンプロギッチ、ヴンニ、ヲルムスなどの称讃を博したが、リトレ一派の実証主義者からは案外に冷評を蒙つたようである。ヱリエはこの書物の中心をさきの仮説の中に見出し、モースが社会学と生理学とは日に日に結合せんとする傾向にあり、やがてその領域から心理学を追い出すこととならんと述べている言葉を以つてロベルティの味方に引き込もうとさえしている。

さてロベルティは一八九六年からブリュッセルに開かれて講義を続け、一九〇二年パリに引き上げたが、その間独自の立場から生物学者に向い、マルクス主義者に向い、心理主義者特にタルドに向い、又デュルケイム派に向つて論争を続け、パリでは講壇生活から離れて著述に没頭した。Nouveau principe は一九〇四年に出たが、翌五年以後は故国に帰つて実証的社会主义の旗の下に立ち、左翼の運動に抗し、鎮圧後はカヴレフスキーと共に Institut psycho-neurologique にロシヤ最初の社会学講座を担任し、傍ら社会運動への関心を捨てなかつた。一九一五年の死に就いてヱリエは「かくて社会学は社会学者にその運命を担わせた。ロベルティのヨーロッパの魂はロシヤではついに死んだのである」（二一〇頁）と語っている。

ヱリエがロベルティを問題にせねばならなかつたのは何故か。第一にロベルティはロシヤ人であると共に優れたフランス人であり、又ヨーロッパ魂の持主でもあつた。この世紀のヨーロッパの観念形態は挙げて彼

の魂に宿った。このことは彼がロシヤに於けるフランスの影響の鏡であり、その歴史の一章であることを意味する。一八六七年以来のロシヤに於けるフランス実証主義時代の先驅が即ち彼であつたからである。第二にロシヤ近代の著作は主として社会科学の文献であり、その史上に偉大な足跡を残したものは即ちロベルティであつたからである。超実証主義者としての不拔の論陣は今世紀初頭の顯著な特質を示すものでなければならぬ。第三にロベルティの生涯は又ロシヤ革命の思弁的側面史を語る一章でもあつた。それ故に露仏両国民間の親善のためにもかかる研究はフランス人の手に依つて行われねばならぬのである（二一四頁）。

ロベルティに関するエリエの書物と時を同じくしてイギリスではラムニーのスペンサー研究が公にされてゐる。Runney, J. [Jay -, 1905-57], Herbert Spencer's Sociology: A Study in the History of Social Theory: to which is appended a bibliography of Spencer and His Work, London, Williams and Norgate, 1934, XVI+357. 著者はロンドン大学でモリス・ギンスバークの下に研究を続けた人であるが、ギンスバークは自ら本書を校閲し序文の筆をとつている。本書が現代の哲学及び社会学の世界に持つ意義についてはギンスバークの所説に尽されていると思うが、それを述べるに先立つて本書の成る由来に就いて一言する必要がある。

本書の冒頭にはスペンサーの遺言によつて委嘱された the Trustees なるものの序論があるが、それに依るとこの書はスペンサーの謂わゆる記述的社会学 The Descriptive Sociology の最後の一卷として刊行されたものである。元来、スペンサーは一八七六年に The Principles of Sociology の執筆に當つて種々の社会的類型から広汎に材料を蒐集して、その社会有機体説、社会進化の法則の根柢を求めた。この計画の下に集大成され

たものが、有名なる記述的社會學叢書である。彼はこの材料を「社會學原理」に使うと同時に、別にこれだけを独立の仕事として更に手広く集めようと企てた。かかる仕事は彼に依れば「この途の研究者をして仮説を離れて自己の結論の証左を求め、又他人の仮説や偏見に煩わされることをなくする」であらうと思われるからであつた。彼はその材料を一、未開社會、二、滅亡せる或は衰微せる文明社會、三、現存せる文明社會の三項目に大別した。スペンサーは一八六七年から八一年までに前後八部の資料集を刊行したが、經濟的負擔の重荷に耐えず「中止の覺書」を出して投げだした。けれども彼は死に当たつてその遺産を挙げてこの計畫に投ずるよう遺言したのである。かくて委嘱された委託人たちの手に依つて更に十部の記述的社會學書の刊行を見たが、更に一八九九年八月十二日附の彼の覺書に従つてこの全叢書十八卷に含まれた材料の整理統一を果す必要があつた。委員會はこの最後の一卷の編纂をギンスバークに囑したのであるが、後ラムニーの手に移つて成れるもの、即ち本書である。

従つて本書は最近に到る資料に依つてスペンサーの社會學說を整理統合したものであつて、彼の死後、躍進せる斯學の新しい立場から如何にスペンサーを理解すべきか、如何なる点でスペンサー業績を今日尚高く買ふべきかを明らかにした。即ちギンスバークの言葉に依るならば、「彼の業績を要約し、その主要なる結論を彼の死後、招來せる進捗發達に照して再吟味せる」ものに外ならない。A Study in the History of Social Theory の副題を有する所以である。本書に依つて彼の結論が如何に多くの点で更新されねばならなかつたかを知ると共に、吾々は彼の建てた根幹が今日の學界に尚依然として固守されているところに彼の偉大さを見るのである。ギンスバークも亦本書を推して「スペンサー研究に一光明を投ずるのみならず、世界の社會

学界に一つの手引ともなるであろう」と言う。

吾々は次に今日におけるスペンサーの社会学の意義を一瞥しておこう。(一)彼のとつた膨大なる綜合哲學の意図は今日の複雑且つ専門化した學問に於いては不可能であることはいうまでもないが、余りに専門的に分化した結果は、科學の歸結を社會生活の改造に利用する上に非常な障害となつてゐることはまた振り返つてスペンサーに學ぶべきものがあるのではないか。更に彼の社會進化論は囂々の世評を捲き起こしたが、進化乃至發達概念は尚社会学には完全のものとしてとられてゐるのではないか。けれどもかかる進化の概念はそこから原始社會の形式を假説として作り出すべきではなく、その眞の目的は広汎なる比較研究に依つて種々の社會が種々の方法で變化し行く諸條件に適應して行くこと、更にそこでは何が根本的恆久的であるか、何が一時的可變的であるかを明らかにすることだ。

(二)スペンサーが既に述べたように記述的社會學を強調して比較的研究法を重視していることが注意されるべきである。この点では彼の後を継いだ多くの著名な人々がある。デュルケイム、エスターマーク、ホブハウス。けれども一方では「類似」の諸制度を比較して結論することは結局皮相な結論に到りはしないかを虞れる人々がある。併し凡ゆる科學的研究に於いて抽象と遊離は必ず含まるべきものであり、殊に實驗的方法の不可能なる社會科學に於いてはかかる批評は不当といふべきであらう。唯、注意すべきは比較的研究法の乱用である。

(三)更に又彼の研究が余りに人類學的基礎に立つことに終始して、近代文明的領域に手を触れることをしなかつた嫌いはあるが、それは當時の社會學の發達段階としては已むを得ないであらう。

(四) 彼は比較的方法に依つて得た帰納的結果は社会学的法則を建設するには不十分だということを認めていたことも注意されねばならない。そして一方では争鬭と適者生存の考えはその社会学説の根本原理となつてはいたが、淘汰は自律的に人類社会に存するものではないと考え、如何なる社会学に於いても強制的な統制に反対したけれども、国際間の紛争は禁止さるべきものと考えたことも記憶さるべきである。要するに生物学的法則を社会現象に適用することの危険に留意すべきである。

以上に依つて本書の現代学界における意義は明らかである。吾々は最後に、こうした意義と意図とを持つ本書がラムニーに依つて如何なる焦点の下にまとめられたかを示すために、その要項を列挙しておこう。

一、社会学の範圍

二、生物学、心理学、歴史（社会有機体）

三、社会の類型

四、婦人、家族、人種

五、社会、国家、政府

六、財産と経済制度

七、聖靈、祖先、神

八、社会変化の諸要因

九、社会進化（統一と分化）

十、社会進歩

十一、結論

さて最後に附言すべきは、本書の附録としてのスペンサーの哲学体系の要約と文献及び著作目録である。この文献目録は the Trustees の序文に依ると始め独立に出さるべき予定のものであつたらしいが、都合によつて附録としたものでその広汎網羅的なること、社会学研究者の見逃すべからざるものである。一、スペンサー自身の著作目録、二、その重要な翻訳（日本支那などは省略）、三、伝記のもの、一般のもの、四、生物学、五、心理学、六、社会学（政治、経済、教育を含む）、七、倫理学と宗教、八、哲学、九、雑誌論文と分類されているが、更にこれをそれぞれ各国別に、年代順に配列してある点、如何にも貴重なる文献集なることを再言しておこう。

海外哲学思潮 1935.7

一 ヴルトブルク『フランス語の発達と構造』。ニエディントン『新科学論』。

三 チャンドラー『美と人間性』。

一 ヴルトブルク『フランス語の発達と構造』

言語研究が盛に行われているという事は最近の学界に於ける一つの注目すべき現象であろう。一三七号（昭和八（1933）年一〇月）の本欄にも Georg Schmidt-Rohr, Die Sprache als Bildnerin der Völker. Eine Wesens- und Lebenskunde der Volkstümer, Eugen Diederichs, Jena 1932, 418 s. 及び Eva Fiesel, Die Sprachphilosophie der deutschen Romantik, J. C. B. Mohr, Tübingen 1927, 259 S. を紹介しておいたが、こゝではヴルトブルク【Walther von Wartburg, 1888-1971】の新著『フランス語の発達と構造』に就いて以下簡単に報告しておくことにしようと思ふ。W. v. Wartburg, Évolution et structure de la langue française, Teubner, Leipzig 1934, 248 p. 【邦訳『フランス語の進化と構造』】

著者ヴルトブルクはライプチヒ大学教授で、外に『フランス語源辞典』を二種類公けにしている。その一は Französisches etymologisches Wörterbuch, その二は O. Bloch との共著になる Dictionnaire étymologique de la langue française, Paris 1932. である。ロマン語の熱心な研究者である。ここに紹介される書物は英語の発達と構造とに關するイエスペルセンの書物と同一叢書に属するものであるが、イエスペルセンの史的言語学的立

場とは異り、フランス語の発達を国民の文化生活との聯関に於いて把握して行くという謂わば文化史的見解を明らかに示すものと見られる。また *Langue et la pensée* の著者たるプリュノ (Brunot) からの引用が極めて多いところから見ても言語研究に於ける社会心理学的立場が窺われる。史的言語学、一般文法論、機能的言語学の如き見地とは別なところに著者が立っているということは記憶すべき点であろう。

序文にも書いてある通り本書はフランス語の大体の輪廓を一般教養人に告げ知らせるという目的の下に書かれたため、細部に互る叙述はこれを省略し、唯各時代の特徴を描き出すことを主眼とし、これに役立つ限り前者に論及している。次に著者は言語の変化がその内部的必然性に基づくものであることは素より確信してはいるが、フランス国民の精神的、政治的、社会的、芸術的發展とフランス語の生命を規制する一般的傾向とを特に取り出して論じている。そして全体は凡べて七章から成り、一、三、五、七章は叙述の部分に充てられ、二、四、六章は歴史的部分とされている。(一、フランス語の起源。二、俗ラテン語より古代フランス語へ。三、古代フランス語。四、古代フランス語より中世フランス語へ。五、一六世紀。六、近代フランス語の時期。七、フランス語の現状。)

言語研究といつても大抵は語彙と音韻とに限られる傾向があるが、本書には文法形態、統辭論の如きが含まれ、社会心理学的に説明を与えられ、歴史的変遷の中に置かれている。トンヌラ【Ernest Tonnelet, 1877-1948】の『ドイツ語史』(Tonnelet, *Histoire de la langue allemande*, A. Colin, Paris 1927) が音韻論のみなるに對し、これが簡潔な書物でありながら文法的部門に多くの注意を払っていることは注意すべき事項であろう。就中吾々の興味を惹く部分は、中世フランス語より近世フランス語への転移と時代思潮との關係、その社会的原

因などに関する個所であろう。合理的思惟様式の確立や個人的自覚の獲得が文法的部門、統辭論の如きに如何に反映しているか。個人を原理とするアトミステイクの近代社会に於いて文法的部門に於ける分析的傾向の進展と文法形態の斉一性が看取されることは如何なる意味を持つてであろうか。ドイツ語に比して *claire* なフランス語が社会的交通に便なるため国際語として登場することが出来たという事情はサロンの影響を如何なる意味に於いて蒙っているであろうか。これ等の事柄は最早ひとり言語学者のみが興味を以つて迎えるべき問題ではないであろう。尚言語と文芸との関係に就いては前記のトンヌラの書も頁を割いておるが、本書では語順、文体などがこれと結びついて取り上げられている。散文としての文体が話す言葉とは別な形式に統一されたのはフランスでは一六世紀以降のことに属する。ラブレールは文学に、カルダンが論文に最初の優れた散文を残している。一七世紀に於いてはパスカルの業績、モリエールに擲擧された言語上の形式主義、ユーゴーの影響、フロベールの功績などが語られている。フランス文学が特殊な関心の下に輸入されつつある今日の日本はそれが手段とするフランス語に対して単なる語学者としての視角以上のものをも用意すべきではないであろうか。

二 エディントン『新科学論』

プランク、ハイゼンベルク等と並んで日本人に親しまれている科学理論家アーサー・エディントン【Arthur Stanley Eddington, 1882-1944】の新著の要領を記しておこう。A. Eddington, *New Pathways in Science*, Cambridge University Press. 著者に依れば本書は最近六年間に彼の興味を惹いた問題に就いて書かれたものの集成であ

るが、最近物理学の主要問題は殆んど凡べて取り上げられており、科学的哲学の問題、ミクロスコピックな現象の問題、マクロスコピックな現象の問題の三部分に分たれると思われる。

言うまでもなく物理学は外界に物の種々相を探索するものであるが、エディントンは先ずかかる世界の存在は抑々如何なる根拠に基づいて信ずる事が出来るであろうかと考える。この点に於いて彼は明らかに吾々の主観的印象から客観を推論し得るとなす観念論的立場に立つものである。吾々の精神こそ第一の最も直接的な経験的事実であり、他の一切はそれから推論されるものに過ぎない。かくて推論されたものは吾々の精神と同じ主観的印象を持つ他者の存在である。吾々はこの自我と他者との共通の印象を説明せんがために凡ゆる精神に共通の世界を予想する。この世界こそ特に科学の対象とするものであつて、本書の問題も亦この世界に關係する。著者の見るところに従えば科学は全く外界の構造上の特質を究明するものであつて、その本質の如きに就いては何ものをも語ることに出来ない。吾々が科学上の言葉として使う「実体」は象徴以外のものではなく、その象徴するものの性質に就いては尠くとも科学的方法に依る限り吾々は何等知ることとは出来ない。これは「群論」と題される章に詳細に説かれているところであるが、尚この部分に於いて数学者は未知の実体に作用する一群の未知の物体の構造を如何によく分析し得るかを説いている。科学の目的としては唯或る形式的關係を知ればよいのであつて、科学的知識は實にこうした關係の知識に限られている。

科学的知識に対するこのような限定は深い哲学的意味を持つものではないであらうか。即ち吾々は外界に對して尚他の知識を持ち得ることがこれに依つて示されている。宗教的又芸術的直観の与える知識は事物の構造以外の点に關係する。このようにして自然現象を嚴密に規定し得るか否かの問題は極めて興味あるもの

となる。現在科学が自然現象の厳密な因果法則を見出し得るか否かの論点に關しては二つの傾向がある。その一は即ち厳密なる因果法則をとらずに一般に蓋然性を問題とする量子論であるが、これは科学が粗雑な知識しか有さぬということを意味するのでなく、自然現象を観察することは必ずこれに何等かの干渉を加えることとなるからであつて、このことは觀察上の難点のみならず理論上も殆んど不可能に近く、如何なる実験も一定量のエネルギーを全く増減することなく行うことは出来ないし又電子のような微粒子の擾乱も全く正確な予見を許さぬものである。第二にはこれに對してかかる厳密な因果法則の定立にまで科学は發達しておらぬがその存在は動かし難いと主張する人々がいる。だがエディントンは何故それを假定するのか、どのような哲學的根拠があるのかと尋ねる。因果法則は嘗つて一個の科学的信条として確信され、幾多の科學的業績を生み出すのを助けて來た。併し今や統計的方法が發達し因果法則とは異つた技術を促進しつつあり、かくして決定論は科學の領域からその姿を没し、非決定論の採用が要求されているとエディントンは言う。

更にミクロスコピックな世界とマクロスコピックな世界との間に關聯を建設することは著者がここ数年の間最も意を用いた点である。最近の相對性理論に依れば大銀河は互に後退しつつあり而もその速度は距離と共に増大しつつあり且つ空間は拡大しつつあるのであるが、拡大とは相對的概念であるから逆に原子が宇宙に此して縮小しつつあるとも言えよう。宇宙の斥力を測定する *cosmical constant* はプロトンや電子の実験から得られるから電子の方程式を知れば最近の相對性理論が示しておるように宇宙全体の運動を演繹することが出來るとエディントンは確信している。

併し科學の世界には權利と共にその限界が認められねばならぬ。科學的知識は象徵である。けれどもその

外に吾々は直接知を持つてゐる。「吾々が直ちに本源に立ち歸る時に経験界に於いて第一に認めねばならぬものは何か真理に対する意欲である。これは決して逃げをうつための暗号ではない。それは物的世界に於ける未知の事物の未知の活動を記述する象徴的言語では書くことが出来ないのである。吾々は科学をして問題を捕えしめ又知覚的经验の事実を整理せしめるに先立つて経験界の第一の合成を仮定した。科学は研究を通してこの合成を再び見出すことが出来るかも知れない。見出し得ぬとすれば科学は宇宙の説明を要求する。だが科学を説明するものに何があるか。」科学は生命の問題を究めて生ける人間と頭脳とを作り得たとしてもその思想と信仰とが真でないとなれば吾々はこの人間の頭を吾々の頭と同じものとは考えることが出来ないのである。最後に直接知に頼らねばならぬということは特に吾々にとつて興味を惹く事柄でなければならぬ。

三 チャンドラー『美と人間性』

今日の美学はドイツなどでは現象学の影響の下に過去の哲学的美学の再認識に赴いてゐると思われるが、一方科学的美学の新傾向として唯物史観的方法が注目されるに到つた蔭に所謂心理学的美学が心理学そのものの動搖と共に昔日の勢威を失いつつあることは何人も認めるところであろう。とはいへアメリカでは新しい立場に基づく心理学的美学が一つの勢力を持つてゐることが忘れられてはならぬ。この風潮を示すものとして吾々はアルバート・チャンドラー【1884-1957】の美と人間性とに関する新著を見ることにしよう。Albert R. Chandler, *Beauty and Human Nature. Elements of psychological aesthetics*, New York 1934, 381 p. 著者は Ohio State

University の哲学の教授。本書は R・M・エリオット編纂に係る The Century Psychology Series の一冊として公刊されたもの。その特徴はサブタイトルに見られるように心理学的方法に依る実験美学の研究というところにある。

著者の主力は美的体験の心理学的実験に注がれている。元来美学に於けるこうした傾向は最近殆んど無力になつており、イギリスでは Gordon, Experimental Aesthetics, 1909. 以来殆んどその跡を絶つておつたと見られる。著者の考えではこういう実験美学こそ吾々の手にし得る最も客観的な材料を提供し得るものであるから、この方針は何にも増して優越な地位に立たねばならぬとされる。芸術制作の見地からは実験的題材は余り重要視さるべきではないが、芸術研究に於いては全く逆である。著者はそれ故実験的材料を研究の基礎とし、彼自らの印象や学者乃至批評家の見解は全く無視しているように見える。

本書は一七章に分れ、芸術の凡ゆるジャンルに万遍なく触れている。第一章 (Art, Beauty, and Experience) は実験美学を強調する著者自らの立場又方法をよく説いている。心理学的方法の採用は前に述べたが、ここに心理学的方法と呼ばれるものは内省的方法である。而もこの研究では種々の事情の故に先ず鑑賞家又享受者の側に於ける心理——著者に依れば即ち思想及び感情である——を主として論じ、芸術家の心理には後章で僅かに触れるにとどまつている。兎に角制作者であれ享受者であれそれ等を通じての美的体験の特質としては Isolation, Unity, Significance の三者を指示することが出来ると言う。こうした前提から出発してチャンネルは視覚的形式の快とは何かを問題にしているが、主としてフェヒネル、ソーンダイクなどの心理学上の実験に依拠して論議を進めている辺り蓋し美学に於ける異色であろう。視覚形式の意義に就いては均斉、

リズムと割合、知覚の容易性などを説いている。同様の手法で色彩の快、建築、彫刻、絵画に触れておるが、これ等の芸術への接近が常に実践的見地から行われ、装飾と機能或は都市計画など応用美術的方面に断えず新たな眼を開いて行くことは吾々をしてその背後に潜むアメリカ社会を想像せしめるに十分なものである。著者は尚音楽に就いてその要素、構造、意義を究明しているが、音楽のために三章を費している点からすればこの方面に於けるチャンドラーの造詣抱負のかなり大なるものがあることを察し得よう。発音とリズムとを見て、言語と文学とに移り、天才と能才とに言及して、最後に美術家と作家との問題、文化と鑑賞との問題に達している。

各章末には夫々の問題に就いて周到な参考書目が添えられている。一方研究報告として他方入門書として吾々の関心を惹くものを備えていると言えよう。

海外哲学思潮 1935.8

一、ベルグソン。二、ブロンデル。三、ブランシュギク。

一、ベルグソン

一九三二年に『道德と宗教との二つの源泉』を公にしてこの方、ベルグソンは再び日本人々の間に新しい興味を以つて迎えられておるように見える。哲学の国として我ひと共に認めて来たドイツは最近の政治的事情の故に昔日の気魄と生命とをついに喪失したかに思われるが、この時フランスの学芸が新に顧みられるということは悦ばしいことでなければならぬ。若しフランス哲学の現勢に就いて云々しようと思ふならばベルグソン及びこの老哲学者を繞る人々に向つて最も綿密な注意を払わねばならぬに相違ない。吾々はその意味に於いて先ずベルグソンが昨年世に問うた *La pensée et le mouvant*, Paris, Alcan, 322 p. を取り上げることにしよう。

既に知られているように、この書物は書き下ろしではなく、以前に発表された論文並びに講演筆記の集録により成つてゐる。この事のために書かれた「序説」の二章も一九二二年一月の日附を有しているのであるから、本書は事実上『道德と宗教との二つの源泉』に先立つものと見られねばならぬ。しかし有名な「形而上学序論」*Introduction à la métaphysique* (1903) の如き入手し難い論文や、最初スエーデンの雑誌 *Nordisk Tidskrift* にスエーデン語で掲載され、今フランス語で初めて発表される「可能なるものと現実的なるもの」

Le Possible et le réel(1930)が含まれており、且つ「序説」も古いものとは言え、全く未発表のものであり、何れもベルクソン哲学の歩み行く道程を理解する上に於いて注目すべきものたるを失わない。

「序説」に於いてはかの天才的な著作『意識に直接与えられたもの』に続く発展が看取される。ベルグソンは哲学に於いて最も欠如しているものをば精密性の中に見出し、この精密性を吟味するために時間の觀念を問題としている。従来の哲学は時間の本質を見失っている。時間の本質は持続 *durée* ということに外ならない。それ故に時間は停止した死んだものではない。時間を空間と同一の系列に置いて、同一種類のものとして取扱つて来た従来の試みは全く誤謬とされねばならぬ。時間と空間とを区別するものは絶対的なものでなければならず、右の試みは時間の空間化に終らねばならぬ。時間の本質はは不斷に流れて止まることなきところに求められねばならぬ。時間の本来の姿は絶えざる創造作用 *création continue* 新たなものの休みなき湧出 *jaillissement ininterrompu de nouveauté* であると言えよう。それは外部から意識に与えられたものでないから、外からこれに向うことは不可能である。科学は通常この持続そのものを捕えることなく、却つて唯その量又屬性に就いて考えているに過ぎない。

ところで実証科学が看過するを常としているこの持続は吾々に直接に与えられているものとして正に自由なる行動 *action libre* である。それは外部から切断され得ぬものであり、而もその進行は予測を許さない。そしてこのような自由なる行動としての持続は、吾々がこれを分析し又思惟しようとする限り、吾々の前にその真の姿を現すことをやめるのである。それは分析され又論議さるべきものではなくして、反対に吾々が感じねばならぬものであり、体験せねばならぬものである。即ちそれは直観されねばならぬものである。直

観は精神が精神を直接に見ることである。

直観の持つ明瞭さは理知 *intelligence* の持つ明瞭さと異なる。前者が持続そのものへの沈潜であるに反し、後者は日常的行動に於ける人間に対して自己の行動を巧みに導かしめるものである。哲学は科学の最高位に立つものでもなければ、諸科学の単なる綜合に依つて成るものでもない。哲学の見方はただ物を純粹に見るというところに尽きる。従つて哲学は日常的な言語を超えねばならぬ。蓋し言語は人間の社会的協同のための伝達機能を果たす社会的思惟たるに過ぎぬからである。哲学には所謂 *esprit de finesse* が要求される。かくて真に哲学することは、流動する事実を既成の観念の框に押し込もうとすることへの抗議であると言ふべきである。

「可能的なるものと現実的なるもの」に於いても同じく不斷の創造が語られる。常に新たなるものが生起するという点では外的事象も内的生活も同一であるが、内的生活に就いては予測が不可能である。事実と予見とが一致するのは要素的現象に限られるが、併しそれは抽象の世界であつて、現実の世界ではない。具體的な現実は無機的素材に入り込んでいる生命的又意識的存在をも包括するものでなければならぬ。従つて厳密に言えば外的事象と雖も新たなるものへの予見は不可能であると言わねばならぬだろう。ところで吾々の理知は本来行為に役立つために作られているのであるが故に、理知は反覆又製作 *fabrication* のみを重視して、眞の創造自体に対しては関心を持たない。かくして理知は思索 *speculation* には向かないと考えられる。一般に理知と言われるものは、*percevoir, concevoir, comprendre* に依つて構成されているが、それは固定するものに就いてこそ知識を与へはするものの、不斷の持続として存在し且つ絶えざる拡大を含むところの現実界

はこの理知に依つては到底捕えられることは出来ない。

今日まで人々が形而上学の問題としてその解決に苦しんで来たものは結局存在に関するものと認識に関するものであるが、前者に就いては、何故に存在があるか、何故に或るものが又或る人が存在するかという如きことのみが問われて、存在するもの自身の性質は全く等閑に附せられておつた。そして存在は超越的原因を示現するものとされ、原因が無限に追及されたが、終局は絶対的空虚であるの外なかつた。これは充実した現実をば空虚なる觀念で以て置き換えようとすることであり、この場合語られる無 *rien* とか全体 *tout* とかは文字の上の、事柄に外ならぬ。後者に就いても同様であつて、統一と言われ又多様と言われても要するに事実の代りに觀念を置いたものに過ぎないと思われる。

ところでこのような企ては、現実的なものの根源に可能的なるものを据えようとするものであるが、可能的なるものを現実的なものよりも「より小さいもの」*le moins* であると考え、この小なるものより大なる現実への移行を考えようとするものである。然るに可能的なるものは由来吾々が現実的なものに就いて仮設的に作つたものであり、現実的なものが存して初めて可能的なるものが生じ得るのではないか。可能的なるものとは現在のなるものの過去に投ぜられた反映である。可能的なるものは現実的なものよりも「より大」*le plus* である。

哲学者は従来可能的なるものから出発することに依つて現実の把握に失敗を重ねて来た。吾々はこの現実自体を出発点として定めねばならぬ。そしてそのものが不斷の創造であつた以上、吾々は時間の上にしっかりと足を踏み占めることを忘るべきではない。

尚このほかに本書にはオクスフォード大学で行った講演「変化の知覚」 *la perception du changement*(1911)、『ボローニユの国際哲学会の講演「哲学的直観」 *L'intuition philosophique*(1911)』「形而上学序論」及び学者に就いての追想と学説の紹介(クロード・ベルナルの哲学)、「真理と現実、キリヤム・ジェイムズのプラグマティズムに就いて」、「ラズソンの生涯と著作」とが含まれている。

二、ブロンデル

哲学と実証科学とがよそよそしく対立することなく、常に交流し合っているということは、恐らくフランスの学問の光輝ある伝統をなすものと言われるであろう。一方に於いては科学に於ける原理的な問題が哲学者達に依って進んで検討せられると共に、他方に於いては諸科学の領域に哲学的な方法が採用されつつある。科学の哲学と哲学的諸科学と。それ故にベルグソンの影響も所謂 *philosophie générale* の範囲にとどまることなく、宗教学、心理学、美術学などの広汎な部門に及んでいる。

Maurice Blondel, *La pensée, I: La genèse de la pensée et les paliers de son ascension spontanée*, Paris, Alcan, 1934, XLI+421 p. 著者ブロンデルはルロワなどと共に早くからベルグソンの影響を受けた人であるが、一方ブートルの傾向を脱し切れず、この意味に於いて折衷的な道を歩みながら独自の世界を開拓しようとする努力を示している。直観と理性との調和を目指すこの方向は右の近著にも遺憾なく現れている。この書は昨秋フランス哲学界に最も大きな足跡を印したものと言われているが、既に著者四〇年の思索の成果であるとすれば亦当然のことであろう。尚その第二巻が *La responsabilité de la pensée et la possibilité de son achèvement spontané*

であることは予告されている。

著者に依れば思惟とは一切の心的なるものを含む。従つてデカルトが思惟するものは何かと問う時、彼は明らかな偏向に陥っているものと見ねばならぬ。デカルトは極めて異質的な諸機能の列挙を以つてこの本質的な統一に於いて把握された思惟の見地に取り代えたのであり、客観的な所与と主観的な活動との混合体を意識と混同したものと評されねばならぬ。思惟に於いては最も相異なる傾向も同一實在を生み出し、相矛盾する定義も調和するのであるから、思惟は自己に内在するものの反映であると同時に外在するものの反映でもあり、思惟の主体の自発性、實在そのものの生成であると言わねばならぬ。

先ず思惟に三つの段階が区別せられる。宇宙的思惟 *pensée cosmique*、有機的思惟 *pensée organique et organisatrice*、心的思惟 *pensée psychique* これである。これ等の各段階には不完全さが生ずる。有機体はその総体に於いては宇宙の完成せざるものを部分的ながら実現し、要素そのものには還元されない統一体を極めて多くの要素に依つて合成しておる。心的機構は又一段の進歩を示している。これは総合的な創造性の原理であり、新たな欲求の創造者である。だがこれらの思惟はついに「思惟する思惟」*pensée pensante* に到達するための条件に過ぎない。思惟する思惟は全く新たな段階であり、自我意識乃至超越的意識こそ人間と動物との間に深淵を掘るものである。若し前三者を以つて人間の意識以前の段階であるとするならば、思惟する思惟は実に人間の意識でなければならぬ。

けれども更に重要なのは、思惟の不完全性であり、統一的たらしとするその努力である。知識の自発性の正常なる発展には三つの段階がある。事物の世界、主観の本質、理性の観念的秩序。事物に於いて自己を統

一し、自らに満足し得ず、又単なる理性に依つては、予見し渴望しながらも全く神秘に包まれた統一体に到達し得ぬために、思惟は一を択び、決し、新たなる世界に進むべき運命に遭遇する。この最後の状態こそ理性的思惟の段階であり、本質的には人々が神と呼ぶ絶対的超越者の存在である。

以上を一層よく理解するために次の事柄が述べられねばならぬ。ブロンデルは宇宙的思惟に就いて *aspect noétique* と *un aspect pneumatique* との二つの側面を区別する。この両者は相互に還元し得ぬものであり、而も相互に協同的なものであり、その衝突は無限性に於いては不可能でありながら自然の動きを刺戟し、この不可能性自体に依つて精神の仲裁を準備する。この二重性は吾々の理性的思惟に見出されるものであり、哲学者から神へ、宗教的憧憬から神への道として存するものである。

三 ブランシュギク

直観を重ずるベルグソン及びこれを中心する人々を離れてフランス哲学界を見渡す時に吾々の前に現れるのは、右の傾向に対立しながら又それ自ら様々の流派に分れながら尚合理主義の伝統を守つて一つの勢力をなす主知主義の哲学であり、就中レオン・ブランシュギクである。彼はラシュリエの傾向に深く影響されているが、その形而上学的態度を斥けて批判的立場に止まろうとするところに特色を持っている。嘗つて彼の *La Connaissance de soi* は本欄に紹介されたことがある【1932.7】。こゝではその新著 *Les âges de l'intelligence*, Paris, Alcan, 1934. を簡単に紹介しておこう。

人間精神の進歩に関する理論は近代フランスの思想に於いて一つの基礎的な意義を持つている。イギリス

に於いて両ペーコンが主張し、フランスに於いてパスカル、デカルトが定式化した古代人に対する近代人の優越の確信、更にペロー及びボワロー等を主役とするこの問題の論争、フランス唯物論を貫く人間精神の進歩の觀念の如き、何れも理性の見地に立つこの進歩の觀念が市民的社會の成立と結びついて果して来た大きな役割を明らかにしておる。ブランシュギクの著書も亦この人間精神の進歩に關係する。著者に従えば、人間の存在に於ける変化を見ようとする場合には差し当り二つの側面が區別されねばならぬ。一は必然的に老衰し且つ死滅して了う生物學的側面であり、他は不斷の改良と絶えざる進歩とを示す精神的側面である。問題は後者にある。

人間的思维の低次の諸階級についての知識は、近代に入つて合理主義的觀念論の立場に立つ新たな実証主義者に依つて飛躍的な進歩を遂げたと思われる。

さて未開人の觀念から思维の幼稚さを示す本質的特性を切り離したものは即ち原因の觀念であつた。一方に於いては実体の素朴な概念的要求の神秘性が、他方に於いては個人の歴史の繋りと實在の客觀的關係とを區別するに不慣れな判断の未熟さが除去されたのであつた。凡ゆる出来事は吾々の欲望に依つて規定される。こうした自我中心主義は後世に到つてガリレイに反對され、相對性理論に依つて打ち破られた。かくて快適なる閑暇は知覺の世界を去ることを妨げ、科學が始まる。而もそれは絶えず進歩せずには措かないのである。吾々と同じく未開人の好んでとれる因果的探求法、經驗的方法を成功せしめるには差異法ではなく弁別法を必要とする。數學に就いては、ピュタゴラス派の数の属性の研究が初めて知性の新しい時代に一步踏みだしたものと見られる。けれども進歩は一刻も止らぬ。ピュタゴラス派は尚成熟せる時代を離れること遙かに遠

い。その絶対的事物の關係に於ける誤謬、整数の算術を發展せしめ得ずして「非合理的なるものの幻想」に對するときのその遁辭。弁証法と誤解された多くの神話との間に於けるプラトンの不確實さ、分析的な第一の群から第二の群への通路を作りギリシャ語の偶然的な法則に支配された「デイスクルの宇宙」を占拠するアリストテレスの支配、更に又近代人に於いてはデカルト以来、原理の直觀的靜的空間に對して幾何學の知的デュナミズムの再生があり、理性と經驗とが互に相抱き合う自然の眞實の概念と自我に於ける事物の世界の傳統的想像との間を動搖したカントなど、段階と人間經驗とに關する、吾々に親しみ深いこれら多くの命題が鮮かに集められている。

數學に對してロジスティクの擡頭も注意されるが、凡ゆる數學的概念を抱括する特異な体系が存在するのではない。數學には常に豊かな言葉の無限性が必要である。けれども哲學者の反省を集中する眞理の決定的判斷は公理に依る仮説を択ぶところにある。それは純粹な形式論理の技巧を把握することを逸している。

相對性理論、波動力學、ハイゼンベルグの不確定の關係などの最近の發展に依つて、吾々の宇宙解釋の思惟は不斷に是正される機會を与えられつつある。一切を包含する空間が物的關係の網を疊みかけてしまうことができないように、最も自然に適應せる思惟に於いても不變の概念は存在しない。さてホモ・サピエンスの世界は唯一の眞實なる世界であるが、それは經驗と理性との現實的方法によつて忠実に把握されるものであり、そこでは何ものも日常語以上の意味を持つものではなく具体は抽象と密接に結びついている。

かくて星辰から原子に、原子から星辰に導く二つの途に立つて最も優れた反省の研究をなすものは全体としての人間理性である。眞理のために、うち樹てられる規律に従つて、哲學には模範と規準があるというこ

と、内在的一般の哲学の発展は吾々の文明の世紀を越えて哲学者の判断に資さねばならぬこと、これらは又何人も争い得ぬところであらう。

海外哲学思潮 1935.9

一、『フランスに於ける文明觀念の歴史』。二、『文学論』。

一、『フランスに於ける文明觀念の歴史』

文化と文明との区別は哲學者の單なるソフィスティクを以つて片づけられてよいものでもなく、又そうかと言つて「科学的」にこの区別を抹殺して了うことも恐らく正当ではない。文化を根本概念として採用する人々は一般に文明との区別を喧しく論ずるが、これに反して文明という概念で割り切つて行こうとする人々は文化との区別を無視し勝ちであるという事情は興味あるものである。この区別は手輕なソフィスティクから解放されて新しい地盤の上に生かさねばならぬと考えられる。最近は文化統制などと結びついて文化の問題が人々を捕えているが、これなどは何処までも文化統制であつて決して文明統制と言い換えることは出来ない。文化と文明との關係に就いて語るのはその場所ではない。唯この区別が特に日本の文化形態の特質を掴む上に重要な意味を持つているということを指摘しておけばそれでよい。日本文化は正に文明と區別された意味に於いて文化である。文明の基本的なモメントをなす合理的性格と進歩の觀念とは日本文化に於いては全く見出されることなく、却つて非合理性と有機的統一とに於ける文化がその根本をなしているからである。

さてここに紹介しようとする書物はフランスに於ける文明の觀念の歴史に關係する。この問題に就いて

吾々は既に一つの注目すべき業績を知っている。Joachim Moras 【1902-61】、*Ursprung und Entwicklung des Begriffs der Zivilisation in Frankreich* (1756-1830), Seminar für Romanische Sprachen und Kultur, Hamburg 1930. 見られる通りこの著書に依って取扱われているのは文明の觀念の歴史の中でもその最初の時期であるが、今この欄でその輪廓を伝えようとする書はこれの後を承けて一八三〇年から一八七〇年に到る時期を対象とする。R. A. Lochoire, *History of the Idea of Civilization in France* (1830-1870), Studien zur abendländischen Geistes- und Gesellschaftsgeschichte, herausgegeben von Hermann Platz, Professor in Bonn, Ludwig Röhrscheid Verlag, Bonn, 1930, 245 S. 著者に就いては詳しいことは判らぬが、ニュー・ゼーランドで M. A. をとり、ボンで Ph. D. をとっている。本書はボン大学に提出されたドクトル論文であろうと思われる。題名からも知られるように英語で書かれているが、フランスの著者達からの多くの引用文は凡べて英語に移されておらず、フランス語のままになっている。モアラスの書と同じくこの書物もその成立に当っては有名なエルンスト・ローベルト・クルティウスの庇護と指導を受けている由である。クルティウスが現代ドイツに於ける有名なフランス精神史研究者であることは日本にも知られており、一二の翻訳も既に公にされている。(試みに彼の著書を摘記すれば、Ernst Robert Curtius, Balzac, Bonn 1923; *Französischer Geist im neuen Europa*, Berlin und Leipzig 1925; "Frankreichkunde", "Wandlungen des französischen Kulturbewusstseins", "Die französische Kultur-Idee", in *Deutsch-Französische Rundschau*, Bd. I, 1928; "Zur Geschichte der Zivilisationsidee in Frankreich", in *Festschrift für Eduard Wechsler*, 19. Okt. 1929, Jena und Leipzig 1929; *Frankreich*, Stuttgart und Berlin 1930.) クルティウスの影響は本書の到るところに現れているようにあるが、その外に著者に役立つものとしては第一に *Centre international*

de synthèse. Civilisation. Le mot et l'idée, 1930. (Contributions par Lucien Febvre, Marcel Mauss, Alfredo Niceforo, Emile Tonnellat, Louis Weber, etc.) 第二 Alfredo Niceforo, Les indices numériques de la civilisation et du progrès, 1921. がゆゑ

文明の觀念に就いて先ず一般的な報告をすることが著者の仕事である。一八三〇年から一八七〇年までの時期に於けるフランスの文明概念の重心は啓蒙時代に依つて提出された社会的及び政治的問題即ち一七八九年に最初の不完全な政治的解決に到達した問題の中に横たわる。一七八四年に「自然が課している人類最大の問題は普遍的に法を管理する市民的社會への到達である」と書いたのはカントであつた。社會と個人との闘争の解決、真に公正なる憲法の制定、各人に自己伸張の自由を与える社會形態の完成、全人類を包括する社會の建設の如き問題はカントが一八世紀思想家と共有していたものであるが、シェリング及びヘーゲルに到つてドイツはカント的問題を捨てて別の方針を採ぶこととなつた。然るにフランスでは本書で取扱う時期に於いても人々は尚カントやルソーの問題を中心に据えていたのである。ルノーギエの如きはその証拠である。——かくて文明は何よりも社會と個人、個人と個人、社會と社會の關係の正しき規定、中央權力の性質、一七八九年の原理の論議と關係する。そこで或る人は文明を定義して *a state in which living beings have social relations one with another* と言っているが、この外延が甚だ大きく従つて内包の甚だ少ない定義も目下の研究には手引きとして役立つことが出来よう。

(二)「社會的政治的問題」はフランスに於ける文明の觀念にとつて基礎的な意味を持つてゐる。この特質はイギリス及びドイツの文明乃至文化の觀念に於いては稀薄である。ところでフランス的な文明觀念にとつ

て第二次的な重要性を有するものは、人間の環境に対する関係、更に人間は客觀的世界を自分の意志通りに変形する力を持たねばならぬという信念である。これは(㉔)「經濟的問題」(環境の征服乃至統制)と呼ばれ得るものであるが、イギリスに於ける文明の觀念は恰もこれを核心とするものであり、ドイツの(文化と區別された)文明の觀念もまた然りである。次にドイツ人の所謂文化の中に含まれている問題がある。一八三〇年のフランスは未だドイツ觀念論の滲潤を経験せず、従つてこのような問題に就いては何事も知らなかつたと言える。それは文学、美術、哲学、科学、宗教などのような——ギゾーの言葉を借りて言えば——個人的な業績と結びつくものであり、そこには世界の目的に関する形而上学的な解釈が含まれているのが常である。これを(㉕)「文化的問題」と呼ぶことにしよう。これは一般に社会有機體説と密接な關聯を持つてゐる。以上の三者は社会としての文明、力としての文明、精神としての文明と言い換えることが出来る。

次に文明觀念の構造に注意しよう。第一にその時間的なディメンション即ち或は進歩として或は衰頹として解釈さるべき問題があるが、これは数学的、物理学的、化学的、生物学的類推を以て捕えられようとし、また過去の全發展を一括して文明となす人もあり、単にその一時期のみに文明の觀念を適用する人もあるが、la civilisation moderne という場合はその中心が政治的性格の中に求められてゐる。第二は空間的ディメンションであつて、これは当然 Carrier-society と結びつくが、Carrier-society といつても、村落の如き運命共同体から全人類を含む社会に到るまで、新しき産業的集團から文化的遺伝にもとづく民族的集團に到るまで色々のものが考えられ、かくして文明の政治的、地理的、人種的、民族的、宗教的、階級的限定が生れる (civilisation autrichienne, germanique, italienne, catholique, bourgeoise etc.)。第三には文明觀念の内包の何れのエレメントを

重視するかに依つて成立する質的限定がある (civilisation morale, publique, extérieure etc.)。—— 以上のように文明の諸要素を分析するということは一八世紀の精神が全く知らなかったところであり、一八三〇年頃に於いても一つの新しい見方たるを失わなかったものである。

文明の多元的性格が人々の認めるところとなつたのは一八三〇年に先立つこと僅かの時代である。一八世紀の見方からすれば文明は唯一つしかないのであつて、それは社会形態というよりも寧ろ歴史的過程として考えられており、この *normative conception* ともいふべきものにおいては未だこの過程に到達せぬ社会は「野蛮」乃至は「蒙昧」として理解せられておつた。然るに一八三〇年頃に及んで社会有機体説と結合する文化的問題の提出が国に依り又社会に依つて異なる様々の文明の存することを主張し始めることとなり、ここに個体と普遍、唯名論と実念論の如き一般的哲学的対立の一つの表現として、文明に対する二つの見方が相抗争することになる。多元性を主張する方を *ethnographical conception* と呼ぶならば、一元性を固執する方を *unitary conception* と名づけることが出来よう。—— 現代文明の批判において *la vraie civilisation* などを云々する人に於いては自己の社会的政治的な理想なり偏見なりがこのものを貫いていると見て差支えない。どういふ人々が文明という語を使っているか。一九世紀の文学は社会的政治的問題に依つて染め上げられており、政治的緊張の存するところには必ず文明という語が見出される (芸術のための芸術を説く人々は論外である。ミュッセとゴーチエとは文明に就いて自己の解釈を与えなかつた少数の著述家の例である)。—— 文明という語の使用が著しく増大した時期がある。一八三〇年以前にこの語を使用したものは哲学者、道德学者、経済学者、歴史家に限られるが、一八七〇年には農夫すらこれを使用した。

本書に於ける資料の整理は先ず年代的には政治的事情を顧慮して次のように行われる。1)1830-1848 (July Monarchy), 2)1848-1851(Second Republic), 3) 1851-1870(Second Empire). 併しこの三つの時期の持つ夫々の重要性は決して同一ではない。尚各時期は如何に区分されるか。それには次の目次を見るのが近道であろう。

第一部

第一章 ギゾー以前と以後

第二章 諸科学

第一節 歴史学

第二節 社会科学

第三節 経済学

第四節 道徳哲学

第五節 人類学

第三章 政治哲学

第一節 ブルジョワジーとデモクラシー

第二節 自由主義

第三節 保守的現実主義

第四節 サン・シモンイズム

第五節 社会主義

第六節 社会政策

第四章 カソリシズムと文明

第五章 フランスと文明

第一節 国民性

第二節 フランスと文明

第三節 戦争と文明

第四節 The Geopolitics of Civilization

第五節 植民地

第二部

第六章 Barbari ad Portas !

第三部

第七章 シーザリズム

第八章 諸科学

第一節 歴史学

第二節 社会科学

第三節 経済学

第四節 道徳哲学

第五節 人類学

第九章 政治哲学

第一節 自由主義

第二節 サン・シモンイズム

第三節 実証主義

第一〇章 カソリシズムと文明

第一章 フランスと文明

第一節 国民性

第二節 フランスと文明

第三節 戦争と文明

第四節 The Geopolitics of Civilization

第五節 植民地

尚この外に序論と結論とが夫々一〇頁、ノートが五〇頁、文献が七頁、索引が凡べて一二頁。こういう書物はどうしても読まれる本というより半ば辞典のような性質を持っている。謂わば資料集である。従つてその輪廓はこれを述べることは出来ても、その内容に立ち入つて紹介することは不可能である。フランス精神史などに興味を持たれる方々には是非一本を備えられることをおすすめしたいと思う。主張なりイデオロギーなりが資料の背後に隠れているためか、ナチスの下で出た本としては注目に値するものの一つと思われる。

る。

二 『文学論』

最近吾が国文壇で最も多くの問題を起している外国文学はフランス文学である。ゲード、ブルースト等の全集も刊行され、批評家ライボーデ【ティボーデ Thibaudet であろう】、クレミュー等も紹介され来つた迅速さは全く驚くべきものである。アランも『散文論』（芸術体系中）が既に訳出され、『神々』も亦この欄において紹介されている。ここに紹介しようとする『文学論』（Alain, *Propos de littérature*, 1934, 324 p.）は発行の順序としては『神々』に先立つものである。

現今フランスの思想家に種々の影響を及ぼしているのはベルグソンである。殊に従来の実証主義、合理主義に慊らず、それに反抗して生の躍動を直観に依つて捕えんとする直観主義は思索する人々に新しい生命を与えた。文学者、批評家にもその影響はひろくゆき互つているかのように見える。アランの『文学論』は文学の精神ともいふべきものを語り、文学の純粹なる詩の精神を強調しているが、ここに我々はベルグソン哲学の表現を明らかに看取することが出来る。

アランは最初に言葉と歌との綜合としての詩に就いて述べる。言葉は人間の道具であり、外から強制され、脅迫された時の叫びである。歌は言葉と同じく一つの記号ではあるが、もともと力の記号であつて、外部から強制されない自由なる人間的形式の表現をなすものである。言葉は他人の援助を求めるものであるが、歌は全く他人の救いを求めるものでなく、従つて人間の没落を告げるのではない。歌には人間全体の雄々しい

力が現れている。歌こそ人間の再興、つまり自らの王者となれる人間を現すものである。

併し吾々はこのような不撓不屈な歌にざらつくような言葉をはめこんで行く詩人に名誉を与えなければならぬ。詩は歌が自己の周囲に作りなした広い場所、世界を自己に戻すのである。叫びはこれと共に再び戻つて歌を亡ぼさねばならぬ。だが韻律は再び音を取り上げることに依つて、反抗する散文を征服して了う。詩人は自己拡張的な歌と自己閉塞的な叫び声とを共にしつかり己れのうちに抱きかかえるのである。

けれどもこの詩を作ることは最も困難なる術である。最も美しい詩は忍耐を要求する。それは恰も果実のように熟するものであり、真の詩は自然の果実である。詩人は先ず自己のうちに音楽的な韻律を起さなければならぬ。そしてこの韻律に依つて己れの持つ思想を救うのである。この生ける韻律こそ詩人の出発点たるべきであつて、思想が中心となることがあつてはならない。詩人は思想を韻律的な言葉に依つて表現する。否、韻律自身から思想が出て来るのである。真の言葉は吾々の肉体に訴えるものであつて、精神には二次的にしか訴えない。詩人の用いる記号は正しくかかるものであつて、先ず吾々の肉体に触れるものである。かかる記号を得るには自然に対する忠実さに依らねばならぬ。一の事柄を熟するまで十分に翫味すること、そして自己の感じを十分に感じる事が大切である。人間の真理と事物の真理とを合致せしめることが詩人の仕事である。

詩はかくして真に実在する現実（自然）と自己との陶酔的な一致であり、そこに韻律が生じて来る。即ち努力よりも寧ろ忍耐とこたわらずにいることが必要であると言えよう。かくて真の詩に於いて語るものは自然でなければならぬ。詩は宇宙の現在を感じしめるものである。この宇宙は併し言葉に依らず、神話に依

らず、そのまま完成したものとして捉えられねばならぬ。言葉は人と人とを結びつけるものであつて、直接に人と自然との關係を現すことはない。この言葉に依つて詩は成立しているが、その自然を捉えることは言葉に依つては不可能だと言ふべきである。

さて吾々は考える時には通常一定の社会的規範に従っている。言い換えれば社会的慣習の拘束を受けている。美の觀念という如きものも結局はこのような慣習的なもの以上に出ることはない。従つてかかる觀念は一つの新たな作品を作り出すことは出来ず、また一つの新たな作品に適合することは全くないのである。批評家は彼等の規準を立てて批評を試みるが、その多くは失敗している。何故ならば、批評家は事物の本質のみを探究してその實在を否定するからである。

かくしてアランは批評家の求める作品は現実には存せぬ作品であり、そこに彼等の誤謬が存するのであると言う。アランはかくして文学に於ける批評の害を語っているが、反主知主義的態度の現れということが出来よう。反省は却つて思想を薄める。唯、何事も考えぬように努めるのが大切であるという逆説が成立する所以である。アランはそしてゲーテ、ダンテ、パスカル、スタンダール、ホメロス、ルソーの如き作家及びその作品を論じ、ルソーの自然論に同意し、そこに文学の精神を求めている。尚トルストイ、ロマン・ローランかブレリー等の巨匠に就いても語っている。文学に於いては美しいものは真なるもの以外にはあり得ない。併し文学はこの真を記述や説明以外の仕方で求めねばならぬというところに彼の根本的な主張があるようである。

海外哲学思潮 1935.10

ナチスと科学

本年六月フランスに文化擁護国際作家大会が開催され、多くの進歩的な作家達がこれに参加してファシズムと戦争への反対を表明しつつ文化の擁護と発展のために叫んだことは既に汎く知られている。ファシズムが文化特に科学の精神に対立するものを含んでいるということは一般に確信せられているように見える。筆者もヒトラー治下のドイツに於いては本欄に紹介すべき有力な業績を見出すことが出来ないのかねがね遺憾としておったのである。この独裁者がその文化統制に依って如何に有能なユダヤ人の学者乃至自由主義的思想家を放逐又迫害しつつあるかに就いては吾々は度々読み或は聴く機会を持ったが、現在ドイツに於いて安定した地位を有する学者のこれに関する意見を知ることが甚だ少かったと言わねばならぬ。吾々は公平を期するために一九三三年五月以後 *Physikalisch-Technische Anstalt* の所長として活躍しているヨハンネス・シュタルク【1874-1957】の小冊子を次ぎに紹介しようと思う。『国民社会主義と科学』Johannes Stark, *Nationalsozialismus und Wissenschaft*, Zentralverlag der N. S. A. P. München 1934, 20 S. と題するこの書は、その出版所からも知られる通り又以下の内容の一瞥からはつきりと理解されるようにナチスの政策の宣伝のために書かれたパンフレットである。その積りで読んで頂きたい。

尚著者シュタルクは一八七四年バイエルンに生れ、ミュンヘンに学び、多くの大学に物理学者として教鞭

をとり、一九一九年にノーベル賞を得た人である。主著としては *Prinzipien der Atomdynamik*, 1910-1915 がある名である。

さてこの書の第一章は「ヒトラー精神と科学」という名を持っているが、それは一九二四年五月八日の *Grossdeutsche Zeitung* に載せられたフィリップ・フォン・レーナルト【Philipp Eduard Anton von Lenard, 1862-1947】の論文の再録である。シュタルクはこの論文の趣旨に完全に同意してこれに *mitunterzeichnen* しているのである。レーナルトは一八六二年にプレスブルクに生れた物理学者であり、落体の振動及び紫外線に関する研究を以て知られ、一九〇五年にノーベル賞を獲得し、その後相対性理論の解説に努めている。

レーナルトの見解に従えば科学者が真にその研究を高め且つよき結果に到達せんがためには完全なる明晰と外界に対する率直と内的統一とを特質とする精神を持たねばならぬ。科学発達の歴史を顧みる人はこの精神がガリレイ、ケプレル、ニュートンの如き人々の間に力強く働いておつたことを知るであろう。この精神こそは科学に前進を約束する力であり、文化を進歩させる原動力である。併しながらそれは常に甚だ稀なものである。そして今吾々はこの有力にして且つ稀なる精神をばヒトラー、ルーデンドルフ其の他の人々の中に発見することが出来る。今後の科学の進展はかくてヒトラー及びその一党の精神を基礎としてのみ可能となる。けれどもこの精神がアリアン及びゲルマンの血と結びついておることは経験がこれを立証する。だがギリシャ又ローマの歴史の示す如く血は亡び易いという不幸を負わされている。そして吾々は科学発展の枢軸をなして来たアリアン・ゲルマンの血も久しい以前からキリストを十字架につけた人々の血に依つて汚さ

れつつあることを知らねばならぬ。吾々のなすべきことは最早明らかである。吾々は民族的たらねばならぬ。科学者と雖も民族的以外に行動することは許されぬ。科学の進歩のために、偉大なる科学者の精神を守るために、吾々はドイツ民族としてゲルマンの血を清く守らねばならない。——以上がシュタルクが同意を示したレーナルトの意見である。

第二章は科学に対するナチス政府の態度に關して流布しているデマに答えようとする。一九一四年以前から官吏となつておるか或は戦線に働いたものを除いてはユダヤ人は官職に就くことが出来ないということは国法に依つて規定せられている。この法律の意図がゲルマンの血をユダヤの血から洗い清めるところに存することは言うまでもないことであり、それは人民投票に依つて十分に大衆の支持を受けているのである。しかし實際にこの法律に依つて官職を奪われたものはそう多くある訳ではないが、それにも拘らずこの少数者は声を大にしてナチス政府を罵っている。アインシュタイン、フランク、オクスフォードへ去つたシュレーディングエル、フォン・ラウエの如きは自己を選ばれたる民と信じドイツ政府に対して非礼なる悪罵を投げている最もよき例である。それにしてもこれ等の不遜なるユダヤ人達が語るように又世界の多くの人々が堅く信じておるようにナチス政府は果して学問の敵であり文化の破壊者なのであるか。成程或る条件の下に於いてユダヤ人を公職から追うという法律は存する。併しこの法律を以つて直ちに学問の自由に対する攻撃であると解するは嗤うべき誤解であると言わねばならぬ。ナチス政府は科学的研究の自由を制限するどころか、寧ろ従来制限されていたこの自由を拡大しようと欲するものなのである。学問に於ける自由を無視

しその進展を阻んだものはナチス政府などではなくて却つて実に彼等ユダヤ人であつたのである。併しそれは又如何にしてか。

第三章はユダヤ的マルクス主義的支配の下に於ける学問の自由に就いて述べている。学問に国境なしというスローガンは特にユダヤ人学者に依つて叫ばれて来た。彼等はこれに依つて自らドイツ民族の中に立ちながら而も民族的見地を捨てて学問的活動のみを眼中に置くという態度を弁明しようとしておつた。けれども吾々の見るところを以つてすれば学者と雖も民族の一員であり、そうである限りこの全体に奉仕すべき責務を有している。学者は学問に依つてこの社会的有機体に仕えるべき一分肢に外ならぬ。従つて学問は単に学問のためにあるのではなくして民族のためにあると言わねばならぬ。

そればかりではない。学問の国際性に関する卑俗なる信仰は尚重大な欠陥を藏している。若し学問が單なる模倣に尽きることなく人間の創造を俟つて成るものとするならばそれは当然人間の精神的又身体的特殊性に依つて規定されておらねばならぬであらう。そして人間のこうした特殊性はひとり一個の人間のみに属するものではなくして正に民族全体のものである。かくて学問は民族性を持たねばならぬ。ゲルマン人とユダヤ人との学問に於ける態度の差異はこれを遺憾なく立証する。

由来科学は諸事実の合法的聯関の認識であり、就中自然科学の任務は人間精神の外に横たわる物体及びその過程を観察と実験とを介して究明するところにある。ところでゲルマン人の精神は自己の外部に存する事物をあるが儘に即ち自己の觀念乃至希望を介入せしめずに觀察することが出来るし、ゲルマン人の肉体は

自然の認識に必要な努力を恐れることがない。ゲルマン人の自然に対する愛及び自然研究の能力はこうした先天的の素質の中に基礎を持つていたのである。自然科学はゲルマン人の血に依つて創造されたと見るべきであろう。実に己れを空しうして客観に随順し一片の私をも挟まぬところに、特に強いられなければ研究結果を公表せず単なる宣伝を以つて学問の墮落と見るところに科学研究に於けるゲルマン的特質が存すると言わねばならぬ。

ユダヤ人の場合はどうであろうか。彼等の行う研究に於いては何よりも先ず自己というものが強く働いてゐる。自己の觀念、自己の意志、自己の利害が常にその背後に立つてゐる。従つて彼等の自然觀察は自己の意見乃至利害にとつて障礙とならぬ範圍に於いてのみ行われそして自己の觀念にとつて有利なように行われる。「それ故にユダヤ人は生れつきの弁護士である。」然るに弁護士は獨創的な精神作用を欠くのが普通である。ユダヤ人は獨創的なゲルマン人の研究成果を模倣するに巧みではあるが、自ら何ものかを生み出すことは出来ない。電磁波に関する偉大な研究を残したヘルマン・ヘルツ【Heinrich Rudolf Hertz であらう】はユダヤ人ではなかつたか、そしてその研究は全く獨創的なものではなかつたか、こう反駁する人がいるかも知れない。だが系図を調べて見ると、彼が決して純粹なユダヤ人ではなくその母はゲルマン人であつたことが判る。彼はその獨創的能力をこの母方から受けてゐると見るべきである。

ユダヤ人はゲルマン人の模倣をせずに自己の素質に従つて進む時は自ら觀察を離れて理論へと向わねばならぬ。理論に依つて自己に不利な事実を沈黙せしめ又これを自己に有利なように歪曲する。このドグマ的野心と結びついてその宣伝的衝動が注意さるべきであらう。彼等は單に學術雜誌ばかりでなく新聞に講演旅行

に活躍することを忘れない。学界に於いてユダヤ人の学者のみがひとり派手に活動して注目を惹きつつある如く見えるのは実にこの宣伝的衝動の然らしむところである。だがユダヤ人の罪はこれだけにとどまらない。彼等は相率いてコンツェルンを結んでいる。数学の領域に於いてはクライン及びヒルベルトを指導者とするゲティンゲン・コンツェルンが永い間覇を唱えて来たし、物理学にあつてはアインシュタインとゾンメルフェルトとがコンツェルンを形成しておつたし、化学に於いてはハーベル・コンツェルンが強大な勢力を擁しておつた。かくの如もユダヤ人学者のコンツェルンは正に精神的テロルと称すべきものであつたのである。これ等の学問に於いて身を立てようと欲するものはコンツェルンの指導者の見解を採用しこれに阿ねることを敢えてせねばならず、これを行わないものは既得の教授職をも失わざるを得なかつたのである。

ユダヤの血を受けついだものが文部大臣となるに及んで右に指摘した如き傾向は全教育界に漲るに到り、文化諸領域に於けるユダヤ的精神の支配は蔽い得ぬ事実となつた。ユダヤ的精神に依るゲルマン精神の駆逐は科学に於いては次の二つの現象を直接の結果として齎した。第一に科学的文獻の著しき増大とその内的価値の甚だしき減少。第二に創造的精神の悲しむべき後退。ドイツ科学はアインシュタインの相対性理論、シュレーディンゲルの波動力学の如き無数のドグマのみを世界市場に投げ出している有様である。ユダヤ人の学者達が如何に学問の自由の敵であつたか、学問の進歩を阻むものであつたかは今や疑う余地はないであらう。彼等の手から学問の自由を奪還してこれに無限の進歩を約束したナチス政府にこそ吾々は深く感謝せねばならぬ。

第四章は自然科学的技術的研究の国民的意義を説いている。自然科学は二群に大別される。広義に於ける物理学と広義に於ける生物学と。技術の発展が常に広義に於ける物理学の進歩を根柢としてのみ可能となることは言うまでもない。ラザオは電磁波の科学的研究を俟って始めてその軌道に乗ることが出来た。前に見たように自然科学はドイツ民族の精神の中に真の地盤を持つものであるから、この点よりしてドイツに於ける技術の進歩及び産業の発展の素晴らしいテンポは完全に説明されたであろう。諸外国はこれに關しては全くドイツに感謝すべき多くのものを負っているのである。過去に妥当したことは将来に向つても妥当すべきである。エルネル・フォン・シーメンスは言う。「自然科学の研究は常に技術的進歩の確実な土台を形作る。或る国が若し自然科学の進歩の先頭に立つておらぬならば、その国の産業は國際的且つ指導的な地位を獲得することは出来ぬであろうし又それを保持することは出来ぬであろう。」このような自然科学の社会的重要性を思う時シュタルクは自己の主宰する *Physikalisch-Technische Anstalt* の規模が未だ頗る貧弱であることを悲しまねばならぬ。(その予算は一五〇万ライヒスマルク、アメリカのは一一五〇万ライヒスマルク。) 広義に於ける物理学がドイツ民族の生存上極めて重要なものであることは以上の如くであるが、そしてこの研究所は往々考えられているように単に軍事的任務のみを帯びるものではないが、この学問の研究が国防に対して持つ意義は決して軽く見られてはならない。広義に於ける生物学は如何なる国民的意義を持つのであろうか。遺伝の科学的研究の成果が政治上の方針に直接的な關係を有しておることは、さきに示されたゲルマンの血の純粋性の喪失という事実を思い起す時に明らかとなるであろう。遺伝の原理はユダヤ人の追放とゲルマンの血の純化とのために不可欠の理論的基礎を与えつつある。

以上見て来たように自然科学がドイツ民族の運命にとって一つの重大な役割を果すものであるとするならば民族の見地を以つて貫かれるナチス政府がその研究を等閑に附する理由はなく却つてこれを守り且つ發展させるために多くの努力を傾注する筈である。シュタルクはそこで一九二九年二月二日にムソリーニが学問の国民的意義に就いて行つた演説の一節を引用し、これを完全に承認し以つて自国の将来に対する範としてゐる。そしてこのパンフレットは次の言葉を以つて結ばれている。「ドイツ民族の指導者アドルフ・ヒトラーこそは科学研究のこの国民的意義をよく理解するものであり、そしてその促進のためには必要な政策がとられてゐるということを吾々は堅く信ずることが出来る。」

シュタルクの弁明がファシズムの中に科学的精神の否定と文化の破壊とを見ている人々に対して果して弁明の役をなしているかどうかは筆者の知る限りではない。だがファシズムが如何に科学研究の意義を無視するとしても二〇世紀の今日一切の科学を斥けるというような方針をファシズムに期待する人はいないであろう。それは常に或る種の科学を或る種の方向に於いて保護促進することを含まねばならぬに相違ない。それ故にシュタルクがナチスを以つて一定の仕方に於いて科学研究の友であるとなしたとしても吾々は余り驚く必要はないであろう。問題は恐らくこの一定の仕方が科学本来の道——そういうものがあるとするれば——にとつて逆行的なものであるか否かということにあるのであろう。

従つてシュタルクの熱心な弁明は人々がナチスの文化政策に対して抱いておる信念を無効ならしめるという弁明固有の働きをなすことなく寧ろこの信念を裏書きし立証してゐるように見えるのである。ゲルマン人

ならぬ吾々はユダヤ人の血を恐れ厭うシユタルクの気特に十分の同情を持つことが出来ないのを遺憾とするが、吾々にもはつきりと知られることは、そして生々と感ぜられることは、文化は如何にその尊貴を説かれてもこのようにして統制され得るということであり、このようにして統制されつつあるということである。そしてこのことはひとりヨーロッパ人のみが経験することの出来るようなものではない。

海外哲学思潮 1935.12

フンボルトの百年忌（服部英四郎【底本のママ、「服部英次郎」が正しいであろう】）

—— Wilhelm Freiherr von Humboldt 【1767-1835】の没後百年と「フンボルト」 Eduard Spranger 【1882-1963】の雑誌「ヘルツィウンク」第十年第九冊における発言、Alfred Baumbach 【1887-1968】の雑誌「国際教育雑誌」第四年第二冊における発言を引用して述べる。最後に、1900年から全集が発行されたこと、「カヴィ語研究」の本論等が専門的著作の故に全集から除外されたことを加える。

—— 【因に Humboldt 全集は公開されている】

Gesammelte Schriften

Vol. 1-6. Abt. 1. Werke; hrsg. von Albert Leitzmann. Band 1-6. 1785-1835.-

Vol. 7-9. Abt. 1. Werke; hrsg. von Albert Leitzmann. Band 71. Einleitung zum Kawiwerk. Band 72. Paralipomena. Band 8.

Übersetzungen. Band. 9. Gedichte.-

Vol. 10-12. Abt. 2. Politische Denkschriften; hrsg. von Bruno Gebhardt. Band 1-3 1-2. 1802-1834.-

Vol. 13. Abt. 1. Werke; hrsg. von Albert Leitzmann. Band 13. Nachträge.-

Vol. 14-15. Abt. 3. Tagebücher; hrsg. von Albert Leitzmann. Band 1-2. 1788-1835.-

Vol. 16-17. Abt. 4. Politische Briefe; hrsg. von Wilhelm Richter. Band 1-2. 1802-1835

海外哲学思潮 1936.2——服部英次郎

現代独逸の精神的祖父 ブラッドリの「試論集」

現代独逸の精神的祖父

——Theodor Haring(1848-1928) は近着の「独逸文化哲学雑誌」に於いて、現代独逸の精神的祖父を尋ねて、Nicolaus Cusanus(1401-64), Paracelsus (1493-1541), Jakob Böhm(1575-1624)に見出している。これらの思想家が新旧思想と対立していたこと、現代ドイツにおけるそれとの類似・相違が述べられている。

ブラッドリの「試論集」

——Francis Herbert Bradley(1846-1924) は「倫理学研究」(一八七六年、二版一九二七年)、「倫理学の諸原理」(一八八三年、二版一九二二年)【*Principles of Logic*】、「現象と実在」(一八九三年、九刷一九三〇年)【*Appearance and Reality*】の外に、「真理と実在」(一九一四年)【*Essays on Truth and Reality*】という試論集を遺しているが、今度それに漏れた諸篇は二巻に集められ、「コレクテド・エッセイズ」と題してオクスフォードから刊行された。

——Andrew Cecil Bradley(1851-1935) は「シェイクスピア悲劇論」(一九〇四年)、「オクスフォード詩論」(一九〇九年)「雑纂」(一九二五年) 恩師グリーンンの遺稿「倫理学序説」の整理と解説、ロツツェの「形而上学」第三巻の翻訳などがある。

海外哲学思潮 1936.4——服部英次郎

最近の西洋古代・中世哲学文献

一九三四年以後刊行の西洋古代・中世哲学に関する研究、原典の校訂、翻訳等を簡単に紹介しよう。

I

Werner Wilhelm Jaeger, 1888-1961: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen. 1. Bd. 2. Aufl. Berl.: W. de Gruyter 1936. IX, 513 S.

Otto Kern, 1863-1942: Die Religion der Griechen. Bd. 1. Von den Anfängen bis Hesiod. Bd. 2. Die Hochblüte bis zum Ausgange des Fünften Jahrhunderts.

W. K. C. Guthrie, 1906-81: Orpheus and Greek religion, a study of the Orphic movement

Cyril Bailey, 1871-1957: Religion in Virgil. Oxf. Clarendon Press, 1935.

Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf, 1848-1931: Kleine Schriften. Hrsg. mit d. Unterstützung d. Preuss. Akad. d.

Wiss. I. Berl.: Weidmann, 1935

Hermann Diels, 1848-1922: *Die Fragmente der Vorsokratiker*, griechisch und deutsch. 4. Aufl. 【紹介は第五版】

H. Langerbeck, 1908-64: ΔΟΞΙΣ ΕΠΙΡΥΣΜΗ. Studien zu Demokrits Ethik und Erkenntnislehre. Berl.: Weidmann,

1935. VII

Helmut Kuhn, 1889-1991: Sokrates. Ein Versuch über den Ursprung der Metaphysik. Berl.: Die Runde, 1934
 Léon Robin, 1866-1947: Platon. Paris: F. Alcan, 1935.

Max Wundt, 1879-1963: Platons Parmenides, Tübinger Beiträge zur Altertumswissenschaft, Heft 25

Nicolaï Hartmann, 1882-1950: Das Problem des Apriorismus in der Platonischen Philosophie. Sitz. ber. d. Preuss. Akad. Berl. W. de Gruyter, 1935

Ernst Hoffmann, 1880-1952: Platonismus und Mystik im Altertum. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse, 1935

Marcel de Corte, 1905-94: La doctrine de l'intelligence chez Aristote. Paris: J. Vrin. 1934. XII; Études d'histoire de la philosophie ancienne Aristote et Platin. Paris: Desclée de Brouwer, 1935

Werner Wilhelm Jaeger: Aristotle. Fundamental of the history of his development. Tr. by Richard Robinson. Oxf. Clarendon Press, 1934.

プラトンの英訳・仏訳の出版

Platon: Oeuvres complètes. Tome p, Pt. 1: Le Politique. texte établi et trad. par A. Diès. Paris: Les Belles Lettres, 1935.

LXV

The Laws of Plato, Tr. into English by A. E. Taylor. Lond.: Dent, 1934.

The Parmenides of Plato. Tr. into English with introd. and appendixes by A. E. Taylor Oxf. Clarendon Press, 1934

- Francis Macdonald Cornford, 1874-1943: Plato's theory of knowledge. The Theaetetus and the Sophist of Plato, tr. with a running commentary by F. M. Cornford. Lond: Kegan Paul, 1935. XIV
- William David Ross, 1877-1971: Aristotelés Physics, A revised text with introduction and commentary by W. D. Ross. Oxf. Clarendon Press, 1936. XII
- Carl Prantl, 1820-88: Acht Bücher Physik. Vier Bücher ü. d. Himmelsgebäude u. zwei Bücher ü. Entstehen u. Vergehen. Gr. u. deut. mit Anmerkungen v. Carl Prantl. Neudruck Lpz.: K. F. Koehler, 1935
- Richard Harder, 1896-1957: Plotins Schriften. übersetzt von Richard Harder. Lpz. F. Meiner
- Michael Schmaus, 1897-1993: Fünfzehn Bücher über die Dreieinigkeit. Aus d. Lat. übers. u. mit Einml. vers. v. M. Schmaus. Bd. 1. Bibl. d. Kirchenväter, R. 2. Bd. 13. München: Kösel & Pustet, 1935. LXVI

I I

- Martin Grabmann, 1875-1949: Mittelalterliches Geistesleben Abhandlungen zur Geschichte der Scholastik und Mystik. Bd. 2. München: Max Hueber, 1936 XII
- Aus der Geisteswelt des Mittelalters. Studien und Texte, Martin Grabmann zur Vollendung des 60. Lebensjahres von Freunden und Schülern gewidmet. Münster i. W.: Aschendorff, 1935. XXXV
- Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters
- Études de la philosophie médiévale. paris: J. Vrin

- Étienne Gilson, 1884-1978: La théologie mystique de Saint Bernard. 1934.; The spirit of mediaeval philosophy. Tr. by A. H. C. Downes. Lond.: Seed & Ward, 1935
- S. Thomae Aquinatis Summa contra gentiles. Ed. Leonina manualis. Roma, 1934
- Vollständige ungekürzte deutsch-lateinische Ausgabe der Summa theologiae. Salzburg: Anton Pustet
- Die Summe wider die Heiden. Nach der lateinischen Urschrift deutsch von Hans Nachod u. Paul Stern Lpz.: Hegner
- On the power of God: Quaestiones disputatae de potentia Dei. Literally tr. by the English Dominican fathers, 3 vols. Lond.: Burns Oates & Washbourne, 1932-34
- Thomae de Vio Caietani In De ente et essentia D. Thomae Aquinatis commentaria cura et studio M. H. Laurent. Taurini: Marietti, 1934
- Thomas von Aquin. Einführung in seine Persönlichkeit und Gedankenwelt. 6. neubearb. u. erwelt. Aufl. München: J. Kösel. 1935 【高桑純夫訳『聖トマス・アケイナス：その人と思想』】
- Magistri Eckardi Opera latina sub auspiciis S. Sabinae. Lpz.: Felix Meiner
- Meister Eckhart: Die deutschen und lateinischen Werke Hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft. Stuttgart.: W. Kohlhammer
- Expositio Sancti Evangelii secundum Johannem. Hrsg. u. übers. v. Karl Christ und Joseph Koch
- Expositio sancti evangelii secundum Johannem Meister Eckhart ; hrsg. übersetzt von Karl Christ und Joseph Koch. 1936
- Erich Seeberg, 1888-1945: Meister Eckhart. Tübingen: Mohr, 1934.

Hastings Rashdall, 1858-1924: *Universities of Europe in the middle ages*. 2nd ed., entirely rev. by F. M. Powicke & A. B. Emden. 3 vols. Oxford, 1936 【vol. 1, vol. 2 のみ公開中】

海外哲学思潮 1936.5——清水幾多郎

アメリカの学問——フランス革命とイデオロジー——

……最近の日本は、下半身においてはアメリカニズムに深く浸潤されながら、上半身はドイツ・フランスから輸入し飾っている……。

チャールズ・ハンター・ヴン・ドゥザー【生没不詳】『フランス革命に対するイデオログの寄与』Charles Hunter Van Duzer: Contribution of the Ideologies to French Revolutionary Thought, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1935, 176p. など
 について The Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science, Under the Direction of the Departments of History, Political Economy, and Political Science 中の一冊である。

本文は五章に分れる。Chap. I: The Background of Ideologic Thought. Chap. II: The Moral and political Implications of Ideology. Chap. III: The spirit of Ideology in Education. Chap. IV: Public Instruction under the Law of Third Brumaire. chap. V: The Ideologies and the First Consul. 外に詳細な文献目録と索引とが附いている。

海外哲学思潮 1936.7——服部英次郎

文献学者の書簡集

一、ウォルフの書簡集。二、ウゼナ＝ウィラモウィッツ往復書簡集。三、モムゼン＝ウィラモウィッツ往復書簡集

一

独逸古典文献学者の名祖、フリドリヒ・アウグスト・ウォルフの書簡集 (Friedrich August Wolf: Ein Leben in Briefen. Die sammlung besorgt und erläutert durch Siegfriede Reiter. 3 Bde. Stuttgart.: J. B. Metzler, 1935. XXXVI, 436; 345; IV, 342 S.)

二

一九三四年十月二十三日ヘルマン・ウゼナの生誕百年を記念して、「ウゼナ・ウィラモウィッツ往復書簡集」(Usener und Wilamowitz. Ein Briefwechsel, 1870-1905. Lpz. u. Berl.: B. G. Teubner, 1934. 70 S.)

三

テオドル・モムゼンとウィラモウィッツ・メルレーンダルフとの往復書簡集 (Mommsen und Wilamowitz, Briefwechsel, 1872-1903 Berl.: Weidmann. XX, 590 S.)

海外哲学思潮 1936.8——清水幾多郎

『權威と家族』

……要するに日本では家族の研究があまりに必要でありすぎるために却って不可能になっていると言えるかも知れない。⁵⁰

Studien über Autorität und Familie. Schriften des Instituts für Sozialforschung, herausgegeben von Max Horkheimer, Fünfter Band, Librairie Félix Alcan, Paris 1936. 菊判で千頁に近い膨大なものである。(同研究所に就いては雑誌『世界文化』昭和一〇年一一月号に簡単な紹介がある。)

Vorwort

Erste Abteilung: Theoretische Entwürfe über Autorität und Familie	1-228
Allgemeiner Teil (Max Horkheimer)	3
Sozialpsychologischer Teil (Erich Fromm)	77
Ideengeschichtlicher Teil (Herbert Marcuse)	136
Zweite Abteilung: Erhebungen	229-469
Geschichte und Methoden der Erhebungen	231
Die einzelnen Erhebungen	239

a. Arbeiter- und Angestellte- hebung	239
b. Erhebung über Sexualmoral	272
Gutachten K. Landauer	285
c. Sachverständigenenerhebung über Autorität und Familie	292
d. Erhebung bei Jugendlichen über Autorität und Familie	353
e. Erhebung bei Arbeitslosen über Autorität und Familie	457
Dritte Abteilung	
Einzelstudien	471-857
Wirtschaftsgeschichtliche Grundlagen der Entwicklung der Familienautorität (Karl Wittfogel)	473
Beiträge zu einer Geschichte der autoritären Familie (Ernst Mannheim)	523
* Materialien zur Wirksamkeit ökonomischer Faktoren in der gegenwärtigen Familie (Andries Sternheim)	575
* Materialien zum Verhältnis von Konjunktur und Familie (Hilde Weiss)	579
* Bemerkungen zur Geschichte der französischen Familie (Gottfried Salomon)	589
* Aus den familienpolitischen Debatten der deutschen Nationalversammlung 1919 (Wili Strelawicz)	586
Das Recht der Gegenwart und die Autorität in der Familie (Ernst Schachtel)	607
* Die Entwicklung des französischen Scheidungsrechts (Harald Mankiewicz)	643
* Die Rechtslage der in nicht-legalisierten Ehen lebenden Personen in Frankreich (Harald Mankiewicz)	645

- * Die Familie in der französischen und belgischen Sozialpolitik (Zoltán Ro'hai) 649
- * Die Familie in der deutschen Sozialpolitik (Hubert Abrahamsohn) 663
- * Materialien zur Beziehung zwischen Familie und Asozialität von Jugendlichen (Paul Honigsheim) 655
- Bemerkungen über die Bedeutung der Biologie für die Soziologie anlässlich des Autoritätsproblems (Kurt Goldstein) 656
- Autorität und Sexualmoral in der freien bürgerlichen Tugendbewegung (Fritz Jungmann) 669
- Autorität und Erziehung in der Familie, Schule und Tugendbewegung Österreichs (Marie Tahoda-Lazarfeld) 706
- * Autorität und Familie in der deutschen Belletristik nach dem Weltkrieg (Curt Worman) 726
- Literaturberichte 735-857
- Autorität und Familie in der deutschen Soziologie bis 1933 (Herbert Marcuse) 737
- Die Familie in der deutschen Gesellschaftsauffassung seit 1833 (Alfred Meusel) 753
- Autorität und Familie in der französischen Geistesgeschichte (Paul Honigsheim) 771
- Autorität und Familie in der englischen Soziologie (J. Rumney) 784
- * Autorität und Familie in der amerikani-schen Soziologie der Gegenwart (Arthur W. Calhoun) 797
- Autorität und Familie in der italienischen Soziologie (Adolfo Luini) 808
- Autorität und Familie in der Theorie des Anarchismus (Hans Mayer) 824

尚*印を附したものは唯目次だけが載せられていて、その詳細は記されていないものである。附録としてフランス語のレジュメ（八六一―八九八頁）、英語のアブストラクト（八九九―九三四頁）、件名索引（九三五―九四〇頁）、人名索引（九四一―九四七頁）が添えられている。

編輯者マクス・ホルクハイメルが序文は（一）文化（三一―二三頁）、（二）権威（二二―四九頁）、（三）家族（四九―七六頁）の三節

海外哲学思潮 1936.9

ゾンバルト『社会学』（清水幾太郎）

形式社会学の退場はこの一派の機関誌 *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* の廃刊（第二二卷三・四号を以つて終る。創刊号は一九二二年の復活祭に出た。）

Forschungsinstitut für Sozialwissenschaften in Köln の閉鎖（一九三四年三月三十一日限り。設立は一九一九年四月一日。）テーニエスが八〇歳の賀のための記念論文集 *Reine und angewandte Soziologie: Eine Festgabe für Ferdinand Tönnies zu seinem achtzigsten Geburtstag, Leipzig 1936*

ゾンバルトの『社会学の現実と理想』なる小冊子に接し得たことはそれ自身一つの喜びである。Werner Sombart, *Soziologie: was sie ist und was sie sein sollte*, Sonderausgabe aus den Sitzungs-berichten der Preussischen Akademie der Wissenschaften Phil.-Hist. Klasse. 1936. V, Verlag der Akademie der Wissenschaften in Kommission bei Walter de Gruyter. プロイヤンのアカデミーでゾンバルトは社会学に就いて何を報告したことであろうか。

四六倍版で三一頁。全体は(A)概観(三一四頁)、(B)社会学の諸傾向(四一二三頁)、(C)私見(二三一二頁)の三部に分れる。社会学の諸傾向は次のように区別される。

(一) 自然法的社会学

(二) 自然科学的 sociology

(a) 物理学的 sociology (サン・シモン、フリーエ・オストワルト、バレート等)

- (b) 生物学的社会学 (スベンサー、リーリエンフェルト、グンブローイッチ等)
 - (c) 心理学的社会学 (タルド、ヨード、ギディングス、ヴント、テーニエス等)
 - (三) 歴史的社会学 (スミス、ファアグスン、モンテスキュー、コンドルセー等)
 - (四) (歴史) 哲学的社会学 (コント、マルクス、オッペンハイメル、シェーレル等)
 - (五) 形式社会学
 - (六) 「ドイツ」社会学 (ヘーゲル、シュタイン、マルクス、フライエル等)
- ルールは最近新しく選集などが出て頻りに復活の気運に向っている。W. H. Rieh, Die Naturgeschichte des deutschen Volkes, zusammengefasst und herausgegeben von Gunther Ipsen, Leipzig 1935.)

ゾンバルトの定義：社会学は個々の精神領域に於ける精神の社会的關係を考える際の諸範疇を取扱う科学である。

『哲学と歴史』——カッシーラー記念論文集 (服部英次郎)

ライデン Leiden 史学教授ヨハン・フィジנג「歴史の概念」

サミュエル・アレグザンダー「諸物の歴史性」

ソルボンヌ大学教授レオン・ブランシュウィック「歴史と哲学」

ピザの教授ギド・カロジエロ「所謂歴史と哲学との同一性」

オクスフォードのクレメント・ウエブ「宗教、哲学、歴史」

コレヂ・ド・フランスのエティエヌ・ジルソン「基督教哲学に就いて」

ベルンハルト・グロエテユイゼン「人間学的哲学に向つて」

ジオヴァツニ・ジェンティーレ「歴史に於ける時間の超越」

倫敦大学教授スーザン・ステビン「時間論に於ける多義性」

ライプチヒ大学教授テオードル・リット「歴史的認識の構造に於ける普遍」

テューリヒ大学教授フリッツ・メデイクス「歴史的認識の客観性について」

ソルボンヌの哲學家エミル・ブレイエ「哲学史の成立」

ハイデルベルグの哲學家エルンスト・ホフマン「アウグスティンの歴史哲学に於けるプラトニスム」

レヴィ・ブリュル「デカルト的精神と歴史」

ワールブルク研究所主事フリッツ・ザクスル「真理は時の子」

エルウィン・パノフスキ「我はアルカディアにも」

エドガー・ウイント「歴史と自然科学との接点」

アムステルダム哲学教授ヘンドリック・ボス「比較語義論の哲学的意義」

フリードリヒ・グンドルフ「ヘルダーよりブルクハルトに至るドイツの歴史家」の序論「歴史叙説」

オルテガ・イ・ガセト「体系としての歴史」

レイモンド・クリバンスキ「歴史の哲学的性格」

LOGOS

INTERNATIONALE ZEITSCHRIFT FÜR PHILOSOPHIE DER KULTUR

Unter Mitwirkung von

BRUNO BAUCH • JULIUS BINDER • ERNST CASSIRER • EDMUND

HUSSERL • FRIEDRICH MEINECKE • RUDOLF OTTO • HEINRICH

RICKERT • EDUARD SPRANGER • KARL VOSSLER

und HEINRICH WÖLFFLIN

Herausgegeben von

RICHARD KRONER

Verlag von J. C. B. MOHR <PAUL SIEBECK> in Tübingen

Inhalt des ersten Heftes des XX. Bandes (April 1931)

Die Ethik des naturgemäßen Lebens. Von H. von Arnim

ΠΑΡΜΕΝΙΔΗΣ ΔΕΞΜΩΤΗΣ 【Der gefesselte Parmenides】 (Über die Quelle der metaphysischen Wahrheiten.) Von Leo Schestow

Stefan George: Das Neue Reich. Von Edith Landmann

Notizen

Die neueste französische Literatur über den nachkantischen deutschen Idealismus. (Georges Gurvitch(Paris))

Hermann Glockner: Hegel. 1 Band (Käte Nadler)

Michael Beresford Foster: Die Geschichte als Schicksal des Geistes in der Hegelschen Philosophie. (Johannes Hoffmeister. Kiel)

Erich Seeberg: Ideen zur Theologie der Geschichte des Christentums. (Käte Nadler)

Wilhelm Burkamp: Die Struktur der Ganzheiten. (Ferd Weinhandl)

Wach Joachim: Das Verstehen, Grundzüge einer Geschichte der hermeneutischen Theorie im 19. Jahrh (Horst Gruenberg)

René Descartes' Hauptschriften Zur Grundlegung seiner Philosophie. Ins Deutsche übertragen und mit einem Vorwort begleitet von Kuno Fisher (Hermann Glockner)

Fedor Stepun: Wie war es möglich? Briefe eines russischen Offiziers. (J. Cohn)

Inhalt des zweiten Heftes
des XX. Bandes
HEGEL-HEFT (Oktober 1931)

Hegels erster Entwurf einer Philosophie des subjektiven Geistes (Bern 1796). Mit einem Facsimile. Herausgegeben und eingeleitet von Johannes Hoffmeister

Hegelrenaissance und Neuhegelianismus. Eine Säkularbetrachtung von Hermann Glockner

Hegels Dialektik des Willens und das Problem der juristischen Persönlichkeit. Von Karl Laurenz

System und Geschichte bei Hegel. Eine Säkularbetrachtung von Richard Kroner

Hamann und Hegel. Zum Verhältnis von Dialektik und Existentialität. Von Käte Nadler

Günther Holstein. Von Walther Schönfeld

Notizen

Hegel: Sein Wollen und sein Werk. Eine chronologische Entwicklungsgeschichte der Gedanken und der Sprache Hegels (Hugo Falkenheim)

Theodor Litt: Kant und Herder als Deuter der geistigen Welt. (Käte Nadler)

Eugen Herrigel: Die metaphysische Form. (Franz J. Böhm)

Arthur Stein, Der Begriff des Verstehens. bei Dilthey. (Hermann Glockner)

Inhalt des drittes Heftes
des XX. Bandes
ITALIEN-HEFT(Dezember 1931)

Inhaltsverzeichnis.

Der Begriff der Natur im modernen Idealismus. Von Giovanni Gentile

Der Irrtum. Von Bernardino Varisco

Grundeigenschaften des Geistesaktes als Selbstbewußtsein überhaupt. Von A. Carlini

Der Begriff der Individuation und das moralische Problem. Von Augusto Guzzo

Die Beziehungen zwischen Naturwissenschaft und Philosophie in der Geschichte des Denkens

Von Hegel bis heute. Von Ugo Spirito

Die drei Epochen des Gewißheitsproblems. Von J. Evola

Einleitung zur Geschichte der Antiken Logik. Von Guido Calogero

Notizen:

J. Hessing und W. Wattjes, Bewustzijn en Wetkrlijkheid.(Jr. B. Wigersma)

Bericht über den 2. internationalen Hegelkongreß in Berlin vom 18.-22. Oktober 1931. (Käte Nadler)

Inhaltsverzeichnis des Band XXI (1932)

Heft 1:

Heideggers Kantinterpretation. Zu Heideggers Buch >Kant und das Problem der Metaphysik<

Von Heinrich Levy

Russische Geschichtsphilosophie und deutscher Geist. Von Rudolf Stadelmann

Das Nichts und die Welt. Die metaphysische Frage bei Jean Paul. Von Cünter Jacob

Heft 2:

Thesen zum System der Philosophie. Von Heinrich Rickert

Zum Problem der Beschreibung und Inhaltsdeutung von Werken der bildenden Kunst. Von

Erwin Panofsky

Kühnemanns >Goethe<. Von Hermann Glockner

Ding oder Gegenstand. Eine-Orientierungsfrage. Von Joseph Münzhuber

Heft 3:

Zu den Antinomien zurdück. Von George Rebec

Dialektischer Realismus. Von Charles M. Perry

Mathematik und Sinnesempfindung. Materialien zu einer Whitehead-Kritik. Von Edgar

Wind

Der >Neue Realismus< in den Vereinigten Staaten. Von Gustav Müller

Notizen:

Heft 1:

Betty Heimann, Studien zur Eigenart indischen Denkens. (Hans Leisegang)

Max Scheler, Philosophische Weltanschauung. (Günther Stern)

Immanuel Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, mit Leitfaden und Erklärungen neu
herausgegeben von Rudolf Otto. (Walther Hunzinger)

Fritz Christmann, Biologische Kausalität. Eine Untersuchung zur Überwindung des Gegen-
satzes: Mechanismus--Vitalismus. (Walter Häntzschel)

Heft 2:

Benedetto Croce, Gesammelte philosophische Schriften in deutscher Übertragung herausgegeben von Hans Feist. (J. Stenzel)

Alexander Fraenkel, Die Philosophie Benedetto Croces und das Problem der Naturerkenntnis. Eine Naturphilosophie unter besonderer Berücksichtigung der modernen Naturwissenschaft. (Sganzini)

Heft 3:

Zeitgenössische amerikanische Philosophie. (Gustav E. Müller)

A. S. Eddington, The nature of the physical world. (Das Weltbild der Physik und ein Versuch seiner philosophischen Deutung). (Kroner)

J. Hutchison Stirling und sein >Geheimnis Hegels<. (Rudolf Metz).

Inhaltsverzeichnis des Band XXII. (1933)

Für HEINRICH RICKERT zum 70. Geburtstag

Kunst und Können. Die >Kategorie< des Künstlerischen. Von Richard Hamann

Wissenschaftliche Philosophie und Weltanschauung. Von Heinrich Rickert

Goethes geistige Gestalt. Von Bruno Bauch

Der autoritäre Staat. Von Julius Binder

Geschichte, Staat und Gegenwart. Gekürzter Abdruck eines 1930 gehaltenen Vortrags. Von
Friedrich Meinecke

Die Individualität des Gewissens und der Staat. Von Eduard Spranger

Puristische und fragmentarische Kunstkritik. Von Karl Voßler

>Kunstgeschichtliche Grundbegriffe.< Eine Revision. Von Heinrich Wölfflin

Die Herkunft des philosophischen Selbstbewußtseins. Von Gerhard Krüger

Die Schicksalsidee in Hegels Philosophie der Geschichte. Von Kurt Plachte

Wert und Wirklichkeit im Pädagogischen. Von Friedrich Glaeser

Notizen:

G. W. F. Hegel, Die Idee und das Ideal. (Erich Brock)

Denken und Tun. Eine Rechenmethode für deutsche Schulen, als Probe angewandter Logik.
Von Heinrich Meyer. (Käte Nadler)

Die neue Platoforschung. (Gadamer)

Theophrastus Metaphysics. (J. Stenzel)

U. v. Wilamowitz, Der Glaube der Hellenen. I. und II. Band. (J. Stenzel)

Siegfried Marck, Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart. (Käte Nadler)

Karl Jaspers, Philosophie. 3 Bände. (J. Stenzel)

Hubert Schrader, Tilman Riemenschneider. 2 Bände. (Hermann Glockner)

Bruno Bauch, Die erzieherische Bedeutung der Kulturgüter. (Käte Nadler)

Erich Przywara, S. J., Kant heute. (Erich Brock)

Die pädagogische Hochschule. Wissenschaftl. Vierteljahrsschrift des Badischen Lehrervereins.
Herausgegeben von A. Faust. (Käte Nadler)

***Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie* 1935.1**

Inhaltsverzeichnis.

Zur Einführung

>Deutsche Philosophie<. Von Hermann Glockner

Volksgeist und Recht. Zur Revision der Rechtsanschauung der historischen Schule. Von Karl
Larenz

Rechtsphilosophie, Jurisprudenz und Rechtswissenschaft. Von Walther Schönfeld

Die Abstimmungsurnen des Deutschen Reichstags. Ein Beitrag zum gegenwärtigen Problem
der künstlerischen Aufgabe. Von Hubert Schrade

Idee und Erscheinung. Von Bruno Bauch

Der Idealismus als Grundlage der Staatsphilosophie. Von Julius Binder

Gegenwärtigkeit und Transzendenz der Geschichte. Von Franz Böhm

Geschichtswissenschaft und politischer Geist. Von Rudolf Craemer

Die Lebenswurzeln des Dramas. Ein Universitätsvortrag. Von Wilhelm von Scholz

Zu schillers 175. Geburtstag: Schiller und die Philosophie. Von Eugen Kühnemann

Der Idealismus und die Lehre vom menschlichen Handeln. Von Arnold Gehlen

Notizen:

C. Schmitt, Über die drei Arten des rechtswissenschaftlichen Denkens. (Karl Larenz)

Handbuch der Philosophie. Herausgegeben von Alfred Bäumler und Manfred Schröter.
Abteilung I bis IV. (Hermann Glockner)

Kurt Hildebrandt, Platon, der Kampf des Geistes um die Macht. (Wilhelm Andrae)

Theophrast von Hohenheim genannt Paracelsus. Sämtliche Werke. I. Abteilung. (Her-
mann Glockner)

Georg Dehio, Geschichte der deutschen Kunst. 4. Band. Das Neunzehnte Jahrhundert von
Gustav Pauli. (Hubert Schrade)

Walther Schönfeld, Das Rechtsbewußtsein der Langobarden auf Grund ihres Edikts. (E.
Wohlhaupter)

Hans R. G. Günther, Das Problem des Sichselbstverstehens. (Wilhelm Böhm)

Wilhelm v. Humboldt, Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren
Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts. (Hermann Glockner)

ZUR EINFÜHRUNG

Der geistige Umbruch unserer Tage stellt auch an die deutsche Wissenschaft und damit an die philosophischen Zeitschriften neue Anforderungen. Unter diesen genoß der >Logos<, der seit 1910 im Verlag der unterzeichneten Verlagsbuchhandlung erscheint, von jeher im Inland wie auch im Ausland ein besonderes Ansehen. Seinen Ursprung verdankt er *Heinrich Rickert* und einem Kreis seiner Schüler, von denen sich besonders *Richard Kroner* als langjähriger Herausgeber verdient gemacht hat.

Mit dem vorliegenden Heft beginnt nunmehr eine neue Folge unter dem Titel:

Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie

Für deren Herausgabe hat der Verlag die an erster Stelle Unterzeichneten gewonnen.



Wenn wir heute daran gehen, den >Logos<, der innerhalb der letzten Epoche der deutschen Philosophie eine ganz bestimmte Aufgabe erfüllt hat, auf einer neuen Grundlage weiterzuführen, so sind wir uns darüber klar, daß ein Doppeltes von uns gefordert werden muß. Einmal haben wir dafür zu sorgen, daß dem deutschen Volk und dem auf die deutsche Wissenschaft blickenden Ausland eine kulturphilosophische Zeitschrift erhalten bleibt, die diese Bezeichnung wirklich verdient. Zum andern aber soll diese Zeitschrift Ausdruck des kulturphilosophischen Wollens unserer Zeit sein und damit jener großen Bewegung dienen, die heute durch unser Volk geht, und die wir zutiefst als eine geistige Bewegung begreifen. Echte Kultur ist immer der Ausdruck eines schöpferischen Gemeingeistes. Aus dem neuen Verhältnis, das unsere Zeit zur Gemeinschaft und zu den ewigen Kräften des Volkstums gewonnen hat, wird uns auch ein neues Verständnis der Kultur und der Geschichte sowie des Rechtes, des Staates und der Wirtschaft erwachsen. Stärker als früher werden die sogenannten Geisteswissenschaften über die Isolierung der Fächer hinausstreben und in der philosophischen Durchdringung aller Formen des Gemeinschaftslebens einen Mittelpunkt suchen. Diese neue Haltung der Geisteswissenschaften bestimmt die neue Richtung der Zeitschrift.

Unser Wille kommt in dem neuen Titel zum Ausdruck. Aus einer >Internationalen Zeitschrift für Philosophie der Kultur< ist eine >Zeitschrift für Deutsche Kulturphilosophie< geworden. Aber wir wollen damit uns nicht von dem geistigen Austausch mit anderen Völkern abschießen. Mit der gleichen Entschiedenheit, mit der wir das fahle Gespenst einer internationalen Kulturphilosophie ablehnen, begrüßen wir jede philosophische Berührung mit dem

Geiste anderer Nationen auf dem einzig fruchtbaren und lebenspendenden Boden völkischer Eigentümlichkeit. Deshalb ist uns auch eine Mitarbeit ausländischer Philosophen willkommen, die sich gleich uns für eine neue Form geistiger Begegnung der Völker auf der Grundlage der Wahrung ihrer nationalen Eigentümlichkeit einsetzen.

Noch in anderer Hinsicht wird der >Logos< grundsätzlich erneuert. Er soll etwas weniger >professoral< werden. Darum bitten wir auch deutsche Künstler um ihre Mitarbeit, soweit sie sich kulturphilosophisch äußern wollen. Denn wir halten dafür, daß die deutsche Weltanschauung von jeher den Dichtern ebensoviel verdankt wie den Denkern.

Die Bindung an eine philosophische Schule lehnen wir ab. Aber in dem Namen der Zeitschrift kommt unser Bekenntnis zu den Wesensgrundlagen gerade der deutschen Philosophie zum Ausdruck. Fern vom Historismus wie vom philosophischen Journalismus wollen wir den ewigen Gehalt der deutschen Philosophie gegen Verfälschung und Verflachung schützen, um ihn aus dem Erleben der Gegenwart heraus für unsere Zeit neu zu gestalten. Die fruchtbaren Ansätze des deutschen Idealismus zumal werden heute noch vielfach im individualistischen oder rein formalen, Sinn mißdeutet. Weil solche Deutungen nicht zu befriedigen vermögen, hat die oberflächliche Kritik leichtes Spiel. Dem wollen wir entgegenarbeiten. Wir kämpfen gegen unzureichende Deutungen wie gegen spielerisch-geistreiche Verschnörkelungen und gegen eine effekthaschende Modephilosophie.

Echte Philosophie und Lebenswirklichkeit sind in ihrem letzten Grunde immer eins. Daher vertrauen wir darauf, daß aus der neuen Wirklichkeit des deutschen Lebens auch eine neue Gestalt der deutschen Philosophie hervorgehen werde. Mit dieser Überzeugung treten wir an unsere neue Aufgabe heran.

Die Herausgeber :

Professor Dr. Hermann Glockner Professor Dr. Karl Larenz

Der Verlag :

J. C. B. Mohr <Paul Siebeck>.

Kant-Studien

INHALTSVERZEICHNIS DES BANDES XXXVI (1931)

BILDBEILAGEN

Hegel, Zeichnung von W.Hensel.....vor Seite 227

Hegel auf dem Katheder. Zeichnung von F. Kugler...vor Seite 267

ABHANDLUNGEN

Kant und das Problem der Metaphysik. Von Ernst Cassirer

Aufklärung, Klassizismus und Romantik bei Kant Von Kurt Sternberg

Kants Philosophie der Lebenserscheinungen. Von Justus Meyer

Das Problem des Satzes von ausgeschlossenen Dritten. Von Paul Hofmann

Über das Cogito, ergo sum. Von Heinrich Scholz

Zur Philosophie von Ludwig Klages. Von Martin Ninck

Johannes Volkelt. Von Emil Utitz

Johannes Rehmke. Von Johannes Erich Heyde

Ferdinand Jakob Schmidt. Von Georg Lasson

Nach hundert Jahren. Die Problemweite der Hegelschen Philosophie. Von Hermann
Glockner

Hegel und die Gegenwart. Von Georg Lasson

Zum Hegelstudium. Von M. Kuiper

Hegel und England. Von Horst Hühne

BESPRECHUNGEN

I. Allgemeines

Jahrbuch der Charakterologie, hsg. von Emil Utitz. Von H. Kulhn

Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, hsg. von Edmund Husserl
Von F. J. Brecht

Festschrift, Edmund Husserl zum 70. Geburtstag gewidmet. Von F. J. Brecht

Brightman, Edgar Sheffield, An Introduction to Philosophy. Von R. Metz

- Dilthey, Wilhelm**, Gesammelte Schriften, VIII. Band: Weltanschauungslehre, hsg. von B. Groethuysen. Von A. Liebert
- Sternberg, Kurt**, Was heißt und zu welchem Ende studiert man Philosophiegeschichte? Von J. Stenzel

II Geschichte der Philosophie und des Geisteslebens

a) Altertum und Mittelalter

- Arendt, Hannah**, Der Liebesbegriff bei Augustin. Von J. Hessen
- Gomperz, Heinrich**, Platons Selbstbiographie. Von A. Liebert
- Kristeller, P. O.**, Der Begriff der Seele in der Ethik des Plotin. Von E. Hauer
- Li Gi**, Das Buch der Sitte, übertr. u. hsg. von Richard Wilhelm. Von A. Liebert
- Stegemann, Viktor**, Augustins Gottesstaat. Von J. Hessen

b) Neuzeit bis zum 18. Jahrhundert

- René Descartes**, Hauptschriften zur Grundlegung seiner Philosophie, übertr. u. hsg. von Kuno Fischer, Neudruck hsg. v. H. Rickert. Von A. Buchenau
- Leone Ebreo**, Dialoghi d'amore, hebräische Gedichte, hsg. von Carl Gebhardt. Von H. Paret
- Gebhardt, Karl**, Spinoza. Von K. Sternberg
- Hume, David**, Untersuchungen über die Prinzipien der Moral, übertr. von Karl Winckler. Von H. Kuhn
- Pflaum, Heinz**, Die Idee der Liebe. Leone Ebreo. Von H. Paret
- Stieler, Georg**, Leibniz und Malebranche und das Theodiceeproblem. Von E. Wentscher

c) Kant

- Kant, Immanuel**, Critica ratiunii pure, traducere de Tr. Braileanu. Von M. Petrescu
- Adickes, Erich**, Kants Lehre von der doppelten Affektion unseres Ich. Von R. Kynast
- Otto, Rudolf**, Immanuel Kant: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. Von R. Kynast
- Ratke, Heinrich**, Systematisches Handlexikon zu Kants Kritik der reinen Vernunft. Von H. Kuhn
- Reinhard, Walter**, Über das Verhältnis von Sittlichkeit und Religion bei Kant. Von K. Kessler

d) Vom Beginn des 19. Jahrhunderts bis zur Gegenwart

- Schopenhauer-Jahrbuch 1930**. Von A. Liebert

- Dekker, Gerbrand**, Die Rückwendung zum Mythos. Von A. Liebert
- Fels, Heinrich**, Bernard Bolzano. Von K. Sternberg
- Flournoy, Th.**, Die Philosophie von William James, übertr. von Helene Baumgarten. Von F. Schröder
- Groethuysen, Bernhard**, Die Entstehung der bürgerlichen Welt- und Lebensanschauung in Frankreich, Band II: Die Soziallehren der katholischen Kirche und das Bürgertum. Von C. Brinkmann
- Guérout, M.**, La philosophie transcendentale de Salomon Maimon. Von H. Bergmann
- Herrmann, Hildegard**, Die Philosophie I. H. Fichtes. Von H. Levy
- Masur, Gerhard**, Friedrich Julius Stahl. Von A. Liebert
- Rothacker, Erich**, Einleitung in die Geisteswissenschaften. Von H. Kuhn
- Springmeyer, Heinrich**, Herders Lehre vom Naturschönen im Hinblick auf seinen Kampf gegen die Ästhetik Kants. Von H. Kuhn
- Wiese, Benno v.**, Friedrich Schlegel. Von H. Folwortschny

Zur Hegel-Literatur

a) Ausgaben, Übersetzungen, Bibliographie

- Hegel, G. W. F.**, Erste Druckschriften, hrsg. von Georg Lasson. Von H. Levy
- Hegel, G. W. F.**, Jenenser Logik, Metaphisik und Naturphilosophie, hrsg. von Georg Lasson. Von Heinrich Levy
- Hegel, G. W. F.**, Vorlesungen über die Philosophie der Religion, hrsg. von Georg Lasson. Von Heinrich Levy
- Hegel, G. W. F.**, Eigenhändige Randbemerkungen zu seiner Rechtsphilosophie, hrsg. von Georg Lasson. Von Heinrich Levy
- Hegel, G. W. F.**, Sämtliche Werke, hrsg. von H. Glockner. Von Helmut Kuhn
- Hegel, G. W. F.**, Schriften zur Gesellschaftsphilosophie, hrsg. von Alfred Bäumler. Von Heinrich Levy
- Hegel, G. W. F.**, Auswahl aus seinen Werken, hrsg. von Friedrich Bülow. Von Hans Sveistrup
- Hegels Logic of World and Idea**, hrsg. von H. S. Macran. Von R. Mettz
- Brecht, F. J.**, Die Hegelforschung im letzten Jahrzehnt (Selbstanzeige)

b) Allgemeines

- Pen, K. J.**, Van Kant naar Hegel. Von Georg Lasson
- Verhandlungen des ersten Hegelkongresses**, hrsg. B. Wigersma
- Haym, Rudolf**, Hegel und seine Zeit, hrsg. von H. Rosenberg. Von A. Liebert
- Haering, Theodor L.**, Hegl. Von Georg Lasson
- Hartmann, Nicolai**, Hegel. Von Siegfried Marck
- Glockher, Hermann**, Hegel. 1. Band: Die Voraussetzungen der Hegelschen Philosophie. Von H. Falkenheim
- Moog, Willy**, Hegel und die Hegelsche Schule. Von Hans Wenke
- Schilling-Wollny, Kurt**, Hegels Wissenschaft von der Wirklichkeit und ihre Quellen. 1. Band: Begriffliche Vorgeschichte der Hegelschen Methode. Von Georg Lasson
- Heimann, Betty**, System und Methode in Hegels Philosophie. Von H. Levy
- Wahl, Jean**, Le malheur de la conscience dans la philosophie de Hegel. Von Hans Wenke
- Hoffmeister, Johannes**, Höderlin und Hegel. Von Wilhelm Böhm
- Simon, Emst**, Ranke und Hegel. Von Heinrich Levy

c) Einzelne Gebiete und Probleme

- Fischer, Hugo**, Hegels Methode in ihrer ideengeschichtlichen Notwendigkeit. Von Georg Lasson
- Wenke, Hans**, Hegels Theorie des objektiven Geistes. Von G. Lasson
- Kayser-Eichberg, Ulrich**, Das Problem der Zeit in der Geschichtsphilosophie Hegels. Von Georg Lasson
- Foster, Michael**, Die Geschichte als Schicksal des Geistes in der Hegelschen Philosophie. Von Helmut Kuhn
- Busse, Martin**, Hegels Phänomenologie des Geistes und der Staat. Von Georg Lasson
- Löwenstein, Julius**, Hegels Staatsidee. Von Georg Lasson
- Giese, Gerhard**, Hegels Staatsidee und der Begriff der Staatserziehung. Von Georg Lasson
- Dürck, Johanna**, Die Psychologie Hegels. Von Georg Lasson
- Salditt, Maria**, Hegels Shakespeareinterpretation. Von Georg Lasson
- Gordon, Jakob**, Der Ichbegriff bei Hegel, bei Cohen und der Südwestdeutschen Schule. Von H. Levy

d) Aus Hegels Wirkungskreis

- Lassale, Ferdinand**, Die Hegelsche und Rosenkranzsche Logik. Von Georg Lasson

Metzke, Erwin, Karl Rosenkranz und Hegel. Von Heinrich Levy

Glockner, Hermann, Grundlegung des Rechenunterrichts nach Hegelscher Methode. Von K. Krippendorf

Adler, Max, Lehrbuch der materialistischen Geschichtsauffassung. Soziologie des Marxismus. 1. Band. Von Constauze Glaser

Gentile, Giovanni, La Riforma della Dialettica Hegeliana. Derslbe: Teoria generale dello spirito come atto puro. Von Werner Peiser

MacTaggart, John Mct. Ellis, Studies in the Hegelian Dialectic. Von E. Harms

III. Rechts-, Staats- und Gesellschaftsphilosophie

Festgabe für Rudolf Stammler zum 70. Geburtstage am 19. Februar 1926, hsg. von Edgar Tatarin-Tarnheyden. Von K. Sternberg

Soziologische Lesestücke, hsg. von Gottfried Salomon. Von Fr. Eulenburg

Alsberg, Max, Die Philosophie der Verteidigung. Von H. Schade

Basch, Victor, Les Doctrines Politiques des Philosophes classiques de l'Allemagne: Leibniz-Kant-Fichte-Hegel. Von H. Levy

Darmstaedter, Friedrich, Die Grenzen der Wirksamkeit des Rechtsstaates. Von H. Liermann

Freyer, Hans, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft. Von H. Kuhn

Petraschek, K. O., Die Rechtsphilosophie des Pessimismus. Von B. Braubach

Ruesch, Arnold, Todesstrafe und Unfreiheit des Willens. Von K. Krippendorf

Sauer, Wilhelm, Lehrbuch der Rechts- und Sozialphilosophie. Von K. Sternberg

Vaerting, Mathilde, Die Macht der Massen. Von P. Schneider

Vierkandt, Alfred, Gesellschaftslehre. Von Fr. Eulenburg

Waldecker, Ludwig, Allgemeine Staatslehre. Von B. v. Oppen

Walder, W., Grundlehre jeder Rechtsfindung. Von H. Schade

Walther, Andreas, Soziologie und Sozialwissenschaften in Amerika. Von P. Vogel

SELBSTANZEIGEN

Dubislav, Walter, Die Definition

Fricke, Gerhard, Gefühl und Schicksal bei H. v. Kleist

Goedewangen, T., Summa contra Metaphysicos

- Leibniz, Gottfried Wilhelm**, Sämtliche Schriften und Briefe, bearb. von Willy Kabitz
- Kühn, Lenore**, Die Autonomie der Werte. Zweiter Teil: Der autonome Grundcharakter des Theoretischen, Ethischen und Ästhetischen
- Richter, Gustav**, Die Philosophie der Einmaligkeit, Zweiter Teil: Zur Geschichte des Bewußtseins
- Sandgathe, Franz**, Die absolute Zeit in der Relativitätstheorie
- Zum Kongreß in Oxford**: Werner, Charles, Lebendiges und Totes in der Philosophie des klassischen Altertums

MITTEILUNGEN

- Kant ins Serbische übersetzt**
- Kant-Büste und Kant-Statuette**
- Hegel-Kongreß Berlin 1931**
- Preisaufrage der Mendelssohn-Stiftung**
- Archiv für Geschichte der Philosophie**
- Entgegnung. Prof. Dr. Karl Roretz**
- Schlußwort. Prof. Dr. Jonas Cohn**
- Gotthold Friedrich Lipps**
- Der VIII. Internationale Philosophenkongreß**
- Preisausschreiben der Soziologischen Gesellschaft und der Philosophischen Gesellschaft in Wien**
- Preisaufrage der Königsberger Gelehrten Gesellschaft**
- Eugenio Rignano-Preis**

KANT-GESELLSCHAFT

- Allgemeine Mitgliederversammlung Halle 1931**
- Berichte der Landes- und Ortsgruppen:**
- Ortsgruppe Berlin
 - Ortsgruppe Bochum
 - Ortsgruppe Bonn
 - Ortsgruppe Boston
 - Ortsgruppe Breslau

Ortsgruppe Buenos Aires (Landesgruppe Argentinien)

Ortsgruppe Erfurt

Ortsgruppe Hannover

Ortsgruppe Kaiserslautern

Ortsgruppe Karlsruhe i. B.

Ortsgruppe München

Ortsgruppe Rostock

Ortsgruppe Stettin

Ortsgruppe Stüttgart

Ortsgruppe Wuppertal (Elberfeld-Barmen)

Ortsgruppenverzeichnis

Neuangemeldete Mitglieder

Zwölftes Preisausschreiben: „Die Philosophie African Spirs“ Urteil der Preisrichter

Dreizehntes Preisausschreiben: „Kants Anthropologie“. Urteil der Preisrichter

An die Mitglieder der Kant-Gesellschaft

INHALTSVERZEICHNIS DES BANDES XXXVII (1932)

Hans Vaihinger zum 80. Geburtstag.....Heft 3/4 Seite V

BILDBEILAGEN

Harald Höffding. Porträt-Aufnahme.....vor Seite 1

Immanuel Kant. Miniatur von C. Vernet.....vor Seite 237

ABHANDLUNGEN

Goethes Platonismus. Von Arthur Liebert

Pflicht und Neigung. Von Rudolf Otto

Unterschiedenheit. Von Johs. Erich Eeyde

Das Strukturproblem in der Philosophie der Gegenwart. Von Walter Del Negro

Beitrag zur Gliederung der Philosophie. Von Eberhardt Zwirner

Theodor Ziehen zum 70. Geburtstag. Von W. Peters

Die drei Schichten des Wirklichen. Von Julius Schultz

Die dreifache Modalität des Psychischen. Von Marianne Beth

BESPRECHUNGEN

I. Allgemeines

Jahrbuch der Charakterologie, 5. Bd., hrsg. von Emil Utitz. Von Paul Arfert

Gundolf, Friedrich, Shakespeare, sein Wesen und Werk. Von Rritz Kühner

Hoffmann, Ernst, Die Freiheit der Forschung und der Lehre. Von Arthur Liebert

Jaspers, Karl, Philosophie. Von Jonas Cohn

Kröner, Fritz, Die Anarchie der philosophischen Systeme. Von Else Wentscher

Leisegang, Hans, Denkfermen. Von Christian Herrmann

Löwith, Karl, Das Individuum in der Roll des Mitmenshen. Von Fritz Kaufmann

Marck, Siegfried, Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart. Von Jonas Cohn

Plessner, Helmuth, Macht und menschliche Natur. Von Heinrich Springmeyer

Schweitzer, Albert, Aus meinem Leben und Denken. Von Arthur Liebert

Sombart, Werner, Die drei Nationalökonomien. Von Richard Müller-Freienfels

Die Religion in Vergangenheit und Gegenwart. Von Arthur Liebert

Cassirer, Ernst, Philosophie der symbolischen Formen. Bd. II. Von Martin Kaubisch

Jaspers, Karl, Die geistige Situation der Zeit. Von Helmut Kuhn

Kraft, Julius, Von Husserl zu Heidegger. Von Heinrich Springmeyer

II. Geschichte der Philosophie und des Geisteslebens

a) Altertum und Mittelalter

Hessen, Johannes, Augustins Metaphysik der Erkenntnis. Von Johannes Sperl

Howald, Ernst, Ethik des Altertums. Von Hans R. G. Günther

Stenzel, Julius, Metaphysik des Altertums. Von Hans-Georg Gadamer

Winter, Ernst Karl, Die Sozialmetaphysik der Scholastik. Von Johannes Hessen

b) Neuzeit bis zum Ende des 18. Jahrhunderts

Brandt, Frithjof, Thomas Hobbes' Mechanical Conception of Nature. Von F. Tönnies

Brockhaus, Heinrich, Die Utopia-Schrift des Thomas Morus. Von Kurt Sternberg

Doerne, Martin, Die Religion in Herders Geschichtsphilosophie. Von Hans R. G. Günther

Hoffmann, Ernst, Das Universum des Nikolaus von Cues. Von Kurt Sternberg

Hönigswald, Richard, Die Renaissance in der Philosophie. Von Kurt Sternberg

Levi, Adolfo, La Filosofia di Tommaso Hobbes. Von Ferdinand Tönnies

Locke, John, An Essay concerning the Understanding, Knowledge, Opinion and Assent. Von Rudolf Metz

Ricklefs, Jürgen, Lessings Theorie vom Lachen und Weinen. Von H. Folwertschny

Stadelmann, Rudolf, Der historische Sinn bei Herder. Von Konrad Eilers

Webb, C. J., Pascals Philosophy of Religion. Von Hermann Gaub

c) Kant

Adler, Max, Das Soziologische in Kants Erkenntniskritik. Von Constanze Glaser

Borries, Kurt, Kant als Politiker. Von Alfred Vierkandt

Dempf, Alois, Das Unendlich in der mittelalterlichen Metaphysik und in der Kantischen Dialektik. Von Kurt Sternberg

Kreß, Rudolf, Die soziologischen Gedanken Kants in Zusammenhang seiner Philosophie. Von S. Friedländer

Schulze, Martin, Die Idee des Reiches Gottes bei Kant. Von Kurt Sternberg

Wieninger, Gustav, Immanuel Kants Musikästhetik. Von Franz Böhn

d) Vom Ende des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart

v. Aster, Ernst, Marx und die Gegenwart. Von Kurt Sternberg

- Bachofen, J. J.**, Selbstbiographie und Antrittsreden über das Naturrecht. Von Kurt Sternberg
- Kaplan, Simon**, Das Geschichtsproblem in der Philosophie Hermann Cohens. Von Walter Kinkel
- Külne, Eugen**, Goethe. Von Arthur Liebert
- Lehmann, Gerhard**, Geschichte der nachkantischen Philosophie. Von Kurt Sternberg
- Rawidowicz, S.**, Ludwig Feuerbachs Philosophie. Von Heinrich Springmeyer
- Rehm, Walther**, Jacob Burckhardt. Von Arthur Liebert
- Scheunert, Arno**, Der Pantragismus als System der Weltanschauung und Ästhetik Friedrich Hebbels. Von René König
- Schmidt, Georg**, Johann Jakob Bachofens Geschichtsphilosophie. Von Konrad Eilers
- Thust, Martin**, Søren Kierkegaard. Von Fritz Grosaart
- Ucko, Siegfried**, Der Gottesbegriff in der Philosophie Hermann Cohens. Von David Baumgardt
- Wach, Joachim**, Das Verstehen. Von Hans R. G. Günther
- Wallner, Nico**, Fichte als politischer Denker, Werden und Wesen seiner Gedanken über den Staat. Von Christoph Scherer
- Winners, Richard**, Weltanschauung und Geschichtsauffassung Jacob Burckhardts. Von Kurt Sternberg

III. Geschichts- und Kulturphilosophie

- Borries, Kurt**, Grenzen und Aufgaben der Geschichte als Wissenschaft. Von Kurt Sternberg
- Freud, Sigmund**, Die Zukunft einer Illusion. Von Arthur Liebert
- Freud, Sigmund**, Das Unbehagen in der Kultur. Von Arthur Liebert
- Kaufmann, Fritz**, Die Philosophie des Grafen Paul Yorck von Wartenburg. Von Kurt Kessler
- Kautsky, Karl**, Die materialistische Geschichtsauffassung. Von Karl Vorländer
- Lessing, Theodor**, Europa und Asien. Untergang der Erde am Geist. Von Walter Kinkel
- Mannheim, Karl**, Ideologie und Utopie. Von Max Salomon
- Meister, Ernst**, Über die Möglichkeit historischer Gesetze. Von Kurt Sternberg
- Scheler, Max**, Mensch und Geschichte. Von Arthur Liebert

- Spengler, Oswald**, Der Mensch und die Technik. Von Arthur Liebert
Wyneken, Gustav, Der europäische Geist, Von Kurt Kessler
Ziegler, Leopold, Der europäische Geist. Von Arthur Liebert
Zwirner, Eberhard, Zum Begriff der Geschichte. Von Kurt Sternberg

IV. Psychologie

- Einführung in die neuere Psychologie**, hrsg. von Emil Saupe. Von Horst Grueneberg
Handwörterbuch der psychischen Hygiene. Von Max Levy-Suhl
Die Lüge, hrsg. von O. Lipmanm und P. Plaut. Von Hans R. G. Günther
Baerwald, Richard, Okkultismus und Spiritismus. Von G. Mamlock
Binswanger, Ludwig, Wandlungen in der Auffassung und Deutung des Traumes von den Griechen bis zur Gegenwart. Von Arthur Liebert
Bühler, Charlotte. Kindheit und Jugend. Von Konrad Eilers
Bühler, Karl, Die Krise der Psychologie. Von Fr. Grossart
Dorer, M., Historische Grundlagen der Psychoanalyse. Von Arthur Liebert
Herzberg, Alexander, Zur Psychologie der Philosophie und der Philosophen. Von Horst Grueneberg
Katz, Rosa, Das Tasten des Kindes. Von Martin Joseph
Koffka, Kurt, Die Grundlgen der psychischen Entwicklung Von Josef Krug
Kohnstamm, Oskar, Erscheinungsformen der Seele. Von Th. K. Oesterreich
Lessing, Theodor, Prinzipien der Charakterologie. Von Horst Grueneberg
Liebeck, Oskar, Das Unbekannte und die Angst. Von Konrad Eilers
Monakow, C. v., und R. Mourgue, Biologische Einführung in das Studium der Neurologie und Psychopathologie. Von E. v. Aster
Müller-Braunschweig, Carl, Das Verhältnis der Psychoanalyse zu Ethik, Religion und Seelsorge. Von Kurt Sternberg
Odebrecht, Rudolf, Gefühl und Ganzheit. Von René König
Prinzhom, Hans. Gespräch über Psychoanalyse. Von Horst Grueneberg
Prinzhorn, Hans, Charakterkunde der Gegenwart. Von Arthur Liebert
Rieffert, J. B., Pragmatische Bewußtseinstheorie auf experimenteller Grundlage Von Marga Baganz

- Scheerer, Martin**, Die Lehre von der Gestalt. Von Arthur Liebert
Seifert, Friedrich, Die Wissenschaft vom Menschen in der Gegenwart. Von Emil Utitz
Stout, G. E., Studies in Philosophy and Psychology. Von Rudolf Metz
Tumarkin, Anna, Die Methoden der psychologischen Forschung. Von Eugen Hauer
Volkelt, Johannes, Versuch über Fühlen und Wollen. Von Fr. Grossart
Wertheimer, Max, Drei Abhandlungen zur Gestalttheorie. Von W. Blumenfeld

SELBSTANZEIGEN

- Fechner, Oskar**, Meine ontologische Kategorienlehre
Kant, Immanuel, Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik. Ins Ukrainische übersetzt
von I. Mirtschuk
Kuypers, K., Theorie der Geschiedenis
Levy-Suhl, Max, Die seelischen Heilmethoden des Arztes
Lorentz, Paul, Quellenbuch zu Goethes Weltanschauung
Scholz, Heinrich, Abriß der Geschichte der Logik
Gent, Werner, Die Raum-Zeit-Philosophie des 29. Jahrhunderts
Gent, Werner, Weltanschauung
Hoffmann, Arthur, Literarische Berichte aus dem Gebiete der Philosophie
Richter, Gustav, Die Philosophie der Einmaligkeit
Thöne, Johannes, Durchs Diesseits zum Jenseits

MITTEILUNGEN

- Benno Erdmann**. Von Johann Baptist Rieffert
Harald Höfding zum Gedächtnis. Mit einem Bild von Höding. Von Victor Kuhr
Adolf Lasson. Ein Gedenkblatt. Von Ferdinand Jakob Schmidt
Gustave Le Bon. Von René König
Julius Schultz zum siebzigsten Geburtstag. Von Richard Mtüller-Freienfels
Zum 70. Geburtstag von Karl Groos
Immanuel Kant, studiosus philosophiae, in Judtschen, Von Fritz Schütz
11. Haupttagung des Euckenbundes in Jena. Von Fritz Schulze
Deutsche Volksspende für Goethes Geburtsstätte
Hegel-Feiern in Japan. Von W. Gundert
Ein unbekanntes Kantbildnis. Von Ed. Anderson

Erkenntniskritik und Relativitätslehre bei Constantin Brunner. Von Lothar Bickel
Christian von Ehrenfels zum Gedenken. Von Max Brod
Georg Lasson zum 70. Geburtstag. Von Helmut Kuhn
Max Wentscher zum 70. Geburtstag. Von Eugen Hauer
Bericht über den II. Internationalen Hegel-Kongreß in Berlin Von Helfried Hartmann
Eine serbische Übersetzung Kants. Von M. T. Seleskovic
Beneke-Preis ausschreiben
Spinoza-Medaille

KANT-GESELLSCHAFT

Berichte der Landes- und Ortsgruppen:

Landesgruppe Anhalt
Ortsgruppe Basel
Ortsgruppe Boston
Ortsgruppe Buenos Aires
Ortsgruppe Stuttgart
Ortsgruppe Berlin
Goethe-Feier der Ortsgruppe Buenos Aires
Ortsgruppe Halle(Saale)

Berichtigung

Neu angemeldete Mitglieder

Jahresbericht 1931: Einnahmen und Ausgaben

Verzeichnis der Ortsgruppen der Kant-Gesellschaft

Archiv für Geschichte der Philosophie

Inhaltsverzeichnis des Band 40(1931)

Abhandlungen:

Vorwort des Herausgebers

Geschichte und System der Philosophie. Erste Hälfte. Von Heinrich Rickert

Der pädagogische Gedanke in platons Höhlengleichnis. Von Ernst Hoffmann

Die „materia primordialis“ in der Schule von Chartres. Von Heinrich Flatten

Die kosmische Anthropologie des Bovillus. Von Bernhard Groethuysen

Hegels Ästhetik als System des Klassizismus. Von Helmut Kuhn

Kuno Fischer und Karl Rosenkranz. Von Hermann Glockner

Die atomistische Auffassung der Zeit. Von Paul Masson-Oursel

Plotins Lehre Von Denken. Von Paul Helms

Sind die Pygmäen Menschen? Ein Kapitel aus der philosophischen Anthropologie der mittelalterlichen Scholastik. Von Joseph Koch

Leibniz' Lehre von der Reinkarnation. Von Nicolai Lossky

Charles Peirce. Von Gustav Müller

Aphorismen Hegels aus der Jenenser Periode

Das unglückliche Bewußtsein. Seine Bedeutung für Hegels Philosophie. Von Jean Wahl

Ein neu aufgefundener Brief Hegels an Niethammer. Herausgegeben und erläutert von Hermann Glockner(mit Faksimile)

Geschichte und System der Philosophie. Zweite Hälfte. Von Heinrich Rickert

Der Ursprung der aristotelischen Kategorienlehre. Von Kurt v. Fritz

Zur Methode der Augustinusforschung. Von Johannes Hessen

Der Begriff der Wahrheit bei Pestalozzi. Von Waiter Feilchenfeld

Jahresberichte:

Deutsche Arbeiten(1930) zur Patristik. Von Adolf Dyroff

Englische Arbeiten (1930) zum Gesamtgebiet. Von G. Dawes Hicks

Italianische Arbeiten (1930) zur Antike I. Von Guido Calogero

Amerikanische Arbeiten (1929-1930): Antike und Seit Kant. Von Gustav Müller

Deutsche Arbeiten (1930) zur Antike. Von Hans Leisegang

Deutsche Arbeiten (1930): Kant und der deutsche Idealismus. Von Helmut Kuhn

Französische Arbeiten (1929) zum Gesamtgebiet. Von Alexandre Koyré

Italienische Arbeiten (1930) zur Antike II. Von Guido Calogero

Italienische Arbeiten (1930) zum Mittelalter. Von Carlo Sganzini

Polnische Arbeiten (1925-1930) zum Gesamtgebiet. Von Wincenty Lutosławski und
Janina Suchorzewska

Russische und ukrainische Arbeiten (Januar 1929 bis April 1931) zum Gesamtgebiet. Von
Dmitrij Tschizewskij

Amerikanische Arbeiten (1928-1930): Neuzeit 1600-1780. Von Sterling P. Lamprecht

Deutsche Arbeiten (1930): Von Bacon bis Kant (ausschließlich). Von Ernst v. Aster

Deutsche Arbeiten (1930): Das 19. Jahrhundert und der Übergang zur Gegenwart. Von Hel-
mut Kuhn

Französische Arbeiten (1930) zum Gesamtgebiet. Von Alexandre Koyré

Italienische Arbeiten (1930, teilweise 1929): Neuzeit. Von Carlo Sganzini

Japanische Neuerscheinungen 1929 und 1930 auf dem Gesamtgebiet

Notizen:

Paul Hensel zum Gedächtnis. Von Fritz Medicus

Benno Erdmann in memoriam. Von Else Wentscher

Preisaufrage der „Moses Mendelssohn-Stiftung“

Die Geschichte der Philosophie am Oxforder Kongreß. Von Charles Werner

Einladung zum II. internationalen Hegel-Kongreß

Harald Höffding. Von Frithiof Brandt

Johannes Rehmke zum Gedächtnis. Von Johs. Erich Heyde

Bericht über die Tagung der Kant-Gesellschaft in Halle 1931. Von Helmut Kuhn

Preisausschreiben der soziologischen und der philosophischen Gesellschaft in Wien

Rezensionen:

Franz Boll: Sternglaube und Sterndeutung (Hermann Glockner)

Johannes Hessen: Augustinus und seine Bedeutung für die Gegenwart (Hans Leisegang)

Ernst Bergmann: Geschichte der deutschen philosophie I. (Jos. Engert)

Karrer-Piesch: Meister Eckharts Rechtfertigungsschrift vom Jahre 1326 (Jos. Engert)

- Bruno Bauch: Goethe und die Philosophie (Hermann Glockner) . . .
- Wilhelm Stähler: Zur Unsterblichkeitsproblematik in Hegels Nachfolge (Hermann Glockner)
- N. v. Bubnoff: Friedrich Nietzsches Kulturphilosophie und Umwertungslehre (Paul Hensel)
- Joachim Wach: Trendelenburg und Dilthey (Hermann Glockner)
- Joachim Wach: Das Verstehen II (Hermann Glockner)
- Max Apel: Philosophisches Wörterbuch (René König)
- Heinrich Schmid: Philosophisches Wörterbuch (René König)
- Johannes Unold: Lebensanschauungen höherer Kulturen. Von Zarathustra d. Ä. bis Zarathustra d. J. (Heinrich Zimmer)
- Adolfo Levi: Sul pensiero di Senofone (Robert Philippson)
- Michael Freund: Die Idee der Toleranz im England der großen Revolution (Ludovico Mentini)
- Franz Schmidt: Die Theorie der Geisteswissenschaften vom Altertum bis zur Gegenwart (Joachim Wach)
- Benedetto Croce: Theorie und Geschichte der Historiographie (René König)
- J. E. Erdmann: Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neueren Philosophie (David Baumgardt)
- Alexandre Koyré: La philosophie de Jacob Boehme (Jean Hering)

Neuerscheinungen

auf dem Gebiete der Philosophiegeschichte

Heft 1.....	163
Heft 2.....	362
Heft 3.....	641
Namenregister zum XL. Band.....	653

Inhaltsverzeichnis des Band 41(1932)

Mitteilung der Redaktion

Abhandlungen:

Goethes Denkweise. Von Jonas Cohn

Goethe und Darwin. (Eine Hundertjahrbetrachtung zum Siege der Naturwissenschaft über die Philosophie.) Von Kurt Hildebrandt

Griechische Geschichtsphilosophie. Von Wilhelm Nestle

Ko Hung, der Philosoph und Alchimist. Von Alfred Forke

Die Philosophie des Pietro Pomponazzi. Von Erich Weil

Das Problem Jean Jacques Rousseau. Von Ernst Cassirer

Das philosophische Werk Robert Adamsons. (Ein Beitrag zur Geschichte des britischen Neukantianismus.) Von Rudolf Metz

Die Religion Spinozas. Von Carl Gebhardt

Aristoteles als Naturforscher. Von Michael Stephanides

Die Stellung der Musik in der Philosophie des Boethius als Grundlage der ontologischen Musikerziehung. Von Leo Schrade

Die Stellung des hl. Thomas von Aquino zur Mathematik. Von Ewald Bodewig

Grundlinien der Erkenntnislehre Valentin Weigels. Von Heinz Längin

Das Problem Jean Jacques Rousseau. (Zweite Hälfte) Von Ernst Cassirer

Aus Hegels Berner Zeit. (Nach bisher unbekannten Dokumenten.) Von Hans Strahm

Jahresberichte:

Deutsche Arbeiten (1931) zur Antike. Von Hans Leisegang

Die Pädagogik im Zusammenhang der Philosophiegeschichte: *Deutsche pädagogische Arbeiten* (1926-1930) zum Gesamtgebiet. Von Nico Wallner

Rumänische Arbeiten zum Gesamtgebiet:

A. Rumänisches Sprachgebiet (1924-1931). Von Lucian Blaga und D.D.Rosca

B. Deutsches Sprachgebiet (1927-1931). Von Alfred Pomarius

Tschechische Arbeiten (1921-1931) zum Gesamtgebiet. Von Johannes Patočka

Amerikanische Arbeiten (1928-1931): Patristik, Scholastik, Renaissance. Von Richard

McKeon

Amerikanische Arbeiten (1931): Zur Antike und Seit Kant (einschließlich amerikanische Philosophie). Von Gustav Müller

Deutsche Arbeiten (1930, teilweise 1931 und 1932): Scholastik und Renaissance Von Adolf Dyroff

Arbeiten über islamisch - orientalische Philosophie (1927-1932). Von Max Horten

Deutsche Arbeiten (1931): Von Bacon bis Kant (ausschl.). Von E. v. Aster

Deutsche Arbeiten (1931): Von Kant bis zur Gegenwart. Von Helmut Kuhn

Englische Arbeiten (1931 und 1932) zum Gesamtgebiet. Von G. Dawes Hicks

Französische Arbeiten (1931 und 1932) zum Gesamtgebiet. Von Alexandre Koyré

Holländische Arbeiten (1930 und 1931) zum gesamtgebiet. Von Antoon Vloemans

Italianische Arbeiten (1931 teilweise 1930 und 1932) zur Antike. Von Guido Calogero

Italianische Arbeiten (1931, teilweise 1930): Mittelalter und Neuzeit. Von Carlo Sganzini

Japanische Arbeiten (1931 und 1932): Antike und Mittelalte. Von Ken Ishiwara

Japanische Arbeiten (1931 und 1932) über Hegel. Von Tomoye Oyama

Spanische Arbeiten (1929 und 1930): Mittelalter und Renaissance. Von P. Marti von Barcelona, O.M.Cap

Notizen:

Anruf der Universität Halle gegen den Abbau der humanistischen Gymnasien

„Volta“-Tagung für die Moral- und Geschichtswissenschaften in Rom 1932, veranstaltet von der Kgl. italienischen Akademie

Rezensionen:

Kafka's Geschichte der Philosophie in Einzeldarstellungen (Herm. Glockner)

Thesaurus Philosophicus Linguae Hebraicae et veteris et recentioris auctore Jac.Klatzkin(Carl Gebhardt)

D. Tschizewskij: Grundlinien der Geschichte der Philosophie in der Ukraine (Nikolai Lossky)

A. Koyré: La philosophie et le problème national en Russie au début du XIXe siècle (Dnitrij Tschizewskij)

Arthur Liebert: Erkenntnistheorie (F. W. Garbeis)

Ernst von Aster: Naturphilosophie (Thilo Vogel)

Kurt Leese: Die Krisis und Wende des christlichen Geistes (Hans Leisegang)

Helmut Kuhn: Die Kulturfunktion der Kunst, 2 Bde. (Fritz Kaufmann)

Neuerscheinungen

auf dem Gebiete der Philosophiegeschichte

1. Selbständige Publikationen.....322 und 718
2. In Zeitschriften und Akademieschriften.....329 und 728

Anschriften der Mitarbeiter:

- Für Heft 1 und 2.....335
- Für Heft 3.....338

Namenregister zum XLI. Band.....734

Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte

Inhalt des X. Bandes.(1932)

Heft I.

Johannes Hoffmeister, Zum Geistbegriff des deutschen Idealismus bei Hölderlin und Hegel

Janko Janeff, Zur Geschichte des russischen Hegelianismus

Gerhard Lehmann, Julius Bahnsen als Willensmetaphysiker und Charakterologe

Ernst Lichtenstein, Platon und die Mystik

J. Handschin, Zur Musikästhetik des 19. Jahrhunderts

Hermann Noack, Über einige neuere Arbeiten auf dem Felde der Ästhetik und der Kunstwissenschaften. Ein Sammelbericht

Erich Rothacker, Zur Lehre Von Menschen. Ein Sammelreferat über Neuerscheinungen zur Philosophie des Organischen, zur Philosophischen Anthropologie, zur Geisteswissenschaft, Geschichtsphilosophie, Kulturosoziologie und Kulturphilosophie

Heft II.

Hermann Schneider, Probleme der altisländischen Literaturgeschichte

Georg Weise, Das „gotische“ odor „barocke“ Stilprinzip der deutschen und der nordischen Kunst. Mit 12 Tafeln

Gustav Hübener, Theorie der Romantik

Kurt K. T. Wais, Das Motiv des Vergangenen in der neueren Literatur

Robert Petsch, Die Lehre von den „Einfachen Formen“

Heft III.

Levin L. Schücking, Literarische „Fehlurteile“. Ein Beitrag zur Lehre vom Geschmacksträgertyp

Hans Naumann, Höfische Symbolik. I. Rüdegers Tod

Max Ittenbach, Höfische Symbolik. II. Helmbrechts Hanbe

Hugo Friedrich, Montaigne über Glauben und Wissen

Karl Vossler, Zwei Typen vom literarischen Virtuosenentum: Lope de Vega und Góngora

Margarete Hoerner, Gegenwart und Augenblick. Ein Beitrag zur Geistesgeschichte des 17. und 18. Jahrhunderts

Herbert Dieckmann, Goethe und Diderot

Fritz-Joachim von Rintelen, Über wertphilosophische Strömungen der Gegenwart

Heft IV.

Benedetto Croce, Methodologie und Literaturgeschichte

Luigi Russo, Richtlinien der literarischen Kritik und der Literaturgeschichte in Italien

Curt Sigmar Gutkind, Poggio Bracciolinis geistige Entwicklung

Helmut Hatzfeld, Die spanische Mystik und ihre Ausdrucksmöglichkeiten

Maria Fuerth, Die Idee der Caritas bei Pascal

Hanns Heiss, Boileau und der französische Klassismus

Erich Auerbach, Vico und Herder

Hermann Platz, Baudelaire und die Ursprünge des französischen Symbolismus

Inhalt des XI. Bandes.(1933)

Heft I.

Rudolf Unger, Karl Rosenkranz als Aristophanide

K. Schumm, Briefe von Karl Rosenkranz über seine Hegel-Biographie

Karl Löwith, Kierkegaard und Nietzsche

Alfred Neumeyer, Die präraffaelitische Malerei im Rahmen der Kunstgeschichte des 19. Jahrhunderts

K. v. Tolnai, Zu Cézannes geschichtlicher Stellung

Ulrich Leo, Pirandello. Kunsttheorie und Maskensymbol

Benno v. Wiese, Zur Kritik des geistesgeschichtlichen Epochebegriffes

Erich Rothacker, Zur Lehre vom Menschen

Heft II.

Robert Petsch, Von der Szene zum Akt

Ernst Benz, Die Kategorien des eschatologischen Zeitbewußtseins

Hennig Brinkmann, Schönheitsauffassung und Dichtung vom Mittelalter bis zum Rokoko

Georg Witkowski, Hat es eine Nürnberger Meistersingerbühne gegeben?

Ernst Lewalter, Die geistesgeschichtliche Stellung d. Hugo Grotius

J. Benrubi, Pestalozzi und Rousseau

Heft III.

August Faust, Heinrich Riekert

Justus Schwarz, Die Bedeutung des Gefühls für Hegels Erfahrung des Geistes

Hans Bruneder, Persönlichkeitsrhythmus - Novlis u. Kleist

Kurt May, Fr. Max. Klingers Sturm und Drang

Adolf v. Grolman, Volks- und Staatsgedanken in Adalbert Stifters Ethik

Hermann Beenken, Die Krise der Malerei

W. Krauss, Deutschland als Thema der französischen Literatur

Anton Lábán, Gesichtspunkte für die Erschließung der ungarischen Literatur für das Ausland

Heft IV.

H. W. Eppelsheimer, Das Renaissance-Problem

G. Weise, Der doppelte Begriff der Renaissance

Konrad Burdach, Die humanistischen Wirkungen der Trostschrift des Boethius im Mittelalter und in der Renaissance

Werner Weisbach, Die klassische Ideologie

Kurt Karl Eberlein, Winckelmann und Frankreich

Albert Dresdner, Ardinghello und Sergel

Heinrich Lützel, Der Wandel der Barockauffassung

Inhalt des XII. Bandes.(1934)

Heft I.

Hermann Schneider, Lebensgeschichte des altgermanischen Heldenlieds

Ernst Benz, Christliche Mystik und christliche Kunst

Karl Simon, Diesseitsstimmung in spätromanischer Zeit und Kunst

Max Semper, Der persische Anteil an Wolframs Parzival

Carl Neumann, Ende des Mittelalters?

Heft. II.

Karl Viëtor, Die Tragödie des heldischen Pessimismus

Robert Petsch, Drei Haupttypen des Dramas

W. v. Wartburg, Aufstieg und Niedergang eines tragischen Dichters

Fritz Neubert, Das Kulturproblem der französischen Klassik bis zur Gegenwart

Rudolf Pfeiffer, Goethe und der griechische Geist

Nikolaus Pevsner, Zur Kunst der Goethezeit

Heft III.

G. Müller und H. Kromer, Der deutsche Mensch und die Fortuna

H. Lipps, „Metaphern“

D. Scheludko, Guinizelli und der Neuplatonismus

Herbert Grundmann, Die geschichtlichen Grundlagen der Deutschen Mystik

Benno v. Wiese, Dichtung und Geistesgeschichte des 18. Jahrhunderts. Eine Problem- und
Literaturschau

Heft IV.

Gerhard Masur, Wilhelm Dilthey und die europäische Geistesgeschichte

Ludwig Wolff, Der Willehalm Wolframs von Eschenbach

Ernst Benz, Der Toleranz-Gedanke in der Religionswissenschaft (über den Heptaplomeres
des Jean Bodin)

Werner Schultz, Wilhelm von Humboldts Erleben der Natur als Ausdruck seiner Seele

Heinrich Henel, Ausländische Goethe-Kritik. Aus Anlaß von Fairleys Buch

Johannes Hoffmeister, Die Hölderlin-Literatur 1926-1933

Unter dem Banner des Marxismus

Inhaltsverzeichnis des IV. Jahrgang (1930)

Heft I.

Magyar, L.: Wirtschaftskrise und Sozialdemokratie

Martynow, A.: Die Theorie des beweglichen Gleichgewichts der Gesellschaft und die Wechselbeziehungen zwischen Gesellschaft und Milieu

Sapir, J.: Freudismus, Soziologie, Psychologie (Schluß)

Tolokonski-Nowitzki-Jakobsohn: Das Allgemeine Gesetz der kapitalistischen Akkumulation

Varga, Eugen: Akkumulation und Zusammenbruch des Kapitalismus

BIBLIOGRAPHIE

Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels 1844-1853

Heft II.

Adoratski, W.: Ueber die philosophischen Studien Lenins

Friedland: Marxismus und westeuropäische Historiographie

Goldstein, Julius: Fritz Stetnbergs „Imperialismus“

Gorfinkel, J. S.: Die Probleme der Arbeitslosigkeit in der Epoche des Monopolkapitalismus

Lurje, D.: Der Aufbau des Sozialismus im Sowjetdorf und die Liquidierung des Kulakentums als Klasse

Maximow, A.: Max Planck und sein Kampf gegen den physikalischen Idealismus

Nowitzki, R.: Der Katholizismus im Dienste des Faschismus

Reimann, Paul: Legendenbildung und Geschichtsfälschung in der deutschen Literaturgeschichte

Heft III.

Gzóbel, Ernst: Rjazanov als Marx-Forscher

Fogarasi, Adalbert: Die Soziologie der Intelligenz und die Intelligenz der Soziologie

Reimann, Paul: Legendenbildung und Geschichtsfälschung in der deutschen Literaturgeschichte(Schluß)

Rudas, Ladislaus: Ueber einige Grundbegriffe der Mechanik und der Dialektik

Safarow, G.:Das Problem der Nationen und die antiimperialistische Revolution

Varga, Eugen: Sozialistischer Aufbau - sterbender Kapitalismus

Inhaltsverzeichnis des V. Jahrgang (1931)

Heft I.

Kurow, I.: Ideologen der kapitalistischen Restauration in der Sowjetunion

Lippay, Z.: Über die faschistische Herrschaft der Bourgeoisie

Naumann, R.: Die allgemeine Krise des Kapitalismus

BIBLIOGRAPHIE

Braunthal, Alfred: Die Wirtschaft der Gegenwart und ihre Gesetze

Feiler, Arthur: Das Experiment des Bolschewismus

Jugow, A.: Die Volkswirtschaft der Sowjetunion und ihre Probleme

Mannheim, Karl: Ideologie und Utopie

Pollock, Friedrich: Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion 1917-1927

Scheler, Max: Die Wissensformen und die Gesellschaft

Sombart, Werner: Die drei Nationalökonomien

Tönnies, Ferdinand: Kritik der öffentlichen Meinung

Troeltsch, Ernst: Der Historismus und seine Probleme

Weber, Max: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre

Heft II.

Heinmann, S. A.: Der sozialistische Wettbewerb in der Industrie der UdSSR

Mitin, M.: Über die Ergebnisse der philosophischen Diskussion

Naumann, R.: Die allgemeine Krise des Kapitalismus(Schluß)

Aus der Resolution der Parteizelle des Instituts der Roten Professur für Philosophie und Naturwissenschaft

Über die Ergebnisse der Diskussion und über die aktuellen Aufgaben der marxistisch-leninistischen Philosophie

BIBLIOGRAPHIE

Adler, Max: Lehrbuch der materialistischen Geschichtsauffassung

Heft III.

Kolman, Ernst und Janowskaja, Sonja: Hegel und die Mathematik

Marx, Karl: [Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt] (1844)

Marx, Karl: Thesenentwurf zur Kritik der Hegelschen Phänomenologie

Unter dem Banner des Marxismus

Adoratski, W.: Marxismus-Leninismus und Dialektik

Fogarasi, F.: Dialektik und Sozialdemokratie

F. M.: Zum Parteienkampf um Hegel

Wittfogel, K. A.: Hegel über China

Vier unveröffentlichte Briefe Hegels

Zwei Fragmente Lenins zur Dialektik

Inhaltsverzeichnis des VI. Jahrgang (1932)

HEFT 1 / JUNI

Der Siegeszug des Marxismus-Leninismus

H. Linde: Die ideologische Vorbereitung der Intervention durch die II. Internationale

L. Rudas: Wie Engels von der bürgerlichen „Wissenschaft“ widerlegt wird

N. Lukin: Protokolle des Generalrates der Internationalen Arbeiter-Assoziation als Quelle für die Geschichte der Pariser Kommune

Bibliographie

Karl Schmidt: Eine sozialdemokratische Fälschung des „Kapital“

HEFT 2 / SEPTEMBER

Die Diktatur des Proletariats und die „linke“ Sozialdemokratie

A. Maximow: Lenin und die Naturwissenschaft. Erster Aufsatz

M. Furschtschik: Max Adlers „materialistische“ Geschichtsauffassung Erster Aufsatz: Der Kampf um Ludwig Feuerbach

Fred Oelßner: Die Wert- und Preistheorie des Sozialfaschismus

Bibliographie

Karl Marx: Das Kapital. Der Produktionsprozeß des Kapitals, Ungekürzte Textausgabe mit einem Geleitwort von Karl Korsch (Gustav Kiepenheuer, Verlag, Berlin 1932)

Werner Alexander: Kampf um Marx. Entwicklung und Kritik der Akkumulationstheorie

HEFT 3/DEZEMBER

R.Naumann : Zum 15. Jahrestag der Oktoberrevolution

K. Marx. Unveröffentlichte Handschriften

A. Leontjew: Bemerkungen zu den Bruchstücke des Marxschen Manuskripts

H. Fröhlich: Der Vorentwurf zum „Kapital“ 1. Buch Anhang

H. Neumann: Das Ende der kapitalistischen Stabilisierung

M. Furschtschik: Max Adlers „materialistische“ Geschichtsauffassung, II. Aufsatz Der Materialismus von Marx und Engels und seine sozialdemokratischen Interpretation

Bibliographie:

Marx-Engels-Gesamtausgabe. Erste Abteilung, Bd. 3

G. Mie: Naturwissenschaft und Thologie

Büchereingang

Inhaltsverzeichnis des VII. Jahrgang (1933)

HEFT 1/2 MÄRZ/APRIL

- M. Furschtschik: Mensch und Freiheit bei Marx 1
K. Marx: Unveröffentlichte Manuskripte 22
A. Leontjew: Zu den Marxschen Manuskripten 29
N. Krupskuja: Wie Lenin Marx studierte 40
F. Chmelnizkaja: Der wissenschaftliche Sozialismus in seiner Verwirklichung 51
L. Rudas: Der dialektische Materialismus und die Sozialdemokratie 83
M. Sorki: Kautsky „revidiert“ die Geschichte 121

HEFT. 3

- F. Engels: Die Börse
M. Rubinstein: Marx über die Entwicklung der Technik
P. Wyszinsky: Zu Kautskys Ansichten über die Entstehung der Klassen und des Staates
O. Dsenis: Der Faschismus und die Widersprüche im Lager der deutschen Bourgeoisie
H. Fröhlich: Die ReProduktion und Zirkulation des Kapitals
L. Segal: Die Marxsche Verelendungstheorie

BIBLIOGRAPHIE

HEFT. 4 / NOVEMBER

- E. Jaroslawski: Die internationale Bedeutung des 2. Parteitags der RSDAP
N. Krupskaja: Dem Gedächtnis Clara Zetkins
L. Rudas: Dialektischer Materialismus und Kommunismus
A. Maximow. Lenin und die Naturwissenschaft
K. Schmidt: Kapitalistische Rationalisierung, Krise und Sozialfaschismus
K. Kriwitzki und A. Rubinstein: „Der Kampf“ und „Die Gesellschaft“ zum 50. Todestag von Karl Marx
E. Ostermann: Die große Jahresfeier und die französischen Sozialfaschisten

後記

カナ表示人名対照表.. 現代表記と異なるもの、及び一般になじみの無い人名の原名対照、不明なものもありそれには？を付す。

ギコ：Vico, Giambattista：ヴィーコ
 ギッチ：Witsch, Joseph Caspar
 ゼーベル／ヴェーバー：Weber：ウェーバー
 ゴーラント：Wieland, Christoph Martin：ヴィーラント
 ゴントウイス：Winthuis, Josef
 ゴルフリン：Wölfflin, Heinrich：ヴェルフリン
 アードレル：Adler, Max：アドラー
 アウグスチヌス／アウグスティン：Augustinus：アウグス
 ティヌス
 アドラッキー：Adoratskii, Vladimir Viktorovich：アドラツキー
 アレギ（エリ）：Halévy, Élie：アレヴィ
 アンコントル（ダニエル）：Encontre, Daniel
 イヴァーン：Иван：イワン
 イェーリンク：Jhering：イェーリング
 イェスペルセン：Jespersen, Jens Otto Harry
 イール（ル）：？
 イフェルト：Iffert, Wilhelm
 キリアムスン：Williamson：ウィリアムソン
 ウィラモウィッツ／キラモーキッツ・メルレンドルフ：
 Wilamowitz-Moellendorff：ヴィラモーヴィッツ＝メレン
 ドルフ
 ウィラント：Wieland, Christoph Martin：ヴィーラント
 ウィント（エドガー）：Wind, Edgar：
 ウォルフ／ヅルフ：Wolf, Friedrich August：ヴォルフ
 ウーツ：Uz：
 ウーティツ：Utitz, Emil：ウーティツツ
 ウゼナ：Usener：ウーゼナー
 ヴィットフォゲル：Wittfogel, Karl August：ウィットフォー
 ゲル
 ヴィルブラント：Wilbrandt, Robert：

エズネット (オートラム) : Evennett, Outram : エベネット

エップ : Webb, Sidney James : ウエップ

エスターマーク / エスタマーク : Westermarck, Edward Alexander : ウェ
スターマーク

オッペンハイメル : Oppenheimer : オッペンハイマー

オーゼ : Hauser, Henri :

オストヴルト : Ostwald, Friedrich Wilhelm : オストヴァルト

オルデンバラ : ?

カヴレフスキー : Kovalevskii, Maksim Maksimovich : コワレフスキー

カッシーレル / カッシラー / カッシレル : Cassirer, Ernst : カッシーラー

カヴール : De Cavour, Gustave :

カルギン・カルヴィン・カルビン : Calvin, Jean : カルヴァン

カルノ / カルノー : Carnot : カルノー

ガスリ : Guthrie : ガスリー

ガルズ : Galvez ? :

キェルケゴール / キールケゴール : Kierkegaard : キルケゴール

ギャジェ : ?

ギールケ / ギイルケ : Gierke, Otto Friedrich von : ギールケ

ギディングス : Giddings :

ギンスバーク (モリス) : Ginsberg, Morris : ギンズバーク

クラカウエル : Kracauer : クラカウアー

クレーホーゼン (アンクギツ・フォン) : Kleehoven, Ankiewicz von

クローナー / クローネル / クロナー : Kroner, Richard : クローナー

ベルンハルト・グロエテュイゼン : Groethuysen, Bernhard :

グローティウス / グロチウス : Grotius, Hugo : グローティウス

グンプロギッチ・グンプロギッチ : ?

ケプレル : Kepler : ケプラー

ケルチ (ウィルヘルム) : Körte, Friedrich Heinrich Wilhelm :

ゲェテ / ゲーテ : Goethe : ゲーテ

ゲイル : ?

ゲレルト : Gellert, Christian Fürchtegott :

コンフォード : Cornford : コーンフォード

ゴエルレス : Goerres : ゲレス ?

ゴーチエ : Gautier :

セン・シモン : Saint-Simon : サン・シモン

ザクスル (フリッツ) : Fritz Saxl : ザクスル (フリッツ)

シェーラー / シェーレル : Scheler : シェーラー

シェークスピア / シェイクスピア / シェクスピア : Shakespeare : シェイクスピア

シェリンク / シェリング : Schelling : シェリング

シャフツペリ / シャフツペリー : Shaftesbury : シャフツペリ

シュヴァリエ : Chevalier, Jaques : シュヴァリエ / シュバリエ

シュツペ (ギルヘルム) : Schuppe, Wilhelm :

シュタビウス : ?

シュトイトリン : Staudlin, Gotthold Friedrich ? :

シュトリヒ (フリッツ) : Strich, Fritz :

シュヴァリエ : Chevalier, Jaques : シュバリエ / シュヴァリエ

シュプランガー (エドゥアルト) / シュプランゲル : Spranger, Eduard : シュプランガー

シュレーディングエル : Schrödinger : シュレーディングー

シュレゲル (フリドリヒ・フォン) : Schlegel, Karl Wilhelm Friedrich von : シュレーゲル

ショーペンハウエル / ショーペンハウエル : Schopenhauer : ショーペンハウアー

シーメンス (エルネスト・フォン) : Siemens, Werner von : ジーメンス (ヴェルナー・フォン)

シラー / シルレル : Schiller : シラー

セン・シラン : ?

シンプソン : Simpson : シンプソン

ジェズンズ (スタンリ) : Jevons, William Stanley : ジェヴォンズ (スタ

ンレー)

ジェイムズ (キリヤム) : James, William : ジェームズ (ウィリアム)

ジェンティーレ (ジオヴァッニ) : Giovanni Gentile : ジェンティーレ
(ジョヴァンニ)

ジュフロワ : Jouffroy ? :

ジメル／ジンメル : Simmel : ジンメル

スウィフト : Swift : スウィフト

スコトウス／スコトゥス : Scotus : スコトゥス

スピノーザ／スピノザ : Spinoza : スピノザ

ズルツェル : Sulzer, Johann Georg ? : ズルツァー

ズントハイム : Sundheim ? :

タールハイメル (アウグスト) : Thalheimer, August : タールハイマー

ザード : Gide : ジード

ツェルテス (コンラート) : Celtis, Konrad :

ツェルラー : Zeller, :

ツルゲネフ : Turgenev:Тургéнев : ツルゲーネフ

テーテンス : Tetens, Johann Nicolas :

テーニエス : Tönnies, Ferdinand : テンニエス／テンニース

ディドロ : Diderot, Denis : デイドロ

デュルケイム : Durkheim, Émile : デュルケーム

デンプ／デンプ／デンプフ : Dempf, Alois : デンプ

デントレーゼス (アレッサンドロ・パッセリン) : Alessandro Passerin
d'Entrèves : ダントレーヴ

トマス／トマス・フォン・アクキン : Thomas von Aquin / Thomas
Aquinas / Tommaso d'Aquino : トマス・アキナス

トロエルチ : Troeltsch, Ernst : トレルチ

ドゥリーシュ : Driesch, Hans Adolf Eduard : ドリーシュ

ドゥレフスキー : Delevsky, Jacques :

ドーム : Dohm, Christian Wilhelm von :

ドストイェーフスキー／ドストエフスキー : Достоевский: Dostoevskii :

ドストエフスキー

ナートルプ：Natorp,Paul Gerhard：ナトルプ

ネットルシップ：Nettleship,Richard Lewis：

ル・ネン：Le Nain：ル・ナン

ノール：Nohl,Herman：

ノイエンブルク（マティアス・フォン）：Neuenburg,Matthias von：

ハイゼンベルク／ハイゼンベルグ：Heisenberg：ハイゼンベルク

ハイデッガー／ハイデッゲル：Heidegger：ハイデッガー

ハウク：Hauck,Albert？：

ジュリアン・ハクスリ：Huxley,Julian Sorell：ハクスリー

ハスティングズ（ワルター・スコット）：Hastings,Walter Scott：ヘイス
ティンクス／ヘースティンクス

ハスハーゲン：Hashagen, Justus：ハースハーゲン

ハルデー：Haldane,John Burdon Sanderson：ホールデン

ハレル：？：

バークリ：Berkeley,George：バークリー

バープ：Bab, Julius：バップ，

バタフィールド：Butterfield：バターフィールド

パヴロフ／パブロフ：Pavlov：パブロフ

パストール（ルートヰヒ）：Pastor,Ludwig：

プリングル・パティソン：Pringle-Pattison,Andrew Seth：

パノフスキ（エルウィン）：Panofsky,Erwin：パノフスキー（エルヴィン）

パレート：Pareto,Vilfredo：

ビュッフオン：Buffon,Georges Louis Leclerc：ビュフォン

ビエリンスキー：Belinsky:Белинский：ベリンスキー

ビオ（ジャン・バプティスト）：Biot,Jean-Baptiste:ビオ（ジャン＝バティ
スト）

ビヤスン：？：

ビンダー／ビンデル：Binder：ビンダー

ピルクハイメル（ヰリバルト）：Willibald Pirckheimer：ピルクハイマー

(ヴィリバルト)

ファースン：Ferguson：ファースン

ファイヒンゲル：Vaihinger：ファイヒンガー

ファルク（ゾルネル）：Falk,Werner

フィジंगा（ヨーハン）／フィチンガ：Huizinga,Johan：ホイジンガ（ヨ
ハン）

フェヒネル：Fechner：フェヒナー

フェララ：？：

フォスレル：Vossler,Karl：フォスラー

フッセル／フッセル：Husserl：フッサール

フムボルト／フンボルト：Humboldt：フンボルト

フライエル：Freyer,Hans：フライヤー

フロイト／フロイド：Freud,Sigmund：フロイト

セント・ブーヴ：Sainte-Beuve：サント＝ブーヴ

ブートルー：Boutroux：

ブラッドリ／ブラドレー：Bradley：

ブランシュギック／ブランシュギク／ブランシュウィック：
Brunschvicg：ブランシュヴィック

ブリュック（アニタ）：Brück,Christa Anita：ブルック

レギ・ブリュール／レヴィ・ブリュル／ブルュール：Lévy-Bruhl：レヴィ
＝ブリュール

ブリッジス：Bridges,John Henry：ブリッジ

ブルックハルト／ブルクハルト：Burckhardt,Jakob：ブルックハルト

ブルーノー：Bruno, Giordano：ブルーノ

ブルンネル／ブルンナー／ブルンナ：Brunner：ブルンナー

ブレイエ：Bréhier,Émile：ブレイエ

プァイフェル：Pfeiffer,Rudolf：プファイファー

プエンダー：Pfänder,Alexander：プフエンダー

プッセン：Poussin,Nicolas：プッサン

プラトー／プラトン：Plato/Platon：

プレンゲ : Plenge :
ヘッカー : Hecker ? :
ヘゲル / ヘーゲル : Hegel : ヘーゲル
ヘリゲル / ヘルリゲル : Herrigel : ヘリゲル
ヘルダァ / ヘルダー / ヘルデル : Herder :
ヘルツェン : Herzen, Alexander: Γέρτσεν : ゲルツェン (日本での通称)
ベイリ : Bailey, Cyril : ベイリー
ペイル : Bayle, Pierre : ペール
ベルクソン / ベルグソン : Bergson : ベルクソン
ベルジャーイエフ : Berdyaev: Бердяев : ベルジャーエフ
ベレルフォン : Bellerophon: Βελλεροφών : ペレロフォン
ベロー : Below, Georg von : ベロー / ベロウ
ホーフディング : Höffding : ヘフディング
ホーゼン (アウグスト・フォン) : Hoven, August Von :
ホブハウス : Hobhouse, Leonard Trelawney :
ボップ : Bopp, Franz :
ル・ボン : Le Bon, Gustave :
ポイティンゲル (コンラート) : Peutingen, Konrad : ポイティンガー
マイエル : Mayer : メイヤー
マクアイヴァー : MacIver, Robert Morrison ? :
マクドゥーガル : McDougall, William :
マリネスコ : Marinescu, Gheorghe / Marinesco, Georges :
マンダヴィル : Mandaville ? :
マンリウス : Manlius ? :
ミュッセ : Musset :
ミュラ (ヨハネス・フォン) / ミュラー : Müller, Johannes von : ミュラー
ムッソリーニ / ムソリーニ : Mussolini : ムッソリーニ
メディクス (フリッツ) : Medicus, Fritz :
モッソ : Mosso ? :
モース : Mauss, Marcel :

モール（カール・フォン）：Moor,Karl von ? :
モンジュ：Monge :
モンテーニュ／モンターニュ：Montaigne：モンテーニュ
ヤコブス：Jacobus :
ヤスペルス：Jaspers：ヤスパース
ラゼル：Ravel：ラヴェル
ラゼッソン／ラゼソン：Ravaisson, Felix：ラヴェッソン
ラッソン：Lasson, Georg：ラッソン
ラートブルッフ：Radbruch, Gustav：ラートブルフ
マリア・ライトネル：Leitner, Maria :
フォン・ラウエ：von Laue,Max Theodor Felix :
ラヴロフ：Lavrov,Sergey Viktorovich :
ラシュリエ：Lachelier,Jules :
ラスエル：Lasswell：ラスウェル
ラブレール：Rabelais,François :
ラムニー：Rumney, Jay：ラムネー
ラメ：Ramée ? :
ランツフト：Landshut,Siegfried：ランツフト
ランドリ：Landry, Bernard :
リッカート／リッケルト：Rickert, Heinrich：リッカート
リット（テオードル）：Litt, Theodor：リット（テオードル）
リーリエンフェルト：Lilienfeld,Paul von ? :
リトレ：Littré,Émile ? :
ルカッチ：Lukács, György：ルカーチ
ルッテル／ルテル：Luther：ルター
ルヌーギエ：? :
ルロワ：Le Roy,Édouard :
レギト（カルル）：Löwith, Karl：レーヴィット（カルル）
レッシング／レッシング：Lessings：レッシング
レーデレル：Lederer, Emil：レーデラー

作成日：2012.6.28

作成者：石井彰文

レオンチェフ：Leontief？：

ロッタツケル：Rothacker,Erich：ロータツカー

ロスミーニ：Rosmini,Antonio：

グイスバッハ（ヱルネル）：Weisbach,Werner：ワイスバッハ

グスムート（エヴルト）：Wasmuth, Ewald：

グルトブルク：Wartburg：ヴァルトブルク

グレリー：Valéry：ヴァレリー

グンニ：？：

ワード：Ward,Lester Frank？：

ウォレズ：Wallas, Graham：ウォーラス

ワルムス：Worms, Rene？：

ヴォルテール：Voltaire：ヴォルテール